番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
337	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	灰黄色 (2.5Y 6/2)	細砂粒を含む	良好	車輪文叩き	格子目文叩き	—	
338	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰色 (7.5Y 5/1)	灰色 (7.5Y 5/1)	細砂粒を含む	良好	車輪文叩き	格子目文叩き	—	
339	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (5Y 7/1)	明青灰色 (5BG 7/1)	精良	やや良好	車輪文叩き	格子目文叩き	—	
340	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	精良	良好	車輪文叩き	格子目文叩き	—	
341	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	精良	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
342	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (10Y 7/1)	灰色 (7.5Y 5/1)	細砂粒を含む	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
343	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (2.5Y 8/2)	灰白色 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む	やや良好	ナデ	格子目文叩き	—	
344	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	灰オリーブ色 (5Y 5/2)	細砂粒を含む	良好	ナデ	格子目文叩き後ナデ	—	
345	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	精良	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
346	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰黄色 (2.5Y 7/2)	灰黄色 (2.5Y 7/2)	細砂粒を含む	やや良好	ナデ	格子目文叩き	—	
347	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	細砂粒を含む	良好	ハケ	格子目文叩き	—	
348	Ⅴ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	細砂粒を含む	良好	同心円文叩き	平行線文叩き (一部ナデ (消してある))	—	
349	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色	青灰色	精良	良好	同心円文叩き	格子目文叩き (長方形)	—	自然釉がかかっている
350	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (10BG 5/1)	細砂粒を含む	良好	平行線・同心円文叩き	平行線文叩き	—	
351	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (10BG 5/1)	青灰色 (10BG 5/1)	精良	良好	同心円文叩き	格子目文叩き	—	
352	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	灰白色 (10Y 7/1)	精良	良好	同心円文叩き	格子目文叩き	—	
353	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (10Y 7/1)	灰オリーブ色 (5Y 5/2)	細砂粒を含む	良好	平行線文叩き 格子目文叩き	平行線文叩き (一部ナデ (消してある))	—	
354	Ⅴ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	細砂粒を含む	良好	同心円文叩き	平行線文叩きの後部分的にナデ	—	
355	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (10BG 5/1)	細砂粒を含む	良好	平行線文叩き	平行線文叩き	—	
356	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	精良	良好	同心円文叩き	格子目文叩き (長方形)	—	
357	Ⅵ区	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	細砂粒を含む	良好	平行線・同心円文叩き	平行線文叩き	—	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
358	Ⅴ区	須恵器	甕	—	—	—	明黄褐色 (10YR 7/6)	明黄褐色 (10YR 7/6)	細砂粒を含む	良好	平行線・同心円文叩き	平行線文叩き	—	
359	Ⅴ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (10Y 7/1)	灰白色 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む	やや良好	平行線文叩き	平行線文叩き 格子目文叩き	—	
360	Ⅳ区	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (5Y 7/2)	灰白色 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む	良好	平行線・同心円文叩き	平行線文叩き	—	
361	Ⅴ区	須恵器	甕	—	—	—	明黄褐色 (10YR 7/6)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	細砂粒を含む	良好	平行線文叩き	平行線文叩き	—	
362	XXⅡ区	須恵器	甕	—	—	—	灰色 (5Y 5/1)	灰黄色 (2.5Y 6/2)	細砂粒を含む	良好	同心円文叩きの後ナデ	格子目文叩き	—	
363	Ⅵ区	緑釉	埦	12.85	6.3	3.8	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り	胎土 褐灰色 (10YR5/1)
364	Ⅵ区	緑釉	皿	11.1	—	—	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	精良	良好	ナデ	ナデ	—	外器面、所々釉がはげている 胎土 灰色 (7.5Y5/1)
365	Ⅵ区	緑釉	皿	12.8	—	—	オリーブ黄色 (5Y 6/3)	オリーブ黄色 (5Y 6/3)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 浅黄橙色 (10YR8/4)
366	Ⅵ区	緑釉	皿	13.3	—	—	暗オリーブ色 (7.5Y 4/3)	暗オリーブ色 (7.5Y 4/3)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 灰色 (7.5Y5/1)
367	Ⅴ区	緑釉	埦	—	3.9	—	オリーブ灰色 (10Y 5/2)	オリーブ灰色 (10Y 5/2)	精良	良好	ナデ	ナデ	糸切り	胎土 灰色 (7.5Y5/1)
368	Ⅵ区	緑釉	皿	—	—	—	オリーブ灰色 (10Y 4/2)	オリーブ灰色 (10Y 4/2)	精良	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 褐灰色 (10YR5/1)
369	Ⅴ区	緑釉	埦	—	—	—	灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) オリーブ黄色 (5Y 5/3)	灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) オリーブ黄色 (5Y 5/3)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 灰色 (7.5Y5/1) 明黄褐色 (10YR7/6)
370	Ⅴ区	緑釉	埦	—	—	—	オリーブ黄色 (5Y 5/3)	浅黄色 (5Y 7/3)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 浅黄橙色 (10YR8/4)
371	Ⅵ区	緑釉	埦	—	—	—	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	精良	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 灰色 (7.5Y5/1)
372	Ⅴ区	緑釉	皿	—	—	—	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)	オリーブ灰色 (2.5GY5/1)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 灰色 (7.5Y5/1)
373	Ⅵ区	緑釉	皿	—	—	—	オリーブ灰色 (10Y 4/2)	オリーブ灰色 (10Y 4/2)	精良	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 褐灰色 (10YR5/1)
374	Ⅵ区	緑釉	皿	—	—	—	灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) オリーブ黄色 (5Y 5/3)	灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) オリーブ黄色 (5Y 5/3)	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	—	胎土 灰色 (7.5Y5/1) 明黄褐色 (10YR7/6)
375	Ⅵ区	緑釉	皿	—	6.4	—	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	細砂粒を含む	やや良好	ナデ	ナデ	不明	風化しているが漬けている釉の色、灰白色 (10Y8/2) 胎土・淡黄色 (2.5Y8/3)
376	XXⅥ区SH7	陶器	鉢	19.8	—	—	灰色 (7.5Y 5/1)	黄灰色 (2.5Y5/1~6/1)	白色の細砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	—	口唇部と内器面全体に自然釉がかかっている
377	XXⅥ区SH7	陶器	鉢	—	—	—	灰黄褐色 (10YR 5/2)	灰黄褐色 (10YR 5/2)	0.5～3mm大の白色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	—	口唇部に自然釉がかかっている
378	XXⅥ区SH9	陶器	鉢	—	—	—	灰色 (7.5Y5/1~6/1)	灰色 (7.5Y 5/1)	石英・長石などの細砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	—	外器面に自然釉がかかっている

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			外面	外面	底部	
379	XXVI区 S H47	陶器	擂鉢	17.6	—	—	黄灰色 (2.5Y 5/1)	黄灰色 (2.5Y 5/1)	細砂粒を含む まれに5mm大の白色小石	良好	横ナデ	ナデ	—	6条一束の条線
380	XXVI区	陶器	壺	10.1	8.4	25.7	赤灰色 (2.5YR5/1)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	1～4mm大の白色・黒褐色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ヘラナデ	ナデ	外器面の口縁～肩部にかけて灰オリーブの自然釉がかかっている
381	Ⅲ区	鉄器	鉄鏃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
382	S B 6－S H10	紡錘車	—	—	—	—	橙色 (5YR 7/6)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	1～3mm大の褐色・灰色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ハケ	—	
383	XXIV区	石塔	水輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
384	XXIV区	石塔	空風輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
385	Ⅳ区	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	0.5～2mm大の褐色の砂粒を含む	良好	口縁一横ナデ 胴部一ナデ	横ナデ	—	三角突帯
386	Ⅳ区	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	細砂粒と1mm大の金雲母・石英を含む	良好	口縁一横ナデ 胴部一ナデ	口縁一横ナデ 胴部一ナデ	—	
387	Ⅲ区	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	石英・長石・黒雲母などの細砂粒を多く含む	良好	ナデ	横ナデ	—	
388	Ⅲ区	弥生土器	甕	—	6.5	—	にぶい黄橙色 (10YR 8/3)	にぶい黄橙色 (10YR 8/3)	1～3mm大の褐色・灰色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
389	Ⅲ区	弥生土器	高坏	—	—	—	浅黄橙色 (10YR 8/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	1～3mm大の褐色の砂粒を多く含む	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	
390	Ⅰ区	弥生土器	鉢	—	10.4	—	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	1～3mm大の褐色・灰色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
391	XXIV区	土師器	坏	12.0	6.75	3.3	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	
392	〃	土師器	坏	11.8	8.4	3.0	浅黄橙色	(底部は黒褐色) 浅黄橙色	0.2～1mm大の褐色の粒をわずかに含む	やや軟質	横ナデ	横ナデ	糸切り	
393	〃	土師器	坏	13.9	—	—	褐色 (7.5YR5/6)	褐色 (7.5YR5/6)	精良	良好	横ナデ	横ナデ	—	
394	〃	土師器	坏	—	7.8	—	橙色	橙色	0.2～3mm大の砂粒・小石を多量に含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
395	〃	土師器	坏	12.9	—	—	淡橙色 (5YR 8/4)	淡橙色 (5YR 8/4)	精良	良好	横ナデ	横ナデ	—	
396	〃	土師器	坏	—	7.8	—	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	
397	〃	土師器	坏	—	7.9	—	橙色	橙色	0.2～3mm大の砂粒・小石を多量に含む	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	
398	〃	土師器	坏	—	7.8	—	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
399	〃	土師器	坏	—	7.4	—	淡橙色 (5YR 8/4)	淡橙色 (5YR 8/4)	精良	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
400	XXIV 区	土師器	小皿	7.9	6.1	1.4	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
401	〃	土師器	小皿	6.9	5.7	1.35	黄橙色	黄橙色	0.1～1mm大の褐色の粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
402	〃	土師器	小皿	8.3	7.1	1.1	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
403	〃	土師器	小皿	7.4	6.9	1.25	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
404	〃	土師器	小皿	7.5	5.8	1.2	黄橙色	黄橙色	0.2～1mm大の褐色の粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
405	〃	土師器	高台付境	—	9.0	—	褐灰色 (7.5YR5/1)	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
406	〃	土師器	甕	22.2	—	—	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	1～6mm大の褐色、灰色の砂粒を多く含む	やや良好	口縁一横ハケ 胴部一ナデ	口縁一横ナデ 胴部一タテハケ	—	外器面にスス付着
407	〃	土師器	甕	22.4	—	—	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	1mm大の褐色の砂粒を含む	良好	口縁一横ナデ 胴部一ヨコヘラケズリ	ナデ	—	
408	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	黒褐色 (2.5Y 3/1)	精良 白色の微細粒を若干含む	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
409	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	精良	良好	ナデ	格子目文叩き 一部ナデ消し	—	
410	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	精良 白色の微細粒を含む	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
411	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (10BG 5/1)	精良 白色の微細粒を含む	良好		平行線文叩き	—	
412	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	青灰色 (5BG 5/1)	砂粒を含む	やや良好	「T」字状の叩き痕が残る	格子目文叩き	—	
413	〃	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 (5BG 5/1)	黒褐色 (2.5Y 3/1)	精良 白色微細粒を含む	良好	ナデ	格子目文叩き	—	
414	〃	陶器	擂鉢	20.0	—	—	灰黄褐色 (10YR 5/2)	灰黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒を含む(白色等)	良好	横ナデ	横ナデ	—	口縁部に自然釉がかかっている (黒褐色10BG3/1)
415	〃	陶器	擂鉢	—	—	—	明青灰色 (5BG 7/1)	青灰色 (5BG 5/1)	砂粒を含む(白色多量)	やや良好	横ナデ	横ナデ	—	
416	〃	陶器	擂鉢	—	—	—	灰褐色 (7.5YR5/2)	灰褐色 (7.5YR5/2)	砂粒を含む(白色)	良好	横ナデ	横ナデ	—	片口、口縁部に自然釉がかかる
417	〃	陶器	甕	—	—	—	灰赤色 (10R 5/2)	灰赤色 (10R 5/2)	砂粒を含む (白色、黒色)	良好	横ナデ	横ナデ	—	420と同一個体か
418	〃	陶器	擂鉢	—	—	—	灰黄褐色 (10YR 5/2)	灰黄褐色 (10YR 5/2)	精良	良好	横ナデ	横ナデ	—	口縁部に自然釉がかかる
419	〃	陶器	擂鉢	—	—	—	にぶい赤褐色 (2.5YR 5/3)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	0.5～6mm大の白色の砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	—	
420	〃	陶器	甕	—	18.0	—	にぶい赤褐色 (5YR 5/4)	灰赤色 (10R 5/2)	砂粒を含む (白色、黒色)	良好	ナデ	荒いナデ	—	417と同一個体か

表28　土錘計測表

No.	出土区	長　さ	径	孔　径	重	分類	図面No.	備　考
1	Ⅰ区	5.6	3.0	0.6	38.5	Ⅰ	421	
2	〃	5.1	2.8	0.45	34.4	Ⅰ	422	
3	〃	4.2	2.6	0.6	23.5	Ⅰ	423	
4	〃	5.4	2.8	0.5	35.1	Ⅰ	424	
5	〃	4.8	2.3	0.45	17.9	Ⅰ	425	
6	〃	4.4	2.4	0.6	19.9	Ⅰ		
7	Ⅱ区	4.98	2.11	0.56	30.1	Ⅰ		
8	Ⅱ区	5.41	2.9	0.62	34.9	Ⅰ		欠損
9	〃	—	2.68	0.5	22.2	Ⅰ		
10	〃	6.21	2.7	0.53	33.3	Ⅰ		
11	Ⅰ区	—	—	0.73	29.1	Ⅰ		欠損
12	Ⅱ区	—	—	0.58	19.6	Ⅰ		欠損
13	Ⅰ区	—	—	—	14.8	Ⅰ		欠損
14	〃	(3.6)	2.1	0.5	(14.3)	Ⅱ		欠損
15	Ⅳ区	3.6	1.6	0.5	(7.5)	Ⅱ		欠損
16	表採	4.8	1.9	0.4	13.5	Ⅱ		
17	Ⅳ区	4.6	1.7	0.47	13.2	Ⅱ		
18	Ⅱ区	4.68	2.16	0.66	17.2	Ⅱ	426	
19	〃	5.04	2.36	0.71	22.2	Ⅱ	427	
20	〃	4.31	2.18	0.6	16.6	Ⅱ	428	
21	〃	4.53	2.22	0.67	17.3	Ⅱ		
22	〃	4.67	2.3	0.67	21.6	Ⅱ	229	
23	〃	4.59	2.39	0.68	20.3	Ⅱ	430	
24	〃	4.9	2.54	0.69	24.2	Ⅱ	431	
25	〃	4.64	4.64	0.71	18.7	Ⅱ	432	
26	SB8・SH1	4.67	4.67	0.66	16.6	Ⅱ	435	
27	Ⅱ区	5.09	5.09	0.67	21.6	Ⅱ	433	
28	〃	4.2	4.2	0.68	16.9	Ⅱ	434	

No.	出土区	長　さ	径	孔　径	重	分類	図面No.	備　考
29	Ⅱ区	4.83	2.49	0.57	24.1	Ⅱ		
30	〃	4.16	2.05	0.7	12.2	Ⅱ		
31	〃	4.89	2.16	0.7	19.0	Ⅱ		
32	〃	4.92	2.33	0.71	21.2	Ⅱ		
33	〃	—	2.12	0.68	14.1	Ⅱ		欠損
34	〃	4.68	2.1	0.67	14.8	Ⅱ		欠損
35	〃	4.98	2.39	0.65	17.6	Ⅱ		欠損
36	〃	—	—	0.71	10.6	Ⅱ		半欠
37	〃	—	—	—	1.8	Ⅱ		一部残存
38	Ⅲ区	4.2	1.9	0.5	10.7	Ⅲ	436	
39	Ⅳ区	3.0	1.8	0.5	6.6	Ⅲ	437	
40	Ⅳ区	3.8	1.7	0.35	7.3	Ⅲ	438	
41	Ⅲ区	4.38	1.82	0.45	12.2	Ⅲ		
42	〃	4.33	—	0.4	5.1	Ⅲ		一部残存
43	Ⅳ区	3.93	2.00	0.43	11.1	Ⅲ		
44	〃	3.70	1.51	0.36	5.7	Ⅲ		
45	〃	(3.2)	1.75	0.5	(6.6)	Ⅳ		欠損
46	〃	(3.3)	1.8	0.6	(5.3)	Ⅳ		欠損
47	XIX区	4.3	1.5	0.4	(8.2)	Ⅳ		一部欠損
48	XXIII区	4.1	1.3	0.4	6.6	Ⅳ	440	欠損
49	Ⅳ区	(3.8)	(1.2)	0.6	5.7	Ⅳ		欠損
50	SB13SH-4	—	—	0.48	4.2	Ⅳ	439	
51	Ⅴ区	4.19	1.34	0.34	6.4	Ⅳ		欠損(半欠)
52	E－1	(5.4)	3.1	1.2	(28.6)	Ⅴ		欠損(半欠)
53	XVI区SH37	(5.0)	3.0	1.0	(27.4)	Ⅴ	441	一部残存
54	Ⅴ区	—	—	—	10.9	Ⅴ		一部残存
55	〃	5.75	3.1	1.1	72.1	Ⅵ	442	石製か
56								

第Ⅵ章　堂地東遺跡の調査

第１節　調査区の設定と概要

当遺跡は，昭和55・57・58年の３ケ年にわたって調査が行なわれ，遺跡全体を地形に合わせてⅠ区～ⅩⅦ区に分けた（第１図）。

昭和55年度は，Ⅺ区の幹線道路建設予定地の発掘調査が行なわれ，縄文早期の楕円押型文土器，縄文後期の深鉢形土器・貝殻文系土器，弥生中期の下城式の甕，弥生後期の刻目突帯を有するくの字口縁の甕，軽石製石棒などが出土している。検出された遺構は，弥生中期後半の竪穴住居１軒，土壙４，ピット群，溝状遺構などである。

昭和57年度は，幹線道路建設予定地のⅠ区～Ⅹ区の発掘調査が行なわれ，弥生中期後半と後期前半の竪穴住居各１軒，掘立柱建物６棟，溝状遺構，石塔群，井戸，近世墓などが検出された。縄文土器，弥生土器，土師器（ヘラ切り・糸切り），陶磁器，硯などが出土した。

昭和58年度は，宮崎大学本部建設予定地のⅪ区～ⅩⅦ 区の発掘調査が行なわれ，縄文早期の集石遺構５，弥生後期前半の竪穴住居16軒，弥生終末の竪穴住居１軒，土壙14，溝状遺構，掘立柱建物４棟などが検出された。旧石器の剥片，縄文早期の条痕文土器，弥生後期の土器，青磁，東播系擂鉢などが出土した。

第２節　遺跡の立地と環境

堂地東遺跡は行政区では宮崎市大字熊野字堂地に所在する。清武川と加江田川に挟まれた２本の丘陵のうちの南側の丘陵上の標高20～30m（平坦地中位面Ⅰ）に立地する。北側と南側の谷底低地との比高差は約５～15m である(第１図)。

当遺跡の西に旧石器時代の遺跡である堂地西遺跡，谷を挟んで南東に弥生時代後期後半～終末期の集落である熊野原遺跡Ｂ地区，古墳時代初頭（布留式併行期）の集落である熊野原遺跡Ｃ地区，谷を挟んで南西には縄文時代後晩期の集落である平畑遺跡が存在する。

第３節　包含層の状態

基本層序は，Ｏ・暗褐色土，Ⅰ・黒色土層，Ⅱ・アカホヤ層，Ⅲ・黒褐色土層，Ⅳ・褐色土層，Ⅴ・ハードローム層，Ⅵ・第２オレンジ層，Ⅶ・白斑ローム層である(第６図)。

Ｏ層は耕作土で，土師器・須恵器・青磁・陶磁器などの破片が出土する。

Ⅰ層は縄文前期以降の包含層であり，Ⅱ区では部分的であるが３層に区分できた。

Ⅱ層は第１オレンジ層で，各区とも削平が著しいため遺構の検出はこの上面で行なった。この層がＢ．Ｐ．6500年の鬼界カルデラ噴出の火山灰層で，縄文時代の早期と前期を分ける鍵層である。

Ⅲ層は硬質黒色土層である。

Ⅳ層は硬質褐色土層で，縄文早期の包含層である。

Ⅵ層はＢ．Ｐ．21,000～22,000年の姶良・丹山火山灰である。

Ⅺ・ⅩⅣ・ⅩⅤ・ⅩⅥ区は第Ⅲ層まで残っていたが，ⅩⅢ区とⅩⅣ区・ⅩⅤ区の南斜面は褐色土層上面まで削平されて

いた。

第４節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代早期の集石遺構が５基検出され，集石遺構には共伴しないが，楕円押型文が出土している。

後期の遺構は検出されず，また包含層として残存してなかったが，撹乱層から貝殻文系土器が出土している。

早期の遺構と遺物

１．集石遺構

ＳＩ１（第２図）

１号集石遺構は，長径約 120cm，短径約 100cm，深さ10cmと，長径75cm，短径65cm，深さ10cmの２個の楕円形プランの土壙を伴なう。北側の土壙には長さ20cm，幅10cmの角礫を配置しており，火を受けた痕跡がある。土壙内の埋土には木炭粒を含む。南側の土壙には長さ20cm，幅10cmの河原石を配置しており，火を受けた痕跡がある。

ＳＩ２（第３図）

２号集石遺構は，長径約 110cm，短径80cm，深さ10cmの土壙を伴なう。土壙内には長さ20cm，幅15cmの２個の河原石を中心に置き，その周囲に小形の角礫がある。石はすべて火を受けている。

ＳＩ３（第３図）

３号集石遺構は，長径85cm，短径65cm，深さ20cmの楕円形プランの土壙を伴なっている。

ＳＩ５（第４図）

５号集石遺構は，長径95cm，短径90cm，深さ５cmの五角形気味の楕円形プランの土壙を伴なっている。

１～５号集石遺構はすべて土器は共伴していないが，アカホヤ層の下層で検出されたことにより，縄文早期の所産と考えられる。

２．遺　　物

第５図は早期の楕円押型文土器片である。

後期の遺構と遺物

アカホヤ層の上面まで削平されていたため，後期の遺構は既に消失しており，縄文土器も耕土及び撹乱層から出土した。

１．遺　　物

第７図１は，肥厚した口縁部とその下位に２段のヘラ描きによる斜行列線文を施した深鉢形土器である。胴部は条痕文が施され，器壁は比較的薄い。胎土には石英砂を含み，色調は暗褐色を呈し，焼成は良好である。

第７図２は，条痕文を地文とし，貝殻腹線文を施すもので，口縁部は肥厚していない。このタイプの土器片が多く出土している。

第７図８は，口縁部内面の２つの突起に，刺突による目の表現がなされており，何らかの動物を表現したものと思われる。胎土には比較的大きな砂粒を含み，色調は暗褐色をなし，焼成は不良である。

第５節　弥生時代の遺構と遺物

１．竪穴住居（第８～17図）

弥生時代の遺構としては，ＸＩ区～ＸＶＩ区で竪穴住居20軒，土壙20基が検出された。特に竪穴住居は，円形プラン・方形プランを基調として間仕切りの機能を持つ突出壁を有する「日向型間仕切り住居」[1]が20軒のうち14軒も検出されたことである。

当集落の最古は中期後半の方形プランのＳＡ２で当遺跡がある丘陵の北側斜面に位置する。他の住居は標高25ｍ～30ｍの丘陵上に東西約140ｍ、南北約140ｍの範囲内に10m～15m間隔で分布し，住居相互の切り合いはない。当集落の最新は弥生終末の台形プランのＳＡ11で南側斜面の南東部端に位置する。当集落の住居の形態プランの内訳は方形プラン４軒，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」５軒，方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」６軒，折衷型の「日向型間仕切り住居」であるＳＡ８の66㎡が突出しており，30㎡代が２軒，20㎡代が８軒，10㎡代が７軒，10㎡未満が１軒と，10㎡～30㎡が平均的な住居である。主柱穴は，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」であるＳＡ16のように突出壁と主柱穴が対応するものや，方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」であるＳＡ５のように２本柱のものがあるが，中には対応しないものもある。屋内施設としての炉跡は４軒で確認されており，ベッド状遺構は６軒で確認されているが，屋内に貯蔵穴を有するものはない。以下，詳細については遺構観察表（表29）を参照されたい。

住居	形態プラン	規模(m)	面積(㎡)	主空間(㎡)	間仕切り空間(㎡)	主柱穴	突出壁	ベッド	石器	鉄器	時期	備考	分類
ＳＡ１	方形	4.8×4.8	19.9+α								中期後半	軽石製石器	
ＳＡ２	方形	4.0×3.6	11.1	10.3	0.8(張り出し)	2			石斧		中期後半	張り出し	
ＳＡ３	間仕切り(折衷)	5.2×4.5	16.9	7.9	(6) 9.0(1.5)		6	有			後期前半		ⅢA
ＳＡ４	方形	4.2×3.4	11.0	11.0		2					〃		
ＳＡ５	間仕切り(方形)	7.0×6.0	25.4	13.1	(8)12.3(1.5)	2	8			○	〃	円形浮文	ⅡB
ＳＡ６	間仕切り(方形)	6.8×5.3	27.7	17.4	(2)10.3(5.15)		2			○	〃	丹塗・鋸歯文	ⅡB
ＳＡ７	間仕切り(円形)	6.5×6.0	20.5	10.0	(7)10.5(1.5)	5	7				〃	丹塗	ⅠB
ＳＡ８	間仕切り(円形)	10.2×9.7	66.1	32.7	(6)33.4(5.6)	8	6				〃	丹塗	ⅠB
ＳＡ９	間仕切り(折衷)	4.3×4.1	14.0	14.0			2				〃		ⅢB
ＳＡ10	間仕切り(円形)	7.2×7.0	34.5	6.3	(4)28.2(7.05)		4		石斧		〃		ⅠB
ＳＡ11	台形	5.5×4.5	16.3	11.8	4.5	4		有			後期末		
ＳＡ12	間仕切り(方形)	6.1×6.0	24.6	11.3	(8)13.3(1.7)		8			○	後期前半		ⅡB
ＳＡ13	方形	5.2×4.5	19.4	19.4							〃		
ＳＡ14	間仕切り(方形)	8.0×6.0	33.7	20.5	(7)13.2(1.9)		8	有		○	〃		ⅡA
ＳＡ15	間仕切り(折衷)	7.0×6.8	29.2	11.7	(6)17.5(2.9)	8	4			○	〃	円形浮文	ⅢB
ＳＡ16	間仕切り(円形)	7.2×6.8	29.5	13.2	(6)16.3(2.7)	6	7	有		○	〃		ⅠA
ＳＡ17	間仕切り(方形)	5.9×5.7	24.0	15.3	(5) 8.7(1.7)	2	5	有			〃		ⅡA
ＳＡ18	間仕切り(折衷)	6.7×6.2	22.6	11.0	(8)11.6(1.45)	4	8	有			〃	軽石製石製品	ⅢA
ＳＡ19	間仕切り(方形)	4.2×3.7	7.9	6.3	1.6	4	3				〃		

表29　竪穴住居観察表

2．土　壙（第18～20図）

土壙は，20基検出されているが，このうち弥生時代と考えられるのは10基である。土壙は，ＳＡ１の西側と集落の南端部に集中して分布する。規模では長さ130cm～185cm，幅95cm～130cmのグループと，長さ170～230 cm，幅130～170cmのグループに分かれる。全体的に土器量は少ないが，土器が集中して出土したのはＳＣ１であり，磨製石鏃・鉄鏃が出土したのはＳＣ10である。土壙は幅広であるので，墓壙とするには躊躇されるが、ＳＣ10だけは磨製石鏃と鉄鏃が出土しているので，その可能性がある。またＳＣ13・14は円形プランであり規模的にも貯蔵穴の可能性がある。それ以外については土壙の性格は不明である。以下，詳細については遺構観察表（表30）を参照されたい。

土　壙	長さ×幅×深（cm）	プラン	遺物	時期
ＳＣ１	195×160× 40	楕円形	壺・甕	弥生後期初頭～前半
ＳＣ２	169×114× 29	楕円形	壺・甕	〃
ＳＣ３	172×162× 85	円形	壺	〃
ＳＣ４	204×133× 46	楕円形	甕	〃
ＳＣ５	182×100×	長方形	高坏	〃
ＳＣ６	227×142× 42	隅丸方形	壺・甕	〃
ＳＣ７	230×184× 33	隅丸方形		
ＳＣ８	148×110× 40	長方形		
ＳＣ９	88× 80× 30	長方形		
ＳＣ10	196×160× 50	長方形	壺・甕・磨製石鏃・鉄鏃	弥生後期初頭～前半
ＳＣ11	133× 95× 32	長方形	壺	〃
ＳＣ12	125×124× 30	方形		
ＳＣ13	136×130×118	円形	甕	弥生後期初頭～前半
ＳＣ14	182×166× 95	円形	壺・甕	〃
ＳＣ15	165× 60× 26	長方形	甕	
ＳＣ16	100×190× 26	長方形		
ＳＣ17	120× 60× 28	楕円形		
ＳＣ18	150× 70× 24	隅丸方形		
ＳＣ19	120× 80× 40	隅丸方形		
ＳＣ20	182×140× 36	長方形		

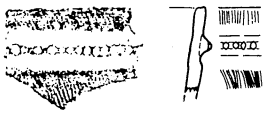
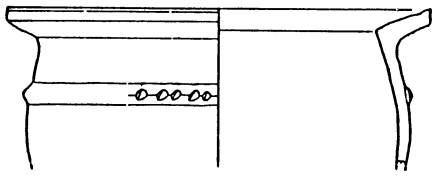
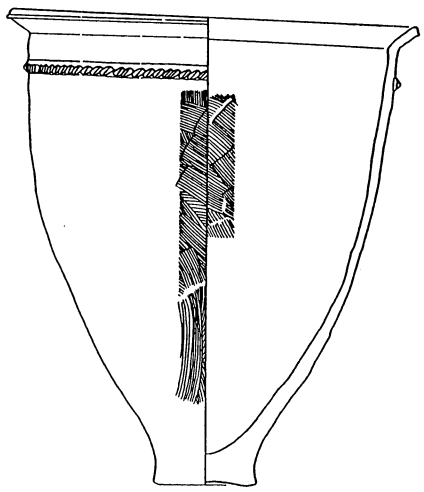
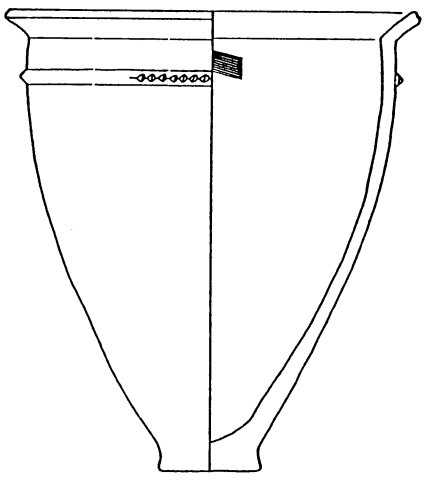
表30　土壙観察表

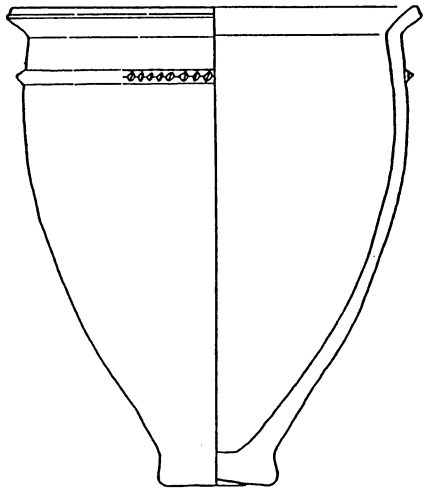
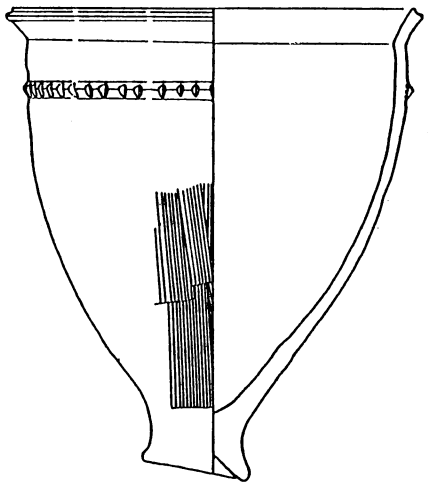
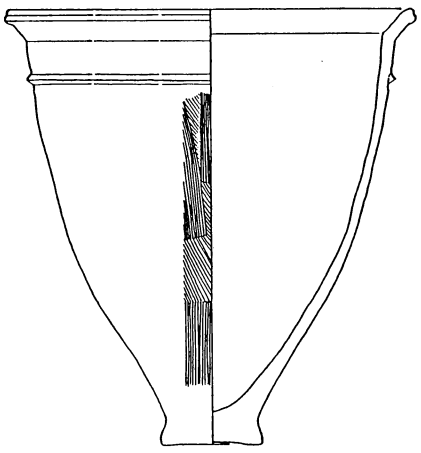
3．弥生土器（第22～41図）

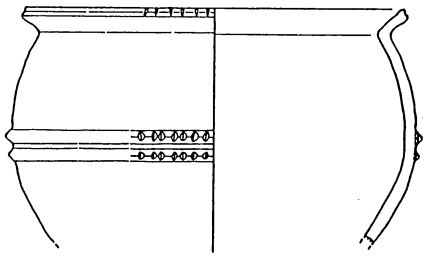
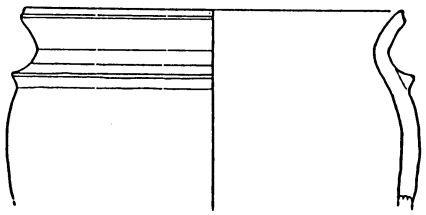
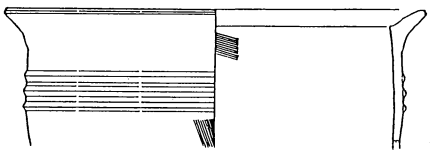
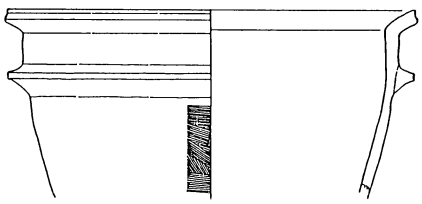
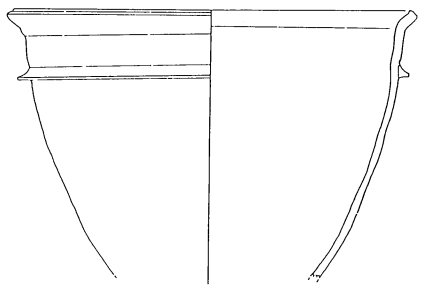
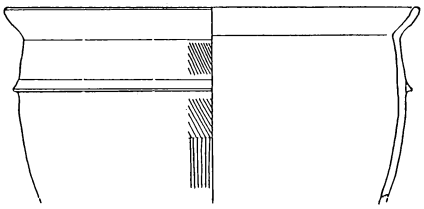
１．弥生土器の形態分類

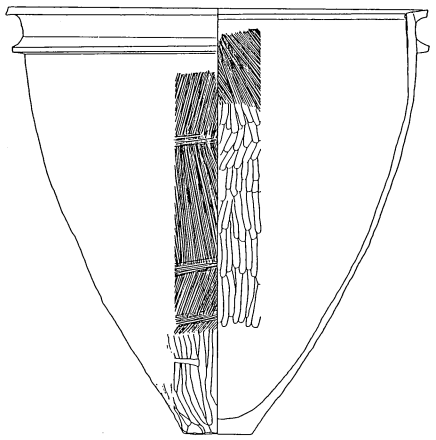
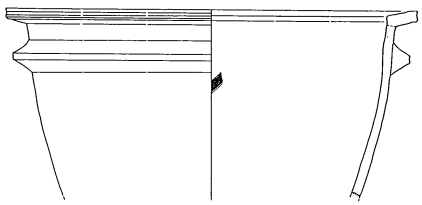
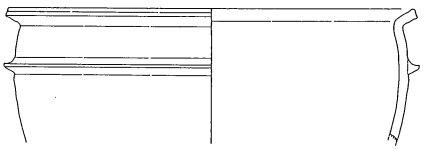
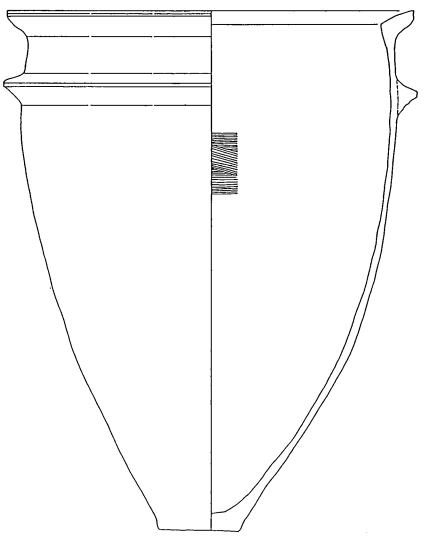
当遺跡の竪穴住居と土壙から出土した弥生土器について次のように分類する。

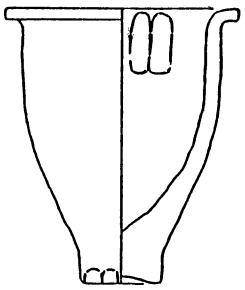
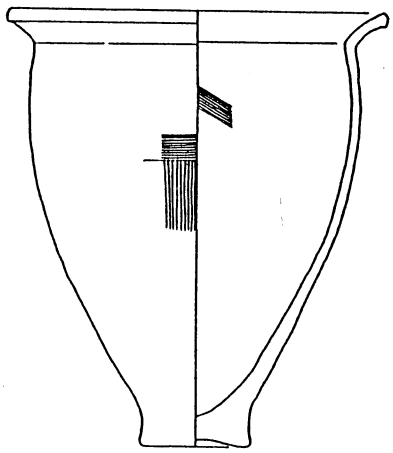
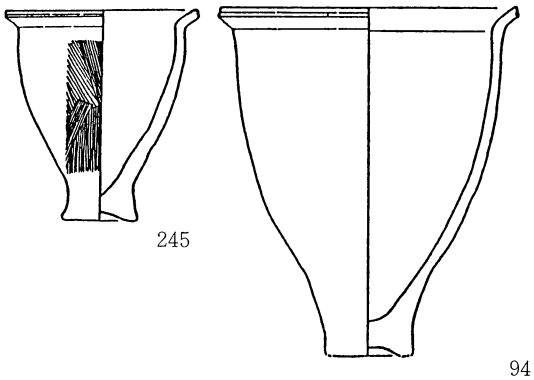
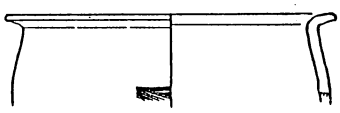
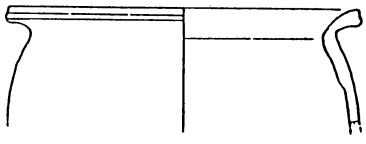
表31　弥生土器分類表

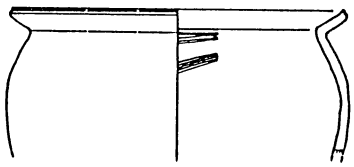
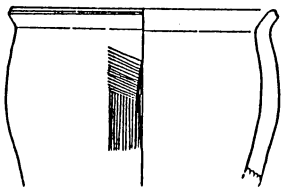
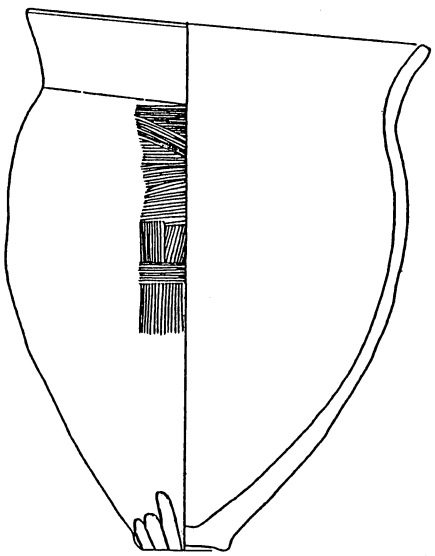
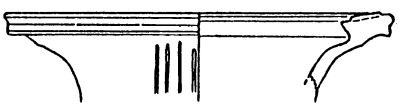
器種	分類	形態	特徴	
甕	I	刻目突帯甕 直口する口縁部の下位に1条の刻目突帯を施す。	 4	
	II	刻目突帯甕 ○くの字口縁 ○口縁直下に一条の刻目突帯 ○上げ底 ○口径＞胴部最大径 ○口径23～27cm ○器高26～32cm ○口唇部が凹気味	 181	A．逆L字状口縁の名残を少し残しており、内面に明瞭な稜を有する。
			 113	B．くの字口縁で、口縁部が斜目上方へ外反する。 a．胴部最大径が口縁部直下
			 285	b．胴部最大径が刻目突帯

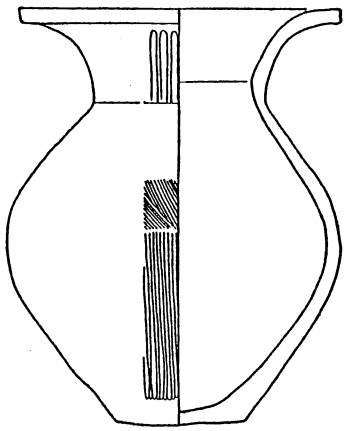
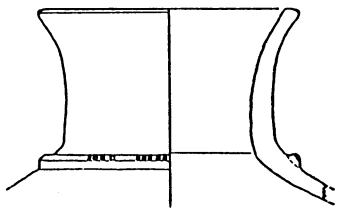
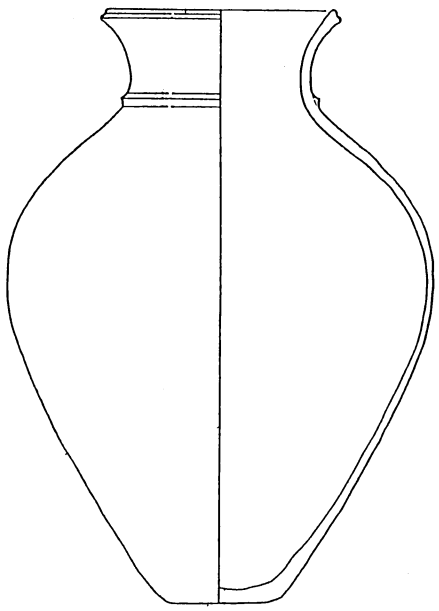
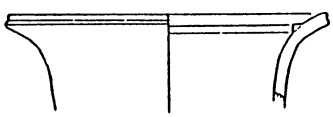
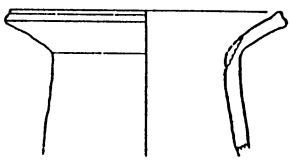
器種	分類	形態	特徴	
甕	II		 219	c．胴部最大径が刻目突帯の下位
			 40	C．くの字口縁で、口縁部が直立気味に立ち上がる。
	III	突帯甕 ○くの字口縁 ○口縁直下に一条突帯 ○上げ底 ○口径＞胴部最大径	 56	

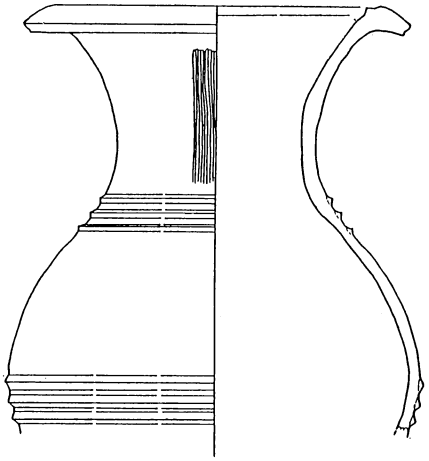
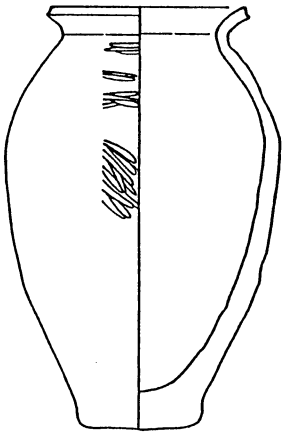
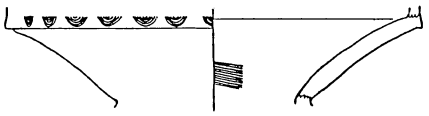
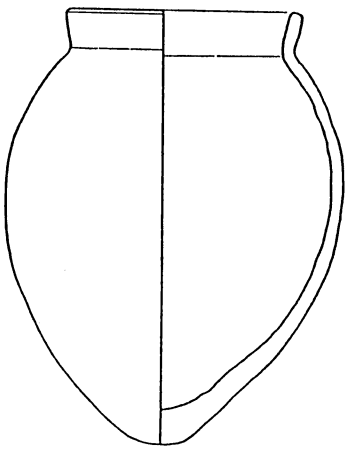
器種	分類	形態	特徴	
甕	Ⅳ	A．くの字口縁の口唇部に刻目を施し、胴部の最大径部に2条の刻目突帯を施す。 ○胴部最大径＞口径	 218	
		B.くの字口縁でやや直立気味に立ち上がる ○口縁部直下に一条突帯 ○胴部最大径＞口径	 210	
	Ⅴ	三条突帯甕 ○厚手の口縁部がくの字に外反し、その直下に2～3条の突帯を有する。 ○金雲母を含む。	 276	
	Ⅵ	中型甕 ○口径30～36cm ○くの字口縁 ○口縁直下に一条突帯	 20	A．口縁部が斜目上方へ外反して、その直下に一条の台形状突帯を有する。
			 124	B．口縁部がやや直立気味に外反し、その直下に下に垂れ下がる一条の細長い台形状突帯を有する。
			 279	C．口縁部が内湾気味に外反し、その直下に垂れ下がり気味の細長い台形状突帯を一条有する。 ○胴部最大径が突帯にある。

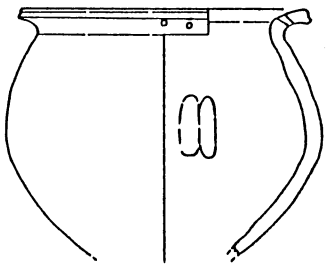
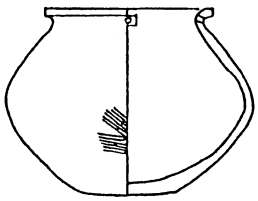
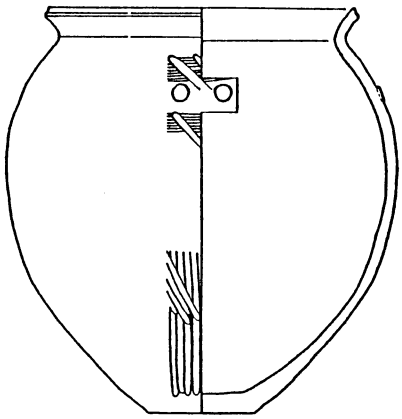
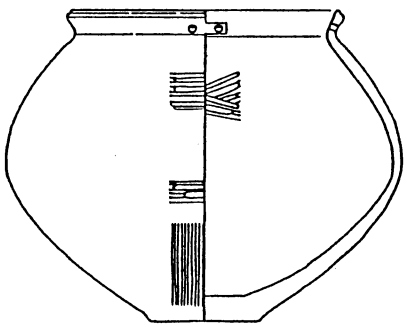
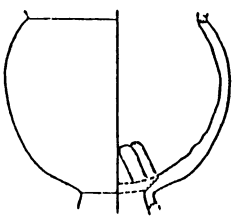
器種	分類	形態	特徴	
甕	Ⅶ	大型甕 ○口径45～50cm ○器高50cm前後 ○口径＝胴部最大径 ○平底	 8	Aa. 逆L字状口縁を有し、その直下に一条の細長い突帯を有する。
			 287	Ab. 逆L字状の口縁が若干立ち上がり、その直下に一条の幅広の台形状突帯を有する。
			 83	B. くの字口縁で、口縁部が斜目上方へ外反し、その直下に一条の細身の三角形突帯を有する。
	Ⅷ	○厚手の口縁部がくの字に外反し、その直下に一条の幅広の台形状突帯を有する。 ○金雲母を含む。	 84	

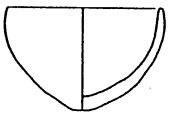
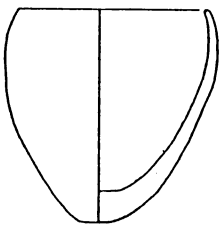
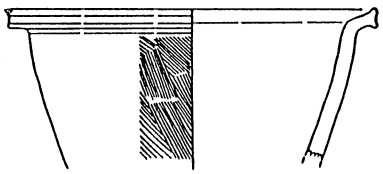
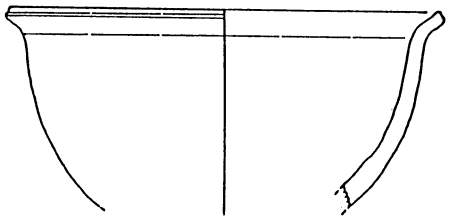
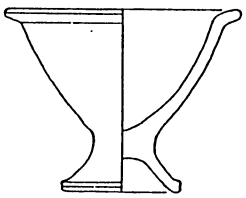
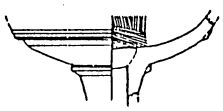
器種	分類	形態	特徴	
甕	Ⅸ	○口径が胴部最大径より大きい。 ○底部は上げ底 ○口径12～20cm ○器高15～23cm	 312	A．口縁部が水平方向に伸びる。 ○口唇部は丸味
			 136	B．口縁部が斜目方向に伸びる。 ○口唇部は丸味
			 245 94	C．口縁部が斜方向に伸びる。 ○口唇部は凹気味
	Ⅹ	○胴部最大径が口径より大きい。 ○口径14～18cm	 137	A．口縁部が水平方向に伸びる。 ○口唇部が丸い。
			 227	B．口縁部が曲線的に斜方向に伸びる。 ○口唇部が凹気味

器種	分類	形態	特徴	
甕	X		 95	C．口縁部が内湾気味に斜方向に伸びる。 ○口唇部が凹気味
			70	D．口縁部が直線的に斜方向に伸びる。 ○口唇部が凹気味
			 29	E．短い口縁部がやや直立気味に立ち上がる。
	XI	○口縁部がなだらかに外反する。 口径＜胴部最大径 ○底部が上げ底	 160	
壺	I	鋤先口縁壺	 32	A．円形浮文
				B．鋸歯文
				C．なし
	II			A．円形浮文

器種	分類	形態	特徴	
壺	II	○口縁部が斜方向に伸び、途中で水平に外反する。 ○平底 ○胴部最大径が中位	 31	B．なし
	III	○口頸部と肩部の境に突帯を有し、口縁部が若干外反気味にゆるやかに伸びる。 ○平底 ○胴部最大径は上位	 169	A．刻目突帯
			 106	B．突帯
	IV	○口縁部がやや直立気味に伸び、途中で大きく外反する。	 170	A．内面に突帯を有する。
			 171	B．内面に突帯を有しない。

器種	分類	形態	特徴	
壺	Ⅴ	○口頸部と肩部の境、胴部に三条突帯を有し、口縁部が大きく外反し垂れ下がる。 ○金雲母を含む。	 102	
	Ⅵ	○頸部がしまり、口縁部がくの字に外反する。長胴で平底。	 177	
	Ⅶ	複合口縁壺 口縁反転部で明瞭な稜を持ち、櫛描波状文を施す。	 157	
	Ⅷ	○口縁部がほぼ直立気味に外反する。底部は丸底に近い平底である。	 159	

器種	分類	形態	特徴	
壺	Ⅸ	○口縁部と頸部の境に穿孔 ○平底 ○胴部最大径＞口径 ○胴部最大径＞器高	 107	A．急激に曲がるくの字口縁 a．口径に比して胴部があまり張らない。
			 34	b．胴部のはりが著しい。
			 282	B．斜目上方にくの字に外反する口縁。 a．口径に比して胴部があまり張らない。
			 278	b．胴部のはりが著しい。
台付甕	Ⅰ	台脚を有する甕	 164	

器種	分類	形態	特徴	
鉢	I		 167	A．直口半球形で丸底である。 ○若干平底気味
			 168	B．直口丸底で前者より器高が高い。
	II	○頸部のつけねに最大径をもつ。 ○口唇部が凹気味	 69	○口縁部がやや水平気味に伸びる。
	III		 74	○口縁部が斜目上方へ伸びる。
台付鉢	I	○口縁部が若干外反し、短い台脚がつく。	 197	
高坏	I	○坏部と脚部の境及び坏部にM字状突帯を各1条有する。	 195	

4．鉄　器（第42図１）

ＳＡ５・６・12・14・15・16，ＳＣ10で鉄片が出土しているが，本来の形がわかるのはＳＣ10の鉄鏃だけである。無茎三角形（凹基腸抉）式の鉄鏃で先端部を欠き，現長3.0㎝，幅2.3㎝である。

5．軽石製石製品（第42図３・４・５）

軽石はすべての竪穴住居から出土しているが，軽石製石製品が出土したのはＳＡ１とＳＡ18である。

第42図３は，ＳＡ１出土の軽石製石棒で，長さ9.9cmである。断面はやや卵形を呈し，長径4.9cm，短径4.2㎝を測る。

第42図４は，ＳＡ18出土の軽石製石製品で石棒と対になるものであり，半分欠如している。まん中に１本の溝を入れ，それを中心にまわりに溝を直角に数本入れる。

6．石　器（第43・44図）

石器の量も少なく，竪穴住居から石斧が２，凹石が８，砥石が２出土しているだけである。石庖丁は出土していないが，磨製石鏃がＳＣ10から出土した。

ＳＡ３（第43図６），ＳＡ５（第43図10），ＳＡ９（第44図14）出土の凹石は両面とも敲打されている。ＳＡ５（第44図13）出土の石器は４面のうち２面は砥石に残りの２面は敲打されている。砥石としてはＳＡ17（第43図７）出土のものがある。第44図15はＳＡ２出土の砂岩製の磨製石斧で基部が欠如している。ＳＡ10からも磨製石斧が出土しており，XV区から抉入り片刃石斧も出土している。第42図２はＳＣ10出土の無茎の磨製石鏃で先端部を欠如している。

小　結

(1)　堂地東遺跡出土の弥生土器の編年

学園都市遺跡群内の弥生土器は，概報で調査した遺跡の一部の資料が公表されただけで編年はまだ行なわれていない。まず，日向における弥生土器編年の研究は３段階に分かれる。

第Ⅰ期は1938年～1966年に県外の研究者である森貞次郎氏が北九州の編年をもとにして日向の土器を見るが，発掘資料に恵まれていないことが弱点であった。1939年に小林行雄氏は宮崎・熊本・鹿児島の南九州の弥生土器をＡ～Ｅの５様式に分類し，日向においてはＡ・Ｄ・Ｅに順序付けた。Ａ・Ｂ・Ｃは北九州の第一・二・三様式にそれぞれ対応するとした。[2] 1964年に森氏は第Ⅰ～Ⅴ様式に分類し，くの字口縁の刻目突帯甕を第Ⅱ様式に位置付けた。[3] 1966年，森氏は日向を東部九州として扱い，中期に東部九州と南部九州を１つにした大津文化圏ともよぶべき近畿・東瀬戸内系文化圏が成立するとした。[4]

第Ⅱ期は1968年～1982年で県内の研究者が日向の土器について述べる段階であるが，やはり発掘資料に恵まれていなかった。1968年に石川恒太郎氏が日向の前期・中期・後期の土器の概略的な特徴を述べ，巻末に編年表を載せているが，[5] 発掘資料に恵まれていなかったため不十分であった。1973年に鈴木重治氏は県内の弥生遺跡を前・中・後期に分けて概観しているが，土器の編年は提示されなかった。[6] 1975年に田中茂氏は刻目突帯を一条有するくの字口縁の甕形土器を中溝式と仮称し，袋状口縁壺が北九州第三様式の須玖式系の壺であり，これに共伴すると考えて中溝式を中期後半～後期初頭に比定した。[7] 1973年に小田富士雄氏は九州の弥生土器編年をまとめたが，日向の発掘資料の不足と宮崎側の研究の遅れのためか日向の土器についてあまり言及していない。[8]

第Ⅲ期は，1983年以降，学園都市遺跡群の発掘調査を始めとして面的調査が増え，県内の若手研究者から体系的な編年試案が提示される段階である。1983年，石川悦雄氏は宮崎平野の弥生土器の編年をはじめて体系的に細分化を行

ない，前期をⅠa・Ⅰb・Ⅰc期，中期をⅡa・Ⅱb・Ⅲ・Ⅳ期，後期をⅤa・Ⅴb・Ⅵ・Ⅶa・Ⅶb期，終末期～古式土師器をⅧ期とした[9]。1984年にはその編年案を８期12小期から６期11小期に組み換え，前期をⅠa・Ⅰb・Ⅰc期，中期をⅡa・Ⅱb・Ⅲ期，後期をⅣa・Ⅳb・Ⅳc・Ⅴ期，終末期～古式土師器をⅥ期とした[10]。氏の編年の場合，本人も認めているように前期の櫃遺跡・持田中尾遺跡，中期の鐙遺跡，終末期～古式土師器の東平下１号周溝墓以外には良好な発掘資料がないために下北方出土の壺が前期から中期に下がったり，中溝遺跡出土の袋状口縁壺が後期からはずされたりしているが，現状では最も妥当性のある編年である。

堂地東遺跡は，石川悦雄氏編年[11]のⅢ・Ⅳa・Ⅳb・Ⅵ期に相当する。当遺跡はⅠ～Ⅳ期に区分され，その特徴について述べる。

堂地東Ⅰ期

この時期の資料はＳＡ１・２出土の土器で，直口する口縁部下に一条の刻目突帯を有する下城式の甕形土器Ⅰ類と水平で平坦な逆Ｌ字状口縁の大甕ⅦAa類の組み合わせである。

堂地東Ⅱ期

この時期の資料はＳＡ３・４・５・８・15出土の土器，ＳＡ６・７・12・14出土の古いタイプの土器である。一条の刻目突帯を有するくの字口縁甕Ⅱ類の出現を画期として，鋤先口縁の壺であるⅠ類と鋤先口縁の名残を残すⅡ類を伴なう。また壺Ⅴ類・甕Ⅴ類のように別系統の土器が出現する。甕Ⅲ・ⅣＡ・ⅥＡ・ⅦＡｂ・ⅨＡ・ⅨＢ・ⅩＡ～Ｅ類，壺Ⅳ・Ⅵ類，高坏Ⅰ類，鉢Ⅱ類がこの時期に属する。

堂地東Ⅲ期

この時期の資料はＳＡ16・17・18・19出土の土器，ＳＡ６・７・12・14出土の新しいタイプの土器である。甕Ⅰ類はⅡ期と比較すると，口縁部が直立気味に立ち上がり，内面の稜が甘くなる。壺は，口頸部と肩部の境に突帯を有し，口縁部が若干外反気味にゆるやかに伸びるⅢ類である。甕ⅣＢ・Ⅴ・ⅥＢ・ⅥＣ・ⅨＣ類がこの時期に属する。

堂地東Ⅳ期

堂地東遺跡Ⅲ期とⅣ期の間は空白期であり，後期中葉～後葉に相当する。Ⅳ期の資料はＳＡ11出土の土器である。櫛描波状文を施した二重口縁壺のⅦ類，底部は丸底に近い直口壺のⅧ類，口頸部がなだらかに外反する甕ⅩⅠ類を特徴として，台付甕Ⅰ類・鉢Ⅰ類の組み合わせである。

以上のように堂地東遺跡出土の土器をⅠ期～Ⅳ期に分けたが，それぞれの時期比定について述べる。

Ⅰ期は，甕ⅦＡａ類の水平で平坦な逆Ｌ字状口縁の特徴から中期後半に比定され，石川氏編年[11]のⅢ期に相当する。Ⅱ期は，壺の口縁に鋤先口縁の名残を残すこと，上ノ原遺跡[12]（国富町）で甕Ⅱ類と瀬戸内系の矢羽透し高坏が共伴した例，鬼付女川西遺跡[13]の竪穴住居の切り合い及び「日向型間仕切り住居」の出現[14]から後期初頭に比定され，石川氏編年のⅣa期に相当する。Ⅲ期は，鋤先口縁の名残が完全に消失する壺Ⅲ類の出現から後期前葉に比定され，石川氏編年のⅣb期に相当する。Ⅲ期とⅣ期の間は当遺跡では空白期であるが，それぞれ後期中葉，後葉に比定され，石川氏編年のⅣC期，Ⅴ期，中岡遺跡[15]Ⅰ式，Ⅱ式に相当する。Ⅳ期は甕ⅪⅠ類・壺Ⅶ・Ⅷ類の特徴から後期末葉に比定され，石川氏編年のⅥ期，中岡Ⅲ式に相当する。

併行関係について

以上述べたように堂地東遺跡出土の土器群は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期それぞれ石川氏編年のⅢ・Ⅳa・Ⅳb・Ⅵ期に対応する。堂地東遺跡Ⅱ期・Ⅲ期の土器群の中に鹿児島県の資料と比較できるものがある。甕Ⅴ類が成川遺跡[16]の充実した脚台状の底部を持つ甕Ⅱ類に対応し，中期後半に比定されている。壺Ⅴ類は成川遺跡の壺Ⅲ類に対応し，中期中葉～後半に比定されている。これらの土器群は，河口貞徳氏によって中期後半[17]とされた山ノ口式土器であるが，森貞次郎氏は一部後期初頭におよぶ可能性を示唆しており[18]，石川悦雄氏も新田原遺跡（新富町）における瀬戸内系土器との共

伴関係から森氏の見解を支持している[19]。堂地東遺跡出土の壺Ⅴ類・甕Ⅴ類は一条の刻目突帯を有するくの字口縁甕Ⅱ類と共伴しているので，後期初頭に比定される[20]。

(2) 堂地東遺跡の竪穴住居と集落構成

堂地東遺跡は弥生時代中期後半から終末（堂地東Ⅰ～Ⅳ期）の竪穴住居跡が20軒調査された。堂地東Ⅰ期～Ⅲ期は連続して集落が営まれ，「日向型間仕切り住居」が出現するⅡ期に大きな画期が見られる。一方では，Ⅲ期とⅣ期の間には明らかに空白期が見られ，集落が断絶しており，集落が熊野原遺跡B地区に移動している。その時期は後期中葉から後葉に相当する。集落の変遷と伴に竪穴住居のプランが，方形プラン→「日向型間仕切り住居」→台形プランに変化している。竪穴住居の構造が「日向型間仕切り住居」に代表されるように在地的であるので，竪穴住居の分類を行なって，堂地東遺跡の変遷を明らかにしたい。

竪穴住居の分類（表32）

竪穴住居を平面プランによって円形プラン，方形プラン，間仕切りの機能を有する突出壁を複数有する「日向型間仕切り住居」，台形プランに分ける。「日向型間仕切り住居」については，付論で詳細に検討するので，ここでは分類だけを提示する。第Ⅰ類は円形プランを，第Ⅱ類は方形プランを，第Ⅲ類は第Ⅰ類と第Ⅱ類の折衷型プランを基調とする。第Ⅳ類は方形プランで突出壁を1，2個有し，主体穴の2本と4本に分かれる。第Ⅰ～Ⅳ類はベッド状遺構の有無によって更にA・Bに分類される。堂地東遺跡は，方形プラン4軒，ⅠA類1軒，ⅠB類3軒，ⅡA類2軒，ⅡB類3軒，ⅢA類2軒，ⅢB類2軒，台形プラン1軒である。円形プランとⅣ類はない。次にⅠ期～Ⅳ期の竪穴住居の分布から集落景観を復元してみたい。

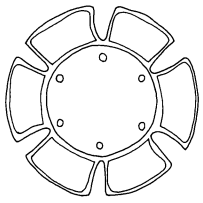
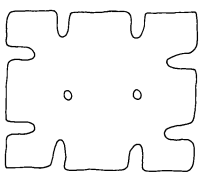
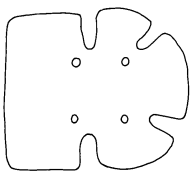
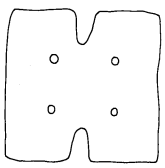
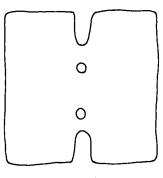
分類		模式図	特徴
Ⅰ	A		円形プランを基調とする。 ベッド状遺構を有する。
	B		円形プランを基調とする。
Ⅱ	A		方形プランを基調とする。 ベッド状遺構を有する。
	B		方形プランを基調とする。
Ⅲ	A		Ⅰ類・Ⅱ類の折衷型 ベッド状遺構を有する。
	B		Ⅰ類・Ⅱ類の折衷型
Ⅳ	A		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 4本柱　ベッド状遺構を有する。
	B		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 4本柱
	A		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 2本柱　ベット状遺構を有する。
	B		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 2本柱

表32　日向型間仕切り住居分類図

堂地東Ⅰ期（Fig. 29）

Ⅰ期の竪穴住居は，方形プランの住居２軒で，北側の斜面の標高23ｍにＳＡ１，南へ40ｍ離れて標高26ｍにＳＡ２が位置する。当丘陵の北側縁辺で，中央部には住居が営まれていない。住居の規模はＳＡ２の11.1㎡，ＳＡ１の推定23.0㎡と小さい。集落と呼べるものではなく閑散とした景観を見せる。

堂地東Ⅱ期（Fig. 29）

Ⅱ期の竪穴住居は，方形プラン１軒，ⅠＡ類１軒，ⅠＢ類２軒，ⅡＡ類２軒，ⅡＢ類１軒の計９軒であり，「日向型間仕切り住居」の集落である。丘陵の中央部と北側の部分の標高26～29ｍに分布し，住居間隔は20～40ｍである。住居の規模は20㎡～40㎡であるのに対してＳＡ８は66.1㎡と突出しており，逆に方形プランのＳＡ４は11.0㎡と最小である。９軒で１集落を形成しているが，住居間隔が広いためゆったりした集落景観を見せる。ＳＡ８はほとんど削平されていたために遺物量が非常に少ないので性格を把握するのは困難であるが，面積が最大規模であるので，当集落の何らかの中心的役割を果たす住居と考えられる。

堂地東Ⅲ期（Fig. 29）

Ⅲ期の竪穴住居は，ⅠＡ類１軒，ⅠＢ類１軒，ⅡＡ類３軒，ⅡＢ類２軒，ⅢＡ類１軒の計８軒であり，Ⅱ期と同様「日向型間仕切り住居」の集落である。丘陵の中央部と南側の部分の標高26ｍ～29ｍに分布し，住居間隔15ｍ～40ｍである。住居の規模は20㎡～40㎡であるのに対して，ＳＡ19は7.9㎡と最小であるので別の用途を考える必要がある。８軒で１集落を形成しているが，内４軒はⅡ期から継続して営まれており，Ⅱ期と同じような集落景観を見せる。この時期を以て堂地東遺跡の集落は終束する。

堂地東Ⅳ期（Fig. 29）

Ⅳ期の竪穴住居は，台形プランのＳＡ111軒だけである。丘陵の南斜面近くの標高25ｍに位置する。面積は16.3㎡と小さい。Ⅲ期とⅣ期の間に当集落は断絶しており，この時期に東へ400 ｍ離れた熊野川を挟んで反対の台地へ集落を移動している。その集落が熊野原遺跡Ｂ地区であり，移動の要因は熊野原遺跡Ｂ地区が未整理なので不明であるが，「日向型間仕切り住居」のⅠＢ・ⅢＢ・ⅣＢ類で構成されており，Ⅳ類が出現し，ベッド状遺構がないのが注目される。

（長　津　宗　重）

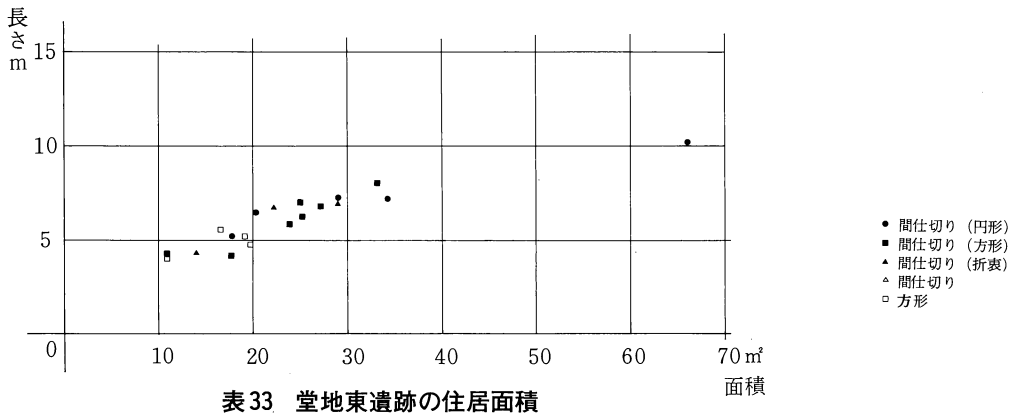


表33　堂地東遺跡の住居面積

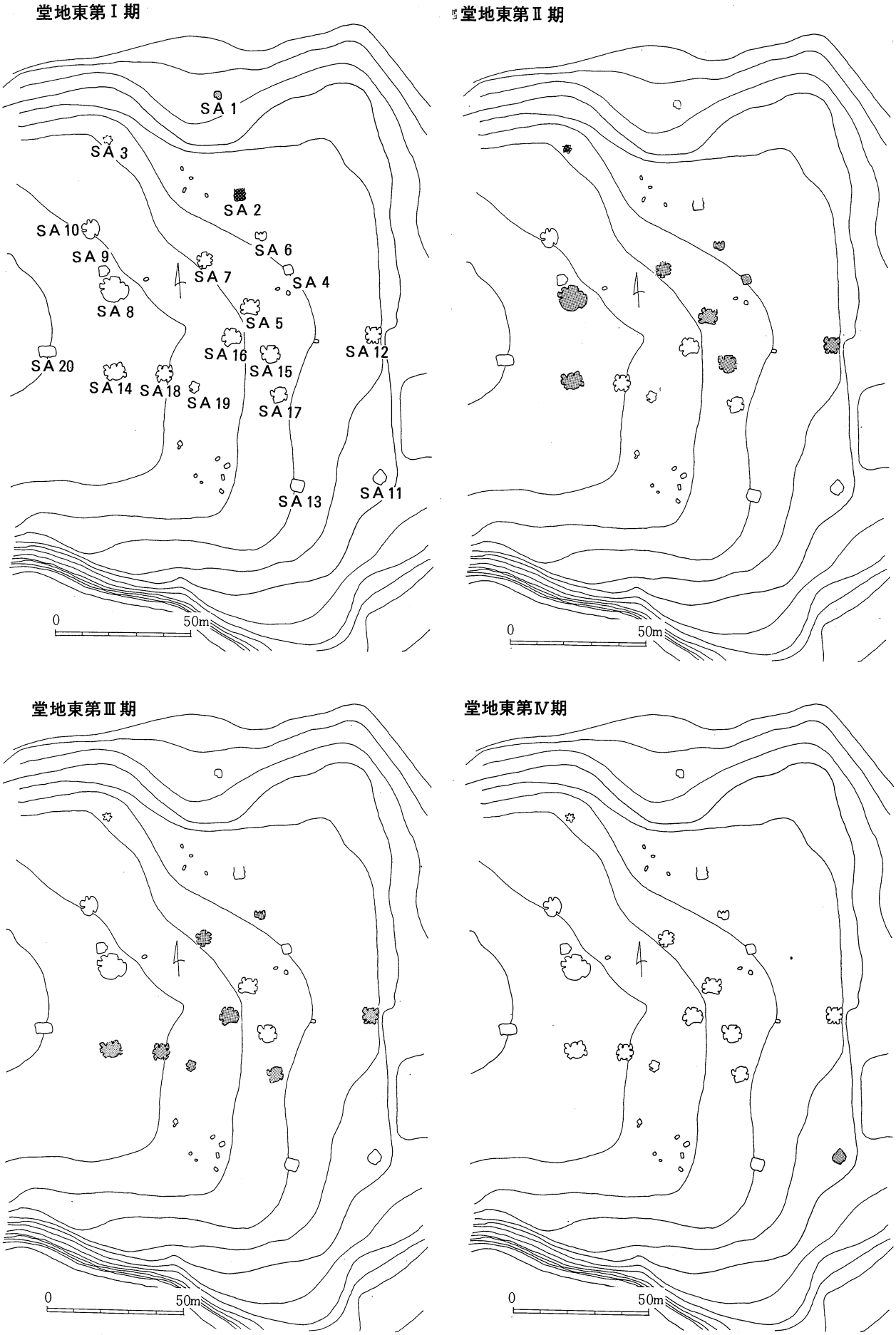


Fig. 29　堂地東遺跡集落変遷

註

(1)北郷泰道　「結語－住居の変遷にふれて－」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）』1982

(2)小林行雄　「弥生式土器聚成図録解説」1939

(3)森貞次郎　「東九州地方」『弥生土器集成　本編Ⅰ』1964

(4)森貞次郎　「九州」『日本の考古学　Ⅲ』1966

(5)石川恒太郎『宮崎県の考古学』1968

(6)鈴木重治　「宮崎における弥生文化の編年上の位置」『石神遺跡』1973

(7)田中　茂　「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『宮崎県総合博物館研究紀要』第３輯　1975

(8)小田富士雄「入門講座　弥生土器・九州」『考古学ジャーナル』76号～84号　1972・1973

(9)山中悦雄　「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描」『宮崎県総合博物館研究紀要』第８輯　1983

(10)石川悦雄　「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（ＭＫ.Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　1984

(11)註(10)に同じ　　以下同じ

(12)長津宗重　「上ノ原遺跡」『国富町遺跡詳細分布調査報告書』1984

(13)宮崎県教育委員会が1984年10月～11月に調査を行ない，１号住居から凹線文の甕の口縁が出土した。

(14)長津宗重　「堂地東遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅳ）』1983

(15)小田富士雄「中岡遺跡の弥生土器」『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』1984

(16)鹿児島県教育委員会　「成川遺跡」1983

(17)河口貞徳　「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』第７集　1960

(18)　註(4)に同じ

(19)　註(10)に同じ

(20)　凹線文の口縁部片が出土しているが，ＳＡ12の外で出土した。

第６節　中近世の遺構と遺物

１．掘立柱建物（第45～48図）

当遺跡で検出された掘立柱建物はⅠ区６棟（ＳＢ１～６），ⅩⅦ区４棟（ＳＢ７～10）の計10棟である。10棟のうち

表34　掘立柱建物観察表

建物No.	柱間	桁行 m	梁行 m	柱間寸法 桁行 m	柱間寸法 梁行 m	主軸方向	備考
ＳＢ１	４間×３間	6.57	6.30	2.20	1.30	N73°　E	両廂
ＳＢ２	３間×２間	5.85	3.20	1.80	1.74	N33°　E	
ＳＢ３	２間×２間	4.27	4.06	2.15	2.10	N21°　W	
ＳＢ４	２間×１間	5.00	4.92	2.50	4.92	N16°30′W	
ＳＢ５	３間×２間	5.62	3.95	1.74	2.05	N76°　E	
ＳＢ６	４間×２間	8.00	3.20	1.81	1.65	N22°　W	
ＳＢ７	６間×４間	12.36	7.08	2.10	1.90	N68°30′E	両廂
ＳＢ８	５間×４間	9.90	6.16	1.95	1.80	N69°　E	両廂
ＳＢ９	４間×３間	8.34	5.90	2.80	1.90	N34°30′E	両廂
ＳＢ10	２間×２間	4.10	3.92	1.90	1.86	N61°30′E	

4棟は両廂を有する。主軸方向では，東西方向のＳＢ１・２・５・７・８・９のグループと南北方向のＳＢ３・４・６に分かれる。規模ではＳＢ７が６間×４間と大きい。Ⅰ区はヘラ切り底の土師器，ⅩⅦ区では糸切り底の土師器を中心としている。以下，詳細については遺構観察表（表34）を参照されたい。

本遺跡において，中近世に相当すると思われる遺物としては，石塔群やⅠ・ⅩⅦ区で確認された掘立柱建物跡等に伴い土師器・陶磁器・古銭等が出土している。

２．土師器（第54図～第61図）

本遺跡出土の土師器は，ほとんどが坏・小皿類である。それぞれヘラ切り底，糸切り底がある。分布状況はⅡ区西側やⅣ区石塔群，及びⅠ・ⅩⅦ区に集中している。それぞれ底部の立上りや口縁部の形態等により数類に細分できる。分類の基準は「山内石塔群」で用いられているヘラ切り底（Ⅰ類），糸切り底（Ⅱ類），坏（Ａ類），小皿（Ｂ類）に準拠し，更に，当遺跡において細分類した（表35）。

Ⅰ－Ａ－１類（口径10.6～13.4cm，器高3.3～4.7cm，底径６～8.2cm）

底部から体部へ丸味をもってやや内湾気味に立ち上がり，胴部中半より口縁部に向ってゆるやかに外反する。内外面ともていねいな横ナデ調整を行い，光沢のあるものもある。内底面にはナデによる起伏がある。

Ⅰ－Ａ－２類（口径11.6～13.3cm，器高3.7～4.4cm，底径7.2～8.3cm）

底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。体部は直線的に外側へ開く。薄手。口縁端部はシャープである。内外面とも横ナデ調整である。外底面には板状圧痕が残る。

Ⅰ－Ａ－３類（口径11.5～12.4cm，器高4.3～4.4cm，底径5.6～6.0cm）

底部と体部の境目は若干稜を形成する。体部は直線的に開くタイプである。やや厚手。口縁端部は丸くおさまる。底径は小さい。

Ⅰ－Ａ－４類（口径12.5～13.6cm，器高3.9～4.9cm，底径4.5～9.0cm）

底部と体部の境目は明瞭で，短く上方へ立ち上がり，外側へ直線的に開く。厚手。

Ⅰ－Ａ－５類（口径11.6～15.2cm，器高3.9～4.9cm，底径5.4～9.6cm）

底部と体部の境目は丸味を持ち，内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。内外面とも横ナデ調整。内底部は平坦である。法量的に細分の可能性がある。

Ⅰ－Ａ－６類（口径13.5cm，器高4.6cm，径8.5cm）

底部と体部の境目は稜を有す。若干内湾気味に立ち上がり直線的に口縁部へ至る。口縁端部は丸い。厚手で大型である。

Ⅱ－Ａ－１類（口径11.2～13.6cm，器高3.3～4.2cm，底径6.3～8.6cm）

底部と体部の境目は丸味をもち，直線的に立ち上がる。内外面とも横ナデ。体部にはナデによる稜を有す。

Ⅱ－Ａ－２類（口径11.8cm，器高2.8cm，底径７cm）

体部は底部から丸味をもって立ち上がり，外側へ直線的に短く開く。口縁端部はシャープである。厚手。

Ⅱ－Ａ－３類（口径11.0～13.4cm，器高3.6～4.3cm，底径5.3～9.0cm）

底部と体部の境目は丸味をもつ。体部は内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。

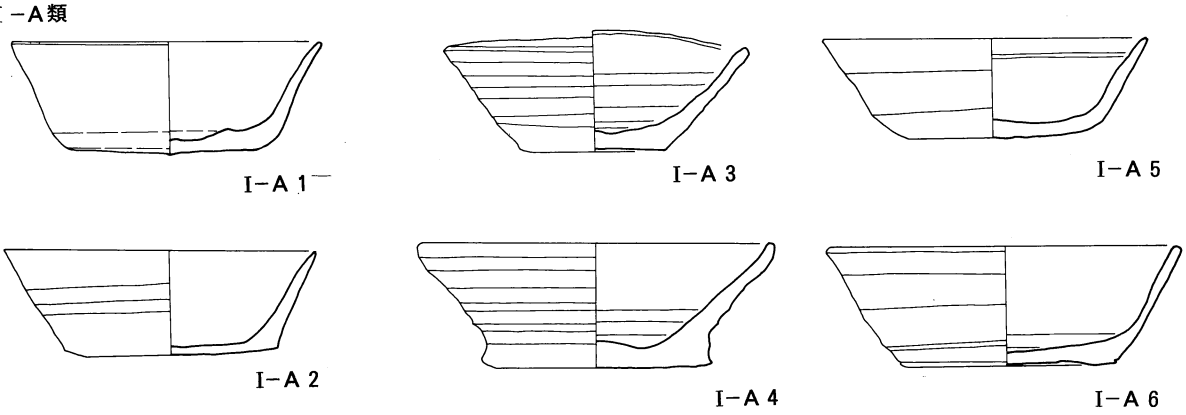
Ⅱ－Ａ－４類（口径13.6～14.2cm，器高3.8～4.4cm，底径8.6～8.8cm）

底部と体部の境目は丸味をもつ。やや内湾気味に立ち上がり，胴部中半より外反する。内外面とも横ナデ。口縁端部はシャープである。

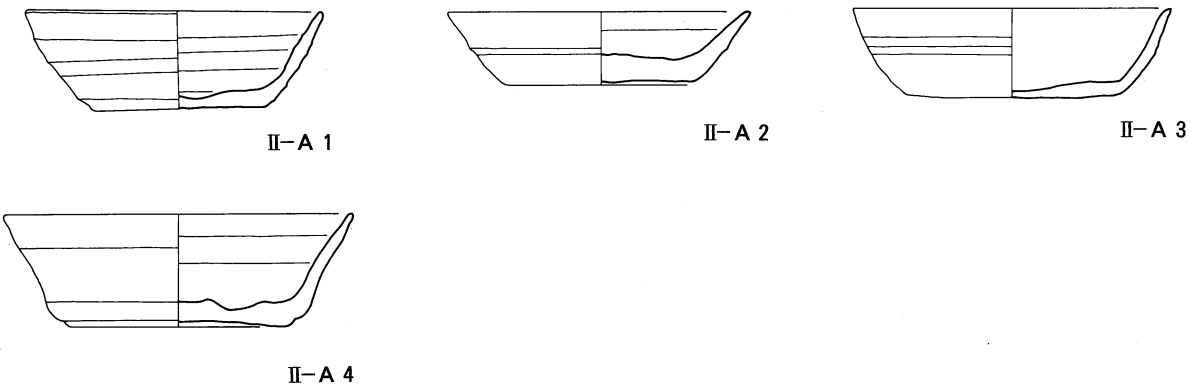
Ⅰ－Ｂ－１類（口径6.8～9.4cm，器高1.1～1.7cm，底径5.6～8.2cm）

底部と体部の境目が明瞭で,やや外反ぎみに短く上がる。口縁端部が丸くおさまるもの（ａ）とシャープなもの（ｂ）

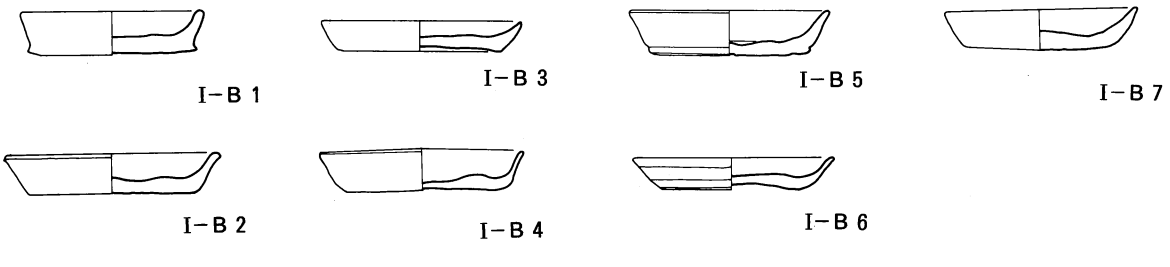
Ⅰ－A類



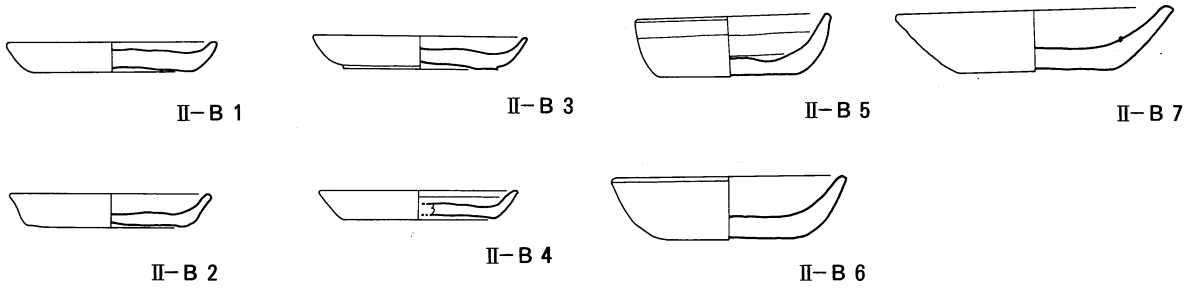
Ⅱ－A類



Ⅰ－B類



Ⅱ－B類



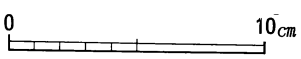


表 35　土師器形態分類図

に２分できる。

Ⅰ－Ｂ－２類（口径7.4～10cm，器高1.2～1.7cm，底径5.4～7.3cm）

底部と体部の境目が若干丸味をおびて，外反ないしは直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。

Ⅰ－Ｂ－３類（口径6.4～９cm，器高1.0～1.5cm，底径5.4～7.4cm）

底部と体部の境目は丸味を持ち，直線的に短く立ち上がる。口縁端部はシャープである。薄手。

Ⅰ－Ｂ－４類（口径6.4～8.8cm，器高1.4～1.9cm，底径3.4～7.2cm）

底部と体部の境目は丸味をもち直線的に立ち上がる。口縁端は丸くおさまる。内底面にはナデによる起伏がある。

Ⅰ－Ｂ－５類（口径7.8～9.5cm，器高1.8～1.9cm，底径6.2～8.2cm）

底部と体部の境目は若干稜を有し，直線的に立ち上がる。口縁端部はシャープである。

Ⅰ－Ｂ－６類（口径7.4～8.8cm，器高1.2～1.5cm，底径5.0～6.0cm）

底部と体部の境目は丸味をもつ。内湾気味に立ち上がり，上半で外反する。口縁端部がシャープなものと丸くおさまるものとがある。

Ⅰ－Ｂ－７類（口径7.5～9.0cm，器高1.5～2.1cm，底径4.8～6.0cm）

底部と体部の境目は丸味をもつ。内湾もしくは直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。厚手。

Ⅱ－Ｂ－１類（口径6.2～10.2cm，器高1.0～1.4cm，底径6.3～8.6cm）

底部と体部の境目は明瞭である。体部はやや内湾気味に短く立ち上がる。

Ⅱ－Ｂ－２類（口径7.9～8.5cm，器高1.0～1.6cm，底径6.0～6.5cm）

底部と体部の境目は丸味をもつ。体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸くおさまるものが多い。

Ⅱ－Ｂ－３類（口径7.3～8.4cm，器高1.0～1.6cm，底径3.0～6.3cm）

底部から体部へ丸味をもち，外側へ直線的に開く。口縁端部はシャープである。

Ⅱ－Ｂ－４類（口径7.6～8.4cm，器高1.1～1.7cm，底径5.2～6.0cm）

底部と体部の境目は丸味をもち，体部は外反ぎみに立ち上がる。口縁端部はシャープである。

Ⅱ－Ｂ－５類（口径7.6～8.2cm，器高2.1～2.4cm，底径5.6cm）

底部と体部の境目は明瞭である。体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端は丸い。厚手。

Ⅱ－Ｂ－６類（口径7.4～9.2cm，器高1.8～2.4cm，底径4.4～5.6cm）

底部と体部の境目は丸味をもち，体部は内湾気味，ないしは体部中半に屈曲部をもって立ち上がる。厚手。

Ⅱ－Ｂ－７類（口径8.4～11.4cm，器高1.8～2.4cm，底径5.4～6.8cm）

底部と体部の境目及び口縁端が丸いもの（ａ）と境目が明瞭で口縁端部がシャープなもの（ｂ）がある。体部は外側に直線的に開く。厚手。

瓦質土器・陶磁器（第62～65図）

坏・小皿以外の中世の遺物として各種出土している。

221は土師器の甕である。222は土鍋でありⅢ区より出土している。須恵器はⅣ区・石塔群より長頸壺（222）が出土している。また陶器としては，古瀬戸の水注（225）や備前焼の大甕（227～231）や擂鉢（241～246），常滑焼の甕（228）も出土している。またこね鉢として東播系（魚住窯）の製品も出土している。磁器は青磁・白磁・染付などの輸入陶磁が主流をなしている。白磁は皿が主で，高台がアーチ状に削られているものや，印花文を有するものなどが出土している。青磁は特に龍泉窯系のものが多く出土しており，器形としては埦が多い。蓮弁も削り出しているものから線描のものまで出土しており，その他雷文帯を有するものなどが出土している。また細片ではあるが同安窯系の青磁も出土している。染付は271のような見込みに玉取獅子文をもつ皿が出土している。その他，268，269などは輸入陶磁とは胎土が異なるため，国内産の磁器と考えられる。268などは美濃焼の折縁菊皿に形態は類似している。

古銭（第78図）

古銭は全てで55枚確認されている。量的にいえば，Ⅱ区の近世墓より出土した寛永通宝が多いが，その他ではⅩⅧ区のＳＨ449他より出土している洪武通宝・元豊通宝が多く，また少量ではあるが開元通宝も出土している。

石製品（第80図）

石製品としては，Ⅲ区のＳＥ２やⅩⅦ区より滑石製石鍋の破片が，Ⅳ区よりは石製の硯，ⅩⅦ区から石臼(第80図５）が出土している。

土製品（第80図）

型作りの仏像（第80図１）や人形（第80図２）も出土している。

墨書石（第79図）

墨書石はⅣ区石塔群より７個体出土している。いずれも偏平な河原石に墨書が施されているが，部分的にしか残っていない。一番残存状況のよかったのが，第79図１で四面に「妙法蓮華経　巻第八　観世音菩薩普門品第二十五[(1)]」の一部が書かれており，そのうちの１面は左～右へ書かれていた。また第79図２は中央部に凹みがあり陰石の可能性が指摘されている[(2)]。

註 (1)坂本幸男，岩本裕訳注「法華経（下）」岩波書店　1967

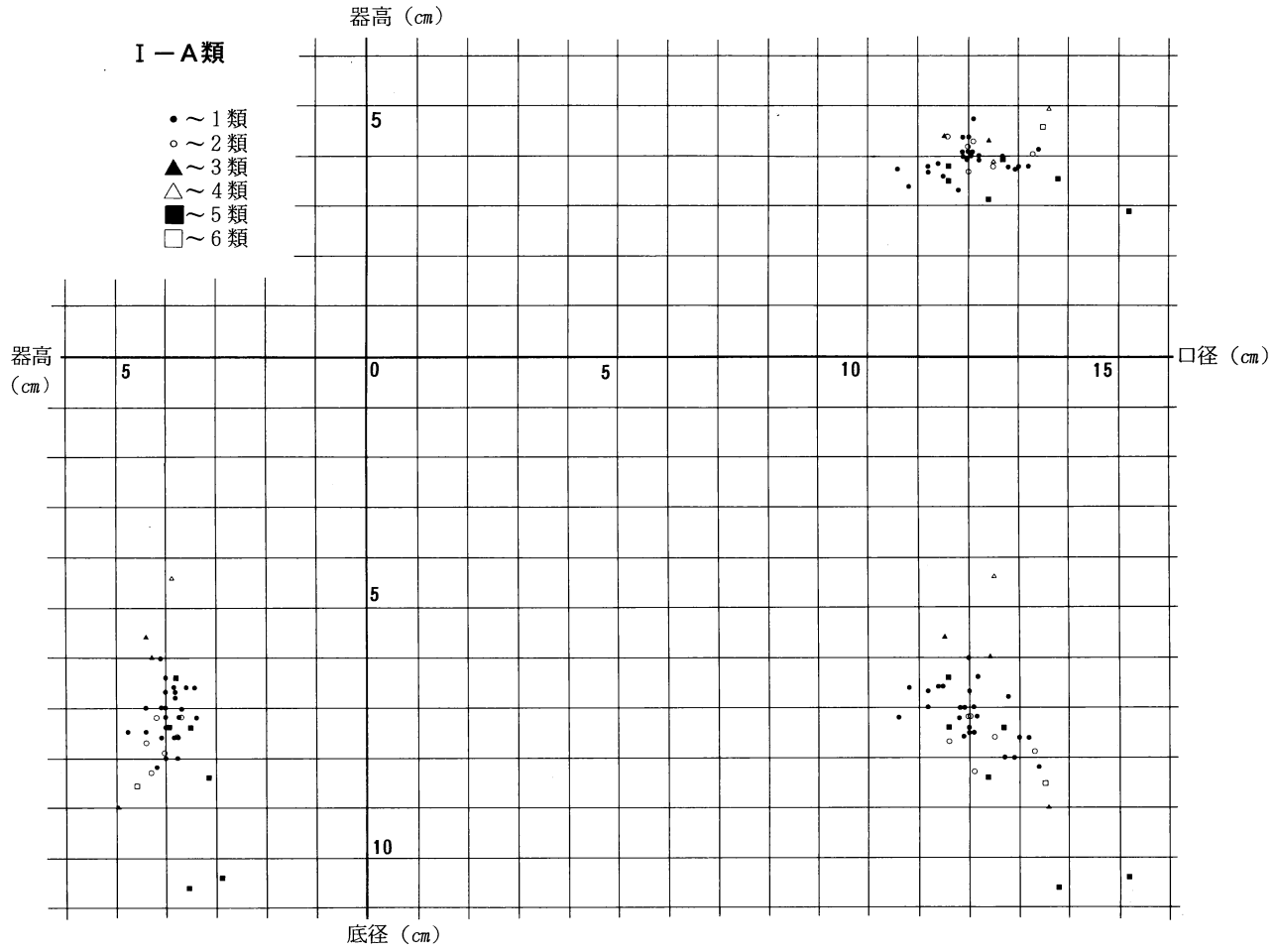
(2)特別調査員として御指導いただいた河野治雄氏他の御教示による。

土師器，その他　　小　結

堂地東遺跡出土の土師器は本文中及び表35で示したような分類が行なえる。この分類をもとに若干の整理を行ってみたい。

堂地東遺跡における土師器の出土分布状況を見てみると，Ⅱ区の西側の地点で集中している地点が１ケ所ある他はほとんどⅠ・ⅩⅦ区のピット群出土のものである。よってⅡ区およびⅠ・ⅩⅦ区出土の土師を中心に検討してみたい。

まず，Ⅰ－Ａ類では，Ⅰ－Ａ－１類がⅡ区，Ⅰ－Ａ－２・５類がⅩⅦ区，Ⅰ－Ａ－３類がⅩⅡ区，Ⅰ－Ａ－６類がⅣ区を中心に出土している。Ⅱ－Ａ類では，Ⅱ－Ａ－１，２類がⅩⅦ区，Ⅱ－Ａ－３，４類がⅡ・Ⅳ区を中心に出土している。またⅠ－Ｂ類においては，Ⅰ－Ｂ－２，４類がⅡ区，Ⅰ－Ｂ－５，６，７類がⅩⅦ区より出土している。Ⅱ－Ｂ類はⅡ区では出土しておらずほとんどがⅠ・Ⅹ・Ⅶ区よりの出土である。またⅠ－Ｂ類においては口縁端部の調整によりⅡ区出土のものは丸く，ⅩⅦ区出土のものはシャープであるという特徴がある。


Ⅰ－A類
●～1類
○～2類
▲～3類
△～4類
■～5類
□～6類
器高（cm）
器高
（cm）
口径（cm）
底径（cm）
5
0
5
10
15
5
10

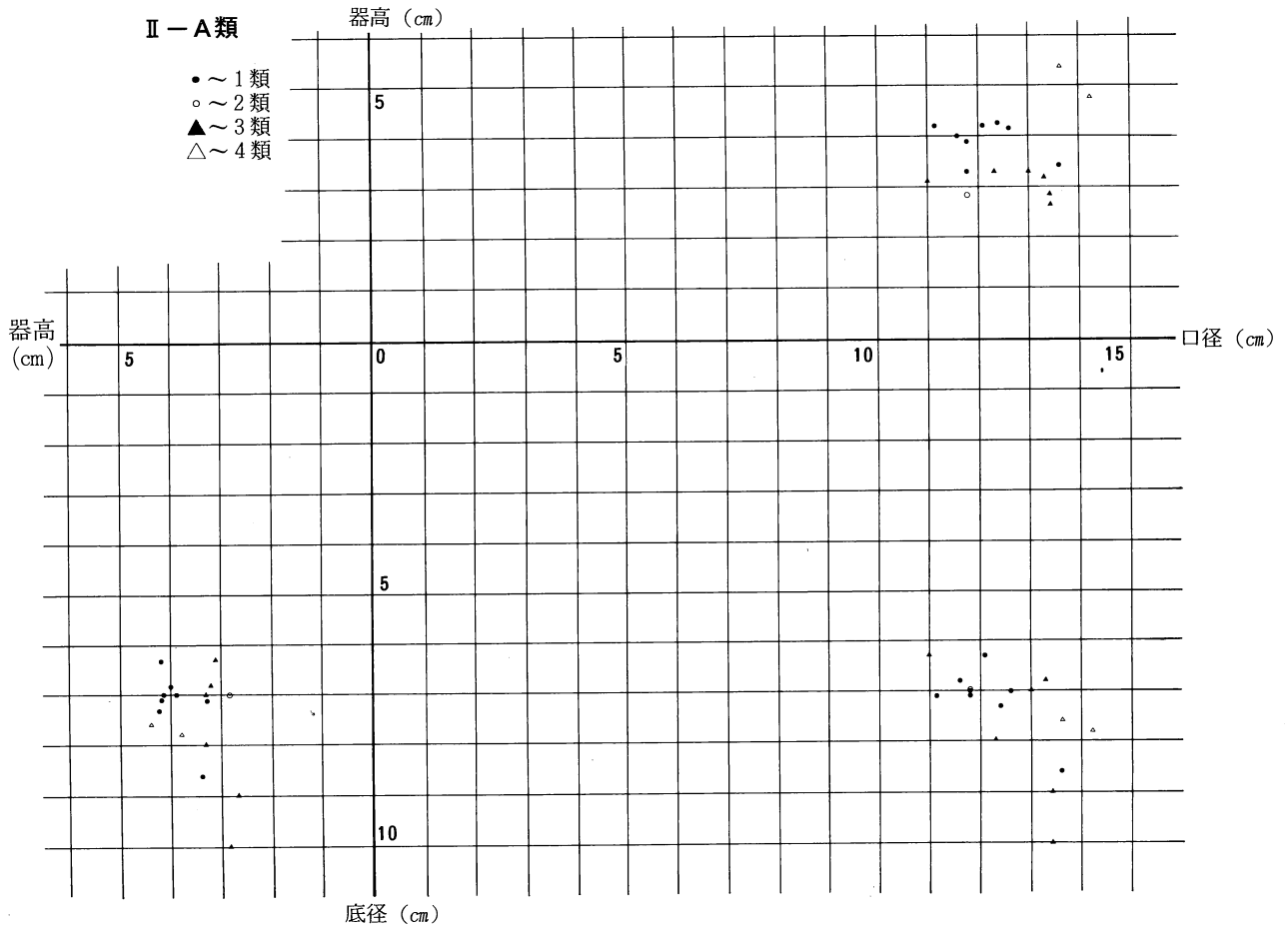
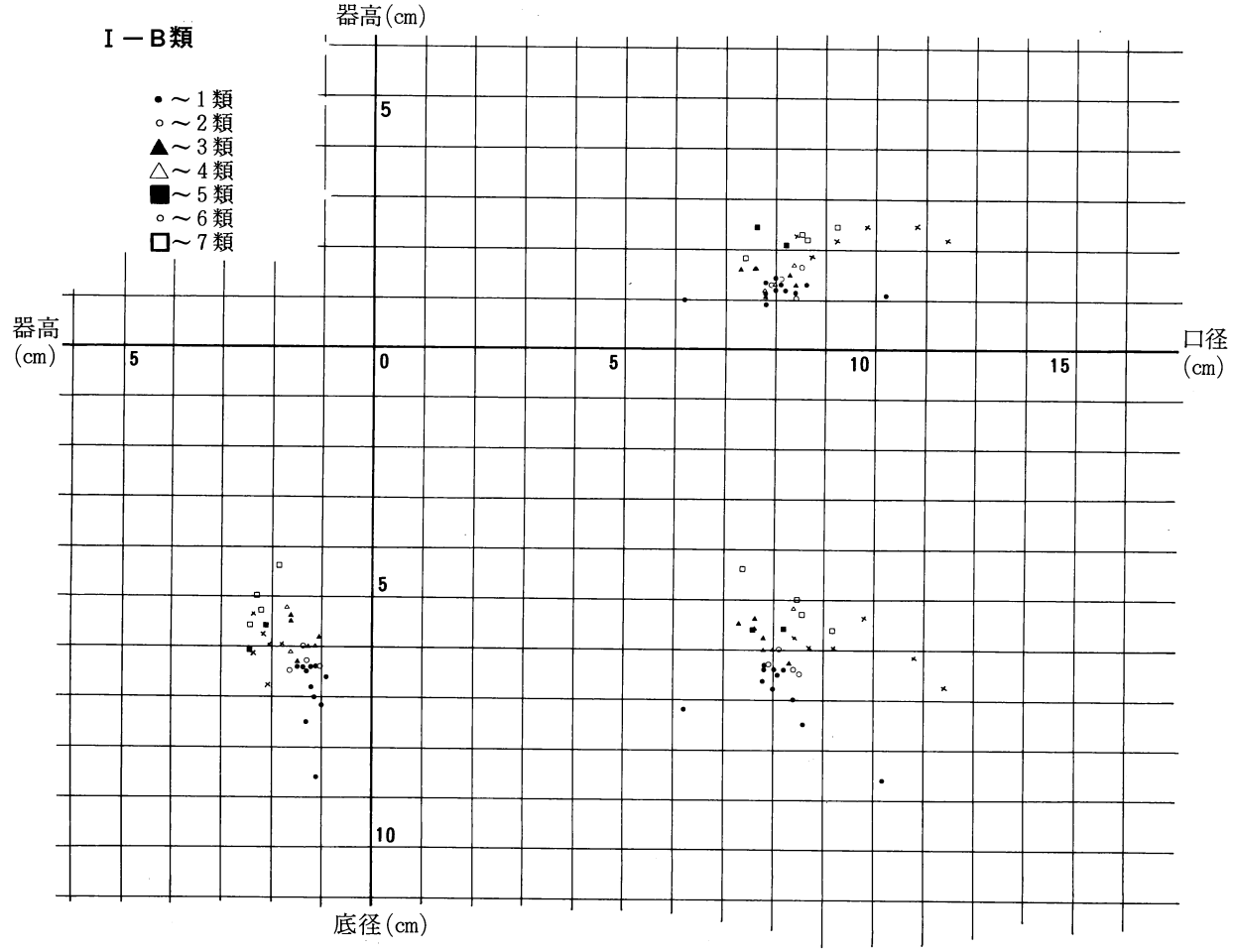

Ⅱ－A類
●～1類
○～2類
▲～3類
△～4類
器高（cm）
器高
(cm)
口径（cm）
底径（cm）
5
0
5
10
15
5
10

表36　土師器法量表(1)


Ⅰ－B類
●～1類
○～2類
▲～3類
△～4類
■～5類
◦～6類
□～7類
器高(cm)
器高
(cm)
口径
(cm)
底径(cm)
5
0
5
10
15
5
10

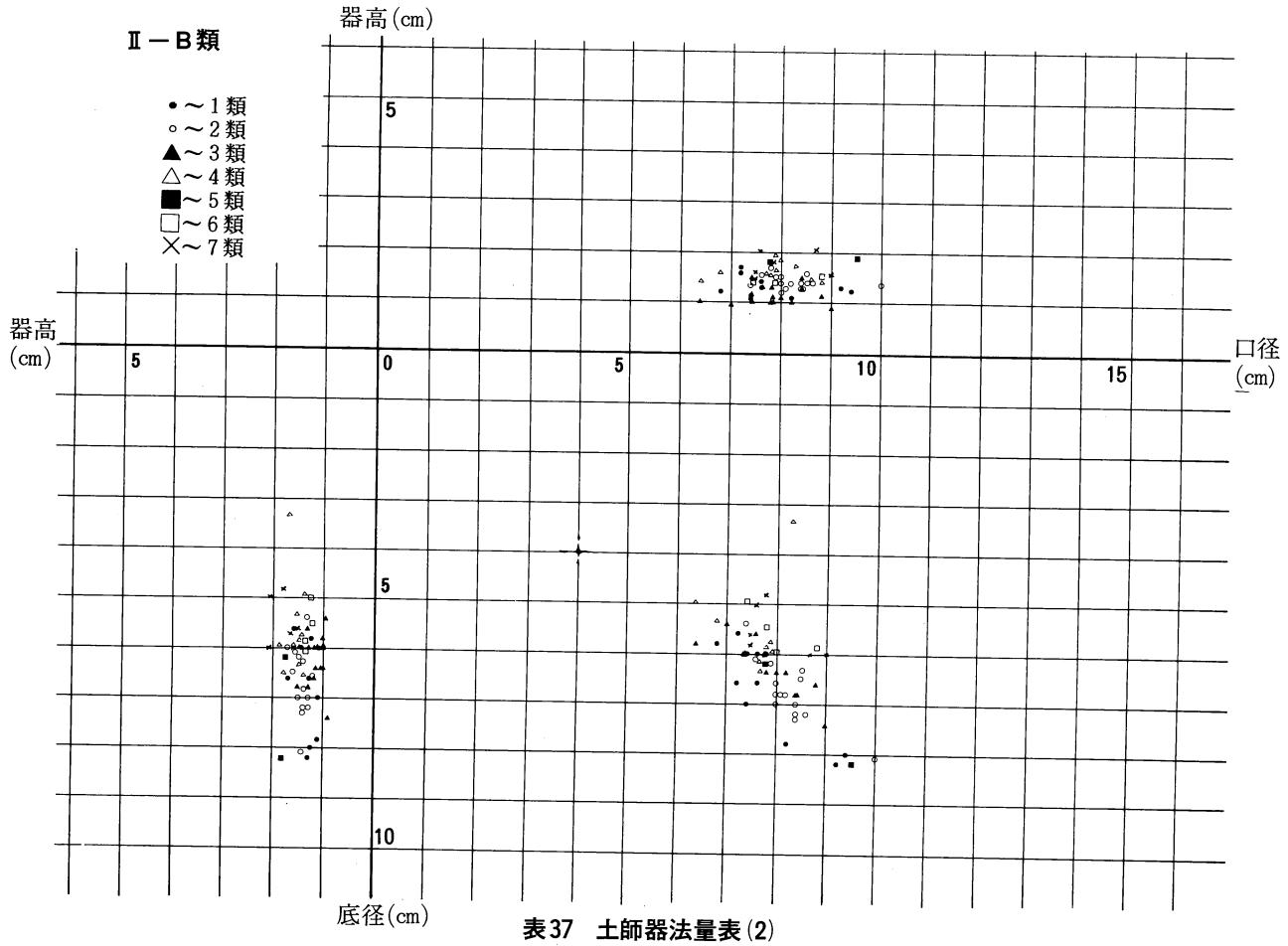

Ⅱ－B類
●～1類
○～2類
▲～3類
△～4類
■～5類
□～6類
×～7類
器高(cm)
器高
(cm)
口径
(cm)
底径(cm)
5
0
5
10
15
5
10

表37　土師器法量表(2)

その出土分布をより詳細にみてみるとXⅦ区のＳＨ3612においてⅠ－Ａ－２類とⅡ－Ａ－１類が，ＳＨ636でⅠ－Ａ－２とⅡ－Ｂ－３類の土器が共伴している。

以上のことにより，他地域のごとくヘラ切り→糸切りへの転換が行なわれたものとして若干の相対的変遷をみてみると，Ⅰ－Ａ－１類，Ⅰ－Ｂ－２，４類からⅠ－Ａ－２類，Ⅰ－Ｂ５・６が続き，この段階にⅠ－Ｂ－７類にみられるような厚手の小皿が出現すると思われる。その次の段階としてⅡ－Ａ－１，Ⅱ－Ｂ－３類を中心とする糸切り底への転換が行なわれるのではないかと思われる。その後，坏の変遷は不明であるが小皿は薄手Ⅱ－Ｂ－１，２，４類，厚手Ⅱ－Ｂ－６，７類に分かれて変化していくのではないかと思われる。現時点では，ヘラ切りから糸切りの転換を山内石塔群[1]で使用されている13世紀～14世紀前半という時期を示しておきたい。

以上，土師器における相対的な変遷を見てきたが，次に共伴している陶磁器や石塔類により，時期をみてみたい。

陶磁器ではまず注目されるのはⅣ区で出土している古瀬戸であろう。これは県内でも２例目の出土であり，ほぼ13世紀後半から14世紀のものである[2]。また備前焼の甕，擂鉢が出土しているが，擂鉢は口縁帯が発達しておりⅣ期ないしⅤ期に相当するので15～16世紀である[3]。また，少量ではあるが東播系（魚住窯）の鉢も出土しており，これは口縁部が丸味をおびているもので，13Ｃ後半代に相当するものであろう[4]。また白磁では高台をアーチ状に削るものが出土しておりほぼ15世紀のものと思われる[5]。青磁は若干時期差があり見込みに印花文を有する類および，雷文帯を有するもの，蓮弁でも大きな蓮弁を有するものは，ほぼ14～15世紀初頭の頃であり，細い線描きの蓮弁を有するものは15世紀末～16世紀にかけてのものであろう[6]。染付は見込みに玉取獅子文が描かれておりほぼ15世紀後半～16世紀前半にかけてのものであろう[7]。

また，石塔において見てみるとその形態は山内石塔群に類似しておりほぼ室町時代以降のものがほとんどであろうと思われる。その中でも紀年銘のあるものをあげると，XⅥ区出土の火輪の残欠に「大永」年間（1521～1528），XⅦ区出土の板碑天正年間（1573～1592），また周辺からであるが，享禄年間（1528～1532）銘の入った宝塔の塔身も出土している。

その他，近世墓のものと思われる墓石には寛政年間（1789～1801）と文化年間（1804～1818）の銘が入ったものがある。

これらのことより堂地東遺跡は鎌倉時代（13世紀代）に集落が営なまれたのにはじまり江戸時代にいたる長期間にわたって集落形成されていたものと思われる。その性格は，当初は，谷をはさんで対岸に位置する熊野原Ｃ地区の中世集落と同様の一般的な集落であったと予想されるが，南北朝・室町時代（15世紀代）に入る頃より，石塔群に見られるように寺院が成立し，最盛期には，ＸⅥ区の南に石塔が存在したりまたⅪ区のＳＥや，ＸⅤ・ＸⅥ区より擂鉢等が出土していることよりかなり広範囲に寺域が存在していたと思われる。その後江戸時代にはいると規模が縮少していくと思われ，寛政年間にはすでに作られたと思われるⅡ区の近世墓は，一般民衆の一族墓的形態をしめしており，この時期には廃絶したか，そうでなくてもかなり寺域としては縮少されていたものと思われる。また日向地誌の中には文政年間（1818～1830）に廃絶した貞永寺という名がみえる[8]。場所等については書かれていないので確定していえないが，堂地東遺跡も有力な候補の１つであると考えられる。

尚，今回は土師器および陶磁器等により大まかな流れを見てきたが，学園都市遺跡群内における他遺跡との比較検討を行うことによってより詳細なものになると思われる。

（日　高　孝　治）

注

(1)宮崎県教育委員会「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第１集」1984

(2)井上喜久男編「瀬戸編年図表」『世界陶磁全集第３巻』小学館　1977

(3)間壁忠彦編「備前編年図表」『世界陶磁全集第３巻』小学館　1977

(4)兵庫県教育委員会「魚住古窯跡群」1983
(5)森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982
(6)上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982
(7)小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982
(8)平部嶠南「日向地誌」1929

3．石塔群

石塔群はⅣ区の南側に位置する。果樹園開墾の際に地輪より上の空風輪・火輪はほとんど動かされて4ケ所に集積されていた。そのため原位置を保つ地輪は39基である。その他の地区は原位置を保っておらず，Ⅱ区では近世墓を切った土壙の中から五輪塔が，XV区では「大永」銘の火輪が，XⅦ区では「天正十七年」銘の画像石板碑が出土した。

石塔群の配置

南側と北側を幅160cm，深さ70cmの台形状の溝によって挟まれた幅6m，長さ28.5mの長方形の区画の中に2～4基を1単位として39基が東西方向に配列している。地輪の周囲には径15cmの河原石が敷きつめてあった。

五輪塔

空風輪は「山内石塔群」の形態分類の腰ばり尖頭型が47の61.0％と多く，法量の分類では細身の中型29，細身の小型21と多い。（以下，五輪塔の形態分類と法量分類は「山内石塔群」(1)の分類に従う）規格は，最大径4尺・高さ3尺，5尺・4尺，3尺・3尺の組み合わせが多い。

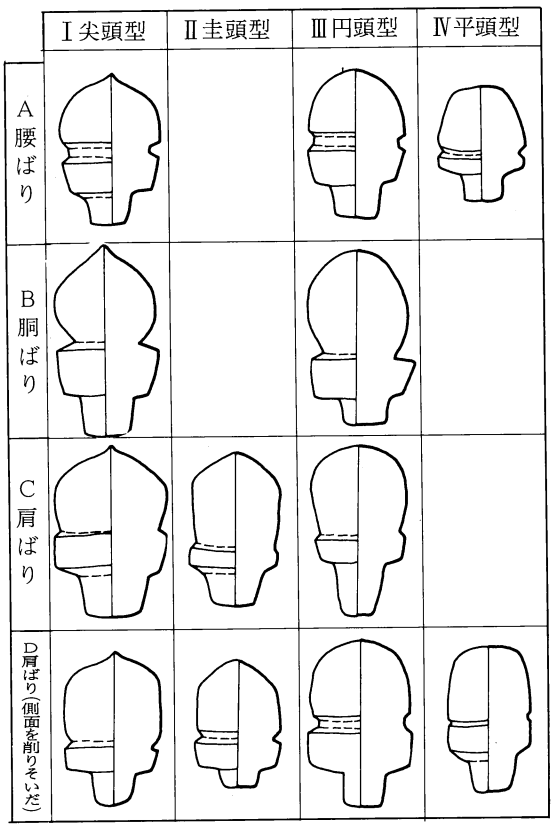


表38　空風輪形態分類図

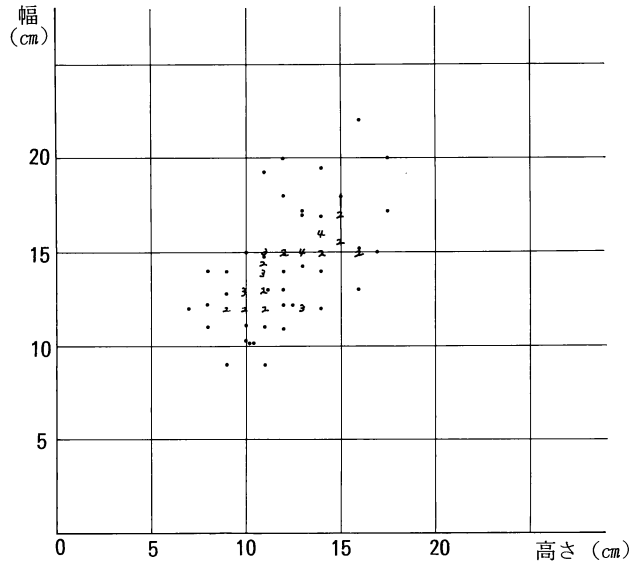


表39　空風輪の法量分布

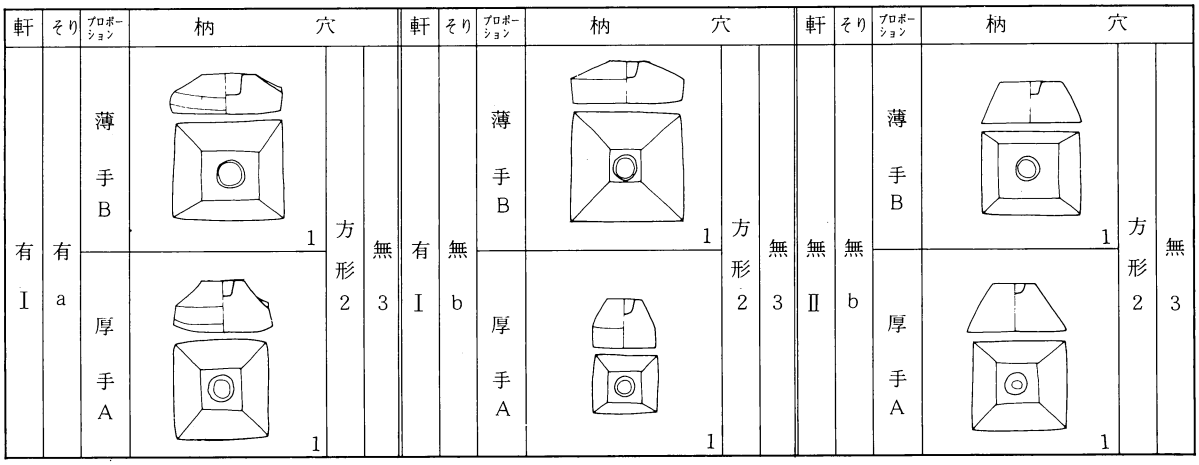


表40　火輪形態分類図

火輪は形態分類の厚手型（軒有・そり有・枘穴円形）が11，薄手型（軒有・そり無・枘穴円形）が９と多く，法量の分類では薄手の中型７，厚手の中型７と多い。規格としては，幅13尺・高さ５尺，13尺・６尺の組み合わせが多い。

水輪は形態分類の厚手型（納骨孔無）が20と多く，法量の分類では薄手の中型が17，厚手の中型が15と多い。規格としては，幅11尺・高さ５尺，11尺・７尺の組み合わせが多い。

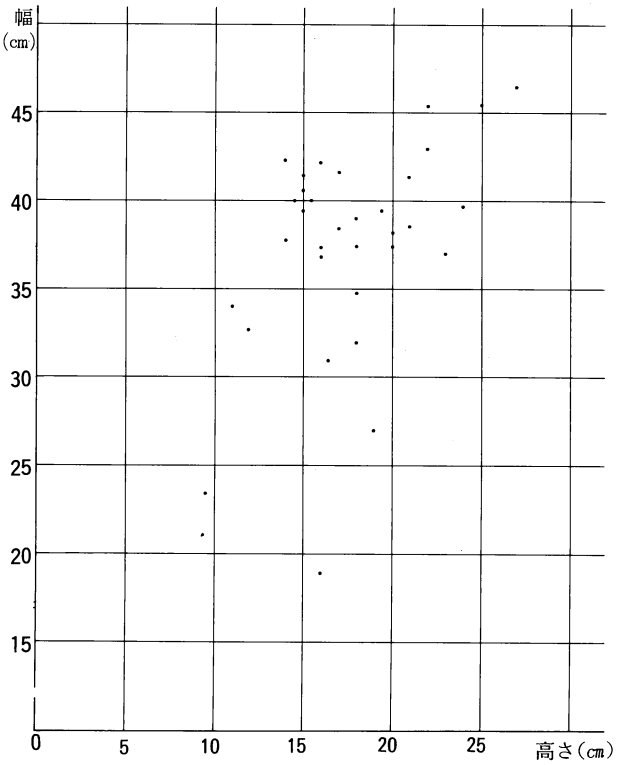


表41　火輪の法量分布

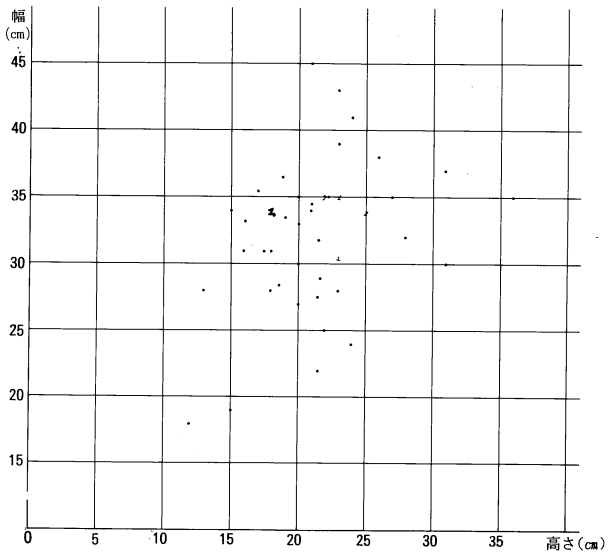


表42　水輪の法量分布

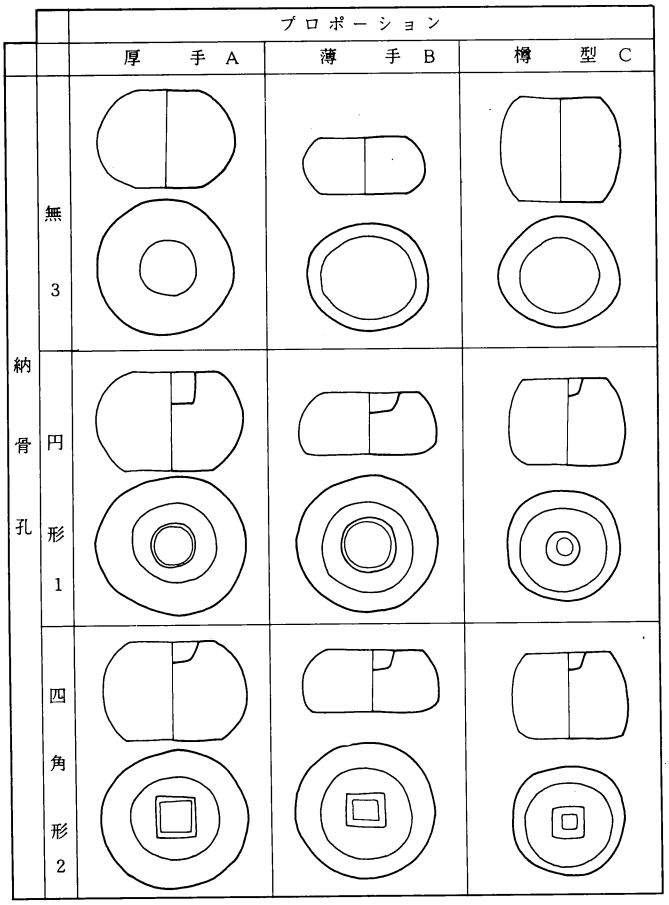


表43　水輪形態分類図

地輪は形態分類の厚手型（受部無）が34と多く，法量の分類では厚手の中型が23の52.2％と多い。規格としては幅9尺・高さ3尺，11尺・2尺，11尺・3尺，10尺・3尺，12尺・3尺の組み合わせが多い。

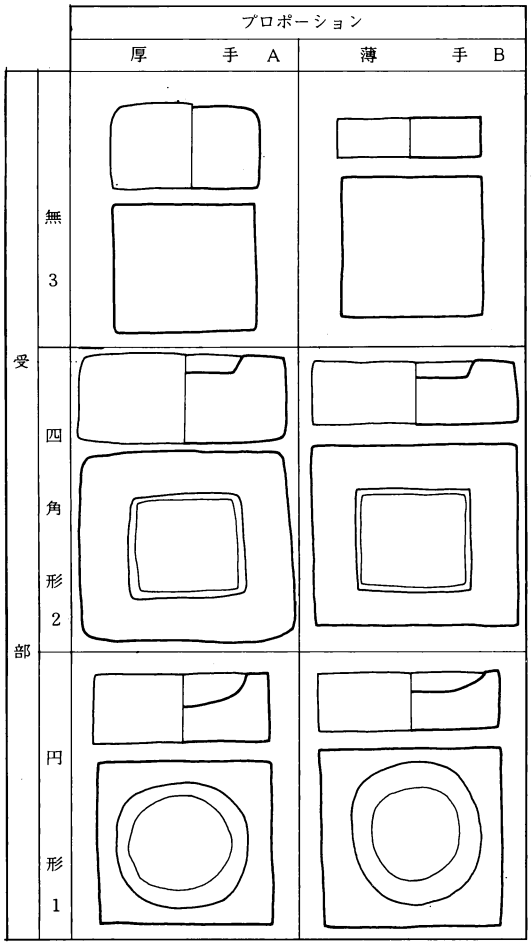


表44　地輪形態分類図

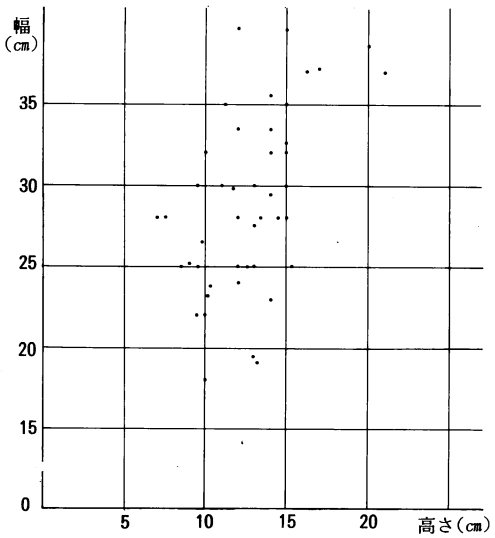


表45　地輪の法量分布

相　輪

相輪は7出土しているが完形はない。形態分類ではAタイプ（上部請花二段・露盤有・請花花弁・ハート）が3と多い。塔身が出土していないため，宝塔的五輪塔が存在していたと推定される。

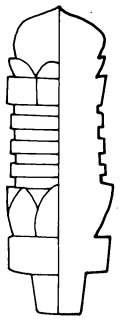
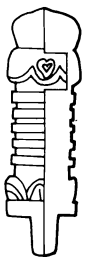
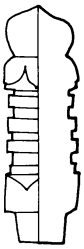
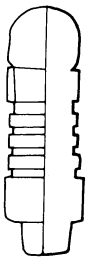
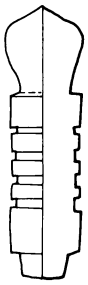
	A	B	C	D	D′
上部請花	二　段	一		段	
露　盤	有		退	化	
請　花	花弁・ハート			無文	
				八角形	四角形
					

表46　相輪形態分類図

板　碑（第73図）

1121は正面形山形が直線によって構成された低い三角形で，二条線の切り込みが深く，額部が突き出ている。 XVII－8は，正面形山形が直線によって構成された三角形で，二条線の切り込みが深く，額部は沈線で表現する。2つの蓮の上に2人の坊さんを載せた図を浮き彫りにしている。「天正十七年　七月十日孝子敬白　妙圓」の線刻あり。

井　戸（第51図）

Ⅰ区の南側に存在し，プランとしては上方で方形を呈し途中より円形になり底に至るものであり，規模は1.9m×1.7m，深さ3.6mである。井筒は確認されなかった。

竪穴式住居跡状遺構（第50図）

Ⅰ区の中央部には，南北3.7m，東西4.7mの隅丸方形と長辺4.0m，短辺2.1mの長方形プランとの切り合いの落ち込みが検出されたが，床面等々の状況からみて，住居跡とは考えにくいため，ここでは住居跡状遺構1・2とした。

4．近世墓（第74図）

近世墓はⅡ区の東端部に位置し，14基の墓壙が検出された。南北方向から直角に曲がって東西方向に伸びる「道」と推定される溝状遺構の終束する場所の両側に長方形プランの墓壙が配列している。14号墓を除いてすべて主軸は南北方向である。北側に2号墓と3号墓，4号墓と5号墓，8号墓と9号墓が対になって配列している。北側のグループは，長さ150～200cm，幅90～180cmであるのに対して，南側のグループは長さ85～125cm，幅55～70cmと一回り小さい。特に11・12・13号墓は深さが125～200cmと深い。8・9・11号墓を切って東西方向を主軸とする2次集積の土壙が掘られていた。その土壙には五輪塔・墓石や河原石が入っており，それに混って鎌倉後半以降の青磁・白磁などの陶磁器が出土した。墓石には「寛政十（1798）年」，「文化二（1805）年」の年号が彫られており，また墓壙から寛永通宝が出土しているので，14基の墓壙は18～19世紀の近世墓と考えられる。以下，各近世墓の詳細は遺構観察表（表47）を参照されたい。

番　号	規模　(cm) 長軸×短軸×深さ	長軸の方向	人骨		副葬品	備　考
			性　別	年　令		
1号墓	150× 90× 30	N17°50′W				釘出土
2号墓	170× 120× 80	N 9°00′W				
3号墓	200× 180× 130	N 1°00′W				
4号墓	180× 140× 95	N 1°40′E	女性	壮　年	銅　銭	数珠玉(数個)
5号墓	160× 95× 115	N 9°40′W	不明	熟年～老年		
6号墓	90× 60× 90	N 0°50′W				
7号墓	85× 55× 95	N 3°20′E				
8号墓	170× 130× 115	N 9°00′W	男性	不　明	銅　銭 (寛永通宝)	
9号墓	100× 160× 105	N20°30′W				
10号墓	100× 70× 90	N11°00′W	不明	不　明	銅　銭	
11号墓	125× 70× 160	N 3°00′W	男性	壮　年	銅　銭 (寛永通宝)	木片・釘出土
12号墓	125× 65× 200	N 6°00′E	男性	壮　年	銅銭 (寛永通宝)	
13号墓	105× 60× 125	N 5°50′W	不明	小児(I)	銅　銭	
14号墓	100× 100× 55 (推定)	N 0°50′W				4号・5号と 切り合い関係

表47　近世墓一覧表

第7節　まとめ

堂地東遺跡は標高20～30ｍの丘陵の平坦地で，谷底低地との比高差は約５～15ｍである。当遺跡はⅩⅢ区のトレンチ調査の結果，暗褐色硬質土層から後期旧石器時代の剥片が出土したことから，既にその時代から人間の営みが行なわれたことが明らかになった。

縄文早期になると集石遺構が５基検出されたが，南斜面には畑の耕作によって動かされた焼石が大量に散乱していたので、かつてかなりの数の集石遺構が存在していたと推定される。前期・中期の資料は出土しなかった。後期の遺構は存在していなかったが，貝殻条痕文や貝殻腹線文を施した土器群が出土した。特に動物を表現したと思われる深鉢形土器は注目されるが，蛇であるかどうかは表現の仕方や分布を考えると消極的にならざるを得ない。晩期の遺物は出土していない。縄文時代における当遺跡のあり方は谷を挟んで南西に位置する平畑遺跡に対して従的な位置にある。

弥生時代の中期後半（堂地東Ⅰ期）になると学園都市遺跡群の中では下田畑遺跡[2]，前原北遺跡[3]に竪穴住居が営まれ，当遺跡でも２軒の竪穴住居が営まれる。竪穴住居は方形プランでＳＡ２は張り出し部を持つ。ＳＡ１からは南九州に分布する軽石製石棒が出土しているのは注目される。軽石製製品は後期前葉のＳＡ18からも出土している。後期初頭（堂地東Ⅱ期）になると「日向型間仕切り住居」の集落が営まれ，次の前葉（堂地東Ⅲ期）まで継続する。この時期の集落は８～９軒であり，多くの住居が20㎡～40㎡であるのに対してＳＡ８は66.1㎡と突出している。「日向型間仕切り住居」は円形プランを基調とするものと方形プランを基調とするもの両者が共存しているのは注目される。学園都市遺跡群内ではこの時期集落が形成されるのは当遺跡だけである。後期中葉になると何らかの要因によって集落が

断絶し，集落は谷を挟んで南東へ約400ｍ離れた熊野原遺跡Ｂ地区[4]へ移動する。弥生終末期になって再び竪穴住居が営まれるがわずか１軒である。

古墳時代～平安時代にかけては当遺跡では生活空間としては利用されていない。Ⅳ区の石塔群から鎌倉時代後半の古瀬戸の水差が出土しており，この時期からこの地が再び利用されはじめる。掘立柱建物はヘラ切り底の土師器坏・皿，糸切り底の土師器坏・皿の形態・法量から中世期のものと考えられる。特にⅩⅦ区の両廂を持つ６間×４間のＳＢ７と５間×４間のＳＢ８は中心的な位置を占めている。

室町時代になると当地に石塔群が，更に江戸時代になると墓地が営まれ，墓地としての空間利用が行なわれる。石塔群は，溝で区画された中に２～４基を１単位として39基が配列しており，山内石塔群のあり方に似ている。近世墓は「墓道」が想定される溝の末端の両側に３号墓と４号墓を中心に計14基営まれており，一族の墓地と推定される。近世墓の調査は県内では初めての調査であった。

以上のように，当遺跡は弥生時代においては集落として，中近世には掘立柱建物以外に石塔群や近世墓という「墓地」的様相として空間利用される。弥生時代の集落についてはある程度の具体像を描写できたが，中世については土師器の編年がまだ不十分であるので不明な点が多かった。今後，学園都市遺跡群の調査及び整理する中で，不十分な点を明らかにしていきたいと思う。

（長　津　宗　重）

(1) 宮崎県教育委員会「山内石塔群」1984
(2) 宮崎県教育委員会「下田畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第３集』1985
(3) 宮崎県教育委会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）」1981
(4) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ・Ⅳ）」1982・1983

表48　弥生土器観察表

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第21図	ＳＡ２	1	壺	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい褐 (Hue7.5YR5/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒若干含む		ⅠC
〃	〃	2	壺	ヘラ磨キ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	黒褐 (Hue10YR 3/1)	1～2mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	3	壺	横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	スス付着	Ⅴ
〃	〃	4	甕	口縁部……縦方向のハケ目	ナデ	良好	茶褐	左に同じ	石英を含む よく精選されている	外面にスス付着 縦方向の刻み目	Ⅰ
〃	〃	5	甕	ナデ	ナデ	やや軟質	明褐 (Hue7.5YR5/6)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	6	甕	横ナデ	横方向のハケ目	良好	灰白 (Hue7.5YR8/2)	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	1～2mm大の砂粒多し		Ⅱ
〃	〃	7	甕	ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3) ～褐灰 (Hue10YR 5/1)	にぶい橙 (Hue 5YR 7/4)	0.5～2mm大の砂粒を多量に含む。透明な粒を含む		
〃	〃	8	甕	口縁部～突帯　横ナデ 胴部　斜方向のハケ目 底部……ヘラ調整	ハケ目	不良	淡灰褐	暗黒	1～3mm角の砂利が含まれているため少しもろくなっている。		ⅦAa
第22図	ＳＡ３	9	壺	突帯部　横ナデ 突帯部～突帯部　ヘラ磨キか	風化著しい　ナデか	良好	橙 (Hue 5YR 7/6)	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	1～2mm大の砂粒多し		Ⅴ
〃	〃	10	甕	横ナデ	ナデ	良好	黄橙 (Hue10YR 8/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し		ⅡBa
〃	〃	11	甕	ナデ	ナデ	やや軟質	橙 (Hue7.5YR6/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	12	甕	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1mm大の砂粒多し		
〃	〃	13	甕	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/2)	1～2mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	14	甕	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	黄褐 (Hue2.5Y 5/3)	1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	15	甕	風化著しい　ナデか	ナデ	良好	灰黄褐 (Hue10YR 5/2) ～浅黄 (Hue2.5Y 7/3)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	16	甕	口縁部　横ナデ 胴部　風化著しい　ハケか	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4) ～浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	17	甕	口縁部　横ナデ 胴部　横方向のハケ目	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	18	甕	ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 6/3)	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒を含む		
〃	〃	19	甕	ナデ	ナデ	良好	にぶい黄 (Hue2.5YR6/3)	黒褐 (Hue10YR 3/1)	0.5～1mm大の砂粒・黒い雲母片等を含む		
〃	〃	20	甕	ハケ目	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4) (Hue10YR 8/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	0.5～2mm大の砂粒多し		ⅥA
〃											

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第22図	ＳＡ４	21	壺	横ナデ	ナデ	良好	茶褐	左に同じ	1～2mm大の砂粒若干含む		Ⅴ
〃	〃	22	壺	胴部　風化著しい横方向のヘラミガキ 底部　ナデ	風化著しい　ナデか	良好	橙(7.5YR7/6)～浅黄橙(10YR8/4) 一部のみ灰黄(2.5Y7/2)	左に同じ	0.5～2mm大の砂粒多し	外面黒斑	
〃	〃	23	甕	口縁部　横ナデ 胴部　風化著しい　ハケか	口縁部　横ナデ 胴部　斜方向のハケ目	良好	淡茶褐	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む	外面スス付着	ⅡBa
〃	〃	24	甕	風化著しい　横ナデか	横ナデ	良好	淡茶褐	左に同じ	1mm大の砂粒多し		Ⅱ
〃	〃	25	甕	横ナデ	横ナデ	やや軟質	橙 (Hue7.5YR7/6)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	26	甕	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4～8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む		Ⅱ
〃	〃	27	甕	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙 (Hue7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (Hue10 YR8/4)	1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	28	甕	横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 (Hue7.5YR7/4)	褐灰 (Hue10YR5/1～4/1)	0.5～3mm大の砂粒多し		
〃	〃	29	甕	口縁部　横ナデ 胴部（上位）斜方向のハケ目 （下位）縦方向のハケ目	口縁部　横ナデ 胴部　風化著しいナデか	良好	にぶい橙(7.5YR8/4)～褐灰 (Hue7.5YR4/1)	橙 Hue5YR6/6 ～Hue7.5YR8/6	0.5～3mm大の砂粒（石英・長石・雲母等）を多量に含む	外面スス付着	ⅩE
〃	〃	30	甕	口縁部　ナデ 胴部　風化著しい　ハケか	ナデ	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/4)	灰黄 (Hue2.5Y 6/2)	1mm大の砂粒多し	外面スス付着	ⅡB
第23図	ＳＡ５	31	壺	口縁部…横ナデ　胴部…ヘラ状工具の（上位）斜方向のハケ目 頸部…縦方向のナデ（下位）縦方向のヘラ削り	横ナデ	良好	浅黄橙(10YR8/4) 底部は黒褐(2.5Y3/1)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し		ⅡB
〃	〃	32	壺	口縁部……横ナデ 頸部……ヘラ状工具の縦方向のナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR8/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	円形浮文	ⅠA
〃	〃	33	壺	底部……風化著しい	ナデ	良好	明黄褐 (Hue10YR6/6・8/6)	黄灰 (Hue2.5Y 6/1)	1mm大の透明な粒・3mm大の小石・及び0.5～2mm大の砂粒を多量に含む	内面黒斑	
〃	〃	34	壺	口縁部……横ナデ 胴部……ヘラミガキ	ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR7/3) 一部黒褐(2.5Y3/1)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	底部外面黒斑	
〃	〃	35	壺	胴部……風化著しい　ナデか 底部……ナデ	剝離が著しいナデか	良好	橙(7.5YR7/4・6) 底部黒褐(7.5YR3/1)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	底部外面黒斑	
〃	〃	36	壺	胴部……ハケ目 底部……ナデ	ハケ目	良好	にぶい黄橙 (Hue10 YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3) ～褐灰(10YR5/1)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒等）を多量に含む	内面黒斑	
〃	〃	37	甕	口縁部……横ナデ	横ナデ	良好	浅黄(2.5Y8/4) ～橙(7.5YR7/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	
〃	〃	38	甕	口縁部……横ナデ 胴部……風化著しい	ナデ	良好	橙 (Hue 10 YR6/6)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	口唇部に縦方向の刻み目	ⅣA
〃	〃	39	甕	口縁部……横ナデ 胴部……斜方向のハケ目 底部……横ナデ	口縁部……横ナデ 胴部……ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	橙(7.5YR7/6) 底部は灰(5Y5/1)	砂粒を含む	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	40	甕	口縁部……横ナデ 胴部……縦方向のハケ目 底部……横ナデ	口縁部……横ナデ 胴部……ハケか	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅢCb
第24図	〃	41	甕	口縁部……横ナデ 胴部……斜方向・縦方向のハケ目 底部……横ナデ	口縁部……横ナデ 胴部……斜方向・縦方向のハケ目 底部……横ナデ	良好	橙 (Hue7.5YR8/6)	左に同じ 但し、底部は灰(5Y5/1)	1～3mm大の砂粒多し	口縁部～胴部上半部にスス付着	ⅢCa

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考	分類
				外面	内面		外面	内面			
第24図	ＳＡ５	42	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	やや軟質	橙 (Hue2.5YR6/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	43	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の細い刻み目	
〃	〃	44	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	にぶい黄橙(10YR7/4) 浅黄橙(Hue7.5YR8/4～6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBb
〃	〃	45	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	やや軟質	にぶい橙 (Hue7.5YR7/4)	橙 (Hue 5YR6/6)	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	46	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴部…ナデか	やや軟質	橙 (Hue7.5YR6/6～7/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	外面ス状付着 斜方向の刻み目	ⅡBc
〃	〃	47	甕	口縁部……横ナデ 胴部(上位)…斜方向のハケ目 (下位)…縦方向のハケ目	口縁部…横方向のハケ目 胴部…斜方向のハケ目	良好	橙 (Hue7.5YR7/6)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBc
〃	〃	48	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	明黄褐(10YR7/6) ～浅黄橙(10YR8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	49	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	にぶい黄褐 (Hue10YR 5/3)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1～2mm大の砂粒若干含む	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡBa
第25図	〃	50	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR6/3) ～橙(7.5YR7/6)	黄橙 (Hue7.5YR8/6～7/4)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	51	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4～6)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	胴部外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡBc
〃	〃	52	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	やや軟質	橙 (Hue 5YR 6/6)	明黄褐 (Hue10YR 6/6)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	53	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/6)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	54	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	やや軟質	浅黄橙(10YR8/4) ～灰黄(2.5Y6/2)	左に同じ 口唇部…橙 (2.5YR7/6)	1mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	55	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	橙(Hue5YR7/6) ～浅黄橙 (Hue10YR8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む	斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	56	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横方向のナデ	良好	にぶい黄橙(10YR8/3) ～褐灰(10YR4/1) 底部の一部橙(5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR8/3) ～黒褐(2.5Y3/2)	1～2mm大の砂粒多し	口縁部～胴部下半部にスス付着	Ⅲ
〃	〃	57	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ	風化著しいナデか	良好	明黄褐 (Hue10YR 7/6)	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4) ～褐灰(Hue10YR4/1)	0.5～2mm大の砂粒多し 1mm大の半透明な粒を含む	内面黒斑	
〃	〃	58	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/4)	黄灰 (Hue2.5Y4/1)	0.5～2mm大の砂粒・雲母片を多量に含む		
第26図	〃	59	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/3)	褐灰 (Hue10YR 4/1)	0.5～2mm大の砂粒含む		
〃	〃	60	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ	胴部…斜方向のハケ目 底部…ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/3)	黄灰 (Hue5Y 5/1～4/1)	0.5～2mm大の砂粒多し 0.5mm大の黒い粒・6mm大の小石含む	内面黒斑	
〃	〃	61	甕	胴部…ナデ 底部…横ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	暗灰黄 (Hue2.5Y 5/2)	0.5～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	62	甕	底部…横ナデ	ナデ	良好	にぶい褐 (Hue7.5YR5/4)	左に同じ	0.5～4mm大の砂粒・石粒多し		Ⅱ

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考	分類
				外面	内面		外面	内面			
第26図	ＳＡ５	63	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ	ナデ	やや軟質	橙 (Hue7.5YR6/6) ～黄灰(2.5Y4/1)	左に同じ	1mm大の砂粒多し		
〃	〃	64	甕	底部…横ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR7/4) ～黄褐 (Hue2.5Y5/3)	黒褐 (Hue2.5Y 3/2)	0.5～2mm大の石英・雲母・長石等の粒を多量に含む		
〃	〃	65	甕	ナデ	ナデ	良好	明黄褐 (Hue10YR 7/6)	暗灰黄 (Hue2.5Y 5/2)	0.5～2mm大の砂粒（黒く光る粒等）を多量に含む		
〃	〃	66	甕	胴部…風化著しいハケか 底部…横ナデ	ハケ目か	良好	橙 (Hue7.5YR7/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4) ～黒(7.5YR2/1)	0.5～1mm大の砂粒多し		
〃	〃	67	甕	胴部…縦方向のナデ 底部…横ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/4)	褐灰 (Hue2.5Y 4/1)	0.5～2mm大の砂粒（黒く光る粒等）を多量に含む	内面黒斑	
〃	〃	68	甕	口縁部…横ナデ 胴部…風化著しい 底部…指押さえ	口縁部・底部…指押え 胴部（上位）…横方向のハケ目 （下位）…縦方向のハケ目	良好	にぶい橙 (5YR6/4) ～橙(2.5YR6/6)	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	2～3mm大の砂粒・石英を含む	外面スス付着	
〃	〃	69	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 6/4)	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒を含む		ⅡA
〃	〃	70	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	茶褐	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒多し	外面スス付着	ⅩD
〃	〃	71	甕	口縁部…横ナデ 胴部…風化著しい	口縁部…横ナデ 胴部…ナデか	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/6)	左に同じ	透明な粒を含む 0.5mm程度の砂粒多し	口縁部外面 スス付着	ⅨC
〃	〃	72	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	明黄褐 (Hue10YR 7/6)	橙(7.5YR7/6) 浅黄橙（？）	透明な粒・黒く光る粒及び0.5～2mm大の砂粒多し	外面スス付着	ⅩC
〃	〃	73	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	茶褐	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒及び透明な粒を含む		
〃	〃	74	甕	ナデ	口縁部…指押え 胴部…ナデ	良好	灰白色 (Hue7.5YR8/2)	左に同じ	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒等）多し	スス付着	ⅡB
〃	〃	75	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	口縁部…ナデ 胴部…ハケ目	良好	茶褐	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒を含む	外面スス付着	ⅩD
〃	〃	76	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	良好	茶褐	左に同じ	透明な粒及び1～5mm大の砂粒を含む	外面スス付着	
〃	〃	77	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR6/4) ～灰黄褐(Hue10YR5/2)	左に同じ	1～2mm大の砂粒を含む	スス付着	
〃	〃	78	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ	ナデ	良好	明黄褐(10YR7/6) 一部橙(2.5YR7/6)	灰黄 (Hue2.5Y 6/2)	1～2mm大の黒っぽい砂粒を多量に含む		
〃	〃	79	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(7.5YR8/6) ～にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰黄 (Hue2.5Y 6/2)	1～3mm大の砂粒多し		
〃	〃	80	甕	底部…横ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/4)	暗灰黄 (Hue2.5Y 5/2)	0.5～2mm大の砂粒（石英等）を多量に含む		ⅩC
〃	〃	81	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/4)	灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	82	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ	ナデ	良好	にぶい黄褐 (Hue10YR 5/3)	浅黄 (Hue2.5Y 7/3)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着	
第27図	〃	83	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	黄橙(10YR8/6) ～橙(2.5YR6/6)	黄橙(7.5YR8/6) ～灰(5Y5/1)	0.5～3mm大の砂粒・石粒多し	外面スス付着	ⅦB

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第27図	ＳＡ５	84	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目後ナデ 底　部…ナ　デ	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目 底　部…ナ　デ	良　好	橙 (Hue7.5YR⅝)	明　褐 (Hue7.5YR⅝)	1～2㎜大の砂粒多し		Ⅷ
第28図	ＳＡ６	85	壺	口縁部…ナデ	ナ　デ	良　好	にぶい黄褐 (Hue10YR⅗～⅔)	左に同じ	1㎜大の砂粒を若干含む	口唇部に鋸歯文	ⅠＢ
〃	〃	86	壺	口縁部…横ナデ・斜方向のハケ目	横方向のハケ目	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR⅔・¾)	左に同じ	1㎜大の砂粒を若干含む		
〃	〃	87	壺	口縁部…ナデ	ナデ・指押え	良　好	浅黄橙(10YR⅝) ～灰黄(2.5Y⅝)	左に同じ	1～2㎜大の砂粒多し		ⅢＢ
〃	〃	88	壺	突帯部…横ナデ	ハ ケ 目	良　好	にぶい黄褐(10YR⅝) ～にぶい黄橙(10YR⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒若干含む	外面スス付着	Ⅴ
〃	〃	89	壺	口縁部…斜方向のヘラミガキ	ナ　デ	良　好	赤　褐 (Hue2.5YR⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒（金雲母等）を若干含む	丹塗り	Ⅱ
〃	〃	90	壺	突帯部…横ナデ 肩　部…横方向のヘラミガキ	風化著しい	良　好	浅黄橙(7.5YR⅝) ～にぶい黄橙(10YR¾)	左に同じ	1㎜大の砂粒若干含む	縦方向の刻み目	ⅢＡ
〃	〃	91	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	淡黄(2.5Y⅝) ～にぶい黄橙(10YR⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向刻み目	ⅡＢc
〃	〃	92	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…縦方向のハケ目 底　部…横ナデ	口縁部…横方向のハケ目の後ナデ 胴　部…横方向のハケ目	やや良好	淡　赤　褐 ～ 淡　黒　褐	左に同じ	2㎜大の砂粒・小石多く含む	口縁部～胴部下位にスス付着 斜方向の刻み目	ⅡＢa
〃	〃	93	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい 底　部…ナ　デ	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	橙 (Hue 5 YR ⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒（白っぽい粒・黒雲母・黒っぽい粒・長石等）多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	
〃	〃	94	甕	口縁部…横ナデ 胴部～底部…風化著しい	口縁部…横ナデ 胴　部…	軟　質	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒多し	口縁部にスス付着	ⅩＣ
〃	〃	95	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ヘラミガキ	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のヘラミガキ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	1㎜大の砂粒多し	外面スス付着	ⅩＣ
〃	〃	96	甕	口縁部…横ナデ	横 ナ デ	良　好	淡　黄 (Hue2.5Y ⅝)	左に同じ	1㎜大の砂粒若干含む		
〃	〃	97	甕	口縁部…横ナデ	横 ナ デ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	左に同じ	1～2㎜大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	98	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	やや軟質	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	橙 (Hue7.5YR⅔)	1～2㎜大の砂粒多し		
〃	〃	99	甕	口縁部…横ナデ	横 ナ デ	やや軟質	橙 (Hue7.5YR⅝)	左に同じ	1～3㎜大の砂粒多し		
〃	〃	100	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	淡黄(2.5Y⅝) ～褐灰(7.5YR⅝)	0.5～2㎜大の砂粒を含む		
〃	〃	101	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	褐　灰 (Hue10YR ⅝)	0.5～3㎜大の砂粒多し		
第29図	〃	102	壺	口縁部…ヘラミガキ・横ナデ 頸　部…縦方向のヘラミガキ 肩　部…	口縁部…横ナデ 頸　部…ヘラミガキ 肩　部…	良　好	にぶい褐 (Hue7.5YR⅝) 一部黒(Hue7.5YR⅝)	左に同じ	1～3㎜大の砂粒多し		Ⅴ
〃	〃	103	壺	口縁部…横ナデ	横 ナ デ	やや軟質	橙(Hue 5 YR ⅔) 一部 Hue 5 YR ¾	左に同じ	1～2㎜大の砂粒多し		
〃	〃	104	壺	胴　部…ヘラミガキ 底　部…ナ　デ	風化著しい	良　好	橙(5 YR ⅝) ～灰白(7.5YR⅝)	灰　白 (Hue7.5YR⅝)	0.5～2㎜大の砂粒・3㎜大の小石を含む		Ⅲ

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第29図	ＳＡ６	105	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…ヘラミガキ 底　部…ナデか	口縁部…横ナデ 胴　部…ナ　デか 底　部…ナ　デか	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR ⅔)	左に同じ	0.5～1㎜大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒）を含む	頸部に穿孔１つ	
〃	〃	106	壺	口縁部… 胴　部… 底　部…ナデか	口縁部… 胴　部… 底　部…	良　好	浅　黄　橙 (Hue7.5YR⅝)	浅黄橙(10YR⅝) 口縁部、橙 (5 YR ⅔)	0.5～1㎜大の砂粒（透明な粒等）多し	底部黒斑	ⅢＢ
〃	〃	107	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…ナデか	口縁部…横ナデ 胴　部…ナデ、部分的に指押え	良　好	橙 (Hue7.5YR⅔)	左に同じ	0.5～2㎜大の砂粒（透明な粒・黒い粒等）多し	頸部に穿孔２	
〃	〃	108	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…ヘラミガキ	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	0.5～2㎜大の砂粒を含む	外面スス付着	
〃	ＳＡ７	109	壺	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	明　赤　褐 (Hue2.5YR⅝)	1～3㎜大の砂粒若干含む	丹塗り	Ⅰ・Ⅲ
〃	〃	110	壺	底　部…風化著しい	ナ　デ	良　好	にぶい橙 (Hue7.5YR¾)	黄　灰 (Hue2.5Y ⅔)	0.5～2㎜大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒等）多し		Ⅱ
〃	〃	111	壺	底　部…ヘラミガキ	ナ　デか	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾) ～橙(7.5YR ¾)	左に同じ	1㎜大の砂粒若干含む		Ⅰ
〃	〃	112	壺	底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	にぶい橙 (5 YR ¾) ～灰黄(2.5Y ⅝)	褐　灰 (Hue10YR ⅔)	0.5～1.5㎜大の砂粒（透明な粒等）多し、6㎜大の小石も含む		
第30図	〃	113	甕	口縁部…横ナデ　胴部(上位)…斜方向のハケ目 底　部…ナ　デ　(下位)…縦方向のハケ目	口　縁　部…ナ　デ 胴部上位…斜方向のハケ目 胴部下位～底部…ナ　デ	良　好	淡褐色、上部に黒っぽいむら	底部付近が黒く変色	1～2㎜大の砂粒含む	胴部上位にスス付着 斜方向の刻み目	ⅡＢa
〃	〃	114	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	橙 (Hue 5 YR ⅔)	左に同じ	0.5～3㎜大の砂粒（石英、長石等）多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡＣb
〃	〃	115	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	良　好	淡黄(2.5Y ⅝) ～黄灰(2.5Y ⅔)	淡黄(2.5Y ⅝) ～灰黄(2.5Y ⅔)	0.5～2㎜大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡＢa
〃	〃	116	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…ナ　デ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ¾)	左に同じ	0.5～1㎜大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅢＣb
〃	〃	118	甕	口縁部～胴部…横ナデか	口縁部～胴部…横ナデか	やや軟質	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾～⅘)	左に同じ	1㎜大の砂粒多し	縦方向の刻み目	ⅡＡ
〃	〃	119	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙 (Hue7.5YR⅝)	左に同じ	0.5～3㎜大の砂粒・石粒を含む	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡＢa
〃	〃	120	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	茶　褐	左に同じ	0.5～2㎜大の砂粒多し	胴部上位スス付着 斜方向の刻み目	ⅡＢc
〃	〃	121	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	にぶい黄橙 (Hue10YR ¾)	0.5～2㎜大の砂粒を含む	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡＢb
第31図	〃	122	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	良　好	明黄褐(10YR⅝) ～橙(7.5YR ⅝)	橙 (Hue7.5YR⅝)	0.5～3㎜大の砂粒・石粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡＣb
〃	〃	123	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	やや軟質	橙 (Hue7.5YR¾) (〃 2.5YR⅝)	左に同じ	0.5～2㎜大の砂粒（石英・長石等）多し	斜方向の刻み目	ⅡＣb
〃	〃	124	甕	口縁部…横ナデ ※胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (10YR¾) ～灰黄褐(10YR⅖)	にぶい黄橙 (10YR¾) ～褐灰(10YR⅓)	0.5～3㎜大の砂粒含む		ⅥＢ
〃	〃	125	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR ⅝)	にぶい黄橙 (10YR⅝) ～灰黄褐(10YR⅖)	1㎜大の砂粒を若干含む		Ⅲ
〃	〃	126	甕	口縁部…横ナデ、部分的にハケ目 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR¾～⅘)	左に同じ	1～2㎜大の砂粒多し		ⅡＢa

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第31図	ＳＡ７	127	甕	突帯部…横ナデか	ハケか	やや軟質	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	橙 (Hue7.5YR 7/6)	1mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	128	甕	胴部…斜方向のハケ目 底部…縦方向のハケ目・横ナデ	ナデ	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	5mm程度の砂粒や透明な粒多し、黒く光る粒も含む		
〃	〃	129	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	2～5mm大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒等）多し		
〃	〃	130	甕	底部…ナデか	ハケ目の後ナデ	良好	にぶい赤橙 (Hue10R 6/4)～にぶい橙	淡黄 (Hue2.5Y 8/4)～黒褐(Hue2.5Y 3/1)	0.5～1.5mm大の砂粒（透明な粒・白っぽい粒等）多し		
〃	〃	131	甕	胴部…ナデ 底部…横ナデ	ナデ	良好	橙 (Hue2.5YR 7/6)	灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒等）多し	内面スス付着	
〃	〃	132	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	黄灰 (Hue2.5Y 4/1)	1.5～5mm大の砂粒多し、透明な粒も含む		
〃	〃	133	甕	底部…横ナデ	ナデ	良好	灰白 (Hue10YR 7/1)	褐灰 (Hue10YR 5/1)	1.5～5mm大の砂粒（黒く光る粒・透明な粒等）多し		
〃	〃	134	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/4)	灰 (Hue 5Y 4/1)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒）多し、3mm大の小石も含む		Ⅲ
〃	〃	135	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/4)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒等）多し	内面黒斑	
〃	〃	136	甕	口縁部…横ナデ 胴部(上位)…横方向のハケ目 底部…横ナデ (下位)…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部(上位)…斜方向のハケ目 胴部下位～底部…風化著しい	良好	橙 (Hue7.5YR 6/6)	明褐 (Hue7.5YR 5/6)～黒褐	0.5～1mm大の砂粒（透明な粒等）多し	口縁～胴部中位スス付着 胴部下位黒斑	ⅨB
〃	〃	137	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…風化著しい	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	左に同じ	1～2mm大の砂粒を含む		ⅩB
〃	〃	138	甕	底部…ナデか		良好	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒（透明な粒・黒く光る粒）多し		Ⅲ
〃	〃	139	甕	底部…縦方向のハケ目・横ナデ	ナデ	良好	灰白 (Hue2.5Y 8/2)	褐灰 (Hue10YR 4/1)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒等）多し、2.5mm大の小石も含む		
〃	〃	140	甕	底部…横ナデ	ナデ	良好	灰白 (Hue2.5Y 8/2)	黄灰 (Hue2.5Y 4/1)	2～5mm大の砂粒（雲母等）多し		Ⅱ
〃	〃	141	甕	胴部…ナデか 底部…ナデ	胴部…ナデ 底部…ナデ	良好	橙(Hue2.5YR 7/6)～浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (Hue7.5YR 7/6)	0.5～1mm大の砂粒多し	胴部下位スス付着 内面黒斑	Ⅱ
〃	〃	142	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	灰白 (Hue2.5Y 8/2)	黒褐 (Hue10YR 3/1)	0.5～1mm大の砂粒（透明な粒等）多し、5mm大の小石も含む		
〃	〃	323	杓子	ナデ		良好	茶褐	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒を含む		
第32図	ＳＡ８	143	壺	脚部…ヘラミガキ	ナデ	良好	明赤褐 (Hue 5YR 5/6)	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	0.5～1mm大の砂粒（雲母・長石等）を含む	沈線2	
〃	〃	144	壺	突帯部…ヘラミガキ・横ナデ	ナデ	良好	黒褐 (Hue7.5YR 3/1)	明黄褐 (Hue10YR 6/6)	1mm大砂粒多し		Ⅴ
〃	〃	145	壺	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/6)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	146	壺	突帯部…横ナデ	横ナデか	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/6)	1～2mm大の砂粒多し		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第32図	ＳＡ８	147	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	やや軟質	橙 (Hue 5YR 7/6)	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒含む		
〃	〃	148	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 8/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	149	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケか	やや軟質	黄褐 (Hue2.5Y 5/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 6/4)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	150	甕	胴部…ハケ目 底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	淡赤橙(2.5YR 7/4) にぶい橙 2.5YR 6/4 ～灰褐 (5YR 5/2)	0.5～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	151	甕	底部…横ナデ・ナデ	風化著しい	良好	黄灰 (Hue2.5Y 5/1)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	0.5～3mm大の砂粒多し		
〃	〃	152	甕	胴部…ナデ 底部…横ナデ・ナデ	ナデか	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	黄灰 (Hue2.5Y 4/1)	0.5～2mm大の砂粒含む		
〃	〃	153	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	黄褐 (Hue2.5Y 5/4)	1～2mm大砂粒多し		ⅥA
〃	〃	154	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒若干含む		
〃	ＳＡ９	155	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ	良好			1mm大砂粒若干含む		
〃	ＳＡ11	156	壺	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左に同じ	0.4～0.8mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	157	壺	頸部…横ナデ	頸部(上位)…横ナデ (下位)…斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)～黄橙(7.5YR 8/6)	暗灰黄 (Hue2.5Y 5/2)	1mm大の砂粒多し	口縁部に櫛描波状文	Ⅶ
〃	〃	158	壺	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ	ナデ	良好	橙(5YR 6/6)～にぶい黄橙 (10YR 7/4)	黒褐(10YR 3/1)～褐灰(10YR 4/1)	0.5～1mm大の砂粒（黒く光る粒等）多し	内面黒斑	Ⅶ
〃	〃	159	壺	口縁部…横ナデ 胴部…ナデか 底部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部～底部…ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR 8/4～6) 底部は褐灰	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む		Ⅷ
〃	〃	160	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目のあとナデ 底部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)～橙(5YR 7/6)	橙 (7.5YR 5YR) (7/6 ～ 7/4)	0.5～2mm大の砂粒・及び4mm大の小石多し	胴部にスス付着	ⅩⅠ
〃	〃	161	甕	底部…ナデ・指押え	ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	橙 (Hue7.5YR 7/6)	1～2mm大砂粒及び3mm大の小石含む		
〃	〃	162	甕	胴部…ナデか	風化著しい	やや軟質	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	灰黄 (Hue2.5Y 6/2)	1～2mm大砂粒多し		
〃	〃	163	甕	口縁部…指押え 胴部～底部…ナデ	口縁部…指押え 胴部～底部…ナデ	良好	明黄褐(10YR 7/6)～浅黄橙	明黄褐 (Hue10YR 7/6)	0.1～2mm大の砂粒多し	口縁部～胴部上位中位にスス付着	
〃	〃	164	脚付甕	胴部～脚部…ナデ	胴部(上～中位)…ナデ 胴部(下位)……指押え	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	黄灰 (Hue2.5Y 4/1)	1～2mm大砂粒多し		Ⅰ
〃	〃	165	鉢	底部…ナデ	ナデ	良好	橙 (Hue7.5YR 7/4)	暗灰黄 (Hue2.5Y 5/2)	1mm大砂粒若干含む		
〃	〃	166	高坏	坏部…ナデ 脚部…斜方向のハケ目・横ナデ	坏部…ナデ 脚部…横方向のハケ目・横ナデ	良好	黄灰 (Hue2.5Y 4/1)	橙 (Hue7.5YR 6/6)	0.5～1mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	167	鉢	口縁部…横ナデ 胴部…ヘラミガキ 底部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部～底部…ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4) にぶい黄橙(10YR 7/4)	浅黄橙(10YR 8/4) ～黒褐(2.5Y 3/1)	0.5～1mm大の砂粒多し	内面黒斑	ⅠA

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考	分類
				外面	内面		外面	内面			
第32図	S A 11	168	鉢	口縁部…ハケ目 胴　部…縦方向のナデ 底　部…ナ　デ	口縁部…横ナデ 胴部～底部…ナ　デ	良　好	橙 (Hue 5 YR 7/6) ～黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR 7/6) ～明褐灰 (7.5YR7/2)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒、白っぽい粒等）多し、また3mm大の小石を含む		Ⅰ B
第33図	S A 12	169	甕	口縁部～肩部…ヘラミガキ	風化著しい	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の刻み目	Ⅲ A
〃	〃	170	甕	口縁部…風化著しい	横ナデ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1～2mm大の砂粒多し	内面に突帯	Ⅳ A
〃	〃	171	甕	口縁部…ヘラミガキか	風化著しい	良　好	淡黄(2.5Y 8/3) ～浅黄(2.5Y7/3)	左 に 同 じ	1mm大砂粒多し		Ⅳ B
〃	〃	172	甕	胴　部…ヘラミガキ	ナ　デ	良　好	灰　白 (Hue2.5Y 8/2)	黄　灰 (Hue2.5Y 5/1～5/1)	透明な粒、黒く光る粒、白い粒を含む砂粒多し		
〃	〃	173	甕	胴　部…風化著しい 底　部…ナデか	テデか	良　好	橙 (Hue7.5YR7/6)	にぶい橙 (Hue7.5YR7/4) ～ 黄 灰	砂粒（白い粒、及び半透明な粒等）を含む		
〃	〃	174	甕	胴　部…ナ　デ	風化著しい	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR8/3～7/3)	左 に 同 じ	1～3mm大の砂粒多し		Ⅰ
〃	〃	175	甕	底　部…ナデ・ヘラミガキ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3) ～にぶい橙 (7.5YR 6/4)	浅黄(2.5Y 7/3) ～黄褐(2.5Y5/3)	0.5～1mm大の砂粒（透明な粒、白い粒等）を含む	底部黒斑	
〃	〃	176	甕	底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	橙(7.5YR7/6) ～ 黒 褐	橙 (Hue7.5YR6/6)	0.5～1.5mm大の砂粒（透明な粒、黒く光る粒等）多し	底部黒斑	
〃	〃	177	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ヘラミガキ 底　部…ナ　デ	口縁部……横ナデ 胴部～底部…ナ　デ	良　好	淡　褐 (　?　)	?	1～2mm大の砂粒多し	胴部から底部にスス付着	Ⅵ
第40図	〃	178	壺	頸　部…ハケ目か 突帯部…横ナデ 肩　部…ハケ目か	頸　部…横方向のハケ目 肩　部…ナ　デ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	黄　灰 (Hue 2.5Y8/1)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	179	壺	胴　部…ヘラミガキか 底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	淡　黄 (Hue2.5Y 8/3)	褐　灰 (Hue10YR 4/1)	1～2mm大の砂粒多し	底部黒斑	
〃	〃	180	壺	胴　部…ヘラミガキ 底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4) 底は褐灰 (10YR5/1)	黄　灰 (Hue10YR 4/1)	1～2mm大の砂粒多し	底部黒斑	
第33図	〃	181	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	横　ナデ	良　好	黄　橙 (Hue10YR 8/8)	にぶい黄橙 (Hue10YR 6/4)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	Ⅱ A
〃	〃	182	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	Ⅱ Ba
〃	〃	183	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	Ⅱ Ba
〃	〃	184	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	にぶい黄橙 (10YR 7/3) ～灰黄(2.5Y 6/2)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	Ⅱ Ca
〃	〃	185	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ナデか	口縁部…横ナデ 胴　部…ナデか	良　好	褐　灰 (Hue10YR 4/1)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	Ⅱ Ca
〃	〃	186	甕	胴　部…ハケ目 底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	にぶい橙 (Hue 5 YR8/4～7/4)	灰 (Hue 5 Y　8/1)	0.5～1mm大の砂粒（黒く光る粒、半透明な粒等）多し		
〃	〃	187	甕	縦方向のハケ目 底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙 (10YR 7.5YR 7/3 ～ 7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	砂粒及び雲母多し	内面黒斑	
〃	〃	188	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	灰　白 (Hue2.5Y 8/2)	黄　灰 (Hue2.5Y 8/1)	砂粒（白い粒・透明な粒等）多し		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考	分類
				外面	内面		外面	内面			
第33図	S A 12	189	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	橙 (Hue7.5YR7/6)	黒　褐 (Hue10YR 3/1)	0.5～1.5mm大の砂粒（半透明な粒等）多し	内面スス付着	
〃	〃	190	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	褐　灰 (Hue10YR 4/1)	にぶい橙 (Hue7.5YR7/4)	1mm大の砂粒（透明な粒、白い粒等）多し		
〃	〃	191	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	橙 (Hue7.5YR7/6)	左 に 同 じ	1mm大の砂粒多し		Ⅱ Bc
〃	〃	192	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	良　好	浅　黄 (Hue2.5Y 7/4)	灰　黄 (Hue2.5Y 6/2)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	193	甕	横ナデ	横ナデ	良　好	灰 黄 褐 (Hue10YR 6/2)	にぶい黄橙 (Hue10YR 6/4)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	194	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左 に 同 じ	1mm大の砂粒若干含む		Ⅱ
〃	〃	195	高 坏	坏部～脚部…ヘラミガキ 突帯部…ナ　デ	坏　部…斜方向のハケ目 脚　部…ナ　デ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/3)	黄　灰 (Hue2.5Y 6/1)	1mm大の砂粒若干含む	円板充鎮	Ⅰ
〃	〃	196		脚端部…横ナデ	ナ　デ	良　好	浅　黄　橙 (Hue7.5YR8/6)	左 に 同 じ	0.5～1mm大の砂粒を含む		
〃	〃	197	高 坏	口縁部～脚部…ナデか	口縁部…横ナデ 坏　部…ナデか 脚　部…横ナデ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/3)	0.5～1.5mm大の砂粒（黒く光る粒、雲母等）多し		Ⅰ
〃	〃	198	壺	口縁部…ナデ・ヘラミガキ	横ナデ	良　好	橙 (Hue 5 YR 8/6)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒若干含む	凹線文	
第34図	S A 13	199	壺	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒若干含む		
〃	〃	200	壺	口縁部…横ナデ 頸　部…ヘラミガキか	ナデか	良　好	黄　橙 (Hue10YR 8/8)	にぶい黄橙 (Hue10YR 8/3)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	201	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横方向のハケ目 胴　部…縦方向のハケ目	良　好	にぶい赤褐 (Hue 5 YR 4/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒若干含む	外面スス付着	
〃	S A 14	202	壺	肩　部…ナデか	ナデか	良　好	橙 (Hue 5 YR 7/6)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1～2mm大の砂粒多し		Ⅲ B
〃	〃	203	壺	胴　部…縦方向のヘラミガキ 底　部…ナ　デ	指押え・ナデ	良　好	淡黄(Hue2.5Y 8/4) ～ 黒 褐 (2.5Y3/1)	黒　褐 (Hue2.5Y 3/1)	透明な粒、半透明な粒を含む		
〃	〃	204	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横ナデ・斜方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～3mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	Ⅱ Ba
〃	〃	205	壺	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	橙(Hue 5 YR7/6) ～黄橙 (Hue7.5YR7/4)	左 に 同 じ	1mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	Ⅱ Bc
〃	〃	206	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の刻み目	Ⅱ Ba
〃	〃	207	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部～胴部…斜方向のハケ目	良　好	橙(Hue7.5YR6/6) ～灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	左 に 同 じ	1mm大の砂粒若干含む	縦方向の刻み目	Ⅱ Bc
〃	〃	208	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	黄　橙 (Hue10YR 8/8)	左 に 同 じ	1～2mm大の砂粒若干含む	斜方向の刻み目	Ⅱ Ba
〃	〃	209	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目・横ナデ	良　好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	浅　黄　橙 (Hue10YR 8/4)	1～2mm大の砂粒若干含む	外面スス付着 斜方向の刻み目	Ⅱ Ca

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第34図	S A 14	210	甕	口縁部…横ナデ 頸　部…ヘラミガキ 胴　部…ヘラミガキ	口縁部…横ナデ 頸部～胴部…ヘラミガキ	良　好	明赤褐(Hue5YR5/6)～明黄褐(Hue10YR7/6)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し		Ⅳ B
〃	〃	211	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	良　好	黄　橙(Hue10YR 8/6)	左 に 同 じ	1～3㎜大の砂粒多し	斜方向の刻み目	Ⅱ Cb
〃	〃	212	甕	底　部…横ナデ	ハケ目か	良　好	浅黄(Hue2.5Y7/4)橙(Hue7.5YR7/6)(Hue5YR6/6)	黒　褐(Hue2.5Y 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒多し		
〃	〃	213	甕	胴　部…風化が著しい 底　部…横ナデ	胴　部…ハケ目か	良　好	明　黄　褐(Hue10YR 7/6)	浅　黄(Hue2.5Y 7/4)～黄灰(2.5Y5/1)	0.5～1.5㎜大の砂粒多し、半透明な粒を含む		
〃	〃	214	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…縦方向のハケ目	口縁部…ハケ目 胴　部…ハケ目か	良　好	にぶい黄橙(Hue10YR 7/4)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒若干含む		Ⅸ C
〃	〃	215	甕	底　部…ナデ・指押え	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙(Hue10YR 7/4)～褐灰	浅　黄　橙(Hue7.5YR8/4)	0.5～1㎜大の砂粒・透明な粒多し	外面スス付着	
第35図	S A 15	216	壺	胴　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	にぶい黄橙(Hue10YR 7/4)	明黄褐(10YR6/6)～橙(5YR6/6)	1～2㎜大の砂粒多し		
〃	〃	217	甕	口縁部…ヘラミガキ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR 8/4)	黄　橙(Hue10YR 8/6)	1～2㎜大の砂粒多し	円形浮文	Ⅱ A
〃	〃	218	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケか	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケか	良　好	橙(2.5YR6/6～5YR7/6)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒若干含む	口唇部に縦方向の刻み目	Ⅳ A
〃	〃	219	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か 底　部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部～底部…ハケ目か	良　好	にぶい黄橙(Hue10YR7/3～8/3)	にぶい黄橙(Hue10YR 7/3)～灰黄褐(10YR5/2)	1～3㎜大の砂粒・石粒多し	斜方向の細かい刻み目	Ⅱ Bc
〃	〃	220	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	にぶい黄橙(Hue10YR 7/3)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	Ⅱ Bb
〃	〃	221	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	橙(7.5YR 7/6)～にぶい黄橙(10YR7/3)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	222	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR 8/4)	黒　褐(Hue7.5YR3/1)	0.5～1㎜大の砂粒多し	内面黒斑	
〃	〃	223	甕	底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デか	良　好	にぶい橙(5YR7/4)～にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(Hue10YR 7/4)	0.5～1㎜大の砂粒（透明な粒を含む）多し		
〃	〃	224	甕	胴　部…縦方向のハケ目 底　部…横ナデ・ナデ	ハケ目か	良　好	明　黄　褐(Hue10YR 7/6)	橙（5YR 7/6）～黒褐(10YR3/1)	0.5～1㎜大の砂粒多し	底部内面スス付着	
〃	〃	225	甕	胴　部…ハケ目か 底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デ	良　好	浅　黄(Hue2.5Y 7/3)	黒　褐(Hue7.5YR3/1)	1～2㎜大の砂粒多し		
〃	〃	226	甕	胴　部…ハケ目 底　部…横ナデ・ナデ	ナ　デか	良　好	浅黄橙(10YR8/3)～にぶい橙(5YR7/3)	黄　灰(Hue2.5Y 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒含む		
〃	〃	227	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…風化著しい	横ナデ	やや軟質	浅黄橙(10YR8/4)～にぶい黄(2.5Y6/3)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し		Ⅹ B
〃	〃	228	甕	底　部…ナ　デ	ナ　デか	やや軟質	に ぶ い 黄(Hue2.5Y 6/3)	に ぶ い 橙(Hue7.5YR7/4)	2～4㎜大の石粒多し		
第36図	S A 16	229	壺	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ	良　好	浅　黄　橙(Hue7.5YR8/4)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し		
〃	〃	230	壺	口縁部…横ナデ 部分的に縦方向のヘラミガキ	ヘラミガキ	良　好	浅黄橙(Hue10YR8/4)にぶい黄(Hue2.5Y6/3)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第36図	S A16	231	壺	底　部…ナ　デ	風化著しい	良　好	浅黄橙(Hue10YR8/4)(底部)灰黄褐(Hue10YR5/2)	左 に 同 じ	0.5～1㎜大の砂粒多し半透明な粒も含む		
〃	〃	232	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	淡　黄(Hue2.5Y 8/3)	に ぶ い 黄(Hue2.5Y 6/3)	1～2㎜大の砂粒多し	斜方向の刻み目	Ⅱ Bb
〃	〃	233	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…横方向のハケ目	良　好	淡黄 Ⅱ Bb(Hue 2.5Y 8/3)	灰　黄　褐(Hue10YR 4/2)	1～3㎜大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	Ⅱ Bc
〃	〃	234	甕	突帯部…横ナデ	横ナデ	良　好	にぶい赤褐(Hue5YR5/4)～褐灰(Hue5YR4/1)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し		
〃	〃	235	甕	突帯部…横ナデ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR 8/4)	灰　黄　褐(Hue10YR 4/2)	1～2㎜大の砂粒多し	斜方向の細い刻み目	
〃	〃	236	甕	底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	橙(Hue7.5YR7/6)	黒　褐(Hue7.5YR3/1)	半透明な粒及び0.5～1㎜大の砂粒多し	内面黒斑	
〃	〃	237	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR8/3～8/4)	左 に 同 じ	1～3㎜大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	238	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ヘラミガキ	良　好	浅　黄　橙(Hue7.5YR8/6)	にぶい黄橙(Hue10YR 7/4)	1～3㎜大の砂粒多し		
〃	S A17	239	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR 8/4)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し		Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ
〃	〃	240	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	浅　黄　橙(Hue7.5YR8/6)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し		
〃	〃	241	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	淡　黄(Hue2.5Y 8/3)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し		Ⅲ
〃	〃	242	甕	突帯部…横ナデ	横ナデ	良　好	灰　褐(Hue7.5YR5/2)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し	縦方向細めの刻み目	Ⅲ
〃	〃	243	壺	胴　部…横方向のヘラミガキ 底　部…ナ　デ	風化著しい	良　好	橙(Hue7.5YR6/6)	灰　黄(Hue2.5Y 6/2)	白い粒及び0.5～2㎜大の砂粒を含む		
〃	〃	244	甕	突帯部…横ナデ	横ナデ	良　好	橙(Hue7.5YR6/6)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し	斜方向の刻み目	Ⅰ
〃	〃	245	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…縦方向のハケ目 底　部…横ナデ・ナデ	横ナデ	良　好	灰　褐(Hue7.5YR5/2)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒・3㎜大の石粒を含む		Ⅸ C
〃	〃	246	甕	胴　部…風化著しい 底　部…ナ　デ	ナ　デ	良　好	橙(Hue7.5YR7/6)	左 に 同 じ	0.5～2㎜大の砂粒多し2.5㎜大の石粒を含む	内面スス付着	
〃	〃	247	甕	口縁部…横ナデ 胴　部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴　部…ハケ目	良　好	浅　黄　橙(Hue10YR 8/4)	橙(Hue7.5YR7/6)	0.5～1㎜大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	248	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良　好	橙(Hue7.5YR7/6)	左 に 同 じ	1㎜大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	249	壺	頸　部…縦方向のヘラミガキ	ヘラミガキ	良　好	明　黄　褐(Hue10YR 7/6)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し		
〃	S A18	250	壺	底　部…ナ　デ	指押え	良　好	淡　黄(Hue2.5Y 8/4)	灰　黄(Hue2.5Y 7/2)	2～4㎜大の砂粒多し		
〃	〃	251	甕	突帯部…横ナデ	横ナデ	良　好	黄　橙(Hue7.5YR7/8)	左 に 同 じ	1～2㎜大の砂粒多し	縦方向の刻み目	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第36図	SA18	252	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左に同じ	1～3mm大の砂粒多し	外面スス付着	Ⅳ
〃	〃	253	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1～3mm大の砂粒多し		
〃	〃	254	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	橙 (Hue5YR 7/6)	橙 (Hue7.5YR6/6)	1～3mm大の砂粒多し		Ⅴ
〃	〃	255	甕	胴部…ハケ目 底部…横ナデ	ナデ	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	浅黄(Hue2.5Y 7/3)～褐灰(Hue10YR 4/1)	0.5～1mm大の砂粒多し		
第37図	SA19	256	壺	突帯部…横ナデ 肩部…風化著しい	風化が著しい	良好	浅黄橙(Hue7.5YR8/4)～橙(Hue5YR 7/6)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅢA
〃	〃	257	壺	頸部…横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/6)	左に同じ	1mm大の砂粒多し		
〃	〃	258	壺	胴部…ヘラミガキ 底部…ナデ	風化が著しい	良好	にぶい橙(Hue7.5YR7/4)～灰オリーブ(Hue5Y 5/3)	黄橙 (Hue10YR 8/6)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	259	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	にぶい橙(Hue5YR 7/4)～浅黄(Hue2.5Y 7/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	260	甕	口縁部…横ナデ	横ナデ	良好	橙 (Hue7.5YR7/6)	左に同じ	1mm大の砂粒多し		
〃	〃	261	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	横ナデ	良好	橙(Hue7.5YR7/6) 口縁～突帯…にぶい黄橙(Hue10YR 8/3)	(にぶい黄(Hue2.5Y 8/3)～黄灰(Hue2.5Y 5/1)	1mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	262	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	良好	黄橙 (Hue10YR 8/6)	橙 (Hue7.5YR8/6)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	ⅡBb
〃	〃	263	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	良好	橙(Hue2.5YR6/6) 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	外面スス付着 縦方向の刻み目	ⅡBb
〃	〃	264	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	橙 (Hue7.5YR8/6)	1～2mm大の砂粒多し	縦方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	265	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	橙 (Hue7.5YR7/6)	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBb
〃	〃	266	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	浅黄 (Hue2.5Y 7/4)	黄灰 (Hue2.5Y 5/1)	1～3mm大の砂粒・石粒多し		
〃	〃	267	甕	胴部…ハケ目 底部…ナデ	ナデ	良好	淡黄(Hue2.5Y 8/3)底部の内側…褐灰(Hue10YR 5/1)	左に同じ	0.5～1mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	268	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	0.5～1mm大の砂粒多し 透明な粒を含む		
〃	〃	269	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ・斜方向のハケ目	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	灰(Hue10YR 8/1)～黄灰(Hue2.5Y 5/1)	0.5～2mm大の砂粒（石英・長石等）を含む		
〃	〃	270	甕	胴部…風化著しい 底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue7.5YR8/3)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	0.5～1.5mm大の砂粒多し		
〃	〃	271	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	浅黄 (Hue5Y 7/3)	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	272	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	左に同じ	0.5～2mm大の砂粒多し 半透明な粒を含む	外面スス付着	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第37図	SA19	273	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ	良好	浅黄橙～灰黄褐(Hue10YR 8/3～5/2)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	274	甕	口縁部～胴部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横ナデか	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR 8/4)	1～2mm大の砂粒多し	外面スス付着	
〃	〃	275	甕	口縁部～突帯部…横ナデ	横ナデ	良好	橙～にぶい黄褐(Hue7.5YR8/4～Hue10YR 5/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し 金雲母を含む	外面スス付着	Ⅴ
第38図	〃	276	甕	口縁部～突帯部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	橙 (Hue7.5YR8/6)	左に同じ	1～4mm大の砂粒・石粒(石英・雲母等)多し	外面スス付着	Ⅴ
〃	〃	277	甕	ナデ	ナデ	良好	赤	左に同じ	精選	丹塗り	
〃	SA20	278	壺	口縁部…横ナデ　底部…ナデ 胴部(上位)…横方向のヘラミガキ (下位)…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ　底部…ナデ 胴部…斜方向のヘラミガキ	良好	明黄褐(10YR 7/6) 黒褐(2.5Y 3/1) 黄灰(2.5Y 5/1)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	頸部、2穿孔2方向	
〃	〃	279	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目のあとナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/3)～灰黄褐(10YR 5/2)	浅黄橙 (Hue7.5YR8/3)	0.1～1mm大の砂粒を含む	外面にスス付着	ⅥC
〃	〃	280	甕	胴部…縦方向のハケ目 底部…ナデ・横ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4～7/4)、底部の内側灰(Hue5Y 5/1)	左に同じ	0.5～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	281	甕	胴部…ハケ目 底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	橙(Hue5YR 7/6)底部…灰(Hue5Y 5/1)	灰 (Hue5Y 5/1)	1～3mm大の砂粒多し		
〃	〃	282	壺	口縁部…横ナデ　胴部(上位)…横方向のハケ目の後ヘラミガキ 底部…ナデ　(下位)…ヘラミガキ	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目　底部…ナデ	良好	浅黄(Hue2.5Y 7/3)底部付近…黒褐(Hue2.5Y 3/1)	左に同じ	1mm大の砂粒多し	2個の円形浮文が4方向	
〃	SC1	283	壺	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴部…ナデか　底部…ナデ	良好	浅黄橙(10YR 8/4)～にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し	2穿孔2方向	
〃	〃	284	甕	口縁部…横ナデ　底部…横ナデ・ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部～底部ナデか	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	口縁にぶい黄橙(10YR 6/4)、胴部(10YR 7/2)、底部褐灰(10YR 5/1)	1～2mm大の砂粒多し	斜方向の刻み目	ⅡBa
〃	〃	285	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目　底部…横ナデ・ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目　底部…ナデ	良好	浅黄橙(Hue7.5YR8/4)突帯より上部、にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	左に同じ 底部の内側褐灰(10YR 5/1)	1～3mm大の砂粒・石粒多し	口縁部～胴部上位にスス付着 縦方向の刻み目	ⅡBb
〃	〃	286	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目　底部…ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目　底部…ナデ	良好	明黄褐 (Hue10YR 7/6)	黒褐 (Hue2.5Y 3/2)	1～3mm大の砂粒を含む	縦方向の刻み目	
第39図	〃	287	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	茶褐	左に同じ	1～2mm大の砂粒多し		ⅦAb
〃	SC2	288	甕	ナデ	ナデ	良好	茶褐	左に同じ	1～2mm大の砂粒若干	円形浮文	
〃	〃	289	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…風化著しい	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	橙 (Hue7.5YR7/6)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	Ⅸ SC3	290	壺	口縁部…指押え 胴部…ナデ　底部…ナデ	胴部…ナデ 底部…指押え	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	左に同じ	0.5～3mm大の砂粒を含む		
〃	〃	291	甕	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	左に同じ	1mm大の砂粒を含む	斜方向の刻み目 外面にスス付着	ⅡBb
〃	Ⅺ SC4	292	甕	底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	にぶい黄 (Hue2.5Y 6/3)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	0.5～1mm大の砂粒（透明な粒等）を含む	内面に黒斑	
〃	〃	293	甕	胴部…ハケ目 底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	浅黄橙(7.5Y8/6)～にぶい黄(2.5Y6/3)	左に同じ	1～2mm大の砂粒を含む		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	分類
第39図	SC5	294	壺	口縁部…横ナデ・ヘラミガキ	口縁部…横ナデ・ヘラミガキ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/4)	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	1mm大の砂粒多し		
〃	SC6	295	壺	頸部(上位)…縦方向のハケ目 (下位)…横ナデ・部分的に縦方向のヘラミガキ	ナデか	良好	黄橙 (Hue7.5YR7/6)	灰黄 (Hue2.5Y 6/2)	1～2mm大の砂粒多し		
〃	〃	296	壺	口縁部…横ナデ	口縁部…横ナデ 胴部…横方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 8/3)	橙 (Hue7.5YR7/6)	0.5～2mm大の砂粒を含む	内外面にスス付着	V
〃	〃	297	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	にぶい橙 (Hue7.5Y 7/4)	にぶい黄 (Hue2.5Y 6/3)	0.5～3mm大の砂粒・石粒多し	斜方向の刻み目	IIBa
〃	SC10	298	壺	胴部(上位)…斜方向のハケ目 底部…ナデ (下位)…ヘラミガキ	風化著しい	良好	橙 (Hue5YR 7/6)	黄灰(2.5Y 4/1) ～黒褐(2.5Y 3/2)	1～2mm大の砂粒（白っぽい）多し	外面にスス付着	
〃	〃	299	壺	底部…ナデ	風化著しい	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	浅黄橙 (Hue7.5YR8/6)	0.5～2mm大の砂粒（透明な粒等）多し		
〃	〃	300	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	橙 (Hue7.5YR7/6)	口縁部 橙(Hue5YR6/6) 胴上部 黒褐(7.5YR3/2)	0.5～3mm大の砂粒を含む	外面にスス付着 縦方向の刻み目	IIBb
第40図	〃	301	甕	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目・部分的にナデ	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目・部分的にナデ	良好	黄橙 (Hue2.5Y 8/6)	にぶい黄 (2.5Y 6/3) ～黄褐(2.5Y 3/3)	0.5～2mm大の砂粒（石英・長石等）を含む	外面にスス付着 斜方向の刻み目	
〃	〃	302	甕	胴部…ナデか 底部…ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	灰白(2.5Y 8/2) ～褐灰 (10YR 4/1)	0.5～1mm大の砂粒多し	内面黒斑	
〃	〃	303	甕	口縁部…ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…ハケ目 胴部…ナデ	良好	明黄褐 (Hue10YR 6/6)	橙 (Hue5YR 7/6)	半透明な粒及び小さい砂粒を含む	外面にスス付着	
〃	〃	304	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目・指押え	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3)	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	0.5～1mm大の砂粒（透明な粒等）を含む	外面にスス付着	
〃	〃	305	甕	胴部…ハケ目 底部…風化著しい	胴部…ナデ 底部…指押え	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3)	灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	0.5～1mm大の砂粒多し	胴部下位にスス付着	
〃	〃	306	甕	底部…横ナデ・ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/3)	黒褐 (Hue2.5Y 3/2)	0.5～1mm大の砂粒多し	内面黒斑	
〃	〃	307	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	にぶい褐 (Hue7.5YR5/3)	左に同じ	雲母・白い粒・砂粒多し		
〃	SC11	308	壺	口縁部…横ナデ 肩部…風化著しい	口縁部…横ナデ 頸部…斜方向のハケ目 肩部…指押え	良好	浅黄橙 (Hue10YR 8/4)	褐灰 (Hue10YR 4/1)	0.5～2mm大の砂粒多し		V
〃	SC13	309	甕	底部…風化著しい	ナデ	良好	淡黄 (Hue2.5Y 8/3)	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3)	0.5～1mm大の砂粒（白い粒、透明な粒等）多し		
〃	SC14	310	壺	底部…ハケ目・ナデ	ハケ目	良好	灰黄褐 (Hue10YR 5/2)	にぶい黄 (Hue2.5Y 6/3)	透明な粒・白い粒等の砂粒含む		
〃	〃	311	甕	底部…ナデ	ナデ	良好	橙 (Hue5YR 7/6)	黒褐 (Hue10YR 3/1)	0.5～1mm大の砂粒（白い粒、透明な粒等）多し		
〃	SC15	312	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ナデ 底部…横ナデ・ナデ・指押え	口縁部…横ナデ 胴部…指押え・ナデ 底部…ナデ	良好	にぶい黄橙 (Hue10YR 7/3)	にぶい黄褐 (Hue10YR 5/3)	0.5～1mm大の砂粒多し	外面スス付着	IXA
〃	XV SC群	313	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目	良好	橙 (Hue7.5YR6/6) ～褐灰 (Hue7.5YR4/1)	橙 (Hue7.5YR7/6)	0.5～1mm大の白っぽい砂粒、雲母多し	外面スス付着	
第41図	XI区	314	壺	ナデ	ナデ	良好	黒褐	黒褐	精選		V

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 面	色調 内面	胎土	備考	分類
第41図	MG11XI区	315	甕							縦方向の刻み目	I
〃	〃	316	甕							縦方向の刻み目	I
〃	MG11XV区	317	壺	ナデ	ナデ	良好	淡黄(2.5Y 8/3) ～黄灰(〃 4/1)	黒褐 (Hue2.5Y 3/1)	1～2mm大の砂粒（白い粒、黒い粒、ガラス状の粒等）を含む		
〃	MG11XI区	318	甕	口縁部…横ナデ 胴部…縦方向のハケ目	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	赤褐	赤褐	細かい砂粒多し	胴部にスス付着	
〃	MG11XV区	319	甕	ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙		0.5～2mm大の砂粒（白っぽい粒、雲母等）多し		
〃	〃	320	甕	ナデ	ナデ	良好	橙(Hue5YR 7/6) 底部は暗灰黄(2.5Y 5/2)	左に同じ	0.5～2mm大の砂粒含む		
〃	MG11XI区	321	甕	口縁部…横ナデ 胴部…ハケ目か	口縁部…横ナデ 胴部…斜方向のハケ目	良好	白黄	白黄	砂粒多し	外面スス付着 斜方向の刻み目	
〃	〃	322	甕	底部…横ナデ・ナデ	ナデ						

表49　土師器観察表

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調数			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底	
1	Ⅱ	土師器	坏	13.2	7.6	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切リ	Ⅰ－A１
2	〃	〃	〃	11.5	6.6	3.6	〃	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－A－1
3	〃	〃	〃	12.2	7.2	4.0	〃	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
4	〃	〃	〃	12.2	6.4	4.0	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
5	〃	〃	〃	13.0	6.7	4.0	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
6	〃	〃	〃	11.2	6.2	3.8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
7	〃	〃	〃	12.7	8.0	4.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－A－1
8	〃	〃	〃	11.9	7.6	4.1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
9	〃	〃	〃	10.8	6.6	3.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
10	〃	〃	〃	11.8	7.2	3.35	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
11	〃	〃	〃	12.9	8.0	3.75	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
12	〃	〃	〃	12	7.4	4.0	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	内面に黒斑がある Ⅰ－A－1
13	〃	〃	〃	12.8	6.8	3.8	〃	〃	石英を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
14	〃	〃	〃	11.4	6.6	3.85	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内面→指頭痕が３ケ所 側面→黒斑がある 底　→板目がある I-A-1
15	〃	〃	〃	10.6	7.2	3.75	〃	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	板目あり
16	〃	〃	〃	12.0	7.5	4.4	〃	浅黄橙色	精良	良好	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－A－1
17	〃	〃	〃	12.0	6.0	4.1	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
18	〃	〃	〃	—	—	6.0	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
19	〃	〃	〃	11.9	7.0	4.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
20	〃	〃	〃	11.2	7.0	3.7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
21	〃	〃	〃	11.9	7.0	4.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－A－1

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
22	Ⅱ	土師器	坏	11.4	7.0	3.2	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－A－1
23	〃	〃	〃	—	7.2	—	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	底→黒斑 Ⅰ－A－1
24	〃	〃	〃	—	8.0	—	浅黄色	浅黄色	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
25	〃	〃	〃	12.1	7.5	4.75	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
26	〃	〃	〃	—	—	3.6	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
27	〃	〃	〃	—	7.4	—	明黄褐色 (10YR⅚)	明黄褐色 (10YR⅚)	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
28	〃	〃	〃	13.0	7.6	3.8	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
29	〃	〃	〃	12.4	6.0	4.3	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－3
30	〃	〃	〃	—	7.8	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
31	〃	〃	〃	—	7.0	—	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
32	〃	〃	〃	—	9.1	—	浅黄色	浅黄色	砂粒を含む	〃	ナデ	〃	〃	
33	〃	〃	〃	16.0	11.8	2.8	にぶい橙色	にぶい橙色	精良	〃	横ナデ	〃	〃	
34	〃	〃	〃	—	7.4	′—	黄橙色	黄橙色	〃	やや良	〃	〃	〃	
35	〃	〃	〃	12.4	8.4	3.15	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
36	〃	〃	小皿	8.0	6.6	1.2	にぶい橙色	にぶい橙色	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
37	〃	〃	〃	8.5	6.5	1.6	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
38	〃	〃	〃	—	6.6	—	浅黄橙色	浅黄橙色	〃		〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
39	〃	〃	〃	8.0	6.8	1.4	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
40	〃	〃	〃	7.8	6.0	1.7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
41	〃	〃	〃	7.9	6.0	1.6	〃	〃	砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－B－4
42	〃	〃	〃	8.3	3.4	1.7	〃	〃	精良	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
43	Ⅱ	土師器	小皿	10.0	8.1	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－B－2
44	〃	〃	〃	7.9	6.0	1.9	浅黄色	浅黄色	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
45	〃	〃	〃	9.2	6.6	1.2	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	
46	〃	〃	〃	7.6	6.1	1.55	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
47	〃	〃	〃	7.9	5.8	1.45	〃	〃	細砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	細砂粒を含む Ⅰ－B－4
48	〃	〃	〃	12.0	7.6	1.2	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
49	〃	〃	〃	7.9	6.2	1.5	黄橙色	黄橙色	精良	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
50	〃	〃	〃	7.7	6.4	1.5	灰黄色	灰黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
51	〃	〃	〃	6.8	5.4	1.55	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
52	〃	〃	〃	6.2	7.2	1.0	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－B－1
53	〃	〃	〃	8.6	7.2	1.45	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	ヘラ切り	Ⅰ－B－4
54	〃	〃	〃	7.2	6.4	0.7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
55	〃	〃	〃	6.4	5.0	1.4	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
56	〃	〃	〃	7.7	6.2	1.55	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
57	〃	〃	〃	7.4	5.4	1.35	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
58	〃	〃	〃	7.4	7.0	1.1	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
59	〃	〃	〃	8.0	6.6	1.8	〃	〃	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
60	〃	〃	〃	8.0	7.0	1.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
61	〃	〃	〃	7.8	5.9	1.5	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
62	〃	〃	〃	8.8	6.6	1.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－4
63	〃	〃	〃	8.4	7.0	1.3	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	Ⅰ－B－2

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
64	Ⅱ	土師器	小皿	8.2	6.8	1.4	浅黄色	浅黄色	精良	良好	ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－B－2
65	〃	〃	〃	8.4	7.3	1.4	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
66	〃	〃	〃	8.5	6.3	1.4	にぶい橙色	にぶい橙色	〃	〃	横ナデ	〃	〃	Ⅰ－B－2
67	〃	〃	坏	11.8	7.1	3.3	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－A－1
68	〃	〃	〃	13.4	9.0	2.65	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－3
69	〃	〃	〃	13.4	8.6	3.2	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
70	〃	〃	〃	12.3	8.0	3.3	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅱ－A－3
71	〃	〃	〃	—	9.0	—	橙色	橙色	〃	良好	—	—	〃	風化が激しい Ⅱ－A－4
72	〃	〃	〃	13.4	10.0	2.85	浅黄色	浅黄色	〃	〃	横ナデ	横ナデ	〃	Ⅱ－A－3
73	〃	〃	〃	14.2	8.8	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－4
74	〃	〃	小皿	7.8	5.8	1.05	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－3
75	〃	〃	〃	8.4	6.4	1.05	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－2
76	〃	〃	〃	8.0	6.8	1.2	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
77	〃	〃	〃	—	7.2	—	にぶい橙色	にぶい橙色	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り	
78	〃	〃	坏	—	6.6	—	赤橙色	赤橙色	0.5～1.0mmの砂粒を含む。風化が激しい	〃	—	—	糸切り	Ⅱ－A－3
79	Ⅳ	〃	〃	12.1	7.2	4.25	浅黄色	浅黄色	精良	〃	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
80	〃	〃	〃	11.0	6.3	3.1	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－A－3
81	〃	〃	〃	14.6	9.2	3.4	浅黄色	浅黄色	〃	やや良	〃	〃	ヘラ切り	
82	Ⅲ	〃	〃	15.2	10.4	2.9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
83	Ⅳ	〃	〃	12.5	4.4	3.9	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－4
84	〃	〃	〃	13.6	9.0	4.95	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－4

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
85	Ⅳ 溝	土師器	坏	13.5	8.55	4.6	浅黄色	浅黄色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－A－6
86	Ⅳ	〃	〃	—	—	8.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
87	〃	〃	〃	—	8.3	—	〃	〃	砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	
88	XII	〃	〃	11.5	5.6	4.4	黄橙色	黄橙色	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－3
89	Ⅲ	〃	小 Ⅲ	7.6	6.6	1.3	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
90	Ⅳ	〃	〃	8.0	6.4	1.4	〃	〃	精良	やや良	〃	〃	〃	
91	Ⅳ東西溝	〃	坏	13.6	8.6	4.4	橙色	橙色	〃	良好	〃	〃	糸切り	Ⅱ－A－4
92	Ⅶ	〃	小 Ⅲ	—	5.6	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り	
93	Ⅲ	〃	〃	8.4	5.8	2.2	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－B－7
94	〃	〃	〃	8.4	5.2	1.7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－4
95	XI	〃	〃	7.6	5.0	2.05	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－7
96	Ⅰ	〃	〃	8.2	6.6	3.0	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
97	XI	〃	〃	9.0	6.2	2.25	浅黄橙色	浅黄橙色		〃	〃	〃	〃	
98	Ⅲ	〃	〃	—	—	2.1	〃	〃	砂粒を含む	〃	〃	〃	ヘラ切り	
99	XI	〃	〃	7.6	5.6	2.43	浅黄色	浅黄色	精良	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－B－5
100	XI	〃	〃	8.2	5.6	2.1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－5
101	Ⅱ	〃	〃	7.6	6.0	1.45	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り	Ⅰ－B－1
102	Ⅳ	〃	〃	8.2	7.8	1.1	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅰ－B－1
103	〃	〃	〃	7.0	5.2	1.9	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り	
104	〃	〃	〃	7.2	5.6	1.6	にぶい橙色	にぶい橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅰ－B－1
105	〃	〃	坏	12.5	7.6	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	精良､砂粒を含む	〃	〃	〃	ヘラ切り	Ⅰ－A－2

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
106	XVIISH3612	土師器	坏	13.3	7.9	4.05	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－A－2
107	XVIISH636	〃	〃	12.1	8.3	4.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－2
108	XVIISH3770	〃	〃	12.7	7.4	3.95	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
109	XVIISH636	〃	〃	11.6	7.7	4.4	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－2
110	XVIISA3665	〃	〃	11.6	6.4	3.8	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
111	ISH-366	〃	〃	11.6	7.4	3.52	橙色	橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
112	XVIISH3612	〃	〃	13.8	10.6	3.55	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
113	XVIISH636	〃	〃	—	7.8	—	橙色	橙色	少量の砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－5
114	XVIISH51･S	〃	〃	13.4	8.2	4.15	黄橙色	黄橙色	精良	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
115	XVIISH3601	〃	〃	12.1	7.0	4.05	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
116	XVII	〃	〃	—	7.0	—	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－1
117	XVII	〃	〃	—	7.4	—	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
118	XVII･SE11	〃	〃	—	6.6	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
119	XVIISE11	〃	〃	12.0	8.0	2.2	淡赤橙色	淡赤橙色	精良･砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	
120	XVIISE11･W	〃	〃	12.0	8.0	2.2	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
121	XVII	〃	〃	—	7.4	—	橙色	橙色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A－2
122	〃	〃	〃	12.0	7.2	4.2	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－A－2
123	〃	〃	〃	12.0	7.2	3.7	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－A－2
124	XVIISH3508	〃	小 Ⅲ	9.2	8.2	1.3	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
125	Ⅰ	〃	〃	—	7.4	—	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
126	XVIISE10	〃	〃	7.4	6.0	1.25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	糸切り	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
127	ⅠSH-91	土師器	小皿	8.6	7.2	1.4	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－B－2
128	ⅩⅦSH163	〃	〃	7.6	6.8	6.85	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
129	ⅩⅦSH30	〃	〃	7.4	6.0	1.1	淡赤橙色	淡赤橙色	褐色の砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
130	ⅩⅦ	〃	〃	7.8	6.0	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
131	ⅩⅦSH2019	〃	〃	8.1	6.8	1.3	浅黄色	浅黄色	砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
132	ⅩⅦSH3320	〃	〃	8.6	6.4	1.5	淡赤橙色	淡赤橙色	精良	〃	〃	〃	〃	
133	ⅩⅦSH36	〃	〃	6.8	5.8	1.25	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
134	ⅩⅦSH376	〃	〃	8.2	6.7	1.0	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
135	ⅩⅦSH36001	〃	〃	9.4	8.0	12.5	黒褐(10YR3/2)	黒褐	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－1
136	ⅩⅦSH36001	〃	〃	7.4	6.0	1.5	灰黄色	灰黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
137	ⅩⅦSH3	〃	〃	7.8	6.2	1.8	黄橙色	黄橙色	精良・砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－5
138	ⅩⅦSH36001	〃	〃	8.4	7.2	1.3	浅黄色	浅黄色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－2
139	ⅩⅦSH186	〃	〃	8.4	6.8	1.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	スス付着 Ⅰ－B－3
140	ⅩⅦSH2019	〃	〃	7.8	6.0	1.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
141	ⅩⅦSH3601	〃	〃	7.4	2.5	1.3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－6
142	ⅩⅦSH181	〃	〃	9.5	8.2	1.9	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－5
143	ⅩⅦSH	〃	〃	7.8	5.5	1.25	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－6
144	ⅩⅦSH3407	〃	〃	7.6	5.6	1.3	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	底部に凸部があるため傾きが不安定 Ⅰ－B－3
145	ⅩⅦSH3187	〃	〃	7.5	5.6	1.5	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－7
146	ⅩⅦSE・11	〃	〃	8.8	5.9	1.5	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－6
147	ⅩⅦSH51	〃	〃	7.8	6.0	1.0	浅黄橙色	浅黄橙色	精良・砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	板目あり Ⅰ－B－3

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
148	ⅩⅦSH46	土師器	小皿	8.4	6.8	1.5	浅黄色	灰黄色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－B－3
149	ⅩⅦSH594	〃	〃	9.0	6.0	1.6	にぶい橙色	にぶい橙色	精良 黒い砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－7
150	〃	〃	〃	7.0	5.4	0.95	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
151	ⅩⅦSH186	〃	〃	7.4	6.0	1.15	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
152	ⅩⅦ	〃	〃	7.8	6.4	1.0	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
153	ⅩⅦSH3471	〃	〃	8.8	6.6	1.15	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
154	ⅩⅦSH2019	〃	〃	7.8	5.8	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	精良 黒い砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	
155	ⅩⅦSH636	〃	〃	7.0	5.6	1.0	〃	〃	精良	〃	〃	〃	〃	
156	ⅩⅦSH51S	〃	〃	7.4	6.0	1.0	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
157	ⅩⅦSH51S	〃	〃	7.9	6.4	1.2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
158	ⅩⅦSH40	〃	〃	8.2	6.4	1.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
159	ⅩⅦSH47	〃	〃	8.0	6.4	1.1	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
160	ⅩⅦSH3631	〃	〃	6.4	5.8	1.0	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒を含む	やや良	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
161	ⅩⅦSH31	〃	〃	8.0	6.0	1.4	浅黄色	浅黄色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－6
162	ⅩⅦ	〃	〃	9.0	7.4	0.9	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	良好	〃	〃	〃	Ⅰ－B－3
163	ⅩⅦ	〃	〃	7.5	5.7	1.65	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－B－7
164	ⅩⅦSH62	〃	〃	7.2	5.0	1.1	浅黄色	浅黄色	〃	やや良	〃	〃	〃	
165	ⅩⅦSH3601	〃	〃	8.6	6.4	0.95	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	
166	ⅩⅦSE12	〃	〃	7.6	4.8	1.45	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－B－6
167	ⅩⅦSE11	〃	〃	8.7	6.0	2.1	黄橙色	黄橙色	精良 砂粒を含む	〃	ナデ	〃	ヘラ切り	Ⅰ－B－7
168	ⅩⅦSH375	〃	〃	7.8	4.8	1.8	浅黄橙色	浅黄橙色	精良	〃	〃	〃	〃	黒斑がある Ⅰ－B－7

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
169	XⅦSE11	土師器	小皿	7.2	6.6	1.7	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	Ⅰ－B－1
170	Ⅰ	〃	坏	12.1	6.3	4.2	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	糸切り	Ⅱ－A－1
171	〃	〃	〃	12.4	7.3	4.25	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
172	〃	〃	〃	—	—	7.1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
173	〃	〃	〃	—	7.4	—	〃	〃	精良 褐色の砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	
174	〃	〃	〃	11.8	7.0	3.9	〃	〃	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
175	〃	〃	〃	—	8.6	—	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	
176	〃	〃	〃	13.0	7.0	3.3	淡赤橙色	淡赤橙色	精良 砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－3
177	XⅦSH3612	〃	〃	11.6	6.8	4.0	浅黄色	浅黄色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
178	〃	〃	〃	11.15	7.1	4.2	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
179	〃	〃	〃	14.2	8.8	3.55	淡赤橙色	淡赤橙色	砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	
180	XⅦSH4	〃	〃	12.6	7.0	4.15	浅黄色	浅黄色	精良 黒い砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	
181	XⅦSE12	〃	〃	11.8	7.0	2.85	〃	〃	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－2
182	XⅦSH3682	〃	〃	13.6	8.6	3.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
183	XⅦSH3564	〃	〃	13.3	6.8	3.2	橙色	橙色	精良 少量の砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－3
184	XⅦSH3694	〃	〃	—	6.8	—	淡赤橙色	淡赤橙色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－1
185	XⅦSE12	〃	小皿	11.4	6.8	2.1	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－A－7
186	XⅦSE12	〃	〃	10.8	6.2	2.4	浅黄色	浅黄色	1㎜～2㎜の橙色の 軟かい石を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－7
187	XⅦSE12	〃	〃	9.2	6.0	2.1	浅黄橙色	浅黄橙色	砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－7
188	XⅦSE12	〃	〃	9.2	5.6	2.45	灰黄色	灰黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－6
189	XⅦSH3263	〃	〃	9.8	5.4	2.4	浅黄色	浅黄色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－7

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
190	XⅦSH3164	土師器	小皿	8.8	5.2	2.4	淡赤橙色	淡赤橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	
191	XⅦ東西溝	〃	皿	8.5	5.0	2.3	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	ナデ	〃	〃	Ⅱ－B－6
192	XⅦSE11	〃	〃	8.6	5.3	2.2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－6
193	Ⅰ	〃	小皿	8.3	6.3	1.5	黄橙色	黄橙色	〃	〃	横ナデ	〃	〃	Ⅱ－B－3
194	〃	〃	〃	6.8	5.6	1.45	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
195	ⅠSH63	〃	〃	7.3	5.5	1.6	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－3
196	XⅦSE11	〃	〃	8.5	6.5	1.65	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－2
197	XⅦSE11	〃	〃	7.4	4.4	1.85	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	〃	—	〃	〃	Ⅱ－B－6
198	XⅦSH2019	〃	〃	8.6	7.5	1.3	淡赤橙色	淡赤橙色	灰色の砂粒を含む	やや良	横ナデ	〃	〃	Ⅱ－B－1
199	XⅦSH2019	〃	〃	7.8	6.6	0.9	〃	〃	灰色の砂粒を含む	良好	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
200	XⅦSH36	〃	〃	8.1	6.5	1.3	黄橙色	黄橙色	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
201	XⅦSE11	〃	〃	7.2	6.0	1.1	淡黄色	淡黄色	〃	〃	〃	〃	〃	
202	XⅦSH3549	〃	〃	8.7	6.0	1.8	灰黄色	灰黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－7
203	XⅦ	〃	〃	7.9	6.3	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－2
204	XⅦSH2019	〃	〃	8.1	6.0	1.4	淡赤橙色	淡赤橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－2
205	XⅦSH4	〃	〃	8.2	6.4	1.2	にぶい橙色	にぶい橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
206	XⅦSH99	〃	〃	7.8	6.4	1.35	黄橙色	黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
207	XⅦSH147	〃	〃	7.6	5.4	1.6	浅黄色	浅黄色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－3
208	XⅦSH3461	〃	〃	8.0	6.0	1.3	黄橙色	黄橙色	精良 砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－4
209	XⅦSH140	〃	〃	7.8	5.6	1.3	灰黄色	褐灰色	精良	〃	〃	〃	〃	
210	XⅦ	〃	〃	10.2	8.6	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	砂粒を含む	〃	〃	〃	〃	黒斑がある Ⅱ－B－1

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
211	XⅦSH177	土師器	小皿	8.0	6.4	1.45	黄橙色	黄橙色	精良	良好	横ナデ	横ナデ	糸切り	Ⅱ－B－1
212	XⅦSH209	〃	〃	8.4	7.0	1.15	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
213	XⅦSH111	〃	〃	7.8	6.4	1.15	黄橙色	黄橙色	橙色の砂粒が少量含まれる	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－1
214	XⅦSH30	〃	〃	7.8	6.0	1.15	〃	〃	精良	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－4
215	XⅦ	〃	〃	—	4.6	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－3
216	XⅦSH376	〃	〃	7.6	5.6	1.6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－4
217	XⅦSH636	〃	〃	8.4	3.0	1.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－3
218	Ⅰ	〃	〃	—	7.6	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－B－2
219	Ⅰ-H-2	〃	〃	—	5.6	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
220	XⅦ	〃	〃	7.5	5.8	1.2	浅黄橙色	浅黄橙色	〃	〃	〃	〃	〃	

凡例

・土師器の色調については基本的に下記の色調に分類した。

○赤橙色（10R6/6） ○淡赤橙色（2.5YR7/4） ○橙色（5YR7/6）

○にぶい橙色（7.5YR7/4） ○黄橙色（7.5YR7/8） ○浅黄橙色（10YR8/4）

○淡黄色（2.5Y8/3） ○浅黄色（2.5Y7/3） ○灰黄色（2.5Y7/2）

表50　陶磁器観察表

No.	出土位置	器種	器形及び部位	法量	色調	形態・成形技法の特徴	備考
221	ⅩⅡ区	土師器	甕（口縁部）	口径～22.8cm	にぶい橙色	胴部はやや張りくびれた頸部より直線的に外反する。口縁端部は丸くおさめられている。	胎土精良。焼成良好。
222	Ⅲ区 SE0	土師質土器	土鍋	口径～30.0cm 器高～27.0cm	内外～灰色（7.5YR5/1）	体部直線的，口縁部は内湾ぎみに外反する。丸底。内面は横ハケ，外面の体部は縦ハケ，底部付近は斜めハケ。	焼成良好。 体部の外面は多量にスス付着。
223	ⅩⅦ区	瓦質土器	羽釜（口縁部）	口径～20.0cm	内外～灰色（7.5Y5/1）	内傾する，口縁端部は角。把手の部分が下方を向く。内外面とも横ナデ。	焼成良好。砂粒を含む。（白色の微細粒を含む）
224	ⅩⅤ区	瓦質土器	火舎（口縁部）	口径～38.0cm	外～暗灰色（N3/） 内～灰色（N5/）	口縁部が外方へ肥厚する。口縁部へラ状圧痕有り。口縁部に凸帯を1条回す。凸帯上下にスタンプ文。外面はヘラミガキ，内面は横ハケの後指頭で押さえる。	胎土には白色の砂粒を含む。 焼成やや良。
225	Ⅳ区	陶器	水注（胴部）	—	外～明黄褐色 内～灰色	肩部より頸部にかけて3条の条線が2ケ所にはいる。把手がはずれた痕がある。	胎土精良。焼成良好。古瀬戸。
226	Ⅳ区 A集石	陶器	壺（胴部）	—	外～明黄褐色（10YR7/6） 内～にぶい黄橙色（10YR7/3）	底部より直線的に外反し肩部に最大径を有す。輪積みか。肩部より上，内面の底部付近には淡緑色の釉がかかっている。	胎土精良。焼成良好。 古瀬戸，233と同一か。
227	Ⅱ区	陶器	大甕（口縁部）	口径～41.0cm	外～暗赤褐色（5YR3/4） 内～灰赤色（2.5YR5/2）	口縁端部を折り曲げて，玉縁。内外面とも横ナデ，外面には釉がかかっている。	胎土～砂粒を含む1～3㎜大の小石を含む。備前焼。
228	ⅩⅦ区	陶器	甕（口縁部）	—	内外～暗赤褐色（10R3/3）	口縁端部を上下に拡張。内外面とも横ナデ。	胎土～砂粒を含む。焼成良好。常滑焼。
229	ⅩⅤ区	陶器	壺（口縁部）	口径～10.4cm	内外～青灰色（10BG5/1）	口縁部直口。口縁端部を折り返し玉縁。内外面横ナデ。	胎土～砂粒を含む1～2㎜の白色粒を含む。焼成良好。
230	ⅩⅦⅡ区	陶器	甕（口縁部）	—	外～青灰色（5BG5/1） 内～明青灰色（5BG7/1）	口縁部外反。口縁端部をすこし折り返し玉縁。内外面横ナデ。	胎土～砂粒を含む。4～5㎜大の小石を含む。焼成良好。
231	ⅩⅤ区	陶器	大甕（口縁部）	—	外～にぶい褐色（7.5YR5/4） 内～灰色（7.5Y5/1）	口縁端部を折り返し玉縁，内外面へ横ナデ，外面には釉がかかる。	胎土～橙色の砂粒を多く含む。焼成良好。備前焼。
232	Ⅳ区	須恵器	壺（底部）	高台～9.2cm	外～灰色（7.5Y5/1） 内～青灰色（5BG5/1）	底部より直線的に外反し肩部より鋭色に内向する。体部内外面へラケズリ，貼り付け高台，底部にヘラ記号あり。	胎土精良。焼成良好。長頸壺か。
233	Ⅵ区	陶器	壺（底部）	高台～7.3cm	外～明黄褐色（10YR7/6） 内～灰白色（10Y8/2）	内外面横ナデ。貼り付け高台。	胎土精良。焼成良好。 古瀬戸，226と同一か。
234	Ⅱ区	緑釉	Ⅲ（底部）	—	内外～オリーブ黄色（7.5Y6/6）	充実した高台より外へ開く。削り出し高台。外底面の半ばまで釉がかかる。	胎土精良，焼成良好，硬陶。
235	ⅩⅦ区 SE10	陶器	小壺	口径～4.0cm 器高～6.3cm 底径～5.2cm	内外～暗赤色（10R3/4） 橙色（2.5YR6/6）	扁平な底部より内湾ぎみに立ち上り，肩部より内向し短い口縁部が立ち上る。肩部よりやや下に沈線が1条めぐる。沈線より下はヘラケズリ上は横ナデ。内底面が隆起している。外底面にヘラ記号あり。	焼成良好。
236	Ⅱ区	褐釉陶器	壺（底部）	底径～8.2cm	外～灰白色（5Y7/1） 内～淡黄色（5Y8/3）	底部より直線的に立ち上る。内面横ナデ，外面ヘラによるナデ，上げ底。	胎土～精良。白色砂粒を若干含む。 焼成良好。
237	ⅩⅥ区 SE10	陶器	鉢（口縁部）	口径～16.0cm	外～灰白色（2.5Y8/1） 内～灰色（7.5Y5/1）	口縁端部をつまみあげる。口縁部肥厚。内外面横ナデ。	胎土～砂粒を含む。焼成やや良。 こね鉢魚住窯
238	ⅩⅦ区 SE12	陶器	鉢（底部）	—	内外～青灰色（5BG5/1）	底部よりゆるやかに立ち上る。底部糸切り，外底部周縁ナデ。	胎土～砂粒を含む。焼成やや良。 こね鉢，魚住窯
239	Ⅰ区	陶器	鉢（底部）	底径～10.0cm	内外～青灰色（5BG5/1）	底部よりゆるやかに立ち上る。底部糸切り，外底部周縁ナデ。	胎土～砂粒を含む。焼成～やや良。 こね鉢，魚住窯
240	Ⅰ区	陶器	鉢（底部）	底径～8.0cm	外～青灰色（5BG5/1） 内～灰白色（5Y7/1）	底部より直線的に立ち上る。底部糸切り。	胎土～砂粒を含む。焼成～やや良。 東播系魚住窯
241	ⅪⅠ区 SE1	陶器	擂鉢（口縁部）	—	外～灰色（N5/） 内～灰オリーブ色（5Y5/2）	直線的な体部より口縁部が直立する。口縁部若干下方に拡張，内外面横ナデ，8本の条線，片口鉢。	胎土～砂粒を含む3～4㎜の小石を含む。焼成良好。備前焼。

No.	出土位置	器種	器形及び部位	法量	色調	形態・成形技法の特徴	備考
242	XVI区	陶器	擂鉢(口縁部)	−	外～青灰色(10BG5/1) 内～灰白色(7.5Y7/1)	直線的な体部より一反くびれて口縁部が直立する。内外面横ナデ。7本の条線。	胎土精良。焼成良好。備前焼か。
243	XVI区	陶器	擂鉢(口縁部)	−	外～明青灰色(5BG7/1) 内～青灰色(10BG5/1)	直線的な体部より若干口縁部が直立する。口縁部若干下方に拡張。内外面横ナデ。	胎土～半透明(石英)，白色粒を含む。焼成良好。備前焼。
244	XVII区 SE12	陶器	擂鉢(底部)	底径～16.2cm	外～赤橙色(10R6/6) 内～にぶい赤橙色(10R6/4)	底部より直線的に立ち上る。外面ナデ，内面はすったためかすべすべしている。9本の条線。	胎土～砂粒を含む2～3㎜の白色の小石を含む。焼成不良。
245	II区	陶器	擂鉢(底部)	−	内外～黄橙色(7.5YR8/6)	底部より直線的に立ち上る。外面ナデ，内面はすったためかすべすべしている。	胎土～砂粒を含む1～3㎜の白色の砂粒を含む。焼成不良。
246	XVII区 SE10	陶器	擂鉢(底部)	−	外～灰褐色(7.5Y5/2) 内～灰色(2.5Y5/1)	底部より直線的に立ち上る。外面ナデ，内面はすったためかすべすべしている。	胎土～砂粒を含む1～2㎜の白色の砂粒を含む。焼成やや良。
247	XVI区 SEEW	白磁	皿	口径～13.0cm 器高～3.0cm 高台～7.2cm	内外～灰白色(7.5Y7/1)	高台よりゆるやかに立ち上り，口縁部付近で外湾する。畳付は露胎している。釉はくすんでいる。	素地白色。
248	XVII区	白磁	皿	口径～9.0cm 器高～2.4cm 高台～4.0cm	内外～灰白色(2.5Y8/2)	高台より丸味をもって立ち上り口縁部へ至る。高台はアーチ状に削られ台形状をなす。4つの畳付を有す。内面には重ね焼の痕が残る。	素地白色。
249	XVII区 SE10	白磁	皿(底部)	底径～4.0cm	内外～灰白色(2.5Y8/1)	高台より丸味をもって立ち上る。高台はアーチ状に削られ台形状をなす。4つの畳付を有す。高台内部は釉切れしている。内面には重ね焼の痕を残す。	素地白色。
250	XVII区	白磁	皿(底部)	底径～5.0cm	内外～明緑灰色(10GY8/1)	碁笥底を呈す。外底は釉切れしている。内底に草花文を有す。	素地白色。
251	II区	青磁	埦	口径～15.5cm 器高～6.4cm 高台～5.0cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	高台より内湾ぎみに立ち上り口縁部付近で外湾する高台外側まで釉がかかる。畳付及び内底は無釉，外面ヘラケズリ痕内部面に草花文有り。	素地灰色。
252	XVII区	青磁	埦(口縁部)	口径～16.8cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	口縁部付近で外湾する。釉が厚くかかっている。	素地灰白色。
253	XVI区 SEEW	青磁	埦(底部)	高台～5.5cm	内外～淡緑色	高台より内湾ぎみに立ち上る。外面に蓮弁を有す可能性有。高台の内壁まで釉がかかる。高台内底は無釉。内底面は草花文。	素地灰色。
254	II区	青磁	埦(底部)	−	内外～淡緑色	高台内底は無釉，内底面に草花文。	素地灰色。
255	XVII区 SE10	青磁	埦(口縁部)	口径～15.5cm	内外～明緑灰色(5G7/1)	口縁部付近で外湾する。	素地灰色。
256	II区	青磁	埦(底部)	高台～6.8cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	釉が高台内壁までかかっている。高台内面は部分的に釉がかかっている。内底面印花文。	素地灰色。
257	XV区	青磁	埦(底部)	高台～6.8cm	内外～淡緑色	短い高台より一反外方へ開き，それから上方へ屈曲する。高台内壁にまでは釉がかかっている。高台内底面には釉がかかっていない。内底面に草花文。	素地灰色。
258	XVII区	青磁	埦(口縁部)	口径～15.6cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的な口縁部，外面若干もりあがった蓮弁を有す。	素地灰色。
259	XVII区	青磁	埦(口縁部)	口径～12.0cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的な口縁部，外面ヘラ先による，細線の線描蓮弁文。	素地灰色。
260	XVII区 SH644	青磁	埦(口縁部)	口径～10.0cm	内外～灰白色(5GY8/1)	直線的な口縁部，外面ヘラ先による，細線の線描蓮弁文。	素地灰白色。
261	XVII区	青磁	埦(口縁部)	口径～13.3cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的な口縁部，外面ヘラ先による細線の線描蓮弁文。	素地灰白色。
262	XVII区 SEXI	青磁	埦(口縁部)	口径～13.0cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的な口縁部，外面雷文帯を有す。	素地灰色。

No.	出土位置	器種	器形及び部位	法量	色調	形態・成形技法の特徴	備考
263	II区	青磁	埦(口縁部)	口径～13.0cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的な口縁部，外面に雷文帯を有す。	素地灰色。
264	I区	青磁	埦(底部)	高台～10.2cm	内外～青緑色	シャープな高台を有す。畳付は褐色を呈し無釉である。その他の部分には釉がかかっている。	素地灰色。
265	XVII区 SE10	青磁	瓶(口縁部)	口径～8.0cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	直線的に外傾し口縁部付近で外湾する。内面は途中まで釉がかかっている。	素地灰色。
266	I区	青磁	(底部)	高台～7.8cm	外～明緑灰色(7.5GY7/1) 内～灰白色(7.5Y8/1)	高台より一反外へ開く，すぐ上方へ屈曲する。畳付は無釉である。内面も無釉である。	素地灰白色。
267	XVI区 SEEW	青磁	皿	口径～11.5cm 器高～3.3cm 高台～5.8cm	内外オリーブ灰色(2.5GY7/1)	高台より一反外へ開き，外反しながら立ち上り口縁部に至る。口縁部は稜花をなす。体部内面には劃花文が施されており内底面には草花文を有す。外底面は無釉である。	素地灰色。
268	XVII区	磁器	皿	口径～11.0cm 器高～2.1cm 高台～6.8cm	内外～灰白色(10Y7/2)	底部より直線的に立上り口縁部付近で外方へ屈曲，口縁端部が若干上方へ折り返す。体部内面は丸のみ状のもので削られ，菊花状に呈す。外底面及び内底面には重ね焼の痕跡がある。屈曲部に緑色の釉がたまる。	素地淡黄色。
269	XVI区 SEEW	磁器	皿	口径～10.5cm 器高～2.6cm 高台～4.5cm	内外～淡黄色(7.5Y8/3)	底部より丸味をおびて立ち上る。口縁部は波状をなし体部内面は菊花状に整形されている。畳付及び高台内部は無釉。	素地淡黄色。
270	III区	青磁	埦	口径～12.8cm 器高～5.5cm 高台～4.3cm	内外～オリーブ灰色(10Y5/2)	高台より内湾ぎみに立ち上り，そのまま口縁部に至る。畳付以外はすべて釉がかかっている。	素地灰色。
271	II区	染付	皿	口径～20.0cm 器高～3.5cm 高台～12.2cm		高台より内湾気味に立ち上り中半より外反する。見込みには王取獅子文。	

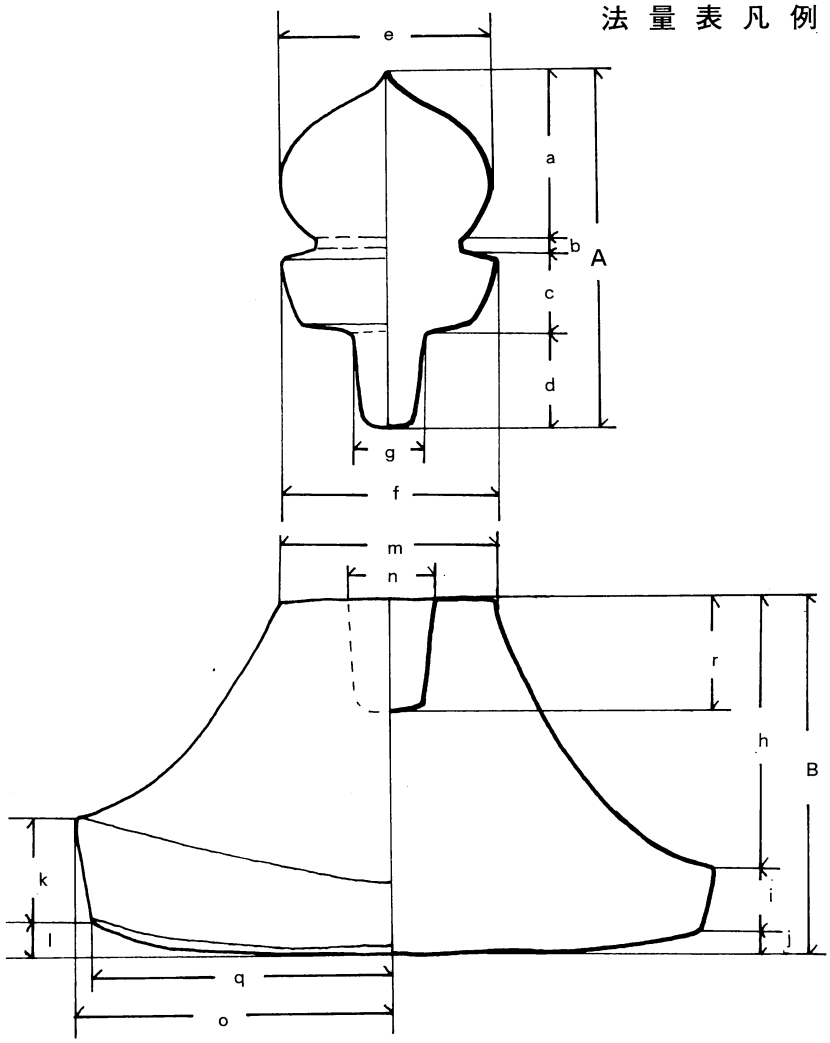
表51　古銭観察表

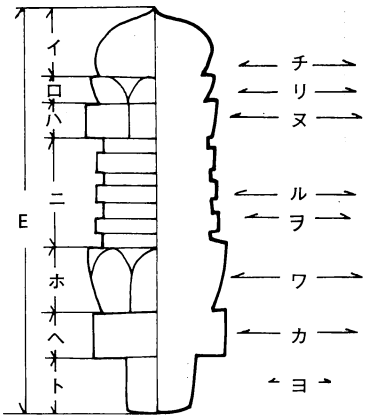
No.	出土地	遺構	銭貨名	初鋳年	西暦	外径	孔径	厚み	備考
1	Ⅲ区	東西溝	洪武通寶	明・太祖 洪武元年	1368	2.4(㎝)	0.6(㎝)	0.15(㎝)	裏に「桂」の字あり
2	Ⅲ区	—	寛永通寶	寛永13年	1636	2.3	0.6	0.15	
3	Ⅱ区	SD 9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
4	〃	〃	不明	—	—	2.5	0.7	0.2	錆の為判読不可
5	〃	〃	—	—	—	2.4	0.6	—	錆でくっついている（鉄製品共伴）
6	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
7	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
8	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
9	〃	SD 11	寛永通寶	寛永13年	1636	2.2	0.6	—	くっついている
10	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
11	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
12	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
13	〃	SD 12	寛永通寶	寛永13年	1636	2.5	0.6	0.2	
14	〃	〃	—	—	—	2.2	0.6	0.2	
15	〃	〃	—	—	—	—	—	—	欠損布付着
16	〃	〃	—	—	—	—	—	—	〃
17	Ⅻ区	—	寛永通寶	寛永13年	1636	2.3	0.6	0.1	
18	XV区	—	金□通□	—	—	2.6	0.5	0.15	
19	Ⅰ区	—	寛永通寶	寛永13年	1636	2.5	0.6	0.15	
20	XⅦ区	SH 449	元豊通寶	宋・神宗 元豊元年	1078	2.9	0.7	0.15	
21	〃	〃	—	—	—	2.35	0.6	0.18	「洪武通寶」か
22	〃	〃	—	—	—	2.3	0.6	0.1	
23	〃	〃	開元通寶	唐・高祖 武徳4年	621	2.3	0.7	—	

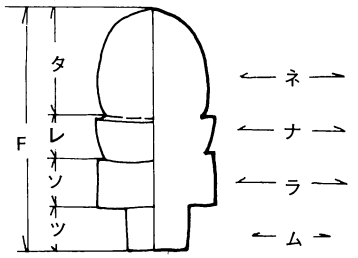
No.	出土地	遺構	銭貨名	初鋳年	西暦	外径	孔径	厚み	備考
24	XVII区	SH 449	—	—	—	— (cm)	— (cm)	— (cm)	
25	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
26	〃	〃	—	—	—	—	—	—	くっついている
27	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
28	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
29	〃	〃	元豊通寶	宋・神宗 元豊元年	1078	2.4	0.7	0.15	
30	〃	〃	—	—	—	2.3	0.6	0.2	
31	〃	〃	大□通寶	—		2.5	0.7	0.2	
32	〃	〃	—	—	—	2.4	0.7	—	「洪武通寶」か
33	〃	〃	—	—	—	—	—	—	くっついている
34	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
35	〃	〃	元豊通寶	宋・神宗 元豊元年	1078	2.4	0.8	0.15	
36	〃	〃	〃	〃	〃	2.3	0.6	0.1	
37	〃	〃	—	—	—	2.3	0.7	0.15	「洪武通寶」か
38	〃	〃	□□通寶	—	—	2.3	0.7	0.15	
39	〃	SH 637	洪武通寶	明・太祖 洪武元年	1368	2.2	0.65	0.18	
40	〃	SH3014	□□通寶	—	—	2.4	0.6	0.25	
41	〃	SH3033	洪武通寶	明・太祖 洪武元年	1368	2.3	0.6	0.19	
42	〃	SH3196	□□通寶	—	—	—	—	0.15	曲っている
43	〃	SH3258	開元通寶	唐・高祖 武徳4年	621	2.5	0.6	0.15	
44	〃	〃	洪武通寶	明・太祖 洪武元年	1368	—	0.6	0.2	半欠
45	〃	〃	元豊通寶	宋・神宗 元豊元年	1078	—	—	0.15	一部残存
46	〃	SH3264	洪武通寶	明・太祖 洪武元年	1368	2.4	0.6	0.2	

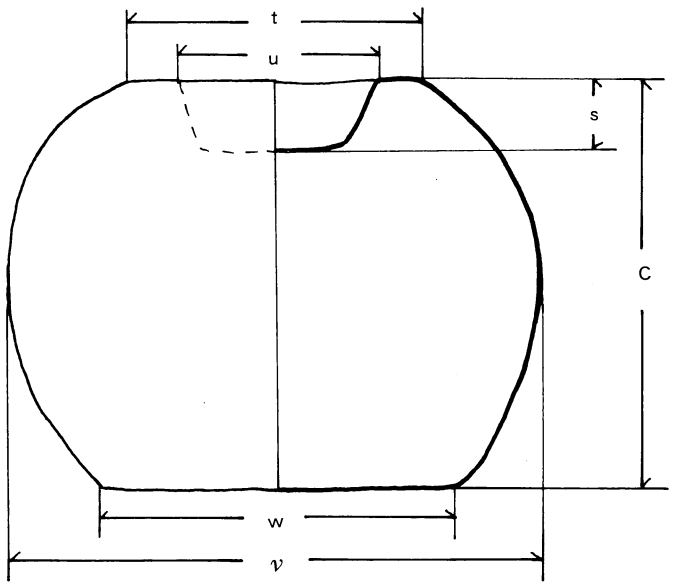
No.	出土地	遺構	銭貨名	初鋳年	西暦	外径	孔径	厚み	備考
47	XVI区	SH3430	—	—	—	2.5 (cm)	0.7 (cm)	0.2 (cm)	「元豊通寶」か
48	〃	SH3471	寛永通寶	寛永13年	1636	2.4	0.6	0.15	
49	〃	SE 10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
50	〃	SE 11	〃	〃	〃	2.25	0.7	—	くっついている
51	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	0.7	—	
52	〃	—	洪武通寶	明・太祖洪武元年	1368	2.35	0.7	0.15	一部欠損
53	〃	—	寛永通寶	寛永13年	1636	2.2	0.7	0.1	
54	〃	—	〃	〃	〃	2.3	0.65	0.15	
55	〃	—	〃	〃	〃	2.3	0.6	0.1	
56	II区	SD 8	〃	〃	〃	2.25	0.64	0.1	
57	〃	〃	〃	〃	〃	2.52	0.61	0.13	
58	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	0.59	0.13	裏に「文」有り
59	〃	〃	〃	〃	〃	2.43	0.59	0.12	
60	〃	〃	〃	〃	〃	2.57	0.59	0.12	
61	〃	〃	〃	〃	〃	2.32	0.63	0.11	
62	〃	〃	〃	〃	〃	2.25	0.64	0.09	

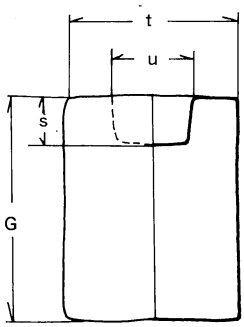
法量表凡例

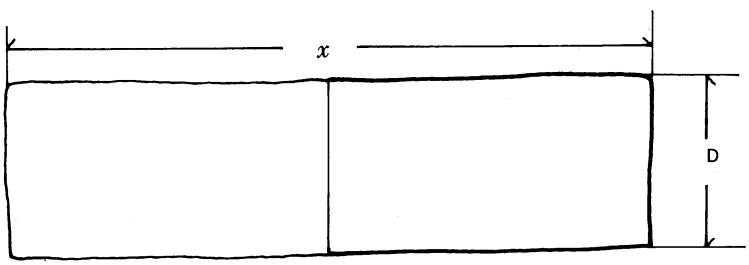












凡　例

1．五輪塔法量表の計測値は図の通りである。

表52　空風輪法量表(1)

区一番号	図面番号	法量 (cm)									型式	備考
		A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
Ⅳ－8	1	20.0	13.0	0.5	5.2	—	12.0	13.0		1.08	Ⅰ・A	小型
25	2	10.0	9.0	1.5	4.0	3.0	9.0	9.5	4.0	1.00	Ⅰ・A	小型
41	3	23.0	13.0	1.0	5.1	3.0	17.0	17.0	(5.4)	0.76	Ⅰ・A	大型
42	4	19.0	8.0	4.5	2.0	4.8	12.0	14.0	5.5	0.67	Ⅲ・A	小型
43	5	22.0	11.0	1.0	7.0	(3.0)	(7.5)	(11.0)	(2.3)	—	Ⅰ・B	
45	6	24.0	12.0	1.0	6.0	5.5	13.0	14.0	6.5	0.92	Ⅰ・B	小型
46	7	23.0	16.0	2.0	5.0	—	22.0	21.0	—	0.72	Ⅲ・A	大型
49	8	22.0	11.0	1.0	1.0	—	(9.0)	12.0	2.0	—	—	—
50	9	9.5	13.0	0	2.2	4.0	12.0	11.0	4.5	1.08	Ⅰ・A	小型
51	10	19.0	13.0	0.5	3.0	(1.0)	12.0	12.1	(4.0)	1.08	Ⅱ・A	小型
52	11	15.0	9.0	1.5	3.0	(1.0)	13.8	13.0	(6.0)	0.65	Ⅰ・A	小型
56	12	11.0	10.0	1.0	6.0	—	11.5	12.0	—	0.86	Ⅲ・D	小型
59	13	18.0	16.0	0.5	4.0	(3.0)	15.0	15.0	5.0	1.06	Ⅰ・A	中型
61	14	13.0	6.0	0.5	4.0	2.5	12.0	12.0	5.0	0.50	Ⅰ・A	小型
62	15	20.0	10.0	1.0	4.0	3.2	12.0	13.0	4.0	0.83	Ⅰ・A	小型
63	16	21.0	10.0	0.5	6.0	(4.0)	13.0	(14.0)	6.0	0.77	Ⅰ・A	小型
69	17	15.0	12.0	0.5	3.2	0.3	11.0	11.0	4.0	1.09	Ⅰ・A	小型
71	18	21.0	13.0	1.0	6.0	4.5	11.0	10.0	7.5	1.18	Ⅰ・A	小型
73	19	25.0	11.0	1.0	5.0	6.2	14.5	15.2	5.0	0.76	Ⅰ・A	中型
74	20	27.0	14.0	0.5	6.5	5.2	15.0	17.0	5.0	0.93	Ⅰ・C	中型
75	21	25.2	16.0	1.2	4.0	4.5	15.0	16.0	7.2	1.67	Ⅰ・A	中型
76	22	23.0	12.0	1.5	6.0	4.5	12.2	12.0	4.2	0.98	Ⅰ・A	小型
77	23	25.5	13.0	0	4.0	7.0	15.0	14.8	7.1	0.87	Ⅰ・A	中型
78	24	25.1	13.0	3.0	5.0	4.0	17.5	17.5	7.0	0.76	Ⅰ・A	大型
79	25	23.0	11.0	1.0	6.0	4.5	14.0	14.0	6.5	0.79	Ⅰ・A	中型
80	26	19.0	11.0	2.5	4.0	(0.8)	12.0	12.0	(4.0)	0.91	Ⅰ・A	小型
81	27	27.0	12.0	3.0	7.0	(5.0)	11.0	12.0	7.0	1.09	Ⅰ・A	小型
84	28	24.5	10.5	3.0	5.0	5.5	11.0	10.2	5.0	0.95	Ⅰ・A	小型
87	29	25.0	15.0	3.0	6.0	(2.0)	18.0	18.0	(5.0)	0.83	Ⅰ・A	大型
91	30	29.9	14.0	1.0	5.0	9.0	16.0	16.0	6.0	0.88	Ⅰ・A	中型
93	31	14.0	8.0	0.5	4.0	—	12.2	12.0	—	0.66	Ⅰ・A	小型
96	32	29.0	17.5	0.5	6.0	3.5	17.1	16.5	4.9	1.02	Ⅱ・A	大型
97	33	18.0	13.0	0	4.0	—	14.3	14.4	—	0.91	Ⅰ・C	中型
99	34	18.0	(12.0)	0	3.0	3.0	12.0	14.0	5.0	—	Ⅰ・A	小型
103	35	19.0	(12.0)	0.3	2.5	5.0	12.3	13.0	9.0		Ⅰ・A	小型
107	36	22.0	(12.0)	0	5.5	3.0	14.0	14.5	7.0		Ⅰ・B	中型
108	37	22.5	(10.0)	1.5	6.0	3.5	13.0	15.0	5.0		Ⅰ・A	小型
109	38	25.0	11.0	1.5	7.0	4.5	19.3	16.0	7.0	0.57	Ⅰ・B	大型
112	39	21.0	16.0	0	2.5	—	(12.0)	14.0	—	—	Ⅰ・C	
115	40	19.0	12.0	1.0	5.0	(1.0)	15.0	14.0	(3.0)	0.80	Ⅲ・B	中型
117	41	19.0	9.0	2.5	3.0	5.0	13.0	13.0	5.0	0.69	Ⅰ・B	小型
119	42	12.0	11.0	1.0	5.0	—	14.0	(10.0)	—	0.79	Ⅰ・A	中型
123	43	22.0	11.0	0.7	3.2	5.0	15.0	14.9	5.0	0.73	Ⅰ・A	中型
126	44	26.0	14.0	1.0	7.0	4.0	14.0	14.5	7.0	1.00	Ⅰ・A	中型
127	45	23.0	11.0	0.3	9.0	3.0	15.0	15.0	—	0.79	Ⅲ・D	中型
128	46	22.0	9.0	0.5	5.0	3.0	12.0	11.9	7.0	0.75	Ⅱ・A	小型
132	47	21.0	11.0	2.0	4.0	4.5	15.0	14.5	6.0	0.73	Ⅱ・A	中型
134	48	21.0	11.0	1.0	2.5	4.0	(11.5)	(10.0)	8.0	—	Ⅰ・A	—
139	49	19.5	11.5	1.5	5.5	4.2	13.0	13.0	6.0	0.88	Ⅰ・A	小型
140	50	14.5	10.0	0.5	2.0	1.5	14.0	13.0	7.0	0.71	Ⅰ・A	中型

表52　空風輪法量表(2)

区－番号	図面番号	法量 (cm)									型式	備考
		A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
Ⅳ－144	51	15.3	10.0	0.5	3.5	—	13.0	13.9	—	0.77	Ⅰ・A	小型
149	52	20.0	12.3	1.5	2.9	3.0	(15.0)	14.0	4.0	—		
154		15.2	9.0	3.0	2.3	(1.3)	12.0	14.0	6.2	0.75	Ⅰ・A	小型
156	53	13.0	—	1.0	4.0	(1.5)	—	11.0	(4.0)	—	Ⅰ・A	—
157	54	21.0	11.0	1.9	5.3	2.0	15.0	15.0	4.5	0.73	Ⅰ・A	中型
301		15.0	9.0	1.5	0.5	4.0	14.0	14.0	9.0	0.64	Ⅲ・D	中型
1005	55	21.5	11.5	0	6.1	4.0	11.2	12.2	5.1	1.02	—	小型
1006	56	22.0	12.5	0	3.0	4.8	14.2	14.0	5.0	0.86	Ⅲ・A	中型
1007	57	26.0	13.0	0	7.5	5.0	15.0	17.0	7.0	0.87	Ⅰ・B	中型
1008	58	18.0	10.2	0	3.5	4.0	12.1	13.8	5.0	0.84	Ⅰ・B	小型
1036	59	26.5	15.0	1.0	6.9	2.5	17.0	17.2	7.0	0.88	Ⅰ・A	大型
1040	60	26.0	14.0	0	7.0	4.0	16.9	17.0	9.0	0.82	Ⅰ・B	中型
1046	61	30.0	14.0	0	6.0	4.5	16.0	16.0	6.0	0.88	Ⅰ・A	中型
1053	62	16.0	9.0	3.5	3.0	(1.0)	11.2	14.0	12.0	—	Ⅰ・A	小型
1054	63	15.0	11.0	1.0	0.7	3.0	14.5	14.5	9.0	0.75	Ⅰ・C	中型
1055	64	16.0	8.0	1.5	4.0	3.0	11.0	12.0	5.0	0.72	Ⅲ・B	小型
1059	65	25.0	12.0	0	7.0	(3.0)	15.0	15.0	(9.0)	0.80	Ⅳ・A	中型
1061	66	28.0	14.0	0.5	8.5	6.0	18.0	19.5	7.5	0.78	Ⅰ・A	大型
1064	67	27.0	14.0	0.5	6.0	5.0	16.0	16.0	(9.0)	0.87	Ⅰ・B	中型
1067	68	18.0	(11.0)	0.5	6.0	—	16.0	16.5	—	—	—	中型
1068	69	23.0	10.0	1.0	6.0	4.0	15.0	15.0	6.5	0.67	Ⅰ・B	中型
1069	70	23.0	11.0	1.0	6.0	4.0	12.0	13.0	5.0	0.92	Ⅰ・A	小型
1070		14.0	10.0	0.5	2.0	(1.0)	13.0	13.0	(5.5)	0.13	Ⅰ・C	小型
1071	71	22.5	16.2	1.9	6.1	2.3	16.2	14.9	5.0	1.00	Ⅰ・A	中型
1073	94	23.1	12.0	1.2	8.0	(1.2)	18.0	18.5	(7.0)	0.67	Ⅰ・A	大型
1075	72	(20.3)	11.0	0.7	7.0	(1.0)	14.9	11.0	(4.0)	0.73	Ⅳ・B	中型
1076	73	19.0	11.0	1.0	5.1	(1.0)	15.0	15.0	6.0	0.73	Ⅰ・A	中型
1081		37.0	—	—	—	—	15.0	—	—	—	—	中型
1083	74	25.0	11.0	1.5	6.0	(5.0)	11.0	1.0	(7.0)	1.00	Ⅰ・A	小型
1085	75	40.0	17.5	1.5	11.0	8.0	20.0	20.0	(10.0)	0.88	Ⅱ・A	大型
1089	76	22.0	11.0	0.5	6.0	4.0	14.0	14.5	(4.0)	0.79	Ⅰ・A	中型
1101	77	23.0	(3.0)	1.0	11.0	8.0	(12.0)	24.0	9.5	—	—	—
1104	78	20.0	13.0	1.5	5.0	—	15.0	(12.0)	—	0.87	Ⅱ・A	中型
1105	79	26.0	14.0	1.5	9.0	1.5	12.0	15.0	4.0	0.88	Ⅱ・A	小型
1107	80	17.0	16.0	1.0	—	—	13.0	—	—	1.23	Ⅰ・A	小型
1109	81	21.0	10.0	1.5	7.0	2.0	(15.0)	(15.0)	(4.0)		—	—
1110	82	25.0	10.0	1.0	6.0	10.0	12.0	12.0	(11.0)	0.83	Ⅰ・A	小型
1119	83	29.0	15.0	1.5	7.0	6.0	17.0	17.0	5.5	0.88	Ⅲ・D	大型
A－6	84	21.0	16.0	1.0	2.5	(1.0)	15.0	(14.0)	(4.0)	1.07	Ⅰ・A	中型
B－2	85	26.0	13.0	0.5	7.5	3.5	15.0	15.0	4.5	0.73	Ⅰ・B	中型
C－3	86	(20.0)	15.0	—	—	(5.0)	14.8	—	(3.0)	1.01	—	中型
C－6	87	16.0	11.0	1.0	2.2	—	13.0	12.2	—	0.84	Ⅰ・A	小型
C－7	88	26.0	19.0	0.5	5.5	(2.0)	18.0	18.0	(7.0)	1.05	Ⅰ・A	大型
C－9	89	24.0	13.0	1.0	4.5	4.0	17.1	15.5	7.0	0.76	Ⅰ・B	大型
D－1	90	25.0	14.0	0	6.0	4.5	16.0	16.0	6.0	0.88	Ⅰ・A	中型
D－5	91	20.0	12.0	0.5	2.0	4.0	14.0	14.0	5.0	0.85	Ⅰ・A	中型
D－11	92	29.0	14.0	1.5	6.0	3.5	15.0	14.5	7.0	0.56	Ⅱ・B	中型
Ⅱ－4	93	26.0	12.0	5.0	—	20.0	20.0	—	—	0.60	Ⅰ・B	大型
XⅦ－6		29.0	15.0	0	11.0	(2.5)	15.5	16.0	10.0	0.97	Ⅰ・A	中型

表53　火輪法量表

区－番号	図面番号	法量 (cm)													枘穴	型式	備考
		B	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	法量比			
Ⅱ－2	102	17.5	11.1	2.0	2.5	3.0	2.5	16.5	8.0	19.5	39.0	17.0	4.0	0.44	丸	Ⅰ・b・B	中型
4		19.0	7.0	6.2	1.0	2.0	3.0	16.0	6.6	9.5	25.0	8.0	5.0	0.76	丸	Ⅰ・b・A	小型
5	103	21.0	11.1	9.0	1.0	9.0	0.5	15.5	8.0	18.5	36.5	17.0	5.1	0.58	丸	Ⅰ・b・A	中型
Ⅳ－38	104	24.0	19.5	4.0	15.0	6.0	1.5	17.0	8.5	18.5	37.8	16.0	5.0	0.68	丸	Ⅰ・b・A	中型
65		9.5	5.0	4.5	0.5	3.2	0.5	7.0	4.0	11.0	21.5	10.0	3.0	0.44	丸	1039(水)とのセット？Ⅰ・b・A	小型
82	105	18.0	12.5	5.3	1.0	7.0	1.5	14.0	9.3	15.0	32.1	15.1	4.0	0.56	丸	Ⅰ・b・A	小型
85		18.0	9.5	—	—	12.0	1.0	12.0	8.0	18.5	37.0	16.0	—	0.48	丸	Ⅰ・b・B	中型
86		16.0	9.0	6.0	1.0	3.5	2.0	12.0	9.0	20.0	40.7	18.0	6.0	0.39	丸	Ⅰ・a・A	大型
88		16.0	9.0	6.5	0.5	7.0	0.3	15.1	10.0	17.0	34.8	15.0	6.5	0.46	丸	Ⅰ・b・A	中型
89	106	16.0	10.2	6.8	1.4	6.8	1.7	14.6	10.0	17.0	34.6	15.2	6.8	0.46	丸	Ⅰ・a・A	中型
146		14.0	6.0	6.2	1.0	2.3	3.0	15.0	7.0	13.0	35.5	10.0	4.9	0.40	楕円	Ⅰ・a・B	中型
158	107	16.2	8.2	7.0	1.0	12.0	0	15.0	8.6	17.2	35.7	8.1	4.0	0.45	丸	Ⅰ・b・A	中型
1001	108	14.5	7.5	6.5	1.0	4.5	1.5	12.0	7.0	16.0	31.8	14.0	4.5	0.46	丸	Ⅰ・b・A	小型
1010	109	15.5	6.5	6.0	2.5	8.0	2.0	16.0	7.0	19.0	38.0	16.0	6.5	0.40	丸	Ⅰ・a・B	中型
1012	110	18.0	11.5	3.5	2.0	5.0	1.0	10.0	9.0	15.0	30.0	13.0	4.9	0.60	丸	Ⅰ・a・A	小型
1015	111	18.0	11.0	5.0	2.0	4.0	2.5	10.0	6.0	15.0	32.5	14.5	5.0	0.55	角	Ⅰ・a・A	小型
1019		20.5	12.0	8.0	1.0	9.5	3.0	15.0	8.0	18.0	31.0	17.0	5.0	0.66	丸	Ⅰ・a・A	小型
1020	112	18.0	12.0	5.0	2.5	4.0	1.0	11.7	7.5	16.0	35.5	16.0	4.5	0.50	角	Ⅰ・a・A	中型
1023	113	19.5	15.0	4.1	0.5	9.0	2.5	13.0	11.5	20.0	43.0	20.0	20.0	0.45	丸	Ⅰ・b・A	大型
1026	114	16.0	10.5	5.5	1.0	4.0	2.0	13.0	9.0	20.0	39.0	18.0	6.0	0.41	丸	Ⅰ・a・A	中型
1028	115	21.0	12.0	8.0	1.5	9.0	3.0	16.0	8.0	19.5	39.0	19.0	6.0	0.53	丸	Ⅰ・a・A	中型
1029	116	17.5	9.5	6.0	1.5	7.0	1.0	21.0	11.0	18.9	38.9	17.0	4.5	0.45	丸	Ⅰ・a・B	中型
1030		24.5	12.0	4.0	1.5	5.0	3.0	17.0	—	19.0	38.0	19.0	—	0.64	—	—	中型
1041	117	17.0	7.0	7.0	1.5	7.0	6.0	22.0	12.0	17.0	35.3	14.0	6.5	0.48	丸	Ⅰ・a・A	中型
1045	118	12.0	4.0	7.0	1.5	8.0	2.5	15.0	9.0	15.0	30.8	14.5	4.0	0.39	丸	Ⅰ・b・B	小型
1047	119	20.0	11.0	6.0	1.5	7.0	1.5	11.0	7.0	17.5	35.1	15.0	5.0	0.56	角	Ⅰ・a・A	中型
1048	128	27.0	10.0	9.5	2.5	9.0	1.5	16.0	10.5	22.5	44.5	21.0	6.0	0.60	丸	Ⅰ・a・A	大型
1052	120	18.5	15.0	—	—	—	2.0	13.0	—	19.0	(35.0)	16.0	—	—	—	—	—
1093	121	20.0	7.5	10.0	0	9.0	1.0	14.0	6.0	17.0	34.5	15.0	3.5	0.58	丸	Ⅰ・a・A	中型
1110	122	16.0	5.0	9.5	0.3	9.0	0	21.0	9.7	18.0	35.9	16.0	3.9	0.44	丸	Ⅰ・b・B	中型
1118		15.0	12.0	3.0	1.0	3.2	2.0	16.5	7.0	19.0	37.5	15.0	4.0	0.40	丸	Ⅰ・b・B	中型
1123	123	15.0	6.5	9.0	0.8	12.0	0	15.0	—	16.0	36.3	15.0	—	0.41	—	Ⅰ・b・B	中型
1127	124	16.0	8.0	6.5	0	9.0	0	11.2	—	15.0	32.5	14.0	7.0	0.49	—	Ⅰ・a・B	小型
1129	125	14.0	9.0	10.1	0	6.0	1.0	22.0	—	20.0	41.0	14.5	—	0.34	—	Ⅰ・a・B	大型
A－10		25.0	15.0	5.0	1.5	9.0	0.5	12.5	12.0	20.5	43.5	19.8	9.0	0.57	丸	Ⅰ・a・B	大型
A－12	129	22.0	15.0	7.0	0	10.0	0	19.8	11.0	22.0	43.5	20.0	17.5	0.51	丸	Ⅰ・a・A	大型
C－1		19.5	11.5	9.0	1.5	10.0	3.0	11.5	6.5	19.0	36.5	17.0	6.0	0.51	丸	Ⅰ・a・A	中型
C－10	126	21.0	(11.0)	6.0	1.5	6.0	3.0	(7.0)	9.5	19.0	38.2	11.5	(1.0)	0.55	丸	Ⅰ・a・A	中型
D－6	127	15.0	9.8	5.0	1.0	4.5	0	10.0	8.7	14.2	39.5	14.0	4.0	0.38	丸	Ⅰ・b・B	中型
D－8		11.0	13.5	6.2	1.5	9.0	1.5	12.0	8.0	6.0	32.0	13.0	21.0	0.34	丸	Ⅰ・b・B	小型
XV－1	132	25.0	18.0	—	—	—	—	22.0	15.0	23.3	46.8	22.8	8.0	0.53	角	Ⅰ・a・A	大永銘(線刻)大型
XⅦ－2	130	23.0	14.0	4.8	3.0	8.0	3.5	10.0	8.0	8.0	35.0	15.0	3.2	0.66	丸	Ⅰ・a・A	中型
5	131	18.0	5.0	9.0	1.0	11.0	2.5	12.0	9.0	18.1	36.5	15.0	9.0	0.49	角	Ⅰ・b・A	中型
15		22.0	(16.5)	(2.0)	4.1	—	—	24.0	14.0	22.0	41.0	—	8.0	0.54	—	Ⅰ・b・A	大型

表54　水輪法量表

区－番号	図面番号	法量 (cm) C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	型式	備考
Ⅳ－105	134	16.0	—	25.0	—	33.2	20.0	0.33		B・3	中型
12	133	21.0	9.0	20.0	10.0	34.0	21.0	0.61	丸	B・3	地輪とのセット中型
21	135	21.0	9.0	35.0	22.0	45.0	32.0	0.47	丸	B・1	大型
48	136	15.0	—	33.0		34.0	22.5	0.44		B・3	中型
58		28.0	—	22.0		32.0	23.0	0.87		C・3	中型
60	137	36.0	—	28.0		35.0	26.0	0.99		A・3	中型
104	139	22.2	—	27.0		35.0	25.5	0.64		A・3	中型
121	140	27.0	—	25.0		35.0	24.5	0.67		A・3	中型
124	141	23.0	7.0	31.0	13.0	43.5	31.0	0.52		B・3	大型
131	138	24.0	—	18.0		24.0	19.0	1.00		C・3	小型
146		18.9	(3.5)	(9.0)	9.0	35.5	31.0	0.53		B・3	中型
154	142	25.0	—	23.0		33.9	22.0	0.73		A・3	中型
159	143	21.5	—	15.0		27.5	18.0	0.78		A・3	小型
02	144	24.0	5.5	34.0	12.5	41.0	30.0	0.59	楕円	B・1	大型
302	145	12.0	—	15.0		18.0	7.0	0.67		A・3	小型
1002		16.0	—	32.0		35.5	30.0	0.45		B・3	中型
1009	146	23.0	4.5	20.0	9.0	30.5	18.0	0.75	丸	A・1	中型
1014	147	18.5	—	21.0		28.0	14.5	0.66		C・3	小型
1017	148	21.5	—	25.3		31.9	22.7	0.67		A・3	中型
1021	149	27.0	—	19.0		39.0	19.0	0.69		A・1	大型
1024	150	22.0	—	24.0		35.0	24.0	0.62		B・3	中型
1025	151	23.8	8.4	24.0	15.2	39.6	28.4	0.60	丸	B・1	大型
1027	152	23.0	—	23.0		35.0	21.0	0.65		A・3	中型
1034	153	21.0	—	24.5		34.5	22.0	0.60		B・3	中型
1035	154	13.0	—	28.0		33.0	29.0	0.39		B・3	中型
1039	172	15.0	6.5	(2.5)	7.0	19.0	8.0	0.79	丸	A・1	小型
1042	155	23.0	18.5	16.0	9.0	28.0	12.0	0.82	丸	A・1	小型
1050	156	22.0	—	28.0		35.0	26.0	0.63		A・3	中型
1051	157	20.0	—	20.0		35.0	24.0	0.57		B・3	中型
1056	158	17.5	—	25.5		31.0	26.5	0.56		B・3	中型
1063	159	18.0	—	22.0		31.0	22.0	0.58		B・3	中型
1082	160	31.0	—	18.0		30.0	17.5	1.03		C・3	中型
1091	161	20.0	12.5	24.5	16.0	33.0	24.0	0.60	丸	B・1	中型
1096	162	18.0	—	22.0		34.0	21.0	0.53		B・3	中型
1097		16.0	4.5	23.2	16.2	31.0	25.0	0.33	丸	B・1	中型
1106	163	18.0	—	22.0		34.0	21.0	0.53	丸	B・1	中型
1117	164	19.0	—	27.0		33.5	25.0	0.56		B・3	中型
1120	165	21.5	—	20.0		29.0	22.0	0.74		A・3	小型
1122	166	18.0	—	(15.0)		28.0	17.0	0.64		A・3	小型
1125	167	20.0	—	27.0		30.0	17.0	0.67		A・3	中型
1126	168	20.0	—	16.0		27.0	22.0	0.74		A・3	小型
1128	169	21.5	—	20.0		29.0	22.0	0.74		A・3	小型
1133	170	22.0	—	19.0		25.0	19.0	0.88		C・3	小型
A－1	171	25.0	5.2	34.0	13.8	43.0	28.0	0.58	丸	B・1	大型
A－9		26.8	—	20.5		38.0	18.5	0.70		A・3	中型
A－11		23.0	—	23.0		35.0	21.0	0.66		A・3	中型
B－21	173	31.0	—	22.0		37.0	22.0	0.83		A・3	中型
C－5		23.5	—	25.0		39.5	27.0	0.75		A・3	大型
D－2	174	23.0	2.8	18.0	6.8	35.0	22.0	0.58	丸	B・1	中型
D－4	175	25.0	—	23.0		33.9	22.0	0.73		A・1	中型

表55　地輪法量表

区一番号	図面番号	法量 (cm) D	x	y	法量比	型式	備考
Ⅳ － 1		12.5	50.5	50.0	0.25	B・3	大型
4	176	11.0	39.5	39.0	0.35	A・3	中型
6	177	7.5	38.0	37.0	0.21	B・3	中型
7	178	12.5	43.5	42.5	0.29	B・3	中型
8		12.5	50.5	50.0	0.25	B・3	大型
11	179	14.0	42.0	40.0	0.34	A・1	中型
12	133	9.5	40.0	40.0	0.24	B・3	中型
14	180	13.0	40.0	41.0	0.33	A・3	中型
15	181	14.5	42.5	39.2	0.34	A・3	中型
25	182	10.1	33.8	31.0	0.30	B・3	小型
27	183	14.5	38.0	38.5	0.38	A・3	中型
30	184	7.0	38.0	35.0	0.18	B・3	中型
153	185	12.0	34.0	33.5	0.35	A・3	小型
158	186	14.0	33.0	32.5	0.42	A・3	小型
159	187	14.5	38.0	38.0	0.38	A・3	中型
1000	188	9.0	32.0	30.5	0.30	A・3	小型
1002	189	15.8	35.2	32.5	0.45	A・3	中型
1003	190	9.8	36.5	37.0	0.27	B・3	中型
1004		13.2	29.5	27.0	0.45	A・3	小型
1011	191	12.5	35.0	32.5	0.36	A・3	中型
1013	192	10.2	33.1	34.5	0.31	A・3	小型
1016	193	9.0	35.2	35.5	0.25	B・3	中型
1018	194	11.0	40.0	37.0	0.44	A・3	中型
1022		9.5	35.0	35.0	0.27	B・2	中型
1031	195	13.5	38.0	38.0	0.36	A・3	中型
1032	196	11.1	45.0	37.0	0.25	B・3	中型
1033	197	12.8	42.0	40.4	0.30	A・3	中型
1034		12.0	35.0	35.5	0.34	A・3	中型
1037	198	11.0	40.0	40.8	0.28	B・3	中型
1038	199	12.4	50.0	50.4	0.25	B・3	大型
1043	200	13.0	35.0	35.0	0.37	A・3	中型
1044		10.0	28.2	29.0	0.36	A・3	小型
1052		15.0	45.0	44.5	0.33	A・3	中型
1060	201	15.4	45.4	46.8	0.39	A・3	中型
1072	202	6.5	38.0	36.0	0.17	B・3	中型
1074	203	14.0	42.0	41.0	0.33	A・3	中型
1077	204	15.0	38.0	40.0	0.39	A・3	中型
1079		15.0	42.5	40.0	0.35	A・3	中型
1080	205	13.0	37.5	38.0	0.35	A・3	中型
1088		14.0	43.5	41.0	0.32	A・3	中型
1095	206	11.0	38.5	39.0	0.29	B・3	中型
1098		8.5	35.0	37.0	0.24	B・3	中型
1099		10.0	32.0	30.0	0.31	A・3	小型
1108	207	11.9	39.2	39.5	0.30	A・3	中型
1111	208	20.0	48.5	50.0	0.41	A・3	大型
1112	209	15.0	40.0	38.0	0.38	A・3	中型
1114	210	14.0	45.5	42.5	0.31	A・3	中型
1115	211	10.0	42.0	41.5	0.24	B・3	中型
1116		12.0	38.5	38.0	0.31	A・3	中型
D－ 1	213	15.0	50.0	50.0	0.30	A・3	大型
D－ 3		10.5	45.1	41.0	0.23	B・3	中型
ⅩⅧ－ 1		20.1	47.0	46.5	0.43	A・2	梵字大型
ⅩⅧ－ 3	212	16.2	47.0	45.0	0.34	A・3	大型
ⅩⅧ－ 4	214	17.0	47.1	47.0	0.36	A・3	大型

表56　相輪法量表

区一番号	図面番号	法量 (cm) イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	E	相輪の数	請花	梵字	型式	備考
Ⅳ-A- 5	95	7.0	6.2		16.0				(11)	(9.8)		11.0	9.1				29.0	4	レリーフ		B	下部請花が無い
A-13	96				(7.0)	7.0	5.5	4.0				1.0	13.0	14.3	17.5	9.0	26.0	(2)	レリーフ		A	下部のみ
1083	97											13.9	12.0				16.0	5				相輪部のみ
1084	98	9.0	5.0		(9.0)				13.0	15.1		12.0	11.0				25.0	3	無文		C	下部欠損
1094	99				(5.0)	9.0	5.0	4.9				11.0	(9.0)	14.0	12.9	(7.0)	23.0		線刻・レリーフ		A	
1100	100					8.0	6.2	6.0						12.5	14.0	11.5	22.5		レリーフ			下部のみ
Ⅱ- 3	101		7.0	2.5	(6.0)				14.3	14.3	14.4	14.5	9.0				16.0	(1)	レリーフ		A	

第Ⅶ章　熊野原遺跡Ｃ地区の調査

第１節　遺跡の立地

熊野原遺跡Ｃ地区は，宮崎市大字熊野字熊野原に所在する。

加江田川と清武川に挟まれたところには,丘陵及び台地が西から東へ延びており,その丘陵及び台地間には,清武川の支流である田上川,熊野川が東流している。その南端に位置する台地は標高14m ～30m ほどである。加江田川に面する台地南縁は，急崖をなし，沖積面との比高差は10m ほどである。一方，熊野川に面する台地北縁は，南縁に比べて傾斜はそれほどでなく，沖積面との比高差も２～３m ほどである。熊野原遺跡は，このような地形をなす台地の中央北縁に立地する。

熊野原遺跡の立地する台地上には，この他，前原北遺跡（20号地),前原西遺跡（15・16号地),平畑遺跡（10号地),陣ノ内遺跡（18号地),車坂城などの遺跡が立地しており，陣ノ内・車坂城以外は，台地北縁に立地する。また，時期的には，熊野原遺跡,前原北遺跡,前原西遺跡は，弥生後期～古墳期及び中世の遺跡であり，これは，台地北縁が遺跡の立地としては好条件を備えているためと思われる。熊野原遺跡の北の丘陵上には，弥生後期～中世の遺跡である堂地東遺跡が所在している。

南台地の基本層序は，第１層・表土（耕土),第Ⅱ層・黒色土，第Ⅲ層・アカホヤ（ＡＴ）第Ⅳ層・黒褐色ローム層（小白班を含む),第Ⅴ層・褐色ローム層……となっている。

第２節　調査の経過と概要

熊野原遺跡は，昭和54年の分布調査の際，弥生土器などの散布地として確認された。その範囲は，熊野川を望む台地の北縁の約５万㎡におよぶため，台地の中央を南北に走る市道熊野一車坂線より東の畑地をＡ地区，その西側の畑地をＢ地区，Ｂ地区の南西畑地をＣ地区の３区に分けた。昭和56年度Ａ地区の調査を行い，併せて，Ｂ・Ｃ区の試掘を行っている。その際，Ｃ地区では方形状の遺構が検出され，竪穴住居跡の存在が予想されていた。

Ｃ地区の調査は，昭和58年４月５日に着手し，耕地は重機で除去する。Ｃ地区の北西部Ｆ～Ｈ－１～４区は耕作等によりアカホヤ上層まで攪乱を受け，黒色土は消滅し，耕土下はアカホヤ層となっており，黒色土は東・南へ行くに従い厚くなっていることが判明した。調査区のほぼ中央を南北に走る農道の西にあたるＦ～Ｈ－１～４区では竪穴住跡が検出され，また，Ｄ・Ｅ－８・９区及びＨ～Ｊ－９～11区では黒色土層で高坏などの土器が多く出土し，竪穴住居跡等の遺構が存在が予想された。農道の東は，黒色土の残りは良かったが，遺物等はほとんど出土しなかったので,アカホヤ上面まで遺物の出土に注意しながら重機を使用して剝ぐことにした。その結果，Ｈ－Ｉ～15・16区で縄文後期の貝殻文土器が出土し，Ｄ・Ｅ－12・13区では柱穴群が検出された。そこで調査区を農道を境に東区と西区に分け,東区から調査を行う。

東区の調査は，７月29日まで実施した。Ｄ・Ｅ－12・13区の柱穴群においては掘立柱建物６棟，Ｇ・Ｈ－12・13区で２棟が確認され，また，掘立柱建物群の東・南においては，溝状遺構が検出されている。Ｈ・Ｉ－15・16区では貝殻文土器が出土していたが，Ｇ－16区で溝状遺構が直角に折れる付近で不整形の土壙が検出されたのみであった。その他，Ｄ－10区，Ｅ－11区では古墳時代の竪穴住居跡が検出されたが，この遺構の調査は，西区の調査時に行うことにした。

西区の調査は，昭和59年１月23日から３月19日まで行う。西区のＦ～Ｈ－１～４区では，表土（耕土）下はアカホヤ層であり，東・南へ行くに従って黒色土は厚くなっている。Ｄ～Ｆ－８・９区，Ｈ～Ｊ－９・11区では黒色土層で

多くの土器の出土をみたが，遺構のプランの確認は困難であった。そこで遺構の検出はアカホヤ面で行うことにした。ただ，Ｅ－８・９区においては，土器が径５ｍほどの範囲内に集中する傾向がみられ，竪穴住居跡の存在が予想されたので，Ｅ－８・９区では，遺物の集中する中心より床面ないし遺物包含層の拡がりを追求したところ，竪穴住居跡ＳＡ19が検出されている。Ｈ～Ｊ－９・11区では，面的に高坏，甕，壺など多くの遺物が出土したが，Ｅ－８・９区のようにまとまりは認められず，遺構は，遺物の出土範囲の西端付近で竪穴住居跡ＳＡ12・13・14が検出されている。Ｃ地区の中央を南北に走り，畑との比高差が１ｍ前後あった農道下からは，溝状遺構が検出された。西区において検出された遺構は，古墳時代の竪穴住居跡21基，周溝状遺構１基，土壙14基，中世の掘立柱建物５棟，溝状遺構である。

Ｃ地区の調査により，古墳時代の遺構として竪穴住居跡23基，周溝状遺構１基，土壙14基，中世の遺構としては，掘立柱建物跡13棟，溝状遺構16条などが検出されている。

第３節　調査の記録

１．縄文時代

縄文時代の遺構は，Ｇ－16区で中世の溝によって一部切られた不整形の土壙１基が検出されている。土壙は，Ｌ字状をなし，東西1.03m，南北1.54m，幅0.4ｍ，深さ30cmほどを測る。土壙内埋土の上層からは縄文後期の貝殻文土器が出土している。この時期の遺物は，Ｈ・Ｉ－15・16区の黒色土層で貝殻文土器がまとまりをもって出土しているが，遺構は確認されていない。口縁は，平縁が大半であるが，669，670のように波状をなすものもある。文様は地文としての貝殻条痕文があり，口縁部には主として貝殻腹縁刺突文が施文されおり，沈線文を併用するもの（669・679）もある。底部は平底が出土している。

早期の遺物は，古墳時代の竪穴住居跡ＳＡ5の埋土内出土である。665は貝殻条痕文を地文として，貝殻腹縁刺突線文がある。666は角筒土器である。667は縦位の山形押型文をもつ口縁部である。665～667は，アカホヤ層下の黒褐色ローム層から出土するものであるが，いわゆる包含層等は確認はされていない。

２．古墳時代

検出された遺構は，竪穴住居跡23基，周溝状遺構１基，土壙14基で調査区の11区以西に分布している。竪穴住居跡の平面形は方形あるいは長方形を呈し，主柱穴は２～６本である。竪穴住居跡は，規模から４グループに分けられる。ＳＡ７などＣ地区で大型のグループに属する１辺７ｍ前後のものは，主柱穴は４本のものが大半で，竪穴住居群の中では中央に分布する傾向がみられる。内部施設としては，壁溝をもつものが６基，方形あるいは長方形プランの皿状土壙をもつものが７基ある。炉跡は検出されていないが，ＳＡ５・７・19の皿状土壙内で焼土が検出され，ＳＡ10・23では焼土のみが検出されている。

竪穴住居跡

ＳＡ１（第２図）

Ｈ－３区で検出される。平面形は長方形[(1)]で，長軸4.75m，短軸3.53m，床面積14.61㎡[(2)]である。壁高は約16cmでアカホヤ最下層面を床面としている。主柱穴は，Ｐ１（58cm×48cm×73cm），Ｐ２（52cm×39cm×72cm）の２本で，心々距離はＰ１～Ｐ２が3.01mである。竪穴の四周には，壁溝が巡り，幅５cm，深さ３cm余りが計測される。壁溝内には径５cm前後の小ピットが数10cm間隔で検出された。炉及び焼土等は検出されていない。

遺物は，頸部に刻目突帯をもつ壺等が出土しているが，少量で，また，小片のみである。

ＳＡ２（第２図）

Ｉ－４区で検出される。竪穴の西壁は，後世の長方形の土壙（イモツボか）により消滅している。平面形は方形

で，南壁中ほどに張り出し部をもつ。長軸　6.5m ＋α，短軸6.86m，床面積34.7㎡＋α である。張り出し部は，幅2.5m，長さ1.4m で，肩部は乱れている。壁高は18cmで，床面は黒褐色土層中にあり，貼床となっている。主柱穴は，P1(51cm×37cm×49cm) P2 (47cm×42cm×57cm) で心々距離はP1～P2が2.56m である。現存する3壁には壁溝が巡り，幅10cm，深さ5cm前後が計測される。壁溝内には小ピットが数10cm間隔で検出されている。

遺物は，それほど多くはないが，張り出し部北付近で若干まとまりが見られた。遺物には甕，高坏，碗，小型丸底壺，石庖丁などが出土している。内厚する口縁（第19図26)，小型丸底壺（同図24)，石庖丁（同図32）は床面から，内面へラケズリの甕（第19図25）の胴部片は，床面から10cmほど上で出土している。

ＳＡ3（第2図）

H－5区で検出される。平面形は正方形で長軸4.38m，短軸4.01m，床面積16.43m である。壁高8cm前後である。ピットは，P1 (23cm×22cm×26cm)，P2 (24cm×22cm×？)，P3 (39cm×15cm×？) の3個が南壁に沿って検出されたが，北壁においては確認できなかった。

遺物は，土器小片が出土しているが，その量は少なく，まとまりも認められなかった。

ＳＡ4（第3図）

G－5区で検出される。平面形は長方形で，長軸6.0m，短軸4.88m，床面積26.64㎡である。壁高47cmほどである。主柱穴は，P1 (28cm×38cm×63cm)，P2 (33cm×33cm×59cm) の2本で，心々距離はP1～P2が2.77cmである。東西短辺の床面は若干高くなっているが，これが削り出しによるベット状遺構か否かは不明である。

遺物は，甕，壺，手捏ね土器などが出土しているが，竪穴の規模・深さのわりには少片のみで出土量も少ない。南西隅の高まり部，北壁中ほどの床面で鉄片が出土している。

ＳＡ5（第3図，Fig 30)

G－6区で検出される。平面形は方形で長軸6.94m，短軸6.91m，床面積42.57㎡である。壁高56cmほどである。主柱穴は，P1 (26cm×25cm×69cm)，P2 (28cm×27cm×73cm)，P3 (33cm×28cm×78cm)，P4 (34cm×24cm×71cm) の4本で，心々距離は，P1～P2が2.35m，P2～P3が2.70m，P3～P4が2.35m，P4～P1が2.77m である。主柱穴間の南よりに長辺2.3m，短辺1.5m，長さ2.55m，深さ10cmほどの梯形状の土壙があり，土壙内には焼土が堆積していた。住居跡の埋土のⅡ・Ⅱ′層には，焼土が含まれ，特に竪穴南半に厚く堆積し，住居跡中央部へ流れ込んだ状況を呈していた。

遺物は，ほぼ完形の甕が床面上で出土した他，壺，高坏，鉢，小型丸底壺などの土器，鉄鏃，刀子，砥石，軽石製品，管玉など多数出土している。特に，焼土が厚く堆積していた南東部に遺物は集中していた。梯形状土壙内及びその周辺には土器は少片ながらまとまりがみられた。なお，埋土からは縄文土器も出土している。

ＳＡ6（第4図）

F－7区で検出される。平面形は隅丸長方形で長軸2.65m，短軸2.13m，床面積6.86㎡である。壁高約10cmである。主柱穴とは確認されていないがピットは，P1 (18cm×15cm×9cm)，P2 (17cm×14cm×11cm) P3 (23cm×14cm×32cm)，P4 (15cm×13cm×28cm) の4個が検出されている。

ＳＡ7（第4図）

F－8区で検出される。平面形は，方形で，長軸7.20m，短軸6.80m，床面積44.99㎡である。壁高は約33cmである。主柱穴はP1 (36cm×29cm×58cm)，P2 (32cm×34cm×56cm)，P3 (33cm×28cm×66cm)，P4 (32cm×28cm×71cm) の4本で，心々距離はP1～P2が2.70m，P2～P3が2.63m，P3～P4が2.91m，P4～P1が2.80m である。主柱穴間には，長軸2.40m，短軸1.9m，深さ13cmほどの隅丸長方形を呈する皿状土壙があり，土壙の北縁部には焼土がみられた。

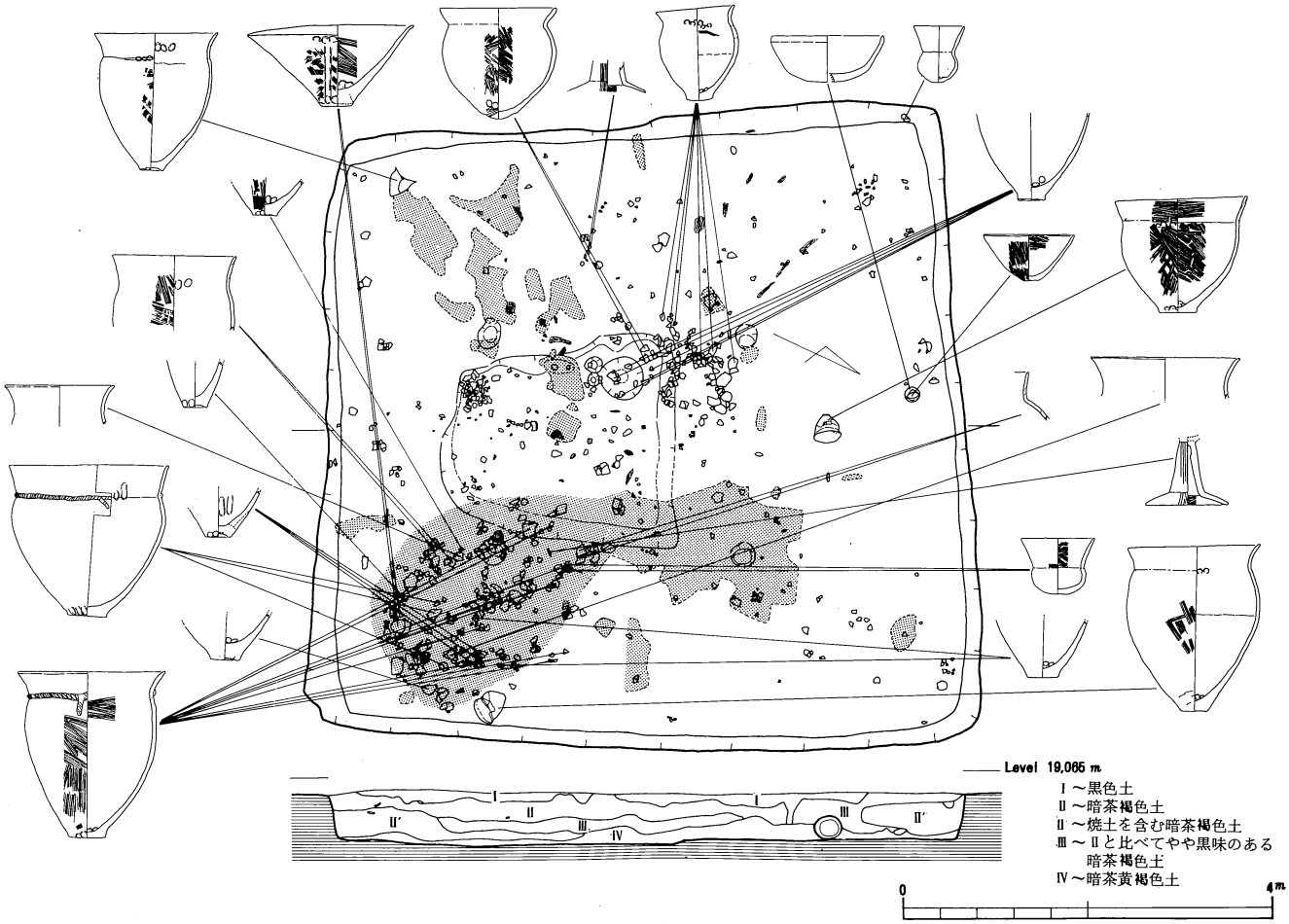


Fig 30. ＳＡ５遺物出土状況

遺物は，住居内全域で出土するが，南半に集中する傾向が認められた。また，皿状土壙内でも小片ながら多くの土器が出土している。出土遺物は，甕，壺，鉢，高坏，器台，小型丸底壺などの土器の他，砥石，軽石製品，鉄鏃などが出土している。炭化材は若干出土している。第24図88の甕は，ＳＡ10出土のものと接合し，東壁際で床面より20cmほどで出土した脚付小型壺の脚部は，ＳＡ19出土の第46図 536 の体部と接合している。

ＳＡ８（第４図，Fig 31）

Ｅ－11区で検出され，Ｃ地区の住居跡群の東端に位置する。平面形は方形で西壁には長さ 1.8m，幅 0.2ｍほどの張り出し部があり，長軸5.84m，短軸5.25m，床面積 29.42 ㎡である。壁高約12cmである。主柱穴はＰ１（31cm×28cm×59cm），Ｐ２（27cm×27cm×52cm）の２本で，心々距離はＰ１～Ｐ２が2.07m である。主柱穴の南には，長軸2.36m，短軸1.54m，深さ７cmほどの長方形プランをなす皿状土壙がある。

遺物は，主柱穴間周辺の床面上で完形に近い土器などが出土し，その付近では同一方向に向う炭化材も出土している。

ＳＡ９（第４図）

Ｈ－７区で検出される。平面形は梯形で，長軸2.92m，短軸2.74m，床面積 6.6 ㎡である。壁高約５cmで，床面は

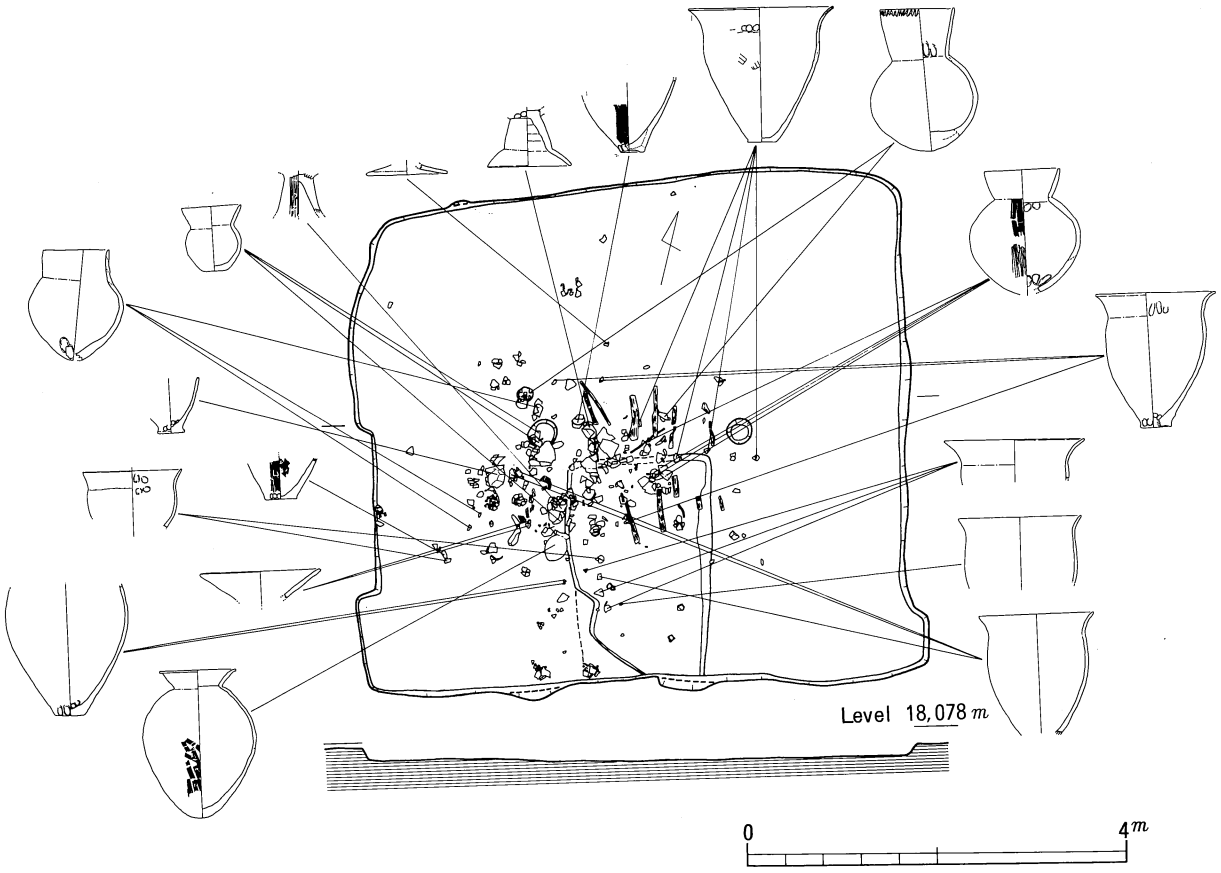


Fig 31. ＳＡ８遺物出土状況

アカホヤ層にある。柱穴，ピット等は検出されていない。

遺物は，甕，高坏などが出土しているが，その量は少ない。

ＳＡ10（第５図，Fig 32）

Ｊ・Ｋ－６・７区で検出される。平面形は方形で，長軸7.97m，短軸7.74m，床面積は56.55㎡ありＳＡ10は，Ｃ地区竪穴住居跡群の中で最大規模を有する。壁高は約20cmである。主柱穴は，Ｐ１（31cm×31cm×37cm），Ｐ２（31cm×33cm×37cm），Ｐ３（25cm×25cm×51cm），Ｐ４（39cm×40cm×51cm）の４本で，心々距離は，Ｐ１～Ｐ２が3.44m，Ｐ２～Ｐ３が3.44m，Ｐ３～Ｐ４が3.09m，Ｐ４～Ｐ１が3.39mである。柱穴Ｐ１の南西及び柱穴Ｐ１～Ｐ２間の２ケ所で焼土が確認されている。

遺物は甕，壺，高坏，鉢などの土器の他，砥石，管玉，鉄鏃等が出土し，特に高坏の出土が多い。また，住居跡中央には，残りの良い炭化材が出土している。床面から数cm浮いた状態ではあるが，ＳＡ10に伴うものと考えられる。中央部で出土した炭化材は，全長1.8ｍ径７cm前後の２本がほぼ直線上に並んで出土している。その南・北端は細くなっている。北の炭化材には，切り込みや長方形の穿孔もみられる。第24図88の甕は，北西約35mの位置にあるＳＡ７の甕と接合している。

ＳＡ11（第５図）

Ｊ－８区で検出される。平面形は方形で，長軸4.22m，短軸4.20m，床面積14.96㎡である。壁高は約43cmである。主柱穴は，Ｐ１（25cm×23cm×55cm），Ｐ２（18cm×20cm×29cm）の２本で，心々距離Ｐ1～Ｐ2は1.88mである。主柱

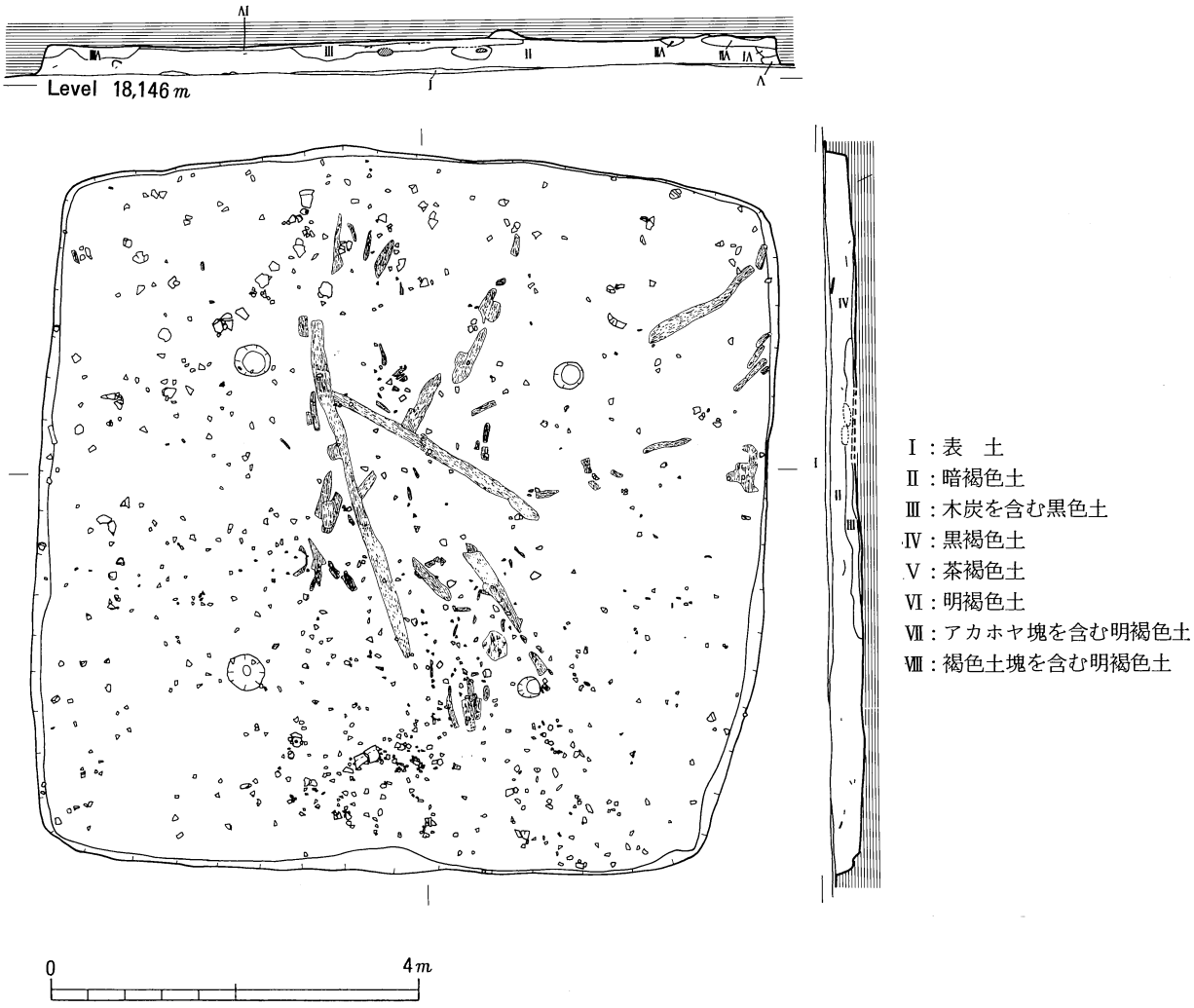


Fig32. ＳＡ10炭火材出土状況

穴の南には長軸85cm，短軸78cm，深さ８cm前後の長方形プランの土壙がある。

遺物は，住居跡西壁近くで完形の甕が出土した他，壺，高坏，鉢，軽石製品などが出土しているが，その量は少ない。

ＳＡ12（第６図）

Ⅰ・Ｊ－８・９区で検出される。平面形は長方形で，長軸6.65m，短軸5.63m，床面積33.14㎡である。壁高は約40cmである。主柱穴は，Ｐ１（33cm×30cm×54cm），Ｐ２（26cm×25cm×54cm）の２本で，心々距離Ｐ１～Ｐ２は2.96mである。東壁中央付近には径23cm，深さ10cmのＰ３，径15cm，深さ数cmのＰ４がある。主柱穴の南には，南壁から北へ張り出す長軸2.55m，短軸2.36m，深さ10cmほどの方形プランをなす皿状土壙がある。南壁の一部を除く四周には，幅10cm，深さ３cmほどの壁溝が巡り，壁溝には数cm間隔で径10cm，深さ10cm前後の小ピットがみられた。

遺物は，住居跡南半，特に南西部において出土している。出土遺物は，甕，壺，高坏，鉢などの土器，砥石が出土している。

ＳＡ13（第６図，Fig33）

Ｊ－９区で検出される。平面形は方形で北壁の一部は，中世の溝に切られている。長軸7.14m，短軸6.58m，床面積39.66㎡である。壁高は約40cmである。主柱穴はＰ１（26cm×28cm×59cm），Ｐ２（37cm×32cm×57cm），Ｐ３（37cm×32cm×76cm），Ｐ４（33cm×30cm×59cm）の４本で，心々距離はＰ１～Ｐ２が3.03m，Ｐ２～Ｐ３が2.65m，Ｐ３～Ｐ４が2.68m，Ｐ４～Ｐ１が3.76mである。主柱穴間には，南壁から北へ張り出す長軸2.80m，短軸1.70m，深さ20cmほどの長方形プランをなす皿状土壙がある。四周には幅15cm，深さ８cmほどの壁溝が巡り，壁溝内には径８cm，深さ15cmほどの小ピットが並んでいる。

床面では，南及び北北西方向に並ぶ長さ30cm前後の炭化材が出土している。

遺物はそれほど多くはないが，甕，壺，高坏，鉢等が出土し，北半に集中する傾向がみられた。脚裾が欠損する第37図363の高坏は，皿状土壙の南端の壁際で直立ぎみで出土している。第36図335の鉢は，ＳＡ14の南東部出土のものと接合している。

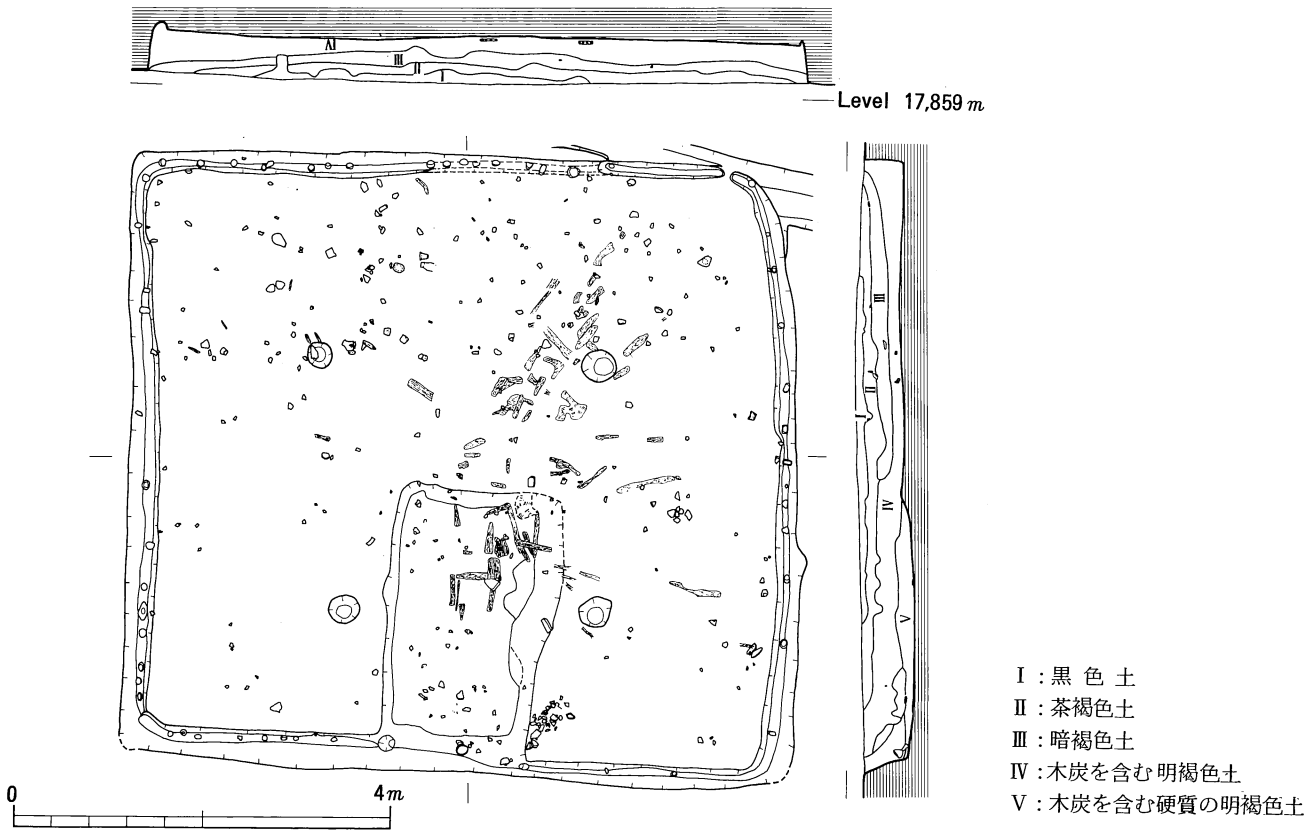


Fig33，ＳＡ13炭火材出土状況

ＳＡ14（第７図，Fig34）

Ｋ－10・11区で検出される。平面形は長方形で，東壁の南には幅1.5m，長さ1.75m の張り出し部がある。南壁は，中世の溝により切られている。長軸8.15m，短軸約6.47m，床面積48.55㎡である。壁高は約42cmである。主柱穴は，Ｐ１（34cm×27cm×72cm），Ｐ２（34cm×32cm×26cm），Ｐ３（29cm×26cm×67cm）の３本で心々距離は，Ｐ１～Ｐ２が3.78m，Ｐ２～Ｐ３が1.31m，Ｐ３～Ｐ１が3.47m である。他にピットは，Ｐ４（25cm×19cm×18cm），Ｐ５（26cm×30cm×14cm）がある。主柱穴南には長軸0.76m，短軸0.59m，深さ12cmほどの長方形の土壙がある。その周辺に床面レベルよりやや低くなっているがプランは把握できなかった。南・北・西壁の一部には幅12cm前後の溝がみられたが，南・北・西壁には壁溝が巡っていた可能性がある。

遺物は，甕，壺，高坏，器台などの土器の他，砥石，鉄製品，小玉等など多く出土している。遺物は，特に西半において出土している。西半北部では，完形の鉢の他，甕・高坏などの大片が，西壁付近では床面より20cmほどのレベルから住居内へ向ってレベルを下げながらまとまりをもって出土している。南西部床面においては，甕，高坏，鉢，小型丸底壺などが出土している。

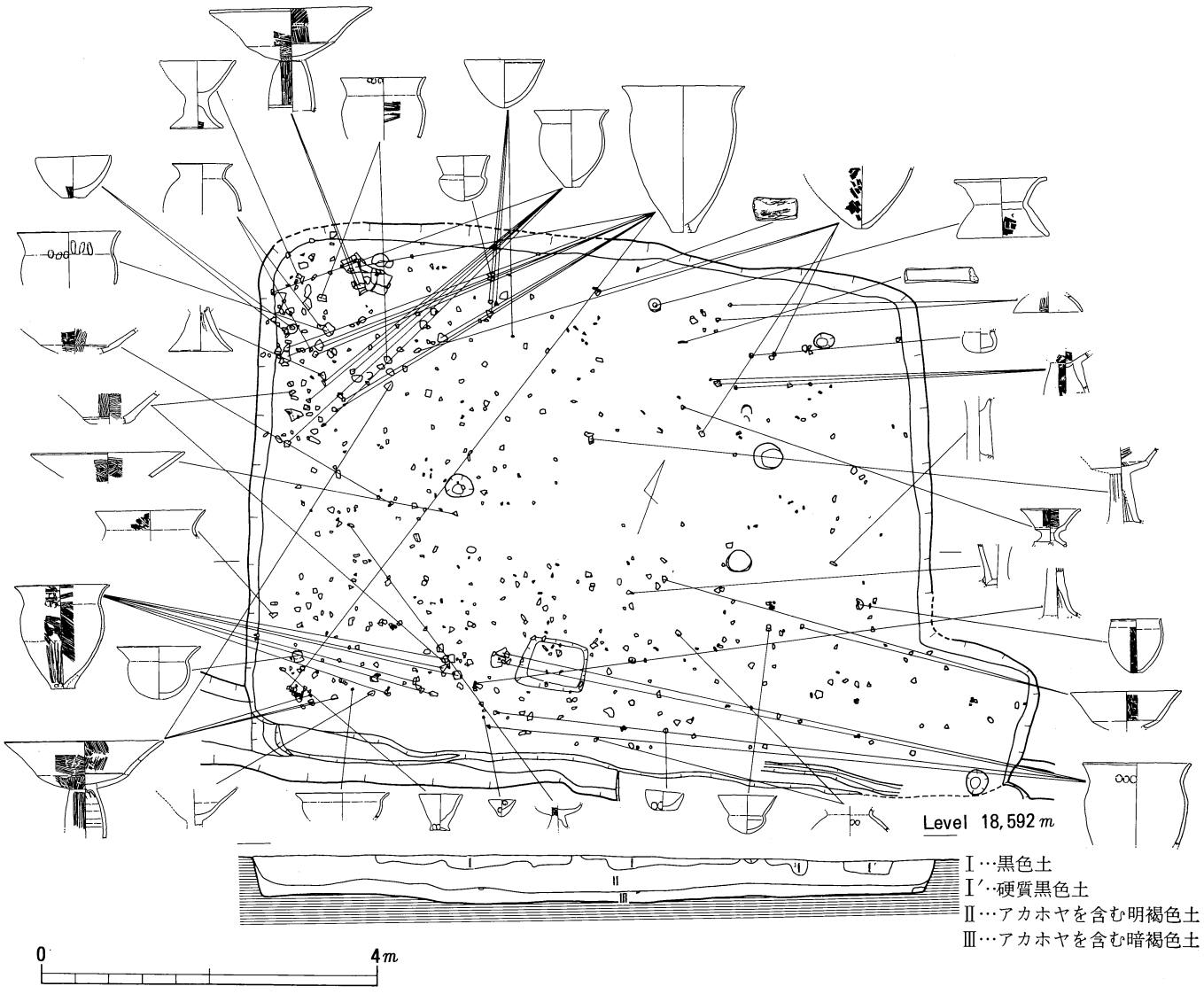


Fig34，ＳＡ14遺物出土状況

ＳＡ15（第5図，Fig 35）

Ｇ－９・10区で検出される。平面形は方形で長軸4.10m，短軸4.07m，床面積13.22㎡である。壁高約30cmである。主柱穴は，Ｐ１（30cm×29cm×63cm），Ｐ２（41cm×32cm×52cm）の２本で，心々距離Ｐ１～Ｐ２は3.39mである。Ｐ３は長径29cm，短径22cm，深さ16cmである。その他のピットは，中世の掘立柱建物の柱穴である。四周には，幅10cm，深さ５cm前後の壁溝が巡り，壁溝内には径８cm，深さ10cm前後の小ピットが並んでいる。

遺物は，住居内西半の床面で甕，壺，高坏などがまとまりをもって出土している。第41図432はほぼ完形で出土した甕で床面より10cmほど浮いた状態であった。

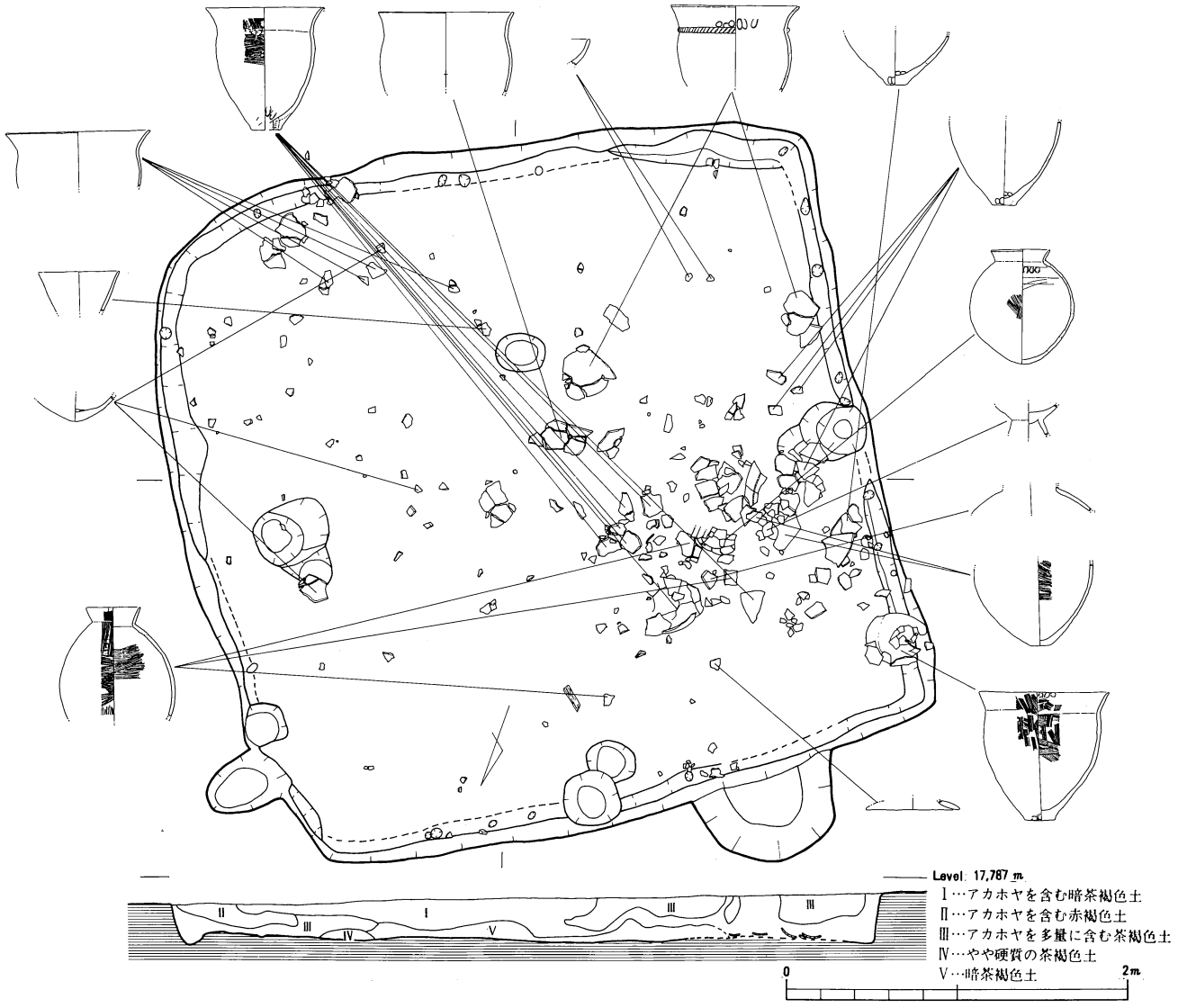


Fig35，ＳＡ15遺物出土状況

ＳＡ16（第７図）

Ｆ・Ｇ－10区で検出される。東壁の一部は土取りにより欠損している。平面形は方形で長軸3.66m，短軸3.23m，床面積10.25㎡である。壁高約30cmである。ピットは，Ｐ１（23cm×23cm×10cm），Ｐ２（43cm×34cm×20cm）の２個検出されている。

遺物は，甕，高坏などが少量出土している。高坏がほぼ床面において出土した。他は床面より20～30cm上である。炭化材が床面上で２片出土している。

ＳＡ19（第８図）

Ｅ－８・９区で検出される。黒色土層において，遺物が径５ｍほどの範囲内においてまとまりをもって拡がっていたので，中央部において床面ないし遺物を多く包含する層を確認しした後，その拡がりを追うことによってプランを確認する。ＳＡ19の平面形は梯形で長軸6.8ｍ，短軸 6.6ｍ，床面積40.82㎡である。壁高は約20cmで，床面は黒褐色土層にある。主柱穴は，Ｐ１（29cm×34cm×34cm），Ｐ２（52cm×40cm×67cm），Ｐ３（31cm×41cm×57cm），Ｐ４（34cm×37cm×55cm），Ｐ５（35cm×38cm×60cm），Ｐ６（20cm×29cm×51cm）の６本で，心々距離は，Ｐ１～Ｐ２が3.01m，Ｐ２～Ｐ３が1.27m，Ｐ３～Ｐ４が1.75m，Ｐ４～Ｐ５が2.13m，Ｐ５～Ｐ６が1.69m，Ｐ６～Ｐ１が1.03mである。なお，Ｐ２～Ｐ４は3.31m，Ｐ５～Ｐ１は2.72m，Ｐ３～Ｐ６は2.52mである。主柱穴間には，南壁から北へ張り出す長軸2.95m，短軸1.93mの長方形プランをなす皿状土壙の北縁には，細長く拡がる焼土がみられた。

遺物は，皿状土壙内及びその周辺，住居跡北東部で甕，壺，高坏，鉢，小型丸底壺，砥石，鉄鏃など多くが出土している。特に甕の出土量が多い。Ｐ４の南西で体部がほぼ完形で出土した脚付小型丸底壺（第46図536）の脚部はＳＡ７から出土している。

ＳＡ20（第７図）

Ｄ－８区で検出される。住居跡の北部は道路の下となっていたため，調査したのは南半の1.45m，床面積4.97㎡である。平面形は方形ないし長方形と推定され，規模は3.75m×（1.45m＋α）である。Ｐ１は長軸48cm，短軸36cm，深さ11cmを測る。

遺物は，頸部に刻目突帯をもつ甕などの小片が少量出土している。

ＳＡ21（第７図）

Ｉ－５区で検出される。平面形は不整方形で,長軸3.05ｍ,短軸2.95m，床面積9㎡ほどである。壁高は北西部が10cm,南西部２cmあまりで，床面はアカホヤ最下層である。主柱穴は，Ｐ１（27cm×33cm×44cm），Ｐ２（23cm×19cm×39cm）の２本で，Ｐ２はプラン外にある。心々距離Ｐ１～Ｐ２は3.12mである。西壁及び北壁には幅10cm，深さ４cmほどの壁溝が巡る。東壁及び南壁はほとんど残存せず，小ピットの列が３列ほど検出された。

遺物は，床面上で小片が出土している。ＳＡ21で出土した下田所ないし亀川上層式相当と推定される第48図591に類似する土器片が出土している。

ＳＡ22（第８図）

Ｇ－２区で検出され，Ｃ地区の竪穴住居跡群の西端に位置する。平面形は長方形で，長軸2.23m，短軸で1.96m，床面軸1.96m,床面積3.26㎡である。壁高８cmあまりで床面はアカホヤ最下層にある。主柱穴はＰ１（29cm×23cm×39cm），Ｐ２（26cm×24cm×34cm）の２本で２柱穴はプラン外に位置する。心々距離Ｐ１～Ｐ２は2.46mである。

遺物は，土器小片が出土しているが，第48図591は，瀬戸内地方の下田所ないし亀川上層式に類似する甕の口縁部が出土している。

ＳＡ23（第８図）

Ｊ・Ｋ－５区で検出される。平面形は長方形で長軸4.32m，短軸3.65m，床面積13.35㎡である。壁高約14cmである。Ｐ１は長径36cm，短径41cm，深さ10cmである。住居跡東部に焼土がみられる。

遺物は，土器が少量出土したのみである。

周溝状遺構

ＳＬ１（第９図）

Ｇ・Ｈ－５・６区で検出され，ＳＡ４とＳＡ５間に位置する。遺構は，アカホヤ面で確認され，周構内の埋土はアカホヤを多く含み茶褐色ないし黄褐色を呈していた。周溝により囲まれた部分において土壙等が認められなかった。

遺構の平面形は隅丸長方形をなし，長径は6.26m，短径は5.41mである。周構の幅は0.85～1.40mで，断面は逆台形状をなし，底幅0.7m～1.05m，深さ0.4～0.55mである。周溝の底レベルは，北区部が10cmほど低く，北西隅には深さ15～25cmの窪みが認められた。東区中ほどの底面には焼土があり，北東隅の埋土中層にも焼土が含まれていた。

遺物は，第Ⅱ・Ⅲ′層を中心に出土し，最下層の第Ⅹ層での出土は少なく，小片である。遺物の中に，現位置を保ち，配置されたと見なせるものはなく，流れ込んだ様相を呈している。第1層で出土した櫛描波状文をもつ長頸壺の口縁部は，30mほど離れたＳＣ４出土の体部と接合している。

表57　竪穴住居跡一覧表

住居番号	平面形	主柱穴	規模 長軸×短軸(m)	規模 床面積(㎡)	住居内施設	備考
ＳＡ１	長方形	2	4.72×3.53	14.61	全周に壁溝，貼床	
ＳＡ２	方形	2	6.5+α×6.86	34.7+α	全周(3)に壁溝，貼床	
ＳＡ３	〃	—	4.01×4.38	16.43		
ＳＡ４	長方形	2	6.00×4.88	26.64	ベッド状遺構？	
ＳＡ５	方形	4	6.94×6.91	42.57	皿状土壙	埋土及び床面に焼土あり
ＳＡ６	長方形	—	2.65×2.13	6.86		
ＳＡ７	方形	4	7.20×6.80	44.99	皿状土壙	
ＳＡ８	方形	2	5.84×5.25	29.42	皿状土壙	
ＳＡ９	梯形	—	2.92×1.81/2.87	6.6		
ＳＡ10	方形	4	7.97×7.74	56.55	貼床	焼土・炭化材あり
ＳＡ11	〃	2	4.22×4.20	14.96		
ＳＡ12	長方形	2	6.65×5.63	33.14	皿状土壙，全周に壁溝，貼床	
ＳＡ13	方形	4	7.14×6.58	39.66	皿状土壙，全周に壁溝，貼床	炭火材あり
ＳＡ14	長方形	3	8.15×(6.47)	48.55	土壙，貼床	
ＳＡ15	方形	2	4.10×4.07	13.22	全周に壁溝	
ＳＡ16	長方形	(1？)	3.66×3.23	10.25		
ＳＡ17	梯形	？	(5.8×4.2)	(25.3)	皿状土壙	炭化材あり
ＳＡ18	方形	2	(4×3.6)	14.7		
ＳＡ19	梯形	6	6.8×6.6	40.82	皿状土壙	炭化材あり
ＳＡ20	方形？	—	3.75×1.45m+α	5.63+α		
ＳＡ21	不整形	2	3.05×2.95	9	全周に壁溝	柱穴1個は竪穴外にある
ＳＡ22	長方形	2	2.23×1.96	3.26		柱穴は，竪穴外にある 炭火材あり
ＳＡ23	長方形	—	4.32×3.65	13.35		

土壙（第10図）

Ｃ地区において土壙は14基検出されている。平面形は方形を基本とし，規模は周辺0.8～1.2m，深さ20cm前後のものが多い。分布は，ＳＡ７の南西あるいは南のＦ・Ｇ－７・８区に６基集中するほかは，竪穴住居の南ないし西に

近接して１基ないし２基分布している。土壙と竪穴住居跡との距離は１ｍ前後である。ＳＡ７とその周辺の土壙との距離は，最小でＳＥ14との距離 0.9m，最大でＳＥ11との距離9.8m である。遺物を出土した土壙は少ないが，形態及び分布状況より14基は古墳時代のものと推定される。

ＳＣ２

Ｇ－７区，ＳＡ７の南西3.4m で検出される。平面形は方形で長軸1.39m，短軸1.38m，深さ30cmである。遺物は出土していない。

ＳＣ３

Ｇ－２区，ＳＡ22の南 0.7m で検出される。平面形は不整楕円形で長軸1.06m，短軸0.89m，深さ10cmほどである。遺物は出土していない。

ＳＣ４

Ｋ－４区，ＳＡ23の南南西２ｍで検出される。平面形は長方形で長軸2.44m，短軸2.22m，深さ26cmほどである。床面に焼土がみられた。遺物は，実形の甕・長頸壺・砥石などが出土している。遺物の出土状態は床面より浮いており完形の甕が７cm，長頸壺が27cm，砥石が12cmほどである。長頸壺は体部のみが出土し，口縁部は周溝状遺構の出土である。

ＳＣ５

Ｊ－９区で検出される。ＳＡ12との距離2.65m，ＳＡ13との距離 0.8ｍである。平面形は方形で長軸1.38m，短軸1.27m，深さ18cmである。遺物は，土器小片が出土している。

ＳＣ12

Ｊ－９区で検出される。ＳＡ12との距離 0.8ｍ，ＳＡ13との距離0.9ｍである。平面形は梯形で長軸13.5m，短軸1.12m，深さ23cmである。遺物は出土していない。

ＳＣ14

Ｆ－８区，ＳＡ７の南西 0.9ｍで検出される。西壁の溝により切られている。平面形は長方形で長軸1.94m，短軸1.13m，深さ18cmである。遺物は出土していない。

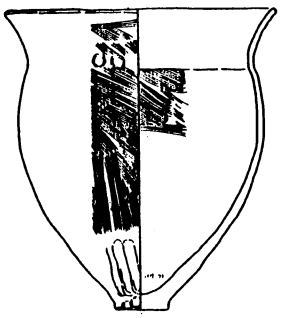
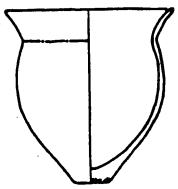
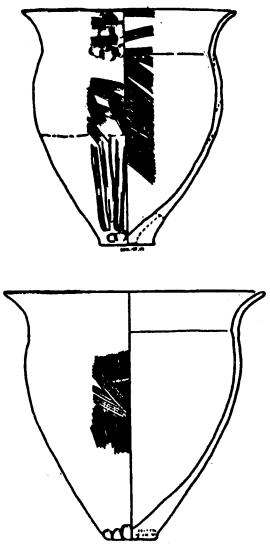
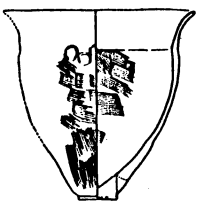
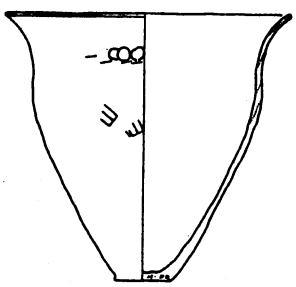
表58　土壙一覧表

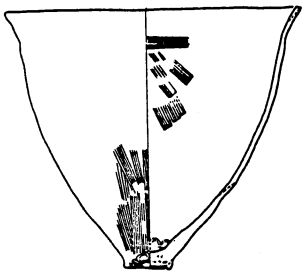
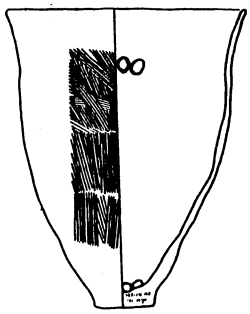
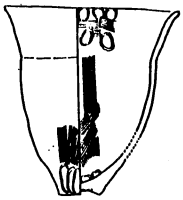
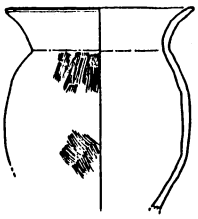
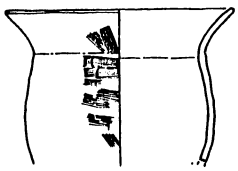
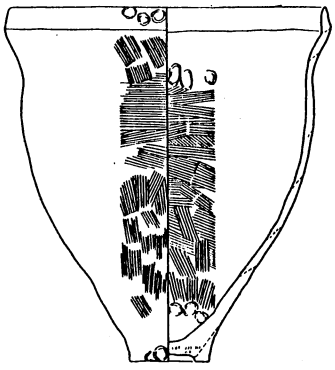
土壙番号	平面形	規模 長軸×短軸×深さ(ｍ)	備考	土壙番号	平面形	規模 長軸×短軸×深さ(ｍ)	備考
ＳＣ１	不整形	1.8 ×0.95×0.06		ＳＣ８	楕円形	1.36×1.12×0.10	
ＳＣ２	正方形	1.39×1.38×0.30		ＳＣ９	隅丸長方形	0.86×0.68×0.11	
ＳＣ３	不整楕円形	1.06×0.89×0.10		ＳＣ10	隅丸方形	0.64×0.51×0.15	
ＳＣ４	長方形	2.44×2.22×0.26	焼土あり	ＳＣ11	長方形	0.91×0.73×0.11	
ＳＣ５	正方形	1.38×1.27×0.18		ＳＣ12	梯形	1.35×1.12×0.23	
ＳＣ６	変長方形	1.18×0.96×0.25		ＳＣ13	梯形	1.01×0.69×0.10	
ＳＣ７	長方形	0.77×0.51×0.21		ＳＣ14	長方形	1.94×1.13×0.18	

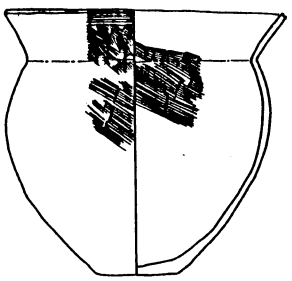
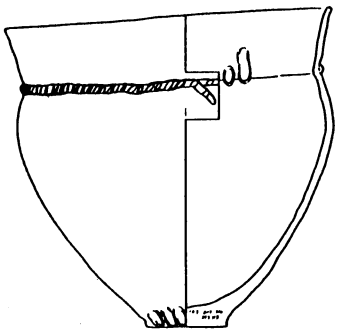
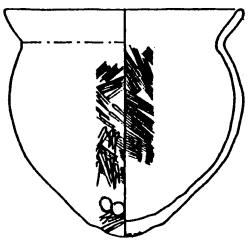
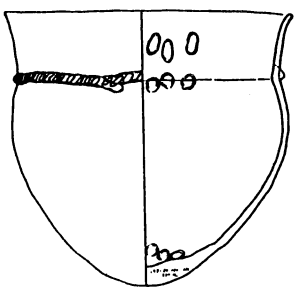
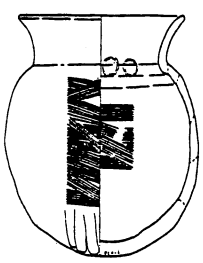
遺　物

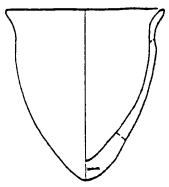
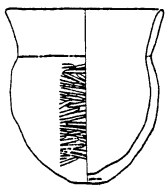
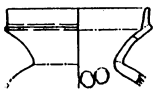
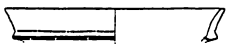
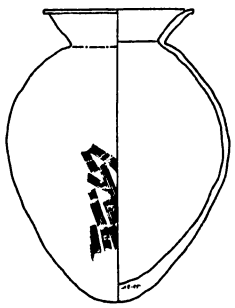
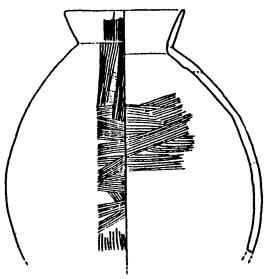
古墳時代の遺物は，竪穴住居跡などの遺構やその周辺から甕，壺，高杯，鉢，小型丸底壺，器台，手捏ね土器など多種多様な土器が出土した。他に，砥石，石庖丁などの石器，軽石製品，鉄鏃，管玉，小玉などが出土している。熊野原遺跡Ｃ地区出土の土器は，次のように器形分類される。

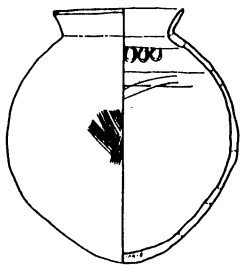
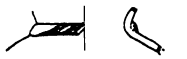
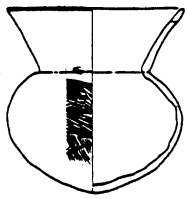
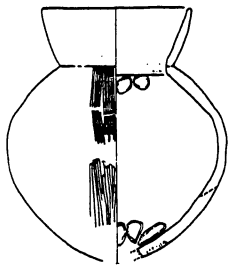
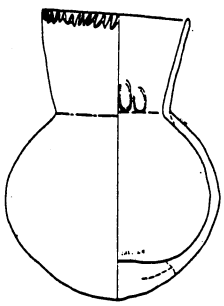
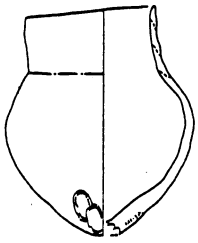
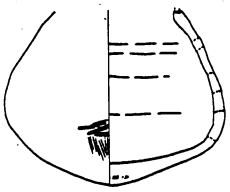
表59　出土土器分類表

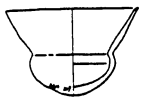
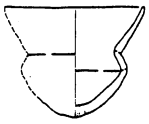
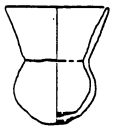
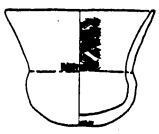
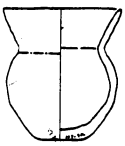
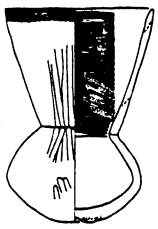
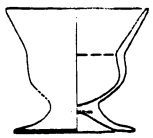
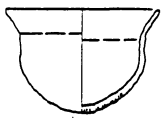
器種	分類	形態	特徴	
甕A	A_1		器高が25cm前後あるいはそれ以上のもの。	口縁部が外反し、体部下半が膨む甕。
	A_2		器高が20cm前後のもの。	
甕B	B_1		器高が25cm前後あるいはそれ以上のもの。	口縁部が外反し、体部最大径を上位にもち、底部へわずかに外彎しながら続く甕。
	B_2		器高が20cm前後のもの。	
甕C			口縁部がゆるやかに外反し、体部最大径を上位にもち、底部へ直線的に続く甕。	

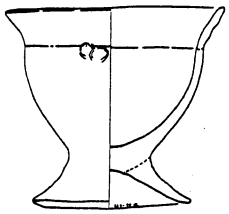
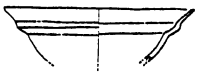
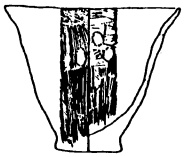
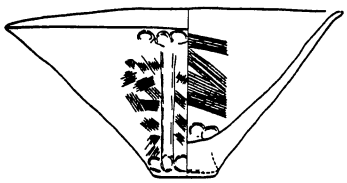
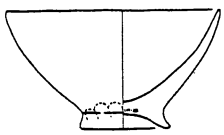
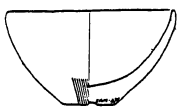
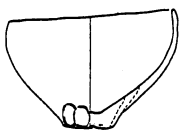
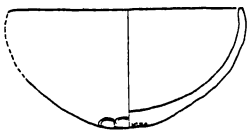
器種	分類	形態	特徴	
甕 D			口縁部はゆるやかに外反し、頸部にしまりがなく、体部の張らない甕。	
甕 E	E_1		口径が25cm前後のもの。	口縁部がゆるやかに外反あるいは外上方にのび、口径に比較して器高の高い甕。
	E_2		口径が20cm前後のもの。	
甕 F	F_1		口縁部がしまり、体部に張りのあるもの。	体部最大径を中位にもつ甕。
	F_2		口縁部のしまりがなく、体部が張らないもの。	
甕 G			甕Bに類似する体部をもち、口縁端部が内傾する甕。	

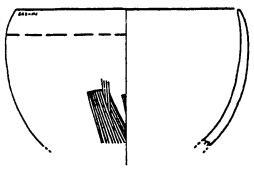
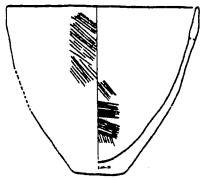
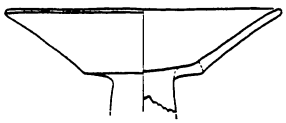
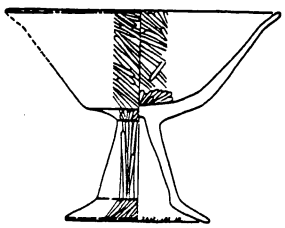
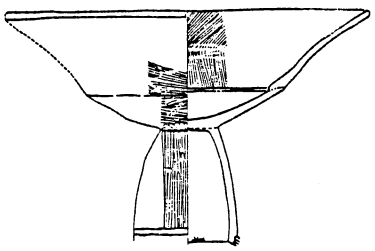
器種	分類	形態	特徴	
甕 H			甕Aに類似する体部をもち、口縁部が大きく外彎する甕。	
甕 I	I_1		底部が平底のもの。	口縁部は、外反あるいは外上方に伸び、器高に比較して頸部の径が大きい甕。
	I_2		底部が平底で、頸部に刻目突帯をもつもの。	
	I_3		底部が丸底のもの。	
	I_4		底部が丸底で頸部に刻目突帯をもつもの。	
甕 J			口縁部は外反し、体部が楕円形、底部が丸底の甕。	

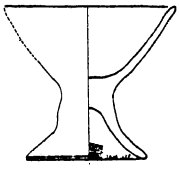
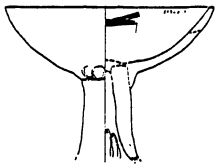
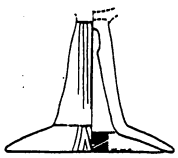
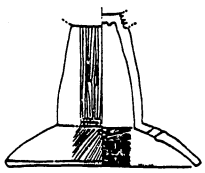
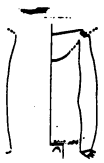
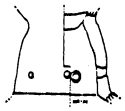
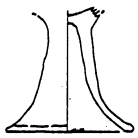
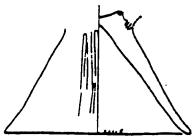
器種	分類	形態	特徴	
甕 K			口縁部が短く外反し、尖底状の底部をもつ甕。	
甕 L			体部が球形をなし、不安定な平底をもつ甕。	
甕 M			口縁部が内厚する甕。	
甕 N			短く直立する口縁部に櫛描文のある甕。	
壺 A	A_1		立ち上がり部が内傾するもの。	口縁部が二重口縁となっている壺。
	A_2		立ち上がり部が直立するもの。	
	A_3		立ち上がり部が外傾するもの。	
壺 B	B_1		口縁部が外反するもの。	口縁部が外反あるいは外上方に伸び、体部は、卵形に近い壺、底部は丸底と思われる。
	B_2		口縁部が外上方に伸びるもの。	

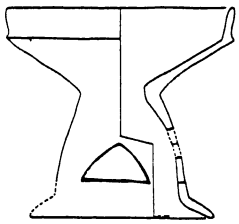
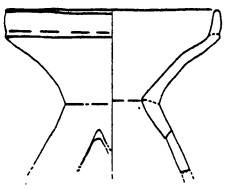
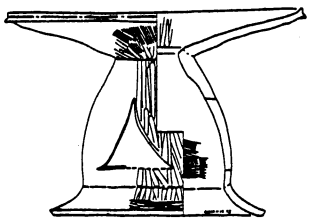
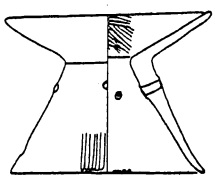
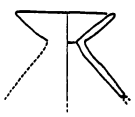
器種	分類	形態	特徴	
壺 C	C_1		口縁部が短く外反するもの。	体部が球形で、比較的甕に近い壺。
	C_2		頸部に刻目突帯をもつもの。	
壺 D	D_1		口縁部が外反するもの。	器高20cm前後の中型で、体部が球形あるいは扁球形の壺、底部は丸底である。
	D_2		口縁部が内彎ぎみに開くもの。	
	D_3		口縁部が外上方へ伸びるもの。	
	D_4		体部から口縁部にゆるやかに移行し、口縁部が内傾あるいは直立ぎみに立ち上がるもの。	
壺 E			体部最大径を体部下位にもつ壺。	

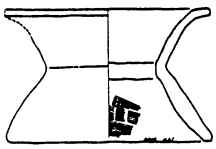
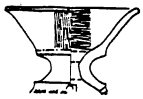
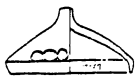
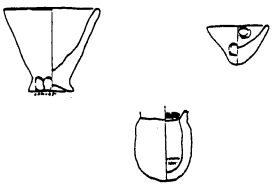
器種	分類	形態	特徴	
壺 F	F_1		体部が扁球形で、小さく浅いもの。	口縁部が外上方に開き、体部は扁球形をなし、口径が体部最大径をしのぐ小型丸底壺。
	F_2		体部は張りがあり、深いもの。	
壺 G	G_1		口縁部が短いもの。	口縁部が外上方に開き、体部が球形をなす小型丸底壺。
	G_2		口縁部が長く、体部と同じか、それをしのぐもの。	
壺 H	H_1		壺Fに類似するもの。	口縁部が外上方に開き、体部が球形あるいは扁球形をなし、底部が平底の小形壺。
	H_2		壺Gに類似するもの。	
	H_3		口縁部が長く伸びるもの。	
壺 I			壺Fに類似する体部で、脚台をもつ小型壺。	
鉢 A	A_1		体部がわずかに張り、浅いもの。	口縁部が外上方に開き、体部があまり張らない鉢。
	A_2		体部が半球形に近いもの。	

器種	分類	形態	特徴	
鉢 A	A_3		脚台をもつもの。	
鉢 B			2段に屈曲する口縁部をもつ鉢。	
鉢 C			口縁部がゆるやかに外反する鉢。	
鉢 D	D_1		口径が20cm前後のもの。	体部が内彎ぎみで、口縁部が外上方にのびる鉢。
	D_2		口径が10cm前後のもの。丸底、平底のものがある。	
鉢 E	E_1		底部があげ底のもの。	体部が内彎して立ち上がり、椀状をなす鉢。
	E_2		底部が平底のもの。	
	E_3		底部が丸底のもの。	
鉢 F	F_1		底部が平底のもの。	口縁部が内彎する鉢。
	F_2		底部が丸底ないし丸底様平底のもの。	

器種	分類	形態	特徴	
鉢 F	F_3		体部が深いもの。	
鉢 G			口縁部がわずかに外反する鉢。	
鉢 H			口縁部が直口する鉢。	
鉢 I			口径10cm以下の鉢。	
高坏 A	A_1		坏下半部は水平ぎみで、口縁部が大きく開くもの。	坏下半部は、小さく、口縁部が屈曲してのびる高坊。口径は20cm前後ものが多い。
	A_2		坏下半部が内彎ぎみに開き、口縁部が外上方に開くもの。	
高坏 B	B_1		坏下半部が内彎し、口縁部が稜をもって外反するもの。口径25cm前後のものが多い。	坏下半部が内彎し、口縁部が大きく開く高坊。
	B_2		坏下半部が内彎し、深く口縁部が外反するもの。	

器種	分類	形態	特徴	
高坏C			坏部が直線的に外上方に開く高坏。	
高坏D			坏部が内彎ぎみに外上方に開き、椀形に近い坏部をもつ高坏。	
高坏脚a	a_1		脚裾部が直線的にあるいは、やや内彎ぎみに開くもの、柱状部内面は、ヘラケズリされることが多い。	脚裾部が屈曲して、外方に開く。
	a_2		脚裾部が内彎して開くもの。	
	a_3		柱状部がエンタシス状に膨むもの、円盤充填法である。	
	a_4		柱状部が径のわりに短く、寸ずまりのもの。	
高坏脚b	b_1		ゆるやかに外反するもの。	脚部が「ハ」の字に開くもの。
	b_2		直線的に開くもの。	

器種	分類	形態	特徴	
高坏脚C	C1		裾部が「く」の字形に外反するもの。	小型高坏の脚部。
	C2		ゆるやかに外反するもの。	
	C3		脚部が短く、大きく外反するもの。	
器台A	A1		二重口縁の立ち上がり部が外傾するもの。	二重口縁の受部をもち、脚部は内彎し、裾部が開く器台。
	A2		二重口縁の立ち上がり部が直立ぎみなもの。	
器台B			受部が大きく開く皿型で、脚部は内彎し、裾部が開く器台。	
器台C	C1		受部が直線的に大きく開くもの。	皿型の受部をもち、脚部が「ハ」の字に開く器台。
	C2		器高が10cm以下の小型のもの。	

器種 分類	形態	特徴
器台D		受部の口縁端部が大きく、短く外反する。
器台E		いわゆる鼓型器台に類似するもの。
蓋		小型の蓋で端部が直立する。
ミニチュア土器		鉢、甕、壺など手捏ね土器。

3．中世

C地区においては，柱穴群がF～G－4～6区，F～H－9・10区，D～F－12～14区，G・H－12・13区等において検出され，F～H－9・10区，D・E－12～14区，G・H－12・13区などで掘立柱建物跡13棟が確認された。溝状遺構は，13棟の掘立柱建物群を取り囲むように又は，2区分するように分布している。これらの遺構からの出土遺物は多くはないが，ヘラ切り，糸切りの土師器坏・皿などが出土していることから，検出された遺構は，中世を中心とした時期のものと推定され，掘立柱建物と溝状遺構とは有機的な関係を有するものと推定される。D・E－7区で検出されたSB13は，その位置及び柱穴の配列状況が他の掘立柱建物と異なり，時期も異なるとも考えられるが，時期を決めるうる遺物が出土していないので一応この時期の項で報告する。

中世の遺構群は，調査区のほぼ中央で検出で1つの単位を把握できる資料を提供している。こうした遺構は，16・17区の溝状遺構の状況よりさらに東にも存在する可能性がある。

掘立柱建物跡

SB1（第11図）

D－13・14区で検出される4面に庇をもつ建物で11.25m×5.93mの規模を有し，棟方向はN86.5°Eである。身舎部分は桁行5間（9.68m），梁行2間（3.68m）で，桁行中央柱は東の1個を欠いている。庇間は，南が1.03m，東が0.80m，北が0.73m，西が0.77mほどである。身舎部分の柱穴の径は30～40cm，深さは35～55cmの間を測る。柱穴の最下部は，アカホヤを含む褐色土ないし黒褐色土で，つき固められている。柱穴内上部の埋土は，アカホヤと黒色土の混入や黒色土でしまりはあまりない。P18の柱穴からは，幅20cm，長さ30cmほどの石が出土している。他の柱穴からは，ヘラ切りの土師器坏小片が出土している。

SB2（第12図）

D－14区で検出され，SB1に隣接している。北面に庇をもち，6.18m×3.19mの規模を有し，棟方向はN3°Wである。身舎部分の桁行は3間（5.49m），南梁行は2間（3.18m）で北梁行は1間となっている。柱穴の径は20～40cm，深さは20～35cmの間を測る。

SB3（第13図）

D・E－12区で検出される。4面に庇をもつ建物で8.30m×5.51mの規模を有し，棟方向はN73.5°Eである。身舎部分の南桁行の柱穴は2個が近接しているが，これは建て替えが行われたものと思われる。しかし，新旧については不明。身舎部分の桁行は3間（6.58m），梁行は1間（3.75m・4.10m）である。庇間は，南が0.96mまたは0.51m，東が0.92m，北が0.90m，西が0.80mほどである。身舎部分の柱穴の径は30～35cm，深さは20～50cmの間である。柱穴内の埋土は，アカホヤ混りの黒色土で，SB1で認められた柱穴底のつき固めは行っていない。柱P10からは瓦器製鍋，P2・3・7・8等からはヘラ切りの土師器坏・皿が出土している。

SB4（第14図）

F－11・12区でSB3に隣接して検出される。棟方向N15°Wで，桁行3間（5.10m），梁行1間（3.66m）である。柱穴の径は25～35cm，深さは15～25cmの間である。

SB5（第12図）

F－3・4区で検出され，SB1の南7mに位置する。棟方向はN87°EでSB1の棟方向に平行する。桁行5間（7.42m），梁行1間（2.9m）である。柱穴の径は20～35cm，深さは15～35cmの間である。P7からはヘラ切りの土師器坏が出土している。

SB6（第14図）

F－11・12区で検出され，SB3の南6.5mに位置する。棟方向はN77.5°EでSB3の棟方向に類似する。桁行4

間（6.42m），梁行１間（3.08m）である。柱穴の径は，30～35cm，深さ15～30cmの間である。

ＳＢ７（第15図）

Ｇ－12区で検出され，ＳＢ６の南７ｍに位置する。棟方向はN79.5°Ｅで桁行３間（6.59m），梁行１間(3.75m）である。東・北・西の面には１ｍ前後の間をもって柱穴（10～15）が並ぶが，これは，庇ないし張り出し部の柱穴と思われる。柱穴の径は30～35cm，深さが15～40cmの間にあり，Ｐ４・７・８に見られる南東への突出部は抜き取り穴と思われる。

ＳＢ８（第15図）

Ｆ・Ｇ－９・10区で検出され，ＳＢ７の南６ｍに位置する。棟方向Ｎ74.5°Ｅで桁行3間(5.01m)，梁行１間（3.61m）である。柱穴の径は25～30cm，深さ10～20cmの間にある。

ＳＢ９（第16図）

Ｆ・Ｇ－９・10区で検出される。南北の２面に庇をもつ建物で8.59m×5.90mの規模を有し，棟方向はN72.5°Ｅである。身舎部分の桁行は４間（8.58m），梁行は２間（3.80m）である。庇間は，北が1.1ｍ，南が1ｍほどある。柱穴の径は30～50cm，深さは40～60cmの間にある。

ＳＢ10（第17図）

Ｇ－９区で検出され，ＳＢ９に隣接している。棟方向はN13.5°Wで，ＳＢ９の棟方向にほぼ直交する。桁行は３間（6.71m），梁行１間（3.89m）である。柱穴の径は35～55cm，深さは45～60cmの間にある。

ＳＢ11（第16図）

Ｈ－10区で検出され，ＳＢ９の南8.5mに位置する。棟方向はN77.5°Ｅで桁行３間（5.63m），梁行１間（3.09m）である。柱穴の径は20～35cm，深さは20～50cmの間にある。

ＳＢ12（第17図）

Ｈ・Ｉ－９区で検出される。棟方向はＮ９°Ｗで桁行３間（4.70m），梁行２間（2.69m）である。柱穴の径は25～35cm，深さは20～40cmの間にある。

ＳＢ13（第17図）

Ｄ～Ｆ－３区で検出される。棟方向はN29.5°Ｗで桁行３間（4.97m），梁行２間（4.40m）である。柱穴の径は25～30cm，深さは10～55cmの間にある。

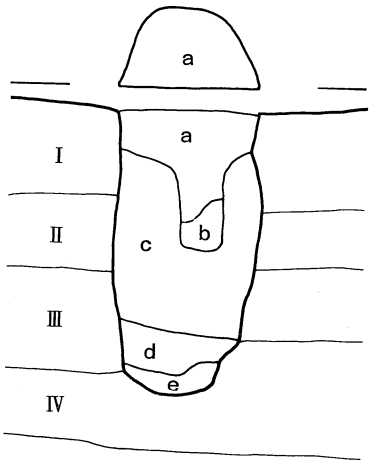
溝状遺構（第18図，付図１）

Ｃ地区で検出された溝状遺構は16条である。溝状遺構は，東区と西区の境とした農道下で検出されたＳＥ８～12以外は，掘立柱建物群を囲む形で東・西・南に分布している。溝の形態は，深さが10cm以内で断面形が「Ｕ」字形をなすもの（ＳＥ１・７・14），深さが20～30cm前後で断面形が逆台形状をなすもの（ＳＥ４・６・８・11・14・15・16）底面に円形あるいは楕円形のピットをもつもの（ＳＥ９），深さが13cm前後で幅が1.5～1.8ｍのもの（ＳＥ２・３・12）などがある。底面レベルは，南北方向に延びる溝状遺構の場合，Ｈ－６区からＧ－11区を結ぶ付近より南北両方向に低下し，東方向に延びる溝状遺構の場合は東方向へ低下している。

ＳＥ４は，Ｋ－８区において東北東方向及び北北西方向に延びている。幅は1.4m～0.8m，深さ15cm～40cm前後である。底面レベルは，Ｈ－６区付近を境にして北方あるいは南・東方向に低下している。Ｉ・Ｋ－８・９区では，糸切りの土師器坏が出土している。

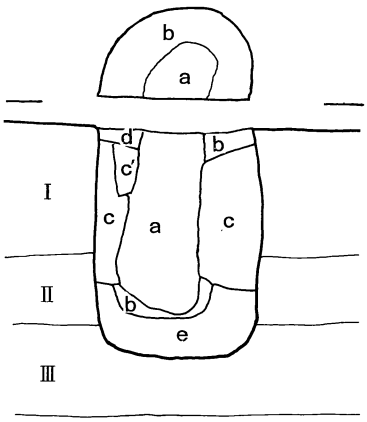
ＳＥ８～11は，畑より１ｍ前後高くなっていた農道の頂度下で検出され，北西方向へほぼ直線で延びている。溝の新旧は，ＳＥ８・９が古く，ＳＥ10が新しい。ＳＥ８とＳＥ９の前後関係は詳らかではない。

ＳＥ９は，特異な形態の溝で，幅は1.4m～1.7m前後でＧ－11区より以北では２段掘りとなっている。Ｇ－11区の



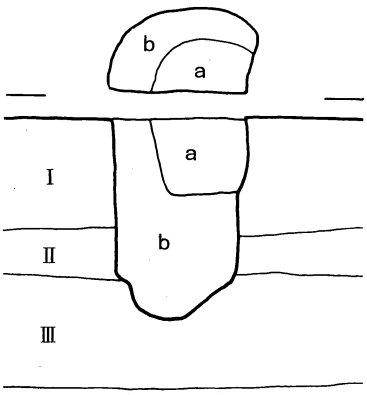
a…アカホヤを若干含む黒色土
b…アカホヤ・褐色土を含む黒色土
c…多量のアカホヤを含む黒色土
d…黒色土を若干含む硬質の褐色土
e…アカホヤを若干含むやや硬質の褐色土

SB1－P12



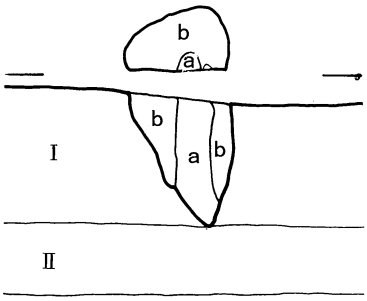
a…乳白色粘土
b…アカホヤを含む黒色土
c…黒色土を含むアカホヤ
c′…cに比べ黒色土多い
d…アカホヤを若干含む砂質黒色土
e…アカホヤを含む硬質の黒色土

SB1－P13



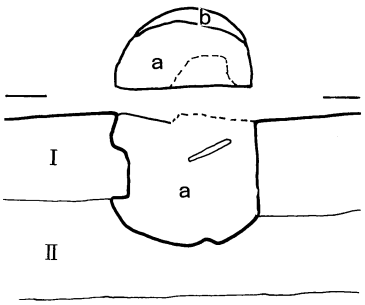
a…アカホヤを若干含む黒色土
b…多くのアカホヤを含む黒色土

SB1－P17



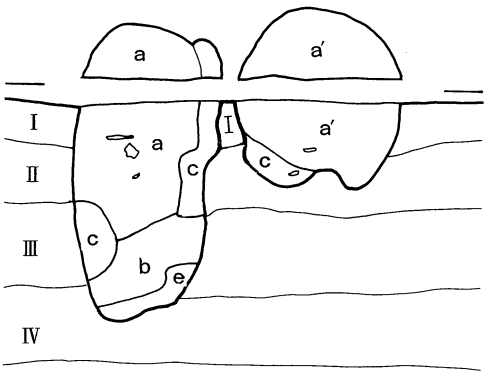
a…アカホヤを若干含む黒色土
b…多くのアカホヤを含む黒色土

SB2－P12



a…アカホヤを若干含む黒色土
b…多くのアカホヤを含む黒色土

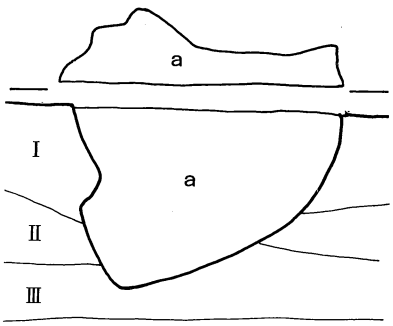
SB3－P10



SB3－P2（左）P3（右）

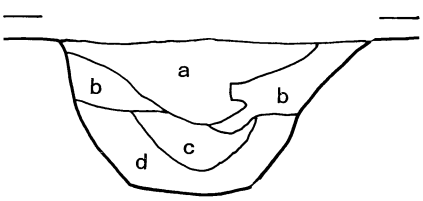
a…アカホヤを若干含む黒色土
a′…aに類似し、ややしまりぎみの黒色土
b…多くのアカホヤを含む黒色土
c…黒色土を含むアカホヤ
e…多くのアカホヤを含む硬質の黒色土

Ⅰ：アカホヤ
Ⅱ：小白斑を含む硬質の黒褐色土
Ⅲ；硬質の褐色土
Ⅳ：硬質の明褐色土



a…多くのアカホヤを含む黒色土

SB7－P8



a…火山灰様の白砂を含む硬質の黒褐色土
b…黒褐色土塊を含むアカホヤ
c…アカホヤ粒を含む明黒褐色土
d…アカホヤ粒を含む褐色土

SE14

0　60cm

Fig36　SB1・2・3・7柱穴，SE14土層図

表60　掘立柱建物計測表

建物番号	棟方向	梁行柱間(m)	梁行間(m)	桁行柱間(m)	桁行間(m)	備考
S B 1	N 86.5° E	P 1— 2 1.95　P 2— 3 1.74 P 4— 5 1.94　P 5— 6 1.86 P 7— 8 2.00　P 8— 9 1.96 P10—11 1.85　P11—12 1.85 P13—14 3.68 P15—16 0.95　P16—17 1.00 P17—18 0.98　P18—19 0.85	P 1— 3 3.69 P 4— 6 3.79 P 7— 9 3.65 P10—12 3.70 P15—19 3.78	P 1— 4 1.94　P 4— 7 2.04 P 7—10 1.92　P10—13 1.93 P13—15 1.63　P 2— 5 1.95 P 5— 8 2.73　P 8—11 1.20 P11—17 3.72　P 3— 6 1.96 P 6— 9 1.92　P 9—12 1.96 P12—14 2.00　P14—19 1.78	P 1—15 9.42 P 2—17 9.58 P 3—19 9.58	北側庇間 0.7 ～0.77m 東側庇間 0.78～0.80 南側庇間 0.8 ～1.05 西側庇間 0.7 ～0.77
S B 2	N 3 °W	P 1— 2 3.14　P 3— 4 3.65 P 5— 6 3.12 P 7— 8 1.49　P 8— 9 1.70	P 7—`9 3.18	P 1— 3 1.85　P 3— 5 1.90 P 5— 7 1.85　P 2— 4 1.88 P 4— 6 1.84　P 6— 9 1.76	P 1— 7 5.59 P 2— 9 5.46	庇間 0.65m
S B 3	N73.5° E	P 1— 2 3.71　P 1— 3 4.04 P 4— 5 3.77　P 4— 6 4.16 P 7— 8 3.85　P 7— 9 4.20 P10—11 3.83　P10—12 4.10		P 1— 4 2.14　P 4— 7 2.16 P 7—10 2.21　P 2— 5 2.22 P 5— 8 2.17　P 8—11 2.25 P 3— 6 2.26　P 6— 9 2.15 P 9—12 2.25	P 1—10 6.5 P 2—11 6.62 P 3—12 6.64	北側庇間 0.85 m 東側庇間 0.83～0.9 南側庇間 0.65～0.7 西側庇間 0.65～0.88
S B 4	N15°W	P 1— 2 3.65　P 3— 4 3.64 P 5— 6 3.80　P 7— 8 3.65		P 1— 3 1.74　P 3— 5 1.64 P 5— 7 1.68　P 2— 4 1.72 P 4— 6 1.74　P 6— 8 1.66	P 1— 7 5.05 P 2— 8 5.12	
S B 5	N 87° E	P 1— 2 2.88　P 3— 4 2.78 P 5— 6 2.82　P 7— 8 2.87 P 9—10 2.92　P11—12 2.99		P 1— 3 1.77　P 3— 5 1.58 P 5— 7 1.59　P 7— 9 1.40 P 9—11 1.59　P 2— 4 1.56 P 4— 6 1.64　P 6— 8 1.51 P 8—10 1.56　P10—12 1.51	P 1—11 7.91 P 2—12 7.78	
S B 6	N77.5° E	P 1— 2 3.12　P 3— 4 2.94 P 5— 6 2.93　P 7— 8 2.92 P 9—10 3.00		P 1— 3 1.75　P 3— 5 1.42 P 5— 7 1.57　P 7— 9 1.69 P 2— 4 1.83　P 4— 6 1.59 P 6— 8 1.60　P 8—10 1.39	P 1— 9 6.42 P 2—10 6.40	
S B 7	N79.5° E	P 1— 2 3.60　P 3— 4 3.80 P 5— 6 3.75　P 7— 8 3.80		P 1— 3 2.23　P 3— 5 2.20 P 5— 7 2.22　P 2— 4 2.17 P 4— 6 2.20　P 6— 8 2.14	P 1— 7 6.68 P 2— 8 6.45	東側庇(？)間 1.05 m 北側庇(？)間 0.9～0.95 西側庇(？)間 0.95
S B 8	N74.5° E	P 1— 2 3.60　P 3— 4 3.81 P 5— 6 3.55　P 7— 8 3.55		P 1— 3 1.52　P 3— 5 1.72 P 5— 7 1.72　P 2— 4 1.65 P 4— 6 1.42　P 6— 8 1.96	P 1— 7 4.95 P 2— 8 5.00	
S B 9	N72.5° E	P 1— 2 1.80　P 2— 3 1.98 P 4— 5 3.85　P 6— 7 3.81 P 8— 9 3.85　P10—11 3.81	P 1— 3 3.78	P 1— 4 2.20　P 4— 6 2.14 P 6— 8 2.19　P 8—10 2.12 P 3— 5 2.13　P 5— 7 2.23 P 7— 9 2.15　P 9—11 2.14	P 1—10 8.62 P 3—11 8.65	北側庇間 1.09～1.15m 南側庇間 0.9 ～1.10
S B 10	N13.5°W	P 1— 2 3.85　P 3— 4 3.82 P 5— 6 3.85　P 7— 8 3.82		P 1— 3 2.27　P 3— 5 2.27 P 5— 7 2.30　P 2— 4 2.27 P 4— 6 2.12　P 6— 8 2.25	P 1— 7 6.86 P 2— 8 6.65	
S B 11	N77.5° E	P 1— 2 3.15　P 3— 4 2.91 P 5— 6 3.02　P 7— 8 2.95		P 1— 3 1.83　P 3— 5 1.90 P 5— 7 1.93　P 2— 4 1.95 P 4— 6 1.80　P 6— 8 1.83	P 1— 7 5.65 P 2— 8 5.59	
S B 12	N 9° W	P 1— 2 2.58　P 3— 4 2.71 P 5— 6 2.63 P 7 — 8 1.50　P 8— 9 1.21		P 1— 3 1.60　P 3— 5 1.55 P 5— 7 1.63　P 2— 4 1.70 P 4— 6 1.50　P 6— 9 1.57	P 1— 7 4.78 P 2— 9 4.77	
S B 13	N29.5°W	P 1— 2 2.17　P 2— 3 2.23 P 4— 5 4.37　P 6— 7 4.35 P 8— 9 2.14　P 9—10 2.22	P 1— 3 4.40 P 8—10 4.35	P 1— 4 1.57　P 4— 6 1.86 P 6— 8 1.53　P 3— 5 1.60 P 5— 7 1.70　P 7—10 1.65	P 1— 8 4.95 P 2— 9 4.95 P 3—10 4.96	

（※計測値は柱穴の中心間の距離）

以北では，下段溝内に径30cm，深さ10cm前後の円形ピットが，以南では，長径110cm，短径30cm，深さ10cm前後の楕円形ピットが30cm前後を間隔として並んでいる。円形ピット，楕円形ピット及びその直上の埋土は，赤褐色あるいは褐灰色系の硬い0.5cm前後の薄い層が互層となっており，検出時には，一層ずつの剝離が見られた。

ＳＥ８～11からは，ヘラ切りの土師器坏，須恵器，中世陶器等が出土している。

ＳＥ14は，幅60cm，深さ30cm前後で底面レベルは北ないし東方に低下し，ＳＥ15に連結する。溝内の埋土上層は，火山灰様の白い砂を含む硬質の黒褐色土である。ＳＥ15の埋土にも同様なものが認められている。

第4節　ま　と　め

熊野原遺跡Ｃ地区の調査で検出された遺構は，古墳時代初頭（布留式併行期）の竪穴住居跡，周溝状遺構，土壙及び中世の掘立柱建物跡，溝状遺構である。

竪穴住居跡は23基検出され，平面形は方形あるいは長方形であり，突出部を有し，「日向型間仕切り住居」と称される形態の竪穴住居跡は検出されていない。主柱穴は不明なものを除き，ＳＡ14が３本，ＳＡ19が６本の他は２本ないし４本である。心々距離は，2.5～３m前後で住居の規模にそれほど関係しないようである。内部施設としては，皿状土壙，壁溝がみられる。皿状土壙は23基中７基がもち，いずれも南に偏して主柱穴間に位置する。ＳＡ５，７のようにそのプランが方形に近いものは主柱穴間にあり，ＳＡ８，12などのように長方形プランの場合，南壁から主柱穴間までのびている。炉は検出されていないが，皿状土壙内及び周辺に焼土がみられたことから，皿状土壙が炉的機能をもっていたとも考えられる。入口を特定できたのは，ＳＡ２のみである。ＳＡ２は，Ｃ地区で１基のみ南壁に張り出し部をもつ。張り出し部の北壁の肩部は乱れており，この張り出し部が入口と判断された。その他の住居跡については特定しえなかったが，皿状土壙をもつ住居の場合，南にあったと考えられるが特に長方形プランの皿状土壙をもつ住居の場合，その可能性が高いと思われる。

竪穴住居跡23基の規模については，主軸の長さから１辺が2.5m前後のもの（Ａ），１辺が4m前後で方形プランが主となるもの（Ｂ），長辺が６m前後，短辺が５m前後で長方形プランが主となるもの（Ｃ），１辺が７m前後で方形プランが主となるもの（Ｄ）の４グループに分けることができ，皿状土壙をもつものはＣ・Ｄグループであり，主柱穴が４本のものはＤグループに限られる。Ｃ地区の住居跡は，平面形，主柱穴，心々距離，内部施設等からみて，住居の造り方にある一定の企画性があったと思われる。

竪穴住居跡の分布状態をみると，主柱穴４本で規模の大きいものは，群の中でも中央に位置し，また，その中央には，ある程度の空間が確保されているように見取ることができる。

周溝状遺構は１基検出されている。遺構は，アカホヤ面で検出され，溝で区画された中央部において土壙は検出されていない。遺物は，溝の東及び南において集中する傾向はあるが，ほぼ全域で出土している。遺物は，土器片のみで完形品など配置されたものはない。中央に土壙をもたない周溝状遺構は，県内では都城市年見川遺跡[3]，川南町丸山西原遺跡，大迫遺跡[4]，学園都市遺跡群の熊野原遺跡Ａ地区[5]で発見されている。年見川遺跡の他は，遺構は集落内において住居跡と切り合うことなく発見されている。これらの遺跡は弥生後期～終末期ごろの時期である。集落内において周溝状遺構が検出される例は，北部九州の筑後川沿いで発見が集中し，その時期も弥生後期に集中するという[6]。県内の周溝状遺構も時期的にも発見状況など北部九州の例に類似点が多いが，九州山地を隔てた両地域にこうした周溝状遺構が存在することは，分布のうえでも注目される現象である。周溝状遺構の性格は，祭祀的と言う以外，その性格について特定することは現在のところ困難である。

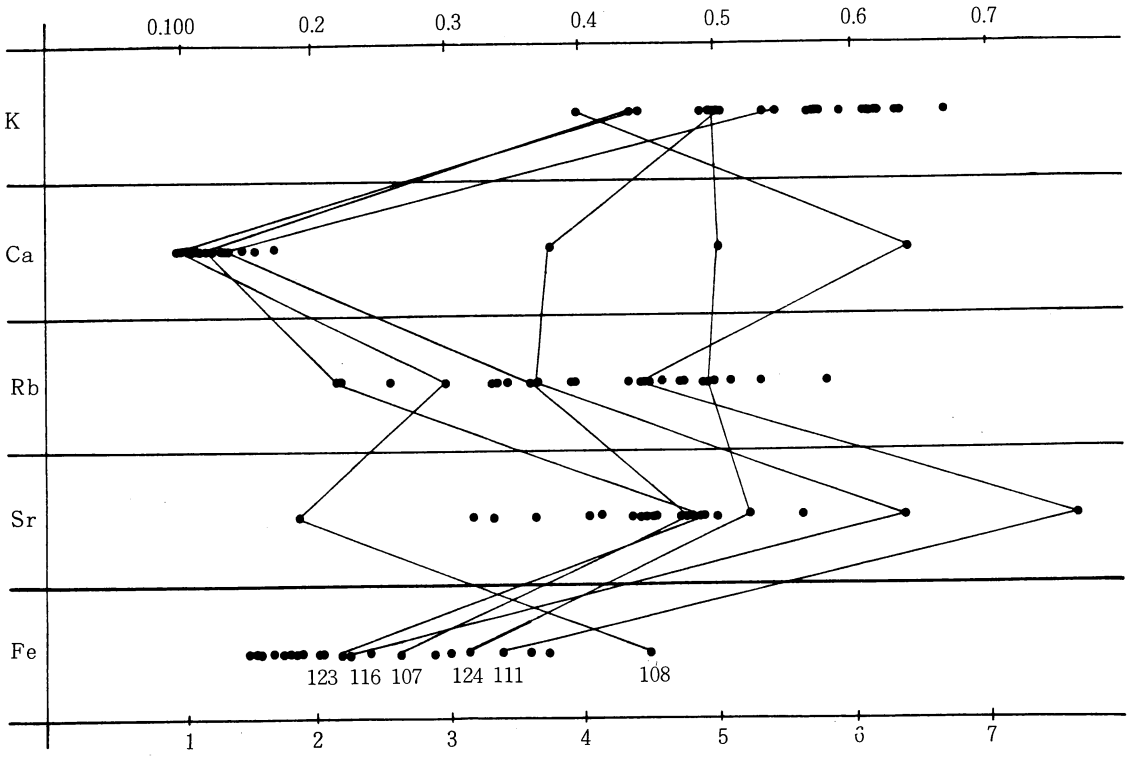
竪穴住居跡，周溝状遺構などから土器，石器，鉄器，装身具など多種多様なものが多く出土している。土器につい

ては，甕14器種，壺９器種，鉢６器種，高坏４器種，器台５器種に分類された。甕は体部の形態により分類した。Ｃ地区ではＢ１類の出土率が高い甕であり，さらに２つに分類できるが，色別が困難であったのでＢ１類としている。Ｃ地区出土の甕の口縁は丸く仕上げられたものが多く，底部については平底ないしわずかなあげ底で仕上げも丁寧である。石川悦雄氏編年[7]の第Ⅴ期・Ⅵ期の甕の口縁端部に面をもつ例が多く，底部についても指頭痕を明瞭に残すあげ底が多いが，Ｃ地区の甕の口縁・底部はこの時期の特徴であると言えよう。高坏のＡ類は布留系のものである。高坏Ｂ１類の脚はa_2がつく。Ｂ１類に類似する資料は，学園都市遺跡群内の前原南遺跡で出土している[8]。前原南出土の高坏は坏部下半と口縁部の境が坏部の中位にあり，わずかに広がる脚部をもち，裾部が外彎している。Ｃ地区の高坏Ｂ１類は，この系譜上にあるものと思われる。

Ｃ地区出土の甕の中でＡ類は古い要素，Ｃ・Ｄ類は新しい要素と考えられる。このことは壺・高坏等についても同様なことが言え，Ｃ地区出土の土器は少なくとも３期に分けることが可能と思われる。この作業を通じてＣ地区の集落構造を把握できるが，後日に期したい。

Ｃ地区では，搬入土器と推定される土器が出土している。第19図25，第36図 335，第46図 536，第48図591がそれである。25は，内面ヘラケズリの甕の肩部付近で外面にタテ方向の細いハケ目がみられ，色調も灰褐色を呈する薄い土器である。335は，丹塗りの鉢でヘラ磨きされ，胎土も黒色味をおびている。536も胎土が黒色味をおび，体部内面はヘラケズリされ，器面の調整も丁寧な土器である。591は，二重口縁の甕の口縁部でほぼ直立して立ち上がり，細い櫛描文をもち，内面は肩部までヘラケズリされ，色調はにぶい褐色を呈する。瀬戸内の下田所ないし亀川上層式に類似する土器である。この４点は，Ｃ地区出土の土器の胎土，手法，色調と明らかに異なるものである。その一部について胎土分析を行っている。資料番号108が536，同じく111が25である。Ｃ地区出土土器の分析結果は，Ｋが0.5～0.6，Caが0.13前後に集中する。Rbは0.2～0.6に分布し，Srが0.4前後に集中し，Feについては1.8前後に集中する傾向がある。先の２点の分析結果は，胎土に違いが認められるので，搬入品と考えてよいと思われるが，その搬入先については，現在のところ不明である。

Fig 37　出土土器胎土分析



C地区で検出された中世の遺構は，掘立柱建物跡，溝状遺構である。遺構に伴って出土した遺物は，土師器，須恵器，瓦器製鍋などである。土師器は坏と皿があり，底部切り離し手法はヘラ切りと糸切りの両手法がみられる。ヘラ切りの坏・皿は，ＳＢ５，ＳＢ３，ＳＥ９，Ｆ－９区などで出土し，糸切りの坏・皿はＳＥ５などで出土している。ＳＢ５，ＳＢ３出土の土師器は，山内石塔群出土の土師器分類によると(9)，第51図645はⅠ－Ａ－２類に，649，650はⅠ－Ｂ－２類に，糸切りの土師器は，底部から丸味をもって立ち上がるⅡ－Ａ－２ないしⅡ－Ｂ－１類に類似する。Ⅰ－Ａ－２とⅠ－Ｂ－１類は，山内石塔群のⅡ期に，Ⅰ－Ａ－２，Ⅱ－Ｂ－１類は第Ⅲ期としている。山内石塔群では，Ⅱ期はヘラ切りと糸切りが混在し，ヘラ切りから糸切りへの転換期の時期で，Ⅲ期は，糸切りが大半を占め，特小皿の出現期とされている。Ⅱ期は14世紀前半，Ⅲ期については特にふれていないが，Ⅳ期が16～17世紀代としていることから，15世紀を中心とした時期が想定される。土師器に示された年代観に従うとC地区出土の土師器はⅡ～Ⅲ期のものなので14～15世紀を中心とした時期のものと考えられる。他の遺物，瓦器製鍋などもこの時期におさまるものである。

掘立柱建物跡は13棟検出され，ＳＢ１以外は側柱式である。掘立柱建物は，四面に庇をもつ５間×２間が１棟（ＳＢ１），３間×１間が１棟（ＳＢ３），南北２面に庇をもつ４間×１間が１棟（ＳＢ９）の他，５間×１間が１棟，４間×１間が１棟，３間×１間が１棟，３間×２間が１棟ある。13棟は，棟方向とその配置状況から次の３群に分けられる。

Ａ…四面に庇をもつＳＢ１を中心とし，ＳＢ２，ＳＢ５が「コ」の字形に配置されたもの。棟方向はＮ87°Ｅないし Ｎ３°Ｗ

Ｂ…四面に庇をもつＳＢ３を中心とし，ＳＢ４，ＳＢ６が逆「コ」の字形に配置されたもの。棟方向はＮ75°Ｅ前後ないしＮ15°Ｗ

Ｃ…南北に庇をもつＳＢ９を中心とし，ＳＢ10，ＳＢ11が逆「コ」の字形に配置されたもの。棟方向はＮ75°Ｅ前後ないしＮ13.5°Ｗ

Ａ～Ｃの各群は，棟方向が直交ないし平行する関係にあり，直交するものは，規模の大きい建物に近接している。また，平行関係にあるものは規模の大きい建物の南７～９ｍに位置する。各群を構成する建物の性格は，庇をもつものが母屋，他が納屋あるいは倉庫が想定される。３群に分けた建物群の南に位置するＳＢ７・８・12には，棟方向からＳＢ７・８がＢ群に，ＳＢ12がＣ群に含まれる可能性がある。

Ｃ地区では，掘立柱建物跡とほぼ同時期の溝状遺構が掘立柱建物群の周囲あるいは中央部に分布している。周囲の溝状遺構は，調査区南半で南北方向から東へ折れるものが多く，掘立柱建物を囲む分布形態を呈している。掘立柱建物群のＡ・Ｂ群とＣ群の間を南北に走るＳＥ８～11は，他の溝と異なり同じ位置で溝が掘り替えられている。溝と掘立柱建物群のＢ群との距離は10m，Ｃ群とは７ｍほどあり，ＳＥ８～11は，Ｂ群とＣ群とを区画する溝であったと思われる。ＳＥ８～11の東にはＡ・Ｂ両群があるが，Ａ群はＢ群の建て替えと推定される。　（面　高　哲　郎）

註1) 平面形については，関晴彦氏の分類に従い，$\frac{\text{短軸}}{\text{長軸}}\times 100$の値が90以上を方形，それ以下を長方形としている。福岡県教育委員会，「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（XIX）」　1977

(2) 床面積は，壁溝をもつ場合，この部分は除いている。

(3) 宮崎県立博物館「図説宮崎の歴史」　1967

(4) 川南町教育委員会「川南町遺跡詳細分布調査報告書」　1983

(5) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）」　1982

(6) 小郡市教育委員会「井上・北内原遺跡」小郡市文化財調査報告書第20集　1984

(7) 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描（ＭＫ・Ⅱ）」宮崎考古第９号　1984

(8) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）」　1983

(9) 宮崎県教育委員会「山内石塔群」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第１集　1984

表61　土師器遺物観察表

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
19	SA1	1		口縁部丸くおさめる	ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒を含む	
〃	〃	2	壺C2		風化のため不明	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	砂粒を含む	
〃	SA2	3	甕		ハケ目 ハケ目	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒を含む	
〃	〃	4	甕		ハケ目 ヨコナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	5	甕D	口縁端部に面をもつ	下位タテ方向のハケ目　底部　指頭圧 口縁下　ハケ目　底部　指頭底	やや不良	にぶい褐 (7.5YR7/4)	橙(7.5YR8/4) 褐灰(5YR 5/1)	2～3㎜の砂粒を含む	外，全面スス付着 内，底部付近スス付着
〃	〃	6	甕		ヨコ方向のハケ目後ヨコ方向のヘラミガキ そのあとをタテに暗文風にヘラミガキ	良好	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 7/6)	細砂粒を含む	
〃	〃	7	底部	平底，底面中央に凹あり	ハケ目　底部指頭圧 ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/4) 褐灰(5YR 5/1)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	8	〃	平底	指によるナデ上げ ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	褐灰 (10YR 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	9	〃	平底	ナデ タテ方向のナデ　底部指頭圧	良好	明黄褐色 (10YR 6/6)	褐灰 (5YR 5/1)	砂粒を含む	内，スス付着
〃	〃	10	〃	平底	ハケ目　一部ハケ目後ナデ ハケ目　指頭圧	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/4) 灰(5Y 5/1)	砂粒を含む	
〃	〃	11	〃	平底	ハケ目　後ナデ ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	黒	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	SA3	12	甕	あげ底	ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	灰黄褐 (10YR 5/2)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	SA4	13	〃		ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	SA6	14	〃		タテ方向のハケ目後ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	15	〃		ヨコナデ　斜のハケ目 ヨコナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	16	〃	刻目突帯をもつ	ナデ ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	17	底部	平底	ハケ目，底部ナデ ナデ	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	18	〃	平底	ナデ，指頭圧 ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	(5YR 7/6)橙 灰黄褐(10YR 5/2)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	19	〃	平底	剝離のため不明 ハケ目後ナデ	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	SA1	20	壺	口縁端部下方に微隆起を持つ	ヘラミガキ，口唇部ヨコナデ ハケ目，〃　〃	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	細砂粒を含む	
〃	SA2	21	高杯b2		ハケ目，部分的にハケ目後ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
19	SA2	22	高杯脚部		斜方向のハケ目のあとタテのヘラミガキ(暗文風) ハケ目	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	21と同一個体？
〃	〃	23	高杯脚部		タテ方向のヘラミガキ ヘラケズリ（ヨコ方向）	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	
〃	〃	24	壺F1		口縁部ハケ目後ヨコナデ，底部指頭圧 口縁部ハケ目後ヨコナデ，胴部ハケ目後指頭圧	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	25	甕		ハケ目 ヨコ方向のヘラケズリ一部ヘラケズリ後指頭圧	良好	灰褐 (7.5YR5/2)	灰褐 (7.5YR5/2)	1～3㎜の砂粒・雲母を含む	外，スス付着
〃	〃	26	甕 M		ハケ目，口唇部ヨコナデ ヨコ方向のハケ目	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	細砂粒・石英を含む	外，スス付着
〃	〃	27	鉢	口縁端部に面をもつ	ヨコ方向のハケ目 ヨコ方向のハケ目	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	28	底部	平底	ナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 8/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	細砂粒を含む	
〃	SA4	29	ミニチュア		ナデ 口縁部ヨコ方向のハケ目，ナデ	良好	灰色 (7.5Y 5/1)	灰色 (7.5Y 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	30	壺 D		口縁タテ方向のヘラミガキ，端部ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒・石英を含む	
〃	〃	31			ナデ ヨコナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	黄橙 (10YR 8/6)	細砂粒を含む	
20	SA5	33	甕A1	口縁部外反	口縁部ヨコナデ，胴部ナデ一部にハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，口縁から胴部下位までスス付着
〃	〃	34	〃	頸部に刻目突帯をもつ	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目，底部指頭圧 〃　ヨコナデ，口縁下ハケ目，胴部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，胴部にスス付着
〃	〃	35	甕I	口縁部直線的に外上方に伸びる	口唇部ナデ，口縁ヨコ方向のハケ目，胴部ハケ目 〃　〃　胴部斜方向のハケ目	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	36	甕I2	口縁部直線的に外上方に伸びる	全体に磨耗しており調整不明 口縁端部ヨコナデ，頸部指頭圧	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 6/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外面と内面底部にスス付着 口縁部著るしくいびつ
〃	〃	37	甕A1	口縁部ゆるやかに外反 頸部にわずかに段を持つ	口唇部ナデ口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目後ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	38	甕I3		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目後ヘラナデ，底部指頭圧 〃　〃　〃　ハケ目，底部ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明黄褐 (10YR 6/6)	2～3㎜の砂粒を含む	内，底部スス付着
21	SA12	39	甕B2	口縁部大きく外反	口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ・指頭圧，胴部ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	外全面スス付着
〃	SA5	40	壺		口縁端部ヨコナデ，胴部ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	41	甕	口縁部ゆるやかに外反	ヨコナデ ヨコナデ	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	42	甕A2		口縁端部ヨコナデ 口縁端部ヨコナデ，胴部ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2㎜前後の砂粒を含む	頸部にスス付着
〃	〃	43	甕A2		ハケ目，底部指頭圧 ハケ目，底部指頭圧	良好	(7.5YR7/6)橙 灰(2.5Y 7/1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
21	ＳＡ５	44	甕A_1		ナデ，口縁との接合部指頭圧 ナデ　〃	やや不良	にぶい褐色 (7.5YR 5/4)	にぶい褐色 (7.5YR 5/4)	1～3㎜の砂粒を含む	内，黒斑あり
〃	〃	45	甕	口縁端部ゆるやかに外反	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 ナデ，口縁との接合部指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	2㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	46	〃		口唇部ヨコナデ，頸部風化著るしい ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	47	底部	あげ底	ナデ ナデ，指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	灰黄 (2.5Y 6/2)	3㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	48	〃	あげ底	ハケ目　底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，一部スス付着
〃	〃	49	〃	平底	ナデ，底部指頭圧 上位ハケ目，下位ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	50	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	51	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 指によるナデ上げ	やや不良	橙 (5YR 7/6)	褐灰 (10YR 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外，黒斑あり
〃	〃	52	〃	あげ底	ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 8/3)	褐灰 (10YR 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	53	〃	平底	ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，黒斑あり
〃	〃	54	〃	平底	ハケ目 風化	やや不良	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	内，スス付着
22	〃	55	壺A_3		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	56	壺A_2		口縁立ち上がり部ヨコナデ，口縁部下位ナデ 〃　〃　〃　〃	良好	橙 (7.5YR 7/6)	淡黄 (2.5Y 8/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	57	壺A_1		タテ方向のハケ目の後ヘラミガキ ヨコ方向のヘラミガキ	やや良	明黄褐色 (10YR 6/6)	褐灰 (10YR 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	58	壺B_2		ヨコナデ ナデ，指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	59	高杯B_2		ナデ ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	60	高杯A		ヨコ方向のヘラミガキ，口唇部ヨコナデ 一部タテ方向のヘラミガキ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	淡橙 (5YR 8/4)	精良	
〃	〃	61	高杯B_2	口縁端部丸くおさめる	上位ヨコナデ，下位タテ方向のナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (8.5YR 8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	62			ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	63	高杯脚a_1		タテ方向のヘラミガキ 脚筒部ナデ，脚部ハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	明赤褐 (2.5Y 5/6)	砂粒を含む	
〃	〃	64	〃		ナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
22	ＳＡ５	65	高杯脚a_1		タテ方向のヘラミガキ 脚筒部ナデ，脚部ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	砂粒を含む	
〃	〃	66	鉢D_1	口縁部わずかに外反	ナデ，口縁部・底部指圧 ハケ目，底部指圧	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	いびつである 内，一次的黒変
〃	〃	67	壺H_1	口縁部わずかに外反	口縁部ハケ目後ナデ，胴部ナデ 〃　ハケ目　〃　ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	68	壺G_2		口縁部ヘラナデ，胴部ナデ ヨコナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	69	鉢Ⅰ		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	70	鉢E_2		口唇～口縁部ヨコナデ，体部～底部ヘラナデ ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，黒斑あり
〃	〃	71	壺E		体部下位から底部ヘラミガキ （体部上位は磨耗） 剝離面多い	良好	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4) 底部・灰黄褐 (10YR 5/2)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	72	鉢D_2		口唇部ナデ ハケ目	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
23	ＳＡ７	79	甕A_1	口縁端部に面を持つ	口唇部～口縁上位ヨコナデ，胴部下位指頭圧 口縁部指頭痕，胴部下位ハケ目の後ナデか？	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の粒子を含む	外，口縁部と胴部中位～底部スス付着
〃	〃	80	甕B_1	口縁部大きく外反	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目・指頭圧 胴部上位ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	外，口縁～胴部下位内，中位～底部スス付着 径，復元
〃	〃	81	甕I_1		口縁部ヨコナデ，頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部上部と底部に指頭圧	良好	黄橙 (7.5YR 7/6)	黄橙(7.5YR 7/6) にぶい褐色 (7.5YR 5/3)	1～2㎜の砂粒を含む	外，口縁部～胴部下位スス付着
〃	〃	82	甕I_4	口縁端部わずかに外反	口縁部ヨコナデ，胴部～底部ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上位～底部ナデ，口縁部と底部に指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	口縁部と胴部中位下位に集中してスス付着
〃	〃	83	甕E_1		口縁部と胴部下位ナデ，胴部上位，中位にハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明黄褐色 (10YR 6/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外面口縁～胴部中位と内面中位～下位スス付着 〃　黒変
〃	〃	84	甕	突帯をもつ	口縁部ヨコナデ，胴・肩部ナデ 口縁部ヨコナデ，頸部～肩部ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む 石英・黒雲母含む	
〃	〃	85	甕E_2		口唇部ナデ口縁部ヨコナデ，底部近く指によるナデあげ 口縁部ハケ目と指頭圧，胴部上～下位ハケ目，底部押圧	良好	黄橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)		内，底部～口縁近くまで黒変 外，スス付着
〃	〃	86	甕B_1	口縁内面に稜を持って外反	口唇部ナデ，口縁部ハケ目，胴部上位タタキ 口縁部ナデ，胴部上位ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	2㎜前後の砂粒を含む	外面，スス付着 径，復元
〃	〃	87	底部		胴下位タタキ・ハケ目，底部指頭圧 胴部下位ハケ目，底部ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	褐灰(10YR 5/1) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	2㎜前後の砂粒を含む	86と同一個体
24	〃	88	甕		ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	口縁部，橙 (5YR 7/6) 橙 (7.5YR 7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	外面，スス付着 径，復元
〃	〃	89	甕E_1	口縁部先細り	口唇部ナデ，口縁部～胴部中位ハケ目 外面胴部上位指頭圧 ハケ目	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6) 明黄褐 (10YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外面，スス付着 径，復元
〃	〃	90	甕	口縁直線的に外上方に伸びる	口縁端部ナデ，口縁部～胴部上位ハケ目 ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	91	甕	刻目突帯をもつ	口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目の後ナデ 胴部上位ハケ目	良好	黄橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1～3㎜程の砂粒を含む	外面スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
24	SA7	92	甕F_2		口縁部ヨコナデ，胴部上～中位ハケ目，頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部上～中位ナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4) 一部灰黄 (5Y 4/2)	1mm前後の砂粒	外面，ススト付着 径，復元
〃	〃	93	甕	口縁部くの字形に折れる 端部に面を持つ	口縁部ナデ 口縁部ハケ目の後指頭圧，胴部上位ハケ目	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2mmの砂粒を含む	外面，ススト付着 径，復元
〃	〃	94	甕		口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目 胴部上位指頭圧	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2～3mmの砂粒を含む	外面口縁～胴部 ススト付着
〃	〃	95	甕	口縁部くの字形に開く	口唇部ヨコナデ，頸部～肩部ハケ目 口縁上位斜のナデ，口縁中位～頸部ヨコナデ，頸部～肩部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2mm前後の砂粒を含む	外面，口縁部ススト付着 径，復元
〃	〃	96	甕E_1		口縁部ヨコナデ，胴上位ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴上位ハケ目，頸部指頭圧	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2～3mmの砂粒を含む	径，復元
〃	〃	97	甕E_1	口縁部先細り	口唇部～頸部ハケ目の後指頭圧，胴部上位ハケ目 ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明黄褐色 (10YR 6/6)	1～2mmの砂粒を含む	外面，ススト付着 径，復元
〃	〃	98	壺	丸底	ヘラミガキ ヨコナデ	良好	一部淡橙 (5YR 8/3) 明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	1mm程度の砂粒を含む	外面，ススト付着
25	〃	99	壺B_2		口唇部ヨコナデ，口縁部ナデ，胴部上～中位ハケ目 口縁部ハケのあとナデ，胴部上位ナデ，胴部中位ハケ目	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	明黄褐 (10YR 6/6)	1mm前後の砂粒と黒雲母を含む	径，復元
〃	〃	100	高杯A_2		ナデ，(屈曲部と口唇部ヨコナデ) ナデ（口縁部ヨコナデ）	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1～2mmの砂粒を含む	径，復元
〃	〃	101	壺C_1		ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2mmの砂粒を含む	径，復元
〃	〃	102	胴部 底部	平底	ハケ目，底部指頭圧 ハケ目	良好	橙 (5YR 6/6) 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4) 灰黄 (2.5Y 5/2)	1mmの砂粒を含む	外面，ススト付着
〃	〃	103	壺C_1	丸底	ハケ目 胴部上～下位ハケ目，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4) 褐灰 (10YR 4/1)	黒雲母，石英と微粒子を含む	外面，胴部下位～底部 ススト付着
〃	〃	104	底部	平底	カキアゲ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2mmの砂粒を含む	
〃	〃	105	〃	〃	ハケ目，底部ハケ目の後ナデ ナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	2～3mmの砂粒を含む	
〃	〃	106	〃	〃 重心を体部下半に持つ	ハケ目 ケズリ(板状)	良好	橙 (5YR 6/6)	灰黄 (2.5Y 6/2) にぶい黄橙 (10YR 6/3)	砂粒を含む	外面，一部ススト付着と黒変あり
〃	〃	107	〃	〃	ヘラナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰 (5Y 4/1)	砂粒を含む	外面，黒変 底径，復元
〃	〃	108	〃	〃	ナデ 剝離の為不明	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～4mmの砂粒多く含む	底径，復元
〃	〃	109	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	1～2mmの砂粒と石英を含む	外面，底部黒変 底径，復元
〃	〃	110	〃	〃	胴部下位ハケ目からナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2mmの砂粒を含む	内面，ススト付着
〃	〃	111	〃	〃	ナデ ナデ，底部指頭圧	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2mm前後の砂粒を含む	
〃	〃	112	〃	〃	ナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～2mmの砂粒を含む	底径復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
25	SA7	113	底部	平底	ナデ ナデ	良好	浅黄 (2.5Y 7/3)	灰白 (2.5Y 8/2)	2～4mmの砂粒多く含む	底径，復元
〃	〃	114	〃	〃	ヘラナデ，指頭圧 ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	褐灰 (10YR 4/1)	2～5mm前後の砂粒を含む	外面，底部の一部ススト付着。底径，復元
〃	〃	115	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1～2mmの砂粒多く含む	外面，ススト付着 底径，復元
〃	〃	116	〃	あげ底	ナデ，底部近く指頭圧 ナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 褐灰 (5YR 4/1)	1～3mmの砂粒を含む	
〃	〃	117	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰白 (5Y 7/1)	1～2mmの砂粒多く含む	外面，部分的にススト付着
〃	〃	118	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい橙 (5YR 7/3) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒褐灰 (10YR 4/1)	1～2mmの砂粒を含む	
〃	〃	119	〃	〃	ハケ目の後ナデ，底部ナデ，底部ハケで削りあげ ハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	2mm前後の砂粒を含む	
〃	〃	120	〃	〃	ハケの後ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	橙 (7.5YR 7/6)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1～2mmの砂粒を含む	外面，ススト付着
〃	〃	121	〃	〃	ヨコナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3mmの砂粒を含む	内面一部ススト付着
〃	〃	122	〃	平底	ハケ目 不明	良好	にぶい橙 (5YR 6/4) 浅黄橙 (10YR 8/3)	灰白 (10YR 8/2)	1～2mmの砂粒多く含む	
〃	〃	123	〃	平底	ナデ ナデ	良好	灰黄 (2.5Y 7/2)	灰白 (2.5Y 8/2)	1mm程度の砂粒含む	
〃	〃	124	〃	あげ底	胴部下位～底部ナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	褐灰 (10YR 4/1)	1～2mmの砂粒を含む	内面，胴部下位～底部ススト付着
〃	〃	125	〃	脚台	ヨコナデ，脚台内面（上位ヨコナデ，中位ヘラナデ） ナデ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	灰 (7.5Y 5/1)	1mm前後の砂粒と石英を含む	底部の裏，黒色
〃	〃	126	〃	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1mm程度の砂粒を含む	内面，ススト付着
〃	〃	127	〃	平底	ナデ ナデ	良好	にぶい橙 (7.5Y 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	砂粒を含む	底径，復元
〃	〃	128	〃	丸底	ナデ一部ハケ目 ハケ目，底部指頭圧	良好	橙 (2.5YR 6/6) 褐灰 (10YR 4/1)	黄灰 (2.5Y 7/1) 灰 (5Y 5/1)	砂粒を含む	
〃	〃	129	〃	丸底	胴部中位ハケ目，胴部下位～底部ナデ 〃　〃　タテナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～2mmの砂粒を含む	胴部中位ススト付着
〃	〃	130	〃	〃	ナデ，底部指頭圧	やや不良	橙 (5YR 7/6)	黄灰 (2.5Y 5/1) 浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3mmの砂粒を含む	
26	〃	131	高杯	口縁端部にわずかに面を持つ	杯口縁部ヨコナデ，杯上位～底部ヘラミガキ一部ナデ ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 一部褐灰 (10YR 4/1)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 一部黄灰 (2.5Y 5/1)	微粒子を含む	径復元
〃	〃	132	高杯A_1		内外とも不明	不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	0.5～2mmの砂粒を含む	
〃	〃	133	高杯B_1		杯口縁部ヨコナデ，杯底部ヘラミガキ 杯口縁部ハケ目，杯底部ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 灰黄 (2.5Y 7/2)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	0.5mm前後の細砂粒と石英多く含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
26	SA7	134	高杯A_2		風化の為不明	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～2㎜前後の砂粒多く含む	
〃	〃	135	高杯脚b_1		脚上位指頭圧,脚筒部ナデ,脚裾部折り返しによる隆起あり 脚上位～裾部ナデ,杯底部ナデ	良好	淡橙(5YR8/4) 浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	1㎜前後の砂粒含む	外面，スス付着
〃	〃	136	高杯脚		脚筒部ヘラケズリ	不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.5～1㎜前後の砂粒含む	
〃	〃	137	高杯脚a_1		ヘラケズリ 脚裾部ハケ目	やや不良	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜前後の細砂粒多く含む	
〃	〃	138	高杯脚		ヘラミガキ ケズリ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒を含む	
〃	〃	139	高杯脚a		脚筒部～脚裾部ヘラミガキ 〃 〃 ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜前後の砂粒含む	
〃	〃	140	高杯脚a_2		脚筒部～脚裾部ヘラミガキ 脚筒部ヘラ削り,脚裾部ハケ目,脚筒上位指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	1㎜弱の砂粒を含む	外面，脚裾スス付着
〃	〃	141	高杯脚		風化の為不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	杯底部：黄灰褐(2.5YR5/1) 浅黄橙(7.5YR8/4)	0.5～3㎜砂粒含む	
〃	〃	142	高杯脚c_2		ハケ目	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	砂粒含む	
〃	〃	143	高杯脚c_2	穿孔をもつ	ナデ シボリ	良好	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	長石･石英を含む細砂粒	
〃	〃	144	器台		脚筒部ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒含む	
〃	〃	145	壺D	口縁端部直立	口縁上部ヨコナデ，口縁中ほどから頸部ヘラナデ 口縁上部ヨコナデ,口縁中ほどから下部ハケ目 ,頸部からナデ	良好	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	1㎜前後の細砂粒	径，復元
〃	〃	146	壺D_2	口縁部わずかに内弯	口縁端部ヨコナデ,口縁中ばから頸部にかけてハケ目の後，タテにヘラミガキ	良好	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	砂粒を含む	
〃	〃	147	壺H_1		口縁部ナデ,胴部中位～底部ナデ,胴部中位指頭圧 口縁部ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	148	壺F_1	口縁部わずかに内弯	ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	底径，復元
〃	〃	149	壺H_1		ヘラミガキ，底部中央にクボミ 風化の為不明	良好	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の石英を多く含む	
〃	〃	150	壺G_1		口唇部ヨコナデ，口縁部～底部ナデ 口縁部～胴部下位ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜前後の砂粒含む	外面,胴部下位黒斑
〃	〃	151	壺F_2	口縁部わずかに内弯	口縁部ヨコナデ,口縁部～肩部ハケ,肩部～底部ナデ 風化の為不明	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (2.5YR7/4)	0.5～1.5㎜の細砂粒	
〃	〃	152	鉢A_1		口縁部ヨコナデ，胴部～底部にかけてヘラケズリ 口縁～胴部上位ヨコナデ，胴部中位～底部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒を含む	
〃	〃	153	器台		脚筒部ナデ，脚裾部ヨコナデ ナデ	良好	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1㎜前後の砂粒と石英を含む	内面脚裾部～外面裾部にかけて黒変径，復元
〃	〃	154	器台C_2		ナデ ナデ	良好	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	1㎜程度の砂粒と細砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
26	SA7	155	器台A_1	三角の透かしを持つ	受部〈不明 ナデ 脚部〈ハケ目 ナデ 裾部〈ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～2㎜前後の砂粒含む	
27	〃	156	鉢D_1	口縁部先細り	口縁部ナデ，中位～底部指頭圧 口縁端部ナデ，その他ハケ目	良好	にぶい橙(10YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	細砂粒を含むを含む	外面底部と内面下位一部黒変
〃	〃	157	鉢E_1		ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	明黄褐 (10YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	1～2㎜前後の砂粒含む	内，外面黒変
〃	〃	158	鉢F_1		ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙 (10YR8/4)	明黄褐(10YR7/6) 黄灰(2.5Y5/1)	1㎜程度の砂粒を含む	外面，底部とそのまわりが黒変
〃	〃	159	鉢F_2		口縁部ヨコナデ,胴部上～下位ヘラナデ,底部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部上位～底部ナデ	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	明黄褐(10YR6/6) 底部褐灰(5YR5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	160	鉢E_3		口縁部ナデ，胴部ハケ目 ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	灰黄(2.5Y6/2) 橙(7.5YR7/6)	1㎜前後と3～5㎜の砂粒を含む	外面,胴部中位スス付着 両面に黒斑あり 径，復元
〃	〃	161	鉢H		ハケ目 ハケ目	やや不良	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	外面，スス付着
〃	〃	162	鉢		ナデ，胴部中位指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙(2.5Y7/3) (5Y6/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	砂粒を少量含む	
〃	〃	163	底部		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR8/4)	橙(7.5YR7/6) にぶい黄橙(10YR7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	164	鉢I		ナデ ナデ	良好	にぶい橙(7.5YR7/4) 黄(2.5Y7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/6)	1㎜程度の砂粒を含む	
〃	〃	165	〃		口縁部ヨコナデ，胴部上～下位ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上～下位ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	微粒子を含む	内面，胴部下位黒変 径，復元
〃	〃	166	〃		ナデ ナデ	良好	黄橙(10YR8/6) (5YR6/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.5～3㎜の砂粒を含む	外面，中位～底部黒変している部分あり
〃	〃	167	底部		ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y6/2)	1～2㎜の砂粒を含む	内面，底部スス付着 底径，復元
〃	〃	168	ミニチュア		ナデ うず状のナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜前後の砂粒含む	外面，黒変している部分あり
28	SA8	175	甕C		口縁部ヨコナデ,ハケ目後ナデ,頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ	良好	黄橙(7.5YR7/6) ～ 黒色	黄橙(7.5YR7/6) ～ 黒色	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，口縁～胴部スス付着 内，胴部下位スス付着
〃	〃	176	甕B_1	張り少ない	口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧 口縁部ヨコナデ,胴部ナデ,口縁・底部指頭圧	良好	にぶい褐 (7.5YR8/4)	にぶい褐(7.5YR6/4) 褐灰(10YR4/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外面と内面胴部下位にスス付着
〃	〃	177	甕		ナデ ナデ	やや不良	暗灰黄 (2.5Y4/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	1～2㎜の砂粒を含む	外面と内面胴部上位にスス付着
〃	〃	178	甕B_1		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部タテ方向のナデ	良好	明黄褐(10YR7/6) 底部付近灰黄(2.5Y6/2)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	179	甕		口縁部かきあげ後ヨコナデ,胴部ナデ 口縁部ヨコナデ後指頭圧	良好	浅黄橙(7.5YR8/6) 褐灰(5YR4/1)	明黄褐(10YR7/6) 褐灰(5YR4/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外，黒変 (タテ方向，帯状)
〃	〃	180	〃	体部の張り少ない	口縁部ナデ，胴部ナデ？ 口縁部ナデ，胴部ナデ？	良好	淡赤橙(2.5YR7/4) にぶい黄橙(10YR7/4)	淡黄橙(5YR8/3) にぶい橙(7.5YR7/4)	0.5～2㎜の砂粒多含	径，復元 外,口縁部にスス付着
〃	〃	181	〃	口縁部大きく外反	風化 ナデ？	やや不良	橙 (5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/3) 橙(7.5YR7/6)	0.5～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
28	S A 8	182	甕B_1		頸部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙（7.5YR8/4） 底部付近褐灰（5YR 4/1）	橙（5YR 7/6）	2～3㎜の砂粒を含む	外，胴部スス付着
〃	〃	183	壺B_1		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	にぶい褐（10YR 7/3）	1～2㎜の砂粒を含む	外，口縁と胴部下位にスス付着
29	〃	184	底部	あげ底	ハケ目，底部指頭圧 ナデアゲ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/3）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	0.5～2㎜の砂粒多含 3㎜前後の小石まばらに含む	外，黒斑 外，内スス付着
〃	〃	185	〃	あげ底	ハケ目，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい褐（7.5YR5/3） にぶい黄橙（10YR 7/3）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	0.5～2.5㎜の砂粒多含	
〃	〃	186	〃	平底	タテ方向の浅いハケ目，底部指頭圧 ハケ目後ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙（10YR 7/3）	灰黄褐（10YR 5/2） 浅黄橙（10YR 8/4）	0.5～2㎜の砂粒多含	
〃	〃	187	〃	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	やや不良	にぶい黄橙（10YR 8/4）	橙（7.5YR8/6）	1～2㎜の砂粒を含む	内，外とも風化が激しい 内，底部付近スス付着
〃	〃	188	高杯脚		脚筒部タテ方向のナデ，脚裾部ヨコナデ ナデ	良好	橙（5YR 7/6）	浅黄橙（7.5YR8/4）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	189	高杯脚		タテ方向のヘラミガキ ？	良好	にぶい橙（7.5YR7/4）	褐灰（10YR 4/1）	3㎜前後の小石を含む	
〃	〃	190	高杯脚a_1		ヘラミガキ ヘラケズリ後ナデ	良好	橙（5YR 7/6）	橙（7.5YR7/6）	1～3㎜の小石をまばらに含む	
〃	〃	191	器台	三角の透かしを持つ	頸部ヨコナデ，脚部は風化（一部ヨコナデ） 脚裾部ヨコナデ，他不明，頸部指頭圧	良好	褐灰（10YR 5/1） 浅黄橙（10YR 8/4）	褐灰（10YR 5/1） 浅黄橙（7.5YR8/4）	1㎜以下の砂粒を含む	外，杯部と脚部にわずかにスス付着
〃	〃	192	器台C_1		脚上位タテ方向のハケ目，脚下位ヨコナデ ヨコナデ	やや不良	浅黄橙（10YR 8/4）	にぶい黄橙（10YR 7/4）	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元 外，脚上位スス付着 内，スス付着
〃	〃	193	高杯脚		ナデ，脚裾部ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（10YR 8/4）	精良	径，復元
〃	〃	194	高杯脚a_2		タテ方向のヘラミガキ ナデ	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR 7/6）	雲母を含む	径，復元
〃	〃	195	鉢F_3		口縁部ヨコナデ，胴上位ハケ目後ナデ，胴下位ハケ目 口縁部ヨコナデ	良好	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	1㎜前後の砂粒多含	径，復元 外，胴部にスス付着
〃	〃	196	壺D_4		ハケ目後ナデ，底部指頭圧 ナデ，全体的に指頭圧	良好	にぶい黄橙（10YR7/3～7/4）	にぶい黄橙（10YR 7/4） （5Y 灰 5/1）	0.5～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	197	壺D_3		ナデ・頸部ヨコナデ ナデ，頸部指頭圧	良好	橙（7.5YR8/6）	明黄褐（10YR 6/6）	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	198	壺D_2		口縁部ヨコナデ，脚上位タテ方向のハケ目，脚下位タテ方向のミガキ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，頸・底部指頭圧	良好	明黄褐（10YR 6/6）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元 外，胴部にスス付着
〃	〃	199	鉢A_3		口縁部強くヨコナデ，胴部ハケ目後ナデ，脚部ナデ，脚裾部ヨコナデ，頸部指頭圧 口縁部ナデ，胴部ナデ後ミガキ？脚部内面ヨコミガキ	良好	にぶい黄橙（10YR7/2～7/3）	にぶい黄橙（10YR 6/3） 黒褐色（2.5Y 3/1）	1㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	200	鉢		口縁ヨコナデ，口縁下位ナデ 口縁ヨコナデ，口縁下位ナデ	良好	黄橙（10YR 8/8）	にぶい橙（5YR 7/4）	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元 外，スス斑付着 内，口縁部スス斑付着
〃	〃	201	鉢H_2		ナデ？（板状工具） ナデ	良好	明黄褐（10YR 6/6）	明黄褐（10YR 6/6）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	202	鉢A_2		口縁部ナデ，頸部ヘラケズリ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/4）	1～2㎜の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
29	S A 8	203			風化（ミガキの痕跡）底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	橙（5YR 6/6）	橙（5YR 6/6）	細砂粒を含む 黒雲母	外，胴部上位スス付着
30	S A 10	204	甕	刻目突帯 口縁端部に面を持つ	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 ハケ目，頸部指頭圧	良好	橙（7.5YR7/6）	浅黄橙（7.5YR8/4）	1～2㎜の砂粒を含む	外，胴部スス付着 径，復元
〃	〃	205	〃		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ヨコ方向のハケ目	良好	浅黄橙（10YR 8/3）	浅黄橙（10YR 8/3）	2㎜前後の砂粒を含む	外，胴部スス付着
〃	〃	206	〃		ヨコナデ，口縁のつなぎ目指頭圧 ヨコナデ	やや不良	橙（5YR 7/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	207	〃	口縁部先細り	全体にナデ 口縁部ナデ，頸部指頭圧，胴部ハケ目	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	浅黄橙（7.5YR8/4）	0.5～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	208	〃		口頸部ヨコナデ，胴部ナデ 〃　ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR 7/6）	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	209	壺	口縁部大きく外反	ナデ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	210	〃		口縁部ヨコナデ，口縁下ハケ目 口縁部ヨコナデ，口縁下指頭圧	良好	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	211	〃		全体，ヨコナデ 全体，ヨコナデ	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR 7/6）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	212	壺C_1		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/4）	にぶい黄橙（10YR 7/4）	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	213	壺		胴部上位ハケ目，下位ナデ，指頭圧 下位，指頭圧	良好	黄橙（7.5YR7/8）	橙（7.5YR7/6）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	214	壺A_2		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい橙（5YR 7/4）	にぶい橙（5YR 7/4）	砂粒を含む	
〃	〃	215	壺A		ナデ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	浅黄（2.5Y 8/4）	1㎜程の砂粒を含む	
〃	S A 9	216	甕		風化のため不明	やや不良	黄橙（7.5YR8/8）	黄橙（7.5YR8/8）	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	217	〃		ナデ ナデ	良好	黄橙（10YR 8/8）	黄橙（10YR 8/6）	0.5～1㎜の砂粒を含む	外，スス付着
31	S A 10	218	高杯A_2	穿孔を持つ	杯部から脚部まで一定方向でないヘラミガキ 杯部ヘラミガキ，脚部ヨコ方向のケズリ←	良好	杯部橙（5YR 8/6） 脚部橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR8/6）	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	219	高杯A	口縁部先細り	杯部ヘラナデ？，脚部ナデ，全体に風化 杯部ナデ，脚部ケズリ→	良好	橙（5YR 8/6）	橙（5YR 8/6）	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	220	高杯A_2		ヨコ方向に所々斜のヘラミガキ，口唇部ヨコナデ ヨコ方向その後タテ方向のヘラミガキ	良好	橙（5YR 8/6）	橙（5YR 8/6）	精良	
〃	〃	221	高杯B_2		ハケ目のあとナデ ナデ，指頭圧	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	222	高杯A_2		口縁端部ヨコナデ，口縁部・杯底部ヘラミガキ 風化（ミガキ？）	やや不良	橙（5YR 8/6）	橙（5YR 8/6）	2～5㎜の砂粒を含む	
〃	〃	223	〃		口縁部ヨコ方向のヘラミガキ，杯底部タテ方向のヘラミガキ 口縁部ミガキ後ナデ，杯底部ヘラミガキ	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR7/6～6/6）	砂粒，黒雲母を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
31	SA10	224	高杯脚a_1		脚筒部風化，脚裾部ヨコナデ 脚筒部ケズリ←	不良	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	225	〃		タテ方向のヘラミガキ 脚筒部ケズリ，脚裾部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	砂粒，石英を含む	
〃	〃	226	〃		ミガキの痕跡残る ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	227	〃		タテ方向のヘラミガキ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	砂粒を多含	
〃	〃	228	器台		粗いタテ方向のミガキ 指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	砂粒を多含	
〃	〃	229	高杯脚c_1		タテ方向のヘラミガキ シボリ	良好	浅黄橙 (2.5Y 8/3)	灰白 (2.5Y 8/2)	砂粒，石英を含む	外，黒斑あり
〃	〃	230	〃		ナデ 脚部指頭圧，ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1~2㎜の砂粒,石英を含む	
〃	〃	231	高杯脚a_2	穿孔を持つ	タテ方向のヘラミガキ 端部から全体ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	砂粒，石英を含む	
〃	〃	232	〃	穿孔を持つ	タテ方向のヘラミガキ，端部ヨコナデ 上位ヨコ方向のハケ目，下位ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	砂粒，石英を含む	
〃	〃	233	高杯脚a1		ヘラミガキ 脚筒部ナデ，脚裾部ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	石英，砂粒を含む	径，復元
〃	〃	234	脚部		上位タテ方向のナデ,下位～端部ヨコナデ ヘラ状のものでのナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	細砂粒を含む	内，黒斑あり 径，復元
〃	〃	235	壺		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	236	壺		ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR 6/6)	1㎜前後の砂粒を含む	口縁端部にスス付着 径，復元
〃	〃	237		口縁部外上方に伸び，先細り	口縁端部ヨコナデ，口縁～胴部ナデ 全体にナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	238			胴部ハケ目，胴部下位ヘラミガキ 全体にハケ目	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR 6/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	239			口唇部ヨコナデ，口縁ヨコ方向のヘラミガキ 口縁部ヨコ方向のヘラミガキ	良好	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR 6/6)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	240			口唇部ヨコナデ，口縁ヨコ方向のヘラミガキ 口縁ヨコ方向のヘラミガキ	良好	にぶい橙 (5YR 6/4)	橙 (5YR 7/6)	精良	径，復元
〃	〃	241	鉢A_2		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
32	〃	242	壺F_1	口縁部先細り	ヨコ方向の細かいヘラミガキ ヨコ方向の細かいヘラミガキ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	精良	径，復元
〃	〃	243	〃	口縁部内弯	口縁部から胴部上位ミガキ,胴部下位ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	橙 (5YR 6/6) (にぶい黄橙 (10YR 7/3))	にぶい橙 (7.5YR6/4)	砂粒，雲母を含む	径，復元
〃	〃	244	壺H		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4) (にぶい橙 (5YR 7/4))	浅黄橙 (10YR 8/3) 下位～底部灰 (5Y 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
32	SA10	245	壺H		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜程の砂粒を含む	
〃	〃	246	〃		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄 (2.5Y 8/3)	1~2㎜の砂粒を多く含む	径，復元
〃	〃	247	〃		ナデ ナデ	良好	淡黄 (2.5Y 8/3)	淡黄 (2.5Y 8/3)	1㎜程の砂粒を少量含む	径，復元
〃	〃	248	壺		全体にナデ 全体にハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	にぶい黄橙 (5YR 8/4)	0.2~1㎜の砂粒を含む	
〃	〃	249	長頸壺	口縁端部内傾	風化（タテ方向のヘラミガキ？） 口縁上位ナデ，下位ケズリ →	良好	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	250	器台E		内，外面とも，風化のため不明	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	SA9	259	高杯D	口縁端部に面を持つ	杯部ナデ，脚部との境指頭圧 杯部ハケ目後ナデ，脚部指頭圧・シボリ	良好	明黄褐 (10YR 5/6)	明黄褐 (10YR 5/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外，黒斑
〃	〃	260	高杯脚a_1		ヨコ方向のヘラミガキ（単位が細い） 脚筒部ヘラケズリ ←，脚裾部ヨコナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1㎜程の砂粒を含む	
33	SA11	261	甕B_1		口縁部ヨコナデ,胴部ナデ,底部指頭圧 口縁部ヨコナデ，口縁下指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	262	甕D_1		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	0.5~3㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	263	甕		ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	264	甕F	重心を体部下半に持つ	タテのハケ目 ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～5㎜の砂粒を含む	外，胴中部スス付着 径，復元
〃	〃	265	〃	体部は長胴	タテのハケ目 内面風化のため不明	やや不良	上位 浅黄橙 (7.5YR8/4) 下位 浅黄 (2.5Y 8/3)	橙 (5YR 7/6)	0.5~3㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	266	底部	平底	底部指頭圧，ナデ 指頭圧，上位ハケ目	良好	淡黄 (2.5YR8/4)	淡黄 (5YR 8/3)	0.5~2㎜前後の砂粒を含む	内，部分的にスス付着
〃	〃	267	高坏A_1		ミガキ ミガキ	良好	橙 (2.5YR6/6)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	268	〃		ミガキ ミガキ	良好	橙 (2.5YR6/6) (にぶい黄橙 (10YR 7/4))	橙 (2.5YR6/6)	0.5㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	269	高坏B_2		風化 風化	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	270	壺A_1		風化 剝離	やや不良	黄橙 (7.5YR8/8)	黄灰 (2.5YR8/1)	0.5~1㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	271	高坏脚		風化のため不明 指ナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	272	〃		タテ方向のミガキ ヨコのケズリ ←	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄 (2.5Y 8/3)	0.5~1㎜の砂粒を含む	スス付着 径，復元
〃	〃	273	壺D_2		ヘラミガキ，口縁端部ヨコナデ ヘラミガキ	良好	黄橙 (10YR 8/8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	外,口縁上位にスス付着 径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
33	S A 11	274	小型壺		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 全体にナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	275	底部	丸底	タテ方向のハケ目	良好	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR 6/6)	0.5～1㎜の砂粒を含む	
〃	〃	276	壺		タテ方向のヘラミガキ ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	黄橙 (10YR 8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	内，黒斑あり 径，復元
34	S A 12	280	甕B_2	口縁上半で外反	口縁部ヨコ方向のハケ目，胴部ハケ目後ナデ，口縁・底部指頭圧 口縁部ヨコ方向のハケ目，胴部ハケ目後ナデ，口縁・底部指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4) 浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4) 浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を多く含み 2～3㎜の砂粒も含む	径，復元 外，胴付スス付着 内，底部スス付着
〃	〃	281	甕B_1	口縁上半で外反	口縁上位ヨコナデ，他ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4) 灰黄 (2.5Y 7/2)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～4㎜の砂粒を含む	外，全面スス付着 内，底部，黒斑 スス付着
〃	〃	282	甕F_1		口縁上位ヨコナデ，口縁下位ハケ目，胴部ハケ目 ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～4㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	283	甕	刻目突帯	ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	284	〃		口縁部ヨコナデ，胴部上位ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上位ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR7/6) 浅黄橙 (10YR 8/4)	1～4㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	285	〃		口縁部ヨコナデ，胴部上位ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上位ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 内，胴部上位 部分的に黒斑
〃	〃	286	甕F_1	口縁部大きく外反	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目後ナデ ヨコナデ	良好	灰黄褐 (10YR 6/2) 橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	287	鉢 C	口縁部内弯	ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4) 褐灰 (10YR 5/1)	浅黄橙 (7.5YR8/4) 黄灰 (2.5Y 5/1)	1～5㎜の砂粒，小石を含む	外，スス付着 内，黒変
〃	〃	288	底部	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい橙 (5YR 6/4) 橙 (5YR 7/6)	にぶい橙 (5YR 7/4) 浅黄 (2.5Y 7/3)	1～3㎜の砂粒を含む	外，部分的に黒変
〃	〃	289	甕	刻目突帯	ナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～2㎜の砂粒多含	
〃	〃	290	〃	〃	ナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	291	〃	〃	ナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	
35	〃	292	壺B_2		ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部上位ナデ，指頭圧	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4	1～4㎜の砂粒を含む	
〃	〃	293	〃		頸部ヨコナデ，胴部上位ハケ目後ナデ 頸部ヨコナデ，胴部上位ナデ	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	294	壺A_1		ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～1㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	295	壺A_1	口縁部直線的に開く	ナデ ナデ	良好	黄橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR 7/6)	0.5～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	296			ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (5YR 7/4) 淡黄 (2.5Y 8/3)	1～1.5㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	297	壺		ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	浅黄 (2.5Y 7/3) 浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～2㎜の砂粒を含む	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
35	S A 12	298	壺B_2		ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6) 浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，内うすく黒変
〃	〃	299	〃		ナデ ナデ	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	300	壺		ハケ目 ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	301	底部	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4) 灰白 (7.5YR9/2)	浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～2㎜の砂粒多含	径，復元 外，黒変
〃	〃	302	〃	平底	底部上位ヘラナデ，底部下位ナデ ヘラナデ	良好	明黄褐 (2.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5～3㎜の砂粒を含む	内，スス付着
〃	〃	303	〃	平底	ヘラナデ 底部上位ハケ目，底部下位ナデ・指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 7/6) 橙 (2.5YR7/6)	浅黄 (2.5YR7/4) 橙 (2.5YR7/6)	1～6㎜の砂粒，小石を含む	内，黒変
〃	〃	304	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 底部上位ハケ目，底部下位ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3～7/4)	明褐灰 (5YR 7/2)	1～4㎜の砂粒を含む	内，スス付着
〃	〃	305	〃	あげ底	ヨコナデ，底部指頭圧 ヘラナデ	良好	橙 (5YR 6/6)	橙 (2.5YR6/6)	0.5㎜前後の砂粒を含む	外，黒変
〃	〃	306	〃	あげ底	底部斜方向の指頭圧	良好	橙 (2.5YR7/6) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	——	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	307	〃	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい橙 (5YR 7/4) 浅黄橙 (10YR 8/3)	橙 (2.5YR6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，黒変
〃	〃	308	〃	丸底	ハケ目後ナデ ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4) 橙 (5YR 7/6)	0.5～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	309	〃	丸底様平底	ヘラナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3) にぶい橙 (5YR 7/4)	0.5～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	310	高坏A_2	口縁部わずかに外反	口唇部ヨコナデ，他，タテ方向のヘラミガキ 杯部ヘラミガキ，脚筒部ナデ，脚裾部ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR 8/4)	微粒子を含む	
〃	〃	311	高坏脚b_2	脚端部広がる	ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/6)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	312	高坏脚c_3		ナデ？（磨耗） ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	313			ヘラミガキ ヨコナデ	良好	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	314	高坏脚a_3	穿孔を持つ	調整不明 脚筒部ナデ，脚裾部ハケ目？	良好	橙 (5YR 7/6)	杯部褐灰 (10YR 5/1) 脚筒部橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	315	高坏脚		脚筒上位ミガキ後ナデ，脚筒下位ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (10YR 4/1)	細砂粒を含む	外，脚筒上位スス付着(部分的)
〃	〃	316	〃		脚筒部タテ方向のヘラミガキ，脚裾部ナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	
〃	〃	317	器台B	三角の透かしを持つ	口縁上位ヨコナデ，口縁下位ハケ目，頸部ハケ目後ミガキ，脚筒部タテミガキ，脚裾部ヨコミガキ 口縁部ヘラミガキ後ナデ，脚筒上位ナデ，脚筒下位ハケ目，脚裾部ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/4) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	318	高坏脚		ヨコ方向のミガキ 脚筒部ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	

図名番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
35	S A 12	319	器台		ハケ目後ナデ ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	320	壺		ヘラミガキ（風化） ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～3㎜の砂粒多含	
36	〃	321	鉢E$_2$		口縁部ヨコナデ，他ナデ 口縁部ヨコナデ，他ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1~10㎜の砂粒，小石を含む	
〃	〃	322	壺E	体部下半に稜を持つ	胴部上位ミガキ，胴部下位ミガキ 胴部上位ナデ，胴部下位ハケ目	良好	にぶい褐 (7.5YR5/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，胴部上位黒塗
〃	〃	323	鉢C		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目，底部ナデ 口縁部ナデ，胴部ハケ目	やや不良	橙 (5YR 7/6) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～3㎜の砂粒多含	
〃	〃	324	ミニチュア		ナデ，底部指頭圧 ナデ，胴部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	325	壺		ミガキ ミガキ	良好	橙 (5YR 7/6) 浅黄橙 (10YR 8/4)	橙 (2.5YR7/6) にぶい橙 (7.5YR7/4)	1～2㎜の砂粒を含む 黒雲母	径，復元 内，黒変
〃	S A 13	332	鉢B		ヨコ方向のヘラミガキ ヨコ方向のヘラミガキ	良好	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	333	壺D$_2$		ヘラミガキ ハケ目のあとヘラナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	砂粒を含む	径，復元
〃	〃	334	壺		ヘラミガキ ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外，黒斑 径，復元
〃	〃	335	鉢A$_1$		丹塗磨研 丹塗磨研	良好	赤褐 (5YR 4/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	1㎜前後の砂粒を含む	S A14と接合 径，復元
〃	〃	336			ナデ，指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	337	底部	平底，底面中央に凹あり	ハケ目後ナデ ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR6/4)	黄灰 (2.5Y 4/1)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	338	鉢		ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6) にぶい黄 (2.5Y 5/3)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	339	底部	丸底様平底	ナデ ナデ，底面指頭圧	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (10YR 4/1)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	340	〃	平底	ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	341	ミニチュア		ナデ，頸部指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	342	高杯脚部	穿孔をもつ	ヨコ方向のミガキ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	雲母，細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	343	〃		ナデ ナデ	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜程の砂粒を含む	径，復元
37	〃	344	甕B$_1$		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目，底部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	内部半面黒変 一部にスス付着
〃	〃	345	甕C		口縁部ナデ，胴部上位ハケ目，下位指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
37	S A 13	346	甕		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	口縁上位褐灰 (10YR 5/1) 口縁下位にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～3㎜の砂粒を含む	口縁部，胴部一部スス付着 径，復元
〃	〃	347	甕C	口縁上半で外反	口縁部ヨコナデ，胴部ナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	全体にスス付着 径，復元
〃	〃	348	甕	刻目突帯	ナデ ナデ，一部に指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	頸部灰黄 (2.5YR5/2) 胴部橙 (7.5YR7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	349	〃		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1㎜程の砂粒を含む	
〃	〃	350	〃		ナデ ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR6/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜程の砂粒を含む	
〃	〃	351	〃		タタキ ハケ目	良好	黄灰 (2.5Y 5/1)	灰黄褐 (10YR 5/2)	1㎜程の砂粒を含む	
〃	〃	352	〃	刻目突帯	突帯下にヨコ方向のハケ目 突帯下にヨコ方向のハケ目	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	353	〃		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ 口縁部ヨコナデ	良好	黄橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	354	甕B$_2$		口縁部ナデ，胴部ヘラナデ 口縁下指頭圧	やや不良	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	砂粒を含む	径，復元
〃	〃	355	底部	平底	ヘラナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/4) 暗灰黄 (2.5Y 5/2)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	356	〃	あげ底	ナデ，指頭圧 ナデ	やや不良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 (5Y 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	357	〃	平底	カキアゲ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	358	〃	平底	カキアゲ ナデ	やや不良	にぶい橙 (5YR 7/4)	灰オリーブ (5Y 5/2)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	359	〃	丸底様平底	カキアゲ ナデ	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	360	〃		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	内，半面にスス付着
〃	〃	361	〃	丸底	ハケ目 ハケ目，指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	362	脚台		ヨコナデ，脚裾部上位クモノス状ハケ目 ヨコナデ	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	363	高杯C		全体に風化著るしい，杯部と脚部のつなぎ目指頭圧 脚部内面ナデ	やや不良	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	粘土の輪積み痕明確に残る
〃	〃	364	鉢		口縁端部ヨコナデ，口縁部ヘラミガキ 口縁部ヨコ方向のヘラミガキ	良好	橙 (5YR 7/6)	黄橙 (10YR 8/6)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	365	鉢E$_2$		ハケ目 ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	366	器台A$_2$	三角の透かしを持つ	口縁部立ち上がりヨコナデ，杯体部ヘラナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/6)	1~3㎜の砂粒，石英を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
37	S A 13	367	鉢		口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	368	高坏脚		タテ方向のヘラミガキ ナデ	良好	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (5YR 7/6)	砂粒・雲母を含む	
〃	〃	369	〃		ナデ，頸部指頭圧 ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	370	高坏脚 b_1		ナデ，爪跡残る ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	黄橙 (10YR 8/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	371	高坏脚		脚筒部ナデ，脚裾部ハケ目，裾端部ヨコナデ 脚裾端部ヨコナデ	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元
38	S A 14	372	甕 B_1		口縁部ナデ，他不明（風化） 調整不明（風化）	やや不良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4) 褐灰 (2.5Y 5/2)	2～4㎜の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	〃	373	〃		口縁部ヨコナデ後指頭圧，胴上位ハケ目，胴下位かき上げ，底部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部右下がりのハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	内，黒変
〃	〃	374	〃	口縁端部に面を持つ	ヨコナデ，頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，胴部下位ススト付着
〃	〃	375	甕		ハケ目 ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，ススト付着
〃	〃	376	〃	口縁端部に面を持つ	口縁部ヨコナデ，頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ，頸部上位指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	明黄褐 (10YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，ススト付着
〃	〃	377	〃		口縁部ヨコナデ，口縁上位指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目後ナデ？	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明黄褐 (10YR 6/6)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，ススト付着 内，胴部下位ススト付着
〃	〃	378	甕 A_2		口縁部ハケ目，底部下位ハケ目 ナデ	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，口縁～胴部ススト付着
〃	〃	379	甕 F_1		調整不明（風化）	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外，内ススト付着
〃	〃	380	壺 C		ヨコナデ ヨコナデ，頸部下位指頭圧	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む 石英少量	径，復元
〃	〃	381	底部	丸底に近い小さな平底	ハケ目後ナデ？ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	0.5～3㎜の砂粒を含む 石英，長石，黒雲母少量	外，黒変
〃	〃	382	甕		口縁部ヨコ方向のハケ目，頸部指頭圧 口縁部ヨコナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	〃	383	〃		ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	〃	384	〃		ハケ目 風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	2㎜前後の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	〃	385	〃		調整不明（磨耗）	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
39	〃	386	高坏 B_1		口縁部ヨコナデ，口縁下位ヨコ方向のハケ目，杯底部ヘラミガキ，脚筒部タテ方向のヘラミガキ 口縁部ハケ目，杯底部ナデ，脚筒部タテ方向のヘラナデ	良好	橙 (7.5YR7/6) にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	細砂粒を含む。長石	外，内部分的に黒変
〃	〃	387	高坏 B_2		口縁上位ヨコナデ，口縁下位ヨコ方向のハケ目 杯底・脚筒部タテ方向のヘラミガキ 杯部ヘラミガキ，脚裾部ナデ，脚裾上位指頭圧	良好	橙 (5YR 7/6) 口縁部に浅黄橙 (10YR 8/3)	橙 (5YR 6/6) 口縁部にぶい黄橙 (10YR 7/3)	細砂粒を含む	外，部分的に黒斑

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
39	S A 14	388	高坏		口縁上位ヨコナデ，口縁部ハケ目後ヘラミガキ ハケ目後ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	淡黄 (2.5Y 8/3)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	389	〃		口縁部ヨコ方向のハケ目後ナデ，杯底部ヨコヘラミガキ ナデ	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	細砂粒を含む 石英多含	径，復元
〃	〃	390	〃		口唇部ヨコナデ，口縁～杯底部ヘラミガキ タテ方向のハケ目	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒，石英を多く含む	径，復元
〃	〃	391	〃		口縁上位ヨコナデ，口縁～杯底部ハケ目 ヘラミガキ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	392	高坏 A_2		口縁上位ヨコナデ，口縁下位タテヘラミガキ，杯底部ヨコヘラミガキ。 ヘラミガキ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4) 口縁部黄灰 (2.5Y 5/1)	黒 (2.5Y 2/1)	0.5～2㎜の砂粒を多含	径，復元
〃	〃	393	高坏		口唇部ヨコナデ，口縁部ヨコ方向のミガキ タテ方向のミガキ	良好	橙 (7.5YR7/6) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	394	〃	口縁部先細り	口縁上位ヨコナデ，口縁下位タテ方向のハケ目後ヨコナデ。 口縁上位ヨコナデ，口縁下位ヨコ方向のハケ目	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	395	〃		タテ方向のハケ目 ヨコ方向のハケ目	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	径，復元 外，ススト付着
〃	〃	396	〃		口縁ヨコ方向のハケ目，杯底部ハケ目後ヨコヘラミガキ タテ方向のヘラミガキ	良好	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	細砂粒を含む 石英多含	径，復元
〃	〃	397	高坏 A_2		杯部不明（風化），脚筒部タテ方向のミガキ 杯部ミガキ，脚筒部タテ方向のヘラナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	杯部橙 (5YR 8/6) 脚筒部橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	398	高坏脚 b_1		ナデ 脚筒部シボリ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	黄橙 (10YR 8/6)	0.5～1㎜の砂粒を含む 石英少量	
〃	〃	399	高坏脚 b_2		調整不明（風化） 脚上位シボリ，脚下位ナデ	やや不良	黄橙 (10YR 8/6)	黄橙 (10YR 8/6)	0.5～2㎜の砂粒多含 まれに4㎜の小石	径，復元
〃	〃	400	高坏脚 a_4		杯部ヨコ方向のハケ目，脚筒部タテ方向のハケ目 杯部ハケ目，脚筒部ナデ	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4) 淡橙 (5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒多含	
〃	〃	401	高杯脚		ヘラミガキ？（風化）	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	402	〃		脚筒上位タテ方向のヘラミガキ，脚筒下位不整方向のヘラミガキ。 ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	0.5～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	403	〃		調整不明（風化） 脚筒部タテ方向のヘラナデ	良好	淡橙 (5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	404	高坏 C		杯部上位ヨコナデ，他ナデ 杯部ヨコナデ，脚部ヨコ方向のハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4) 脚部浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～4㎜の砂粒多含	口径，復元 内，脚部に黒斑
〃	〃	405	高坏 B_2		調整不明（風化）	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4～8/4)	黄橙 (7.5YR8/8) 浅黄橙 (10YR 8/4)	0.5～1.5㎜の砂粒多含	
〃	〃	406	高坏 C_2		杯部ヘラミガキ，脚筒部不明（風化） 杯部ナデ，脚筒部ヘラケズリ	良好	橙 (5YR 7/6)	にぶい橙 (5YR 6/4)	細砂粒を含む	
40	〃	407	高坏脚 a_1		タテ方向のハケ目 ハケ目後ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR 6/6)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	408	高坏脚		ナデ ナデ	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	淡黄橙 (10YR 8/4) (5Y 灰 4/1)	0.5～1㎜の砂粒を含む 石英少量	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
40	S A 14	409	高坏脚 a_2		ヘラミガキ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	410	器台E	穿孔をもつ	口唇部ヨコナデ，口縁上位ナデ，口縁下位タテミガキ 口縁部ヨコ方向のミガキ，脚部ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6) にぶい黄 (2.5Y 8/3)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	411	器台D		タテ方向のヘラナデ 受部ヨコナデ，脚部ヨコ方向のハケ目	良好	黄橙 (10YR 8/6)	黄橙 (10YR 8/6)	1㎜前後の砂粒多含	口径，復元
〃	〃	412	壺 F_1		口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4) 黄灰 (2.5Y 4/1)	1㎜前後の砂粒多含	
〃	〃	413	鉢 A_2		口縁上位ヨコナデ，口縁下位ヨコ方向のハケ目，胴部斜方向のハケ目，底部ナデ？ 口縁部ヨコ方向のハケ目後ナデ，体部ナデ	良好	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	0.5～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	414	壺 F_2	体部に肩を持つ	調整不明（風化）	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1㎜前後の砂粒多含	外，底部に黒斑
〃	〃	415	壺 G_2		口縁上位ヨコナデ，口縁下位タテ方向のハケ目 体部ヨコ方向のハケ目後ヘラミガキ 口縁部ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 8/4) 灰黄褐 (10YR 4/2)	淡黄 (2.5Y 8/4) 灰黄褐 (10YR 4/2)	1㎜前後の砂粒を含む	外，底部黒変
〃	〃	416	鉢 A_2		丁寧なヨコナデ 丁寧なヨコナデ	良好	灰黄 (2.5Y 6/2) 黒褐 (2.5Y 3/1)	黒褐 (10YR 3/2) にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元 外内，ス？付着
〃	〃	417	鉢E		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1～2㎜の砂粒を含む 石英，黒雲母少量	径，復元
〃	〃	418	鉢 E_2		底部付近タテ方向のハケ目，他不明（風化） 口縁部ヨコナデ，体部不明（風化）	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4) 橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6) 橙 (5YR 7/6)	0.5～4㎜の砂粒多含	
〃	〃	419	鉢 D_2		調整不明（風化）	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	黄橙 (7.5YR 7/6)	0.5～3㎜の砂粒多含	
〃	〃	420	鉢G		口縁部ヨコナデ，体部ハケ目 ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	細砂粒を含む	
〃	〃	421	ミニチュア		ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，底部 部分的に黒斑
〃	〃	422	壺H		ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外，部分的に黒斑
〃	〃	423	ミニチュア		ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR 8/6)	橙 (7.5YR 8/6)	細砂粒を含む	
〃	〃	424	〃		ヨコナデ，底部付近タテ方向のナデ，底部指頭圧 ヨコナデ	良好	淡黄 (2.5Y 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	425			ナデ 口縁部上位ヘラナデ，口縁部下位削りぎみにナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	にぶい黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
41	S A 15	432	甕	口縁部直線的に外上方に伸びる	ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，口縁から胴部 下位までスス付着
〃	〃	433	甕 B_2	口縁部先細り	口縁上位ヨコナデ，下位タテ方向のハケ目，胴部ヨコ方向のハケ目。 口縁ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 8/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，口縁から胴部 半ばまでスス付着
〃	〃	434	甕 I_1		口縁上位ヨコナデ，口縁下位から胴部ハケ目 口縁ヨコナデ，口縁下位から胴部ハケ目	良好	黄橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 8/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，口縁部，胴部 最大径部にスス付着
〃	〃	435	甕 A_1		口縁部ヨコナデ 風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
41	S A 15	436	甕		口縁端部ヨコナデ 風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	437	〃	刻目突帯	口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目，突帯の上指頭圧 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，口縁とのつなぎ目指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	438	壺 B_2		口縁端部ヨコナデ，口縁から胴部ハケ目 口縁ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	口縁橙 (5YR 8/6) 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (5YR 7/6)	4㎜前後の砂粒を含む	
42	〃	439	壺 C_1		ハケ目 肩部，指頭圧	やや不良	橙 (5YR 8/6)	橙 (5YR 8/6)	細砂粒を含む	内，外面ともに 部分的にスス付着
〃	〃	440			ナデ ナデ	良好	淡橙 (5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	441	壺		ナデ 頸部ヨコナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	2~3㎜の砂粒・石英を含む	径，復元
〃	〃	442	底部	平底	ハケ目後ミガキ？ ハケ目	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	443	甕B	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4) 底部褐灰 (10YR 4/1)	1～2㎜の砂粒を含む	内外面ともにスス付着
〃	〃	444	〃	平底	ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	褐灰 (10YR 4/1)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	445	〃	尖底	風化のため不明 ナデ，底部指頭圧	良好	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1mm前後の砂粒・石英を含む	外，黒斑あり
〃	〃	446	〃	平底	ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	447	高杯脚		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	
〃	〃	448	鉢E		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	449	高坏脚		ヨコナデ ヨコナデ	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
43	S A 19	454	甕G		口縁部ナデ，胴部ハケ目，底部指頭圧 口縁部ナデ，胴部ハケ目，底部指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	1～2㎜の砂粒を含む	内，胴下位黒変
〃	〃	455	甕 A_1		口縁部ナデ，口縁下から胴部下位ハケ目，底部ナデアゲ 口縁部ヨコナデ，ハケ目	良好	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	外，全体スス付着 内，半面黒変
〃	〃	456	甕 A_2		口唇部ヨコナデ，口縁から胴部ハケ目，底部指頭圧 口縁部ヨコナデ	良好	にぶい褐 (7.5YR 6/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	外，全体スス付着 内，胴下位スス付着
〃	〃	457	甕 B_1		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 褐灰 (5YR 5/1)	2～3㎜の砂粒を含む	外，口縁から胴部 下位までスス付着
〃	〃	458	〃	器高33cm前後	口縁端部指頭圧，口縁から胴部ハケ目 口唇部ヨコナデ，口縁から胴部ハケ目	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	459	甕 B_2		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ナデ，胴部ハケ目	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	灰黄褐 (10YR 6/2)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	460	〃		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧 口縁部ヨコナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	0.5～2㎜の砂粒多含	外，口縁，胴部 最大径の部分スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
43	S A 19	461	甕 H	口縁部に指頭痕	指頭圧 指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 5/6)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
44	〃	462	甕		ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	463	〃		口縁上位ヨコナデ，下位ハケ目 ヨコナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	464	甕 A_2		指頭圧 不明	やや不良	明黄褐 (10YR 5/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	465	甕 B_1	口縁端部外反	口縁部ヨコナデ・指頭圧，胴部ナデ 口縁部ヨコナデ後指頭圧，胴部ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3) 灰褐 (5YR 5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	466	甕 F_2		口縁部カキアゲ 風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	467	甕		口縁端部ヨコナデ，口縁から胴部ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3) 灰褐 (5YR 5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	468	〃		口縁端部ヨコナデ，ハケ目 口縁端部ヨコナデ，斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明黄褐 (10YR 5/6)	2～5㎜の砂粒，石英を含む	径，復元
〃	〃	469	甕 A		口縁端部ヨコナデ，胴部とのつなぎ目指頭圧 ナデ，口縁部指頭圧	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	2㎜程の砂粒・細砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	470	甕 A_2		口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ，胴部不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	471	甕 E_1		口唇部ナデ，ハケ目 風化のため不鮮明，ハケ目？	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 灰褐 (5YR 5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	外，全体にスス付着。径，復元
〃	〃	472	甕		風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	473	〃		ナデ，指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	474	〃		タテ方向のハケ目 ヨコナデ	やや不良	橙 (7.5YR 8/6)	橙 (7.5YR 8/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	475	鉢		口縁端部ヨコナデ，体部ハケ目 ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	内，外，口縁部スス付着 径，復元
45	〃	476	甕		ナデ？ 口縁部ナデ，胴部ハケ目	やや不良	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	477	〃		ヨコナデ 磨耗のため不明	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	478	〃		カキアゲ？ 風化のため不明	やや不良	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	479	〃		ヨコナデ ヨコナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	褐灰 (5YR 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	480	〃		風化のため不明	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	481	〃		ハケ目 ナデ	良好	明黄褐 (10YR 5/6)	明黄褐 (10YR 5/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
45	S A 19	482	甕		ヨコナデ ヨコナデ，指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3) 灰 (10YR 5/1)	1㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	483	〃		ハケ目 ヨコナデ，指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 5/6)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	484	〃		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	485	〃		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	明黄褐 (10YR 5/6)	2～3㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	486	壺		ナデ，口縁に指頭圧 ナデ，頸部に指頭圧	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 褐灰 (2.5Y 5/1)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	487	壺 B_1		口唇部ナデ，ハケ目 ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	488	壺 A_2		ヨコナデ 肩部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	489	壺 B_1		ヨコナデ後タテ方向のハケ目 ヨコナデ，頸部指頭圧	やや不良	橙 (7.5YR 8/6)	橙 (5YR 7/6) にぶい褐 (7.5YR 5/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	490	甕	刻目突帯	風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	491	〃	〃	ナデ ヨコナデ，指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	492	〃	叩き整形	タタキ ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	493			口縁上位ヨコナデ，下位斜方向のナデ 口縁上位ヨコナデ，下位ヨコ方向のナデ	良好	明黄褐 (10YR 5/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	494	甕		ヨコナデ ヨコナデ，指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	495	壺 A_1		風化のため不明	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	496	壺 C_1		不明 ヨコナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	明黄褐 (10YR 5/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	497	底部	あげ底	ナデ ナデ，指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	498	〃	平底	剝離のため不明 ナデ，指頭圧	やや不良	にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 8/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	499	〃	〃	ナデ ハケ目	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	500	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 指によるナデアゲ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 褐灰 (5YR 5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	501	〃	〃	ナデ ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	502	〃	〃	指頭圧 ナデ	やや不良	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～3㎜の砂粒を含む	内，スス付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
45	S A 19	503	底部	平底	ヨコナデ，指頭圧 指頭圧	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	504	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 褐灰 (5YR 5/1)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	505	〃	〃	ナデ，指頭圧 ナデ，指頭圧	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1~2㎜の砂粒・雲母を含む	外，スス付着
〃	〃	506	〃	〃	ナデ ナデ	やや不良	淡黄 (5YR 8/4) 明黄褐 (10YR 6/6)	黄橙 (10YR 7/4) 褐黒 (10YR 3/1)	2～3㎜の砂粒を含む	内・外スス付着
〃	〃	507	〃	〃	指によるナデアゲ ナデ	やや不良	灰黄 (2.5Y 6/2)	褐灰 (5YR 5/1)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	508	〃	〃	表面剥離，ハケ目？ ナデ	やや不良	明黄褐 (10YR 7/6)	褐灰 (10YR 4/1)	1～3㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	509	〃	〃	カキアゲ ナデ	良好	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	510	〃	〃	指によるナデアゲ 指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3) 褐灰 (10YR 4/1)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	511	〃	〃	ナデ ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	黒褐 (10YR 3/1)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	512	〃	〃	指によるナデアゲ ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	褐灰 (10YR 4/1)	細砂粒を含む	
〃	〃	513	〃	〃	タテ方向のハケ目 剝離（ハケ目？）	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1~2㎜の砂粒・石英を含む	
〃	〃	514	〃	あげ底	風化のため不明 胴部下位ヨコナデ，底部指頭圧	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	褐灰 (10YR 4/1)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	515	〃	〃	ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	516	〃	〃	指によるナデアゲ ナデ？	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2～3㎜の砂粒 まれに5㎜大の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	517	〃	〃	指頭圧 ナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1~2㎜の砂粒・雲母を含む	
〃	〃	518	〃	平底	ハケ目のあとナデ ナデ	やや不良	にぶい褐 (7.5YR 5/4) 灰黄 (2.5Y 5/2)	灰黄 (2.5Y 6/2) 褐灰 (10YR 4/1)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	519	〃	あげ底	ナデ，指頭圧 ナデ？	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	520	〃	〃	ヨコナデ 指によるナデアゲ	良好	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4) 灰黄 (2.5Y 5/2)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	521	〃	〃	ナデ，指頭圧 ナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	灰 (5Y 6/1)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	522	〃	〃	ナデ，指頭圧 ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2～3㎜の砂粒を含む	内，一部スス付着
〃	〃	523	〃	〃	ナデ，指頭圧 ナデ	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2～3㎜の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
45	S A 19	524	底部	あげ底	ナデ ナデ	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	灰黄 (2.5Y 6/1)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	525	〃	〃	風化のため不明	やや不良	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	526	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ナデ？	やや不良	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	褐灰 (5YR 5/1)	1～3㎜の砂粒を含む	外，胴部から底面までスス付着
〃	〃	527	〃	〃	ナデ？ ハケ目	やや不良	明黄褐 (10YR 6/6)	褐灰 (5YR 5/1)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	528	〃	〃	ナデ，指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6) 褐 (7.5YR 3/6)	1～2㎜の砂粒を含む	539と同一個体か
〃	〃	529	〃	脚台	風化のため不明 指頭圧	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
46	〃	530	高杯B		ハケ目 ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6) 黒 (2.5Y 3/1)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	531	高杯B_2		口縁部ナデ，杯底部ヨコ方向のミガキ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1~2㎜の砂粒・石英を含む	
〃	〃	532	〃		口縁端部ヨコナデ，ミガキ？ 全体に風化	やや不良	橙 (5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	533	高杯脚a_4	穿孔をもつ	ナデ ヨコ方向のナデ	良好	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	534	高杯脚		タテ方向のヘラミガキ 指ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒わずかに含む	径，復元
〃	S A 11	535	器台C_1	穿孔をもつ	受部ヨコナデ，脚部タテ方向のヘラミガキ 受部ヘラミガキ，脚部ナデ	やや不良	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	S A 19	536	壺I		タテ方向のハケ目後ヨコナデその上をヘラミガキ 口縁部ヨコ方向のハケ目，体部ケズリ，脚部ナデ	良好	橙 (5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	1～2㎜の砂粒を含む	SA7出土分と接合
〃	〃	537	甕L		口縁部ヨコナデ，胴部ヨコ方向のヘラミガキ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	0.5~2㎜の砂粒を含む	外，黒斑あり
〃	〃	538	壺		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	口縁部浅黄橙 (10YR 8/3) 浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	539	甕		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁端部指頭圧，ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	528(底部)と同一個体か内，口縁部にスス付着
〃	〃	540	甕K		口縁部ヨコナデ，胴部ナデ ナデ	やや不良	にぶい橙 (5YR 7/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	細砂粒を含む	
〃	〃	541	壺F_1	口縁部わずかに内弯 体部と口縁部の境に稜を持つ	ナデ，底部付近ヘラケズリ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	橙 (5YR 7/6)	細砂粒を含む	
〃	〃	542	鉢E_3		口縁端部ヨコナデ，体部ヘラナデ 口縁端部ヨコナデ，底部指によるナデアゲ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	543	鉢D_2		口縁端部ナデ，体部ハケ目 口縁端部ナデ	やや不良	淡黄 (2.5Y 8/3)	淡黄 (2.5Y 8/4)	0.5~3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	544	鉢I		ナデ 口縁端部ヨコナデ，体部ハケ目	良好	橙 (5YR 6/6)	にぶい橙 (5YR 6/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
46	S A 19	545	鉢I		口縁端部ヨコナデ，体部ナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
47	S A 16	549	甕B_1		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目 口縁部ヨコナデ，胴部上位ハケ目，胴部ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4) 灰黄褐 (10YR 5/2)	1～3㎜の砂粒を含む	550と同一個体？ 径，復元 外，ススト付着
〃	〃	550	底部	平底	胴部ハケ目，底部付近ナデ ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～3㎜の砂粒を含む	549と同一個体？ 外，内ススト付着
〃	S A 17	551	壺c_1		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	黄橙 (10YR 8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，ススト付着
〃	〃	552			ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	553	甕		口縁上位ヨコナデ，口縁下位～胴部ハケ目 口縁上位ヨコナデ，口縁下位～胴部ハケ目	良好	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～3㎜の砂粒多含	径，復元
〃	〃	554	〃		ナデ ヨコナデ	良好	口縁部橙 (2.5YR7/6) 胴部にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	0.5～4㎜の砂粒を含む	径，復元 外，胴部ススト付着
〃	〃	555	〃		頸部ヨコナデ，ヘラナデ，胴部ハケ目 頸部ナデ，胴部ハケ目	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	556	底部	あげ底	タテナデ，底部指頭圧 ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～4㎜の砂粒多含。長石	外，胴部ススト付着
〃	〃	557	〃	平底	ナデ，底部指頭圧	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	2㎜前後の砂粒を含む	内，ススト付着
〃	〃	558	〃	平底	ナデ ハケ目，底部指頭圧	良好	浅黄 (2.5YR7/3)	灰黄 (5YR 7/2)	1～2㎜の砂粒を含む	外，まだらに黒変 内，全体に黒変
〃	〃	559	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	(5YR 7/6)橙 明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒多含	外，胴部ススト付着 内，底部黒変
〃	S A 18	560	鉢c		口縁部斜方向のハケ，胴部タテ方向のハケ目，指頭圧 ハケ目，頸部指頭圧	良好	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (5YR 7/4)	2～5㎜の砂粒を含む	径，復元 外，底部付近黒変
〃	〃	561	底部	平底	ヨコ方向のハケ目，底部付近ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	橙 (7.5YR7/6) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	562	〃	平底	指によるナデアゲ ナデ	やや不良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	563	脚台		脚部上位タテ方向のナデ，脚部下位ヨコナデ 脚部ヨコナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	564	壺		頸部ナデ，胴部上位ハケ目 ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	S A 20	565	甕		ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	566	〃	刻目突帯	ナデ ナデ	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	
〃	S A 21	567	〃		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1～2㎜の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	〃	568	〃		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
47	S A 21	569	底部	平底	ナデ ナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	S A 23	570	甕	刻目突帯	調整不明（風化）	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	外，ススト付着
〃	S A 21	571	底部	丸底	ナデ ナデ，底部指頭圧	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	2～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	S A 22	572	〃	あげ底	ハケ目，底部指頭圧 ナデ	良好	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1～3㎜の砂粒を含む	外，部分的に黒変
〃	〃	573	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄 (2.5Y 8/3)	黒褐 (10YR 3/1)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 内，ススト付着
48	S A 16	574			ヨコナデ ナデ	良好	黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	575	鉢		ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6) (5YR 7/6)橙	(5YR 7/6)橙 (5YR 7/6)橙	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元 内，胴部に黒変
〃	S A 17	576	蓋		体部ヘラナデ，指頭圧，端部ヨコナデ 体部ナデ，端部ヨコナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	外，体部に黒変
〃	〃	577	高杯脚c_1		タテ方向のミガキ 杯部ミガキ，脚筒部指頭圧，脚裾部ナデ	良好	淡黄 (2.5Y 8/3)	淡黄橙 (7.5YR8/4)	0.5㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	S A 16	578	高杯脚c_2		タテ方向のヘラミガキ 脚筒上位シボリ，脚筒下位ナデ	良好	灰黄褐 (10YR 5/2) にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR8/4)	0.5～2㎜の砂粒を含む	
〃	S A 17	579	脚部		ナデ ヨコナデ	良好	淡黄 (2.5Y 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	580	高杯脚		ナデ ヨコナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1.5㎜前後の砂粒を含む	
〃	S A 18	581			ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	582			口唇部ヨコナデ，口縁部ハケ目後ヘラナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	583	高杯A_1		タテ方向のミガキ ナデ	やや不良	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 8/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	584	鉢E		ナデ ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	細砂粒を含む	
〃	〃	585	壺D_1		口縁部ヨコナデ，体部ハケ目後ミガキ 口縁部ヨコナデ，体部ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部橙 (7.5YR7/6) 体部浅黄橙 (10YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	外，部分的に黒変
〃	〃	586	壺D		ハケ目 ナデ	良好	橙 (5YR 7/6)	にぶい橙 (5YR 7/4) 底部一部褐灰 (5YR 5/1)	1～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	587	脚部		脚部上位タテ方向のナデ，脚部下位ヨコナデ 脚部上位ケズリ・指頭圧，脚部下位ナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	2㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	S A 20	588	壺		ヨコナデ ナデ	良好	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (5YR 6/4)	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	S A 21	589	〃		ヨコナデ ヨコナデ	良好	黄橙 (10YR 8/6)	橙 (7.5YR7/6)	細砂粒を含む	径，復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
48	SA21	590			ヨコナデ ヨコナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	にぶい黄橙（10YR 7/4）	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	SA22	591	甕N		ヨコナデ 口縁部ヨコナデ，肩部ヘラケズリ	良好	にぶい黄橙（10YR 5/3） にぶい橙（7.5YR 5/4）	にぶい褐（7.5YR 5/4）	1㎜以内の砂粒多含	外，スス付着
〃	〃	592	壺		ヨコ方向のミガキ ヨコ方向のミガキ	良好	にぶい黄橙（10YR 6/4）	灰黄褐（10YR 5/2）	細砂粒を含む	
〃	SA23	593	壺		ヨコナデ ヨコナデ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/3）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	細砂粒を含む まれに石英	
〃	SA21	594	壺E		タテ方向のヘラミガキ 胴部ヨコ方向のハケ目，底部ナデ	良好	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	細砂粒を含む	外，胴部に黒変
〃	〃	595	高杯脚		タテ方向のヘラミガキ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/4）	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	596	〃		ミガキ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	浅黄橙（10YR 8/4）	1㎜前後の砂粒を含む 石英，長石少量	径，復元
〃	SA23	597	底部	平底	ミガキ タテ方向のミガキ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/3）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
49	SL1	598	甕		口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/4）	浅黄橙（10YR 8/4）	0.5～3㎜前後の砂粒を含む	外，スス付着 径，復元
〃	〃	599	〃		ハケ 口縁部ヨコナデ，頸部ハケ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/4）	黄橙～にぶい黄橙（10YR8/6～7/3）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	600	底部	平底	胴部はハケ，底部指ナデ 下から上へのナデ	やや不良	にぶい黄橙（10YR 7/4）	にぶい黄橙（10YR 8/4）	0.5～3㎜の砂粒を多く含む	径，復元 外，スス付着
〃	〃	601	〃	〃	ハケ，底部指頭圧 ハケ	良好	灰黄褐（10YR 5/2）	胴部黒褐（10YR 3/2） 底浅黄橙（10YR 8/4）	1～3㎜の砂粒多含	外，スス付着 径，復元
〃	〃	602	甕A_2		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目，底部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ，胴部ナデ，底部指頭圧	良好	橙（7.5YR7/6）	褐灰（10YR 4/1）	1～2㎜の砂粒を含む	外，スス付着
〃	〃	603	壺		ハケ目の後ナデ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	橙（7.5YR7/6）	砂粒多含	
〃	〃	604	壺	平底	内，外面とも 風化のため調整不明	良好	淡橙（5YR 8/4）	浅黄橙（10YR 8/4）	砂粒多含	径，復元 外，スス付着
〃	〃	605	底部	尖底	ヘラケズリ ハケ目	良好	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい黄橙（10YR 7/3）	砂粒多含	外，スス付着
〃	〃	606	〃	あげ底	ナデ，底部指頭圧 ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	1～4㎜の砂粒を含む	
〃	〃	607	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 ハケ目，底部ナデ	良好	橙（7.5YR7/6）	浅黄橙（7.5YR8/3）	1～3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	608	〃	平底	指ナデ ナデ	良好	橙（7.5YR6/6）	橙（5YR 6/6）	1～2㎜の砂粒を含む まれに4㎜	外，スス付着
〃	〃	609	〃	〃	ナデ，底部指頭圧 胴部ハケ目，底部ナデ	良好	明黄褐（10YR 7/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	1～3㎜の砂粒を含む	内，スス付着
〃	〃	610	〃	〃	ナデ ナデ	良好	黄橙（10YR 8/6）	橙（5YR 7/6）	2～6㎜の砂粒を含む 石英，長石も少量含む	外，スス一部厚く付着 内，スス厚く付着

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
50	SL1	611	高杯脚a_1		ヨコヘラミガキ ヘラケズリ	良好	黄橙（7.5YR7/6）	黄橙（10YR 8/6）	0.5～2㎜の砂粒を多く含む	径，復元 脚裾部一部スス付着
〃	〃	612	高杯脚a_2		風化のため調整不明 ヨコヘラ削り	良好	浅黄橙（10YR 8/4）	浅黄橙（10YR 8/4）	0.5～1㎜の砂粒を多く含む	径，復元
〃	〃	613	高杯脚b_3		ハケ目後ナデ 脚筒部指頭圧	やや不良	にぶい黄橙（10YR 7/3）	にぶい橙（7.5YR7/4）	1㎜前後の砂粒多含	径，復元
〃	〃	614	高杯脚b_1		ナデ ナデ	やや不良	黄橙（7.5YR7/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	615	高杯脚b_2		脚部タテ方向のミガキ，後ナデ，脚部下位ヨコナデ 脚部ナデ，脚部下位ヨコナデ	良好	浅黄橙（10YR 8/4）	褐灰（10YR 5/1）	0.5mm程の砂粒多含	径，復元
〃	〃	616	器台A_2	穿孔をもつ	受皿部タテ方向のナデ，口縁部ヨコナデ，脚部ミガキ? 受皿部ハケ目，口縁部ヨコナデ	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	浅黄橙（7.5YR8/4）	2㎜前後の砂粒	
〃	〃	617	器台A_1		ナデ ナデ	やや不良	黄橙（10YR 8/6）	明黄橙（10YR 7/6）	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	618	底部	丸底	底部ヘラケズリ 風化のため調整不明	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR 8/6）	砂粒多く含む	
〃	〃	619	壺H_3		タテ方向のミガキ，口縁部くし描波状文 ハケ目，口縁部ナデ	良好	橙（7.5YR8/6）	にぶい黄橙（10YR 8/4）	微粒子を含む	口径復元
〃	〃	620	ミニチュア	手づくね土器	指頭圧	良好	浅黄（2.5Y 8/4）	明黄褐（2.5Y 7/6）	砂粒を含む	
〃	SC4	621	壺D		ナデ ナデ	良好	橙（7.5YR7/6）	灰（5Y 5/1）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	622	甕J		口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目の後ナデ，底部カキアゲ 口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目の後ナデ，頸部指頭圧	良好	灰黄（2.5Y 8/2）	黄灰（2.5Y 5/1）	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	623	底部	あげ底	指頭圧 ハケ	良好	にぶい橙（5YR 6/4）	灰黄褐（10YR 6/2）	0.2～3㎜の砂粒を含む	
〃	〃	624	〃	平底	ヘラナデ ナデ	良好	にぶい黄橙（10YR 7/4）	橙（7.5YR7/6）	1～3㎜の砂粒を含む	
51	西区	626			ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙（7.5YR7/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	1～2㎜の砂粒を含む 長石，石英，雲母片も少量含む	径，復元
〃	〃	627	器台A_2		口縁部ヨコナデ，ナデ 口縁部ヨコナデ，ナデ	良好	橙（5YR 7/6）	浅黄橙～口縁（10YR 8/3） 灰（5Y 5/1）	1～4㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	628	壺A_1		ヨコナデ ヨコナデ	良好	橙（7.5YR7/6）	明黄褐（10YR 7/6）	1～2㎜の砂粒を含む	
〃	〃	629			ナデ ナデ	良好	浅黄橙（7.5YR7/4）	浅黄橙（7.5YR7/4）	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	630	高杯A_2		杯口縁部ハケ目の後ヘラナデ，杯底部ヘラナデ ヨコナデ	良	橙（2.5YR8/6）	橙（2.5YR8/6）	細かい石英を含む，細砂粒	径，復元
〃	〃	631	高杯A		杯口縁部ヘラナデ，杯底部ヘラミガキ 風化のため調整不明	良好	橙（5YR 7/6）	黄橙（7.5YR7/6）	1～1.5㎜前後の砂粒を含む ガラス質，雲母も少々含む	径，復元
〃	〃	632	高杯A_1		ヘラナデ 中心方向へヘラナデ	良好	橙（5YR 7/6）	橙（5YR 7/6）	細砂粒を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面 下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
51	西区	633	高杯脚a_1		ヘラミガキ 脚筒部ケズリ，脚裾部ナデ	良好	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	細砂粒を含む	径，復元
〃	〃	634	〃		ヘラミガキ ナデ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	砂粒を多く含む 石英，雲母も含む	径，復元
〃	〃	635	高杯脚		内外面とも風化のため調整不明	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	636	〃		タテ方向のヘラミガキ ヨコナデ	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1㎜程の砂粒含む(石英)	
〃	〃	637	器台D		内，外面とも風化のため調整不明	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	橙 (7.5YR 7/6)	1~3㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	638	高杯脚		内，外面とも風化のため調整不明	やや不良	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1～2㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	639	〃		ヘラナデ ヘラケズリ	良好	にぶい黄橙 (10YR 8/4)	橙 (2.5YR 8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	640	高杯脚c		内，外面とも風化のため調整不明	良好	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	細砂粒を含む	
〃	〃	641	高杯脚c		内，外面とも風化のため調整不明	良好	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	褐灰 (10YR 5/1)	1㎜前後の砂粒を含む	
〃	〃	642			ハケ目 ハケ目	良好	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	黒褐 (2.5Y 3/1)	1~3㎜の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	643	小型鉢		タテ方向のナデ ナデ	良好	浅黄 (2.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1㎜前後の砂粒を含む	径，復元
〃	〃	644			ヘラミガキ ヘラミガキ	良好	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	1~2㎜の砂粒を含む	

石器

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	全長	幅	厚さ	石材	備考
19	SA2	32	石庖丁	7.85	3.75	7.00	硬砂岩	
22	SA5	74	軽石製品	7.55	3.65	3.15	浮石	
〃	〃	75	砥石	10.00	4.75	2.05	硬砂岩	
〃	〃	76	凹石	9.75	5.90	3.90	砂岩	
27	SA7	170		15.40	6.60	1.90	蛇紋石	
〃	〃	171	砥石	10.05	2.60	1.70	砂岩	
〃	〃	172	〃	12.05	7.55	3.00	〃	
〃	〃	173	軽石製品	9.85	8.95	4.70	浮石	片面に凹みあり
〃	〃	174	砥石	14.30	9.95	4.60	砂岩	
32	SA10	251	〃	8.00	6.60	1.55	粘板岩	
〃	〃	252	〃	19.80	5.30	3.75	硬質泥岩	4面ともよく使用されている
〃	〃	253	凹石	13.00	5.80	4.35	砂岩	
〃	〃	254	軽石製品	8.85	6.10	3.25	浮石	
〃	〃	255	〃	(5.20)	(3.90)	(5.15)	〃	小片である
〃	〃	256	〃	(6.40)	(5.70)	(4.00)	〃	小片である
33	SA11	277	〃	7.15	3.40	2.65	〃	
〃	〃	278	〃	8.55	5.90	3.70	〃	
〃	〃	279	〃	7.05	8.55	3.90	〃	穿孔あり
36	SA12	326	砥石	14.60	6.30	5.10	砂岩	
〃	〃	327	凹石	16.45	9.70	4.80	〃	両面に凹みをもつ
〃	〃	328	砥石	14.40	8.80	6.79	〃	
〃	〃	329	凹石	10.40	6.85	3.70	〃	両面に凹みをもつ
〃	〃	330	砥石	13.85	5.25	4.00	硬砂岩	
〃	〃	331	〃	10.65	5.75	2.85	砂岩	
40	SA14	426	〃	7.65	3.75	3.12	泥岩	4面ともよく使用されている
〃	〃	427	〃	12.32	2.80	1.80	硬質泥岩	4面ともよく使用されている
〃	〃	428	軽石製品	4.10	3.55	1.90	浮石	
〃	〃	429	凹石	8.70	10.10	4.20	砂岩	
42	SA5	450	軽石製品	13.60	10.65	5.60	浮石	
〃	SA19	451	〃	9.30	8.20	3.39	〃	片面に凹みあり
〃	〃	452	砥石	6.35	7.65	5.20	砂岩	
〃	SA2	453	〃	10.55	8.80	2.45	〃	
46	SA19	546	〃	12.45	4.95	3.00	〃	
〃	〃	547	〃	6.45	3.18	1.45	〃	
50	SC4	625	〃	7.90	4.25	0.69	粘板岩	

その他の遺物

図面番号	遺構名	遺物番号	遺物名	計測値及び特徴	備考
22	S A 5	73	管玉	全長－20.0　径－ 6.6　上端孔径－ 2.0　下端孔径－ 1.9　色調－淡灰緑色	
〃	S A 5	77	刀子	現長－65.0　身長－50.0　身断面形－二等辺三角形	身に木質残る
〃	S A 5	78	鉄鏃	全長－56.0　身断面形－両丸作り	無茎腹抉五角形式
27	S A 7	169	鉄鏃	現長－89.0　身断面形－両丸作り　茎の断面形－茎欠損	変形圭頭広根斧箭式
32	S A 7	257	土スイ	現長－36.0　長軸径－15.0　短軸径－14.0　孔径－ 5.0	
〃	S A 10	258	鉄鏃	現長－59.0　身断面形－身先端のみ尖る，他断面は長方形	圭頭細根斧箭式
40	S A 14	430	鉄器	現長－57.5　幅－31.0　厚さ－ 1.0	
〃	S A 14	431	小玉	長径－ 4.6　短径－ 4.5　厚さ－ 3.3　孔径－ 1.2　色調－コバルトブルー	
〃	〃	〃	小玉	長径－ 5.5　短径－ 5.0　厚さ－ 3.7　孔径－ 1.9　色調－グリーンブルー	
〃	〃	〃	小玉	長径－ 4.1　短径－ 3.9　厚さ－ 2.7　孔径－ 1.4　色調－マリーンブルー	
46	S A 19	548	鉄鏃	現長－81.0　身断面形－身のみ尖り，他断面は長方形　茎の断面形－長方形	圭頭細根斧箭式 茎に樹皮(桜皮)残る

中世遺物

図面番号	番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			分類	備考
					口径	底径	背高	内面	外面			内面	外面	底部		
51	645	S B 5	坏		12.1cm	8.1cm	3.6cm	橙 (7.5YR⅞)	橙 (7.5YR⅞)	細砂粒を含む	良好	口縁ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		
〃	646	S B 1	坏			6.9		にぶい橙 (5YR ⅞)	にぶい橙 (5YR ⅞)	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	647	S B 3	坏			7.0		橙 (5YR ⅝)	橙 (5YR ⅝)	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	648	S B 3	坏			5.1		浅黄橙 (7.5YR⅞)	浅黄橙 (7.5YR⅞)	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	649	西区	皿		8.0	6.6	1.4	にぶい橙 (7.5YR⅞)	にぶい橙 (7.5YR⅞)	石英を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	650	S B 3	皿		8.3	7.1	1.3	橙 (7.5YR⅞)	橙 (7.5YR⅞)	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	651	西区	皿			9.4		にぶい橙 (7.5YR⅞)	にぶい橙 (7.5YR⅞)	石英を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	652	S B 3	皿			6.2		橙 (7.5YR⅞)	橙 (7.5YR⅞)	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		径，復元
〃	653	S A 16	皿			7.0		橙 (7.5YR⅞)	橙 (7.5YR⅞)	きめ細やか	良好	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		
〃	654	西区	坏					にぶい橙 (7.5YR⅞)	にぶい橙 (7.5YR⅞)	石英を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		
〃	655	西区	坏					橙 (7.5YR⅞)	橙 (7.5YR⅞)	砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		
〃	656	西区	皿					にぶい橙 (7.5YR⅞)	にぶい橙 (7.5YR⅞)	石英を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切リ		
〃	657	西区	?					にぶい橙 (7.5YR⅞)	にぶい橙 (7.5YR⅞)	石英を含む	良好	ナデ		ヘラ切リ		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整 上：外面　下：内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
〃	S B 3	658	鍋		ヨコナデ 口縁ヨコナデ，胴部ナデ	良好	灰 (5Y ⅘)	灰白 (7.5Y ⅛)	砂粒を含む	径，復元
〃	西区	659	甕		ナデ ナデ	堅固	灰 (10Y ⅘~⅗)	黄灰 (2.5Y ⅘)	精良	
〃	東区	660			ナデ ナデ	良好	橙 (7.5YR⅝)	明黄褐 (10YR ⅝)	細砂粒を含む	
〃	西区	661	碗		釉，灰白色	堅固	灰白 (2.5GY⅞)	灰白 (2.5GY⅞)	精良	径，復元
〃	〃	662			釉，浅黄，貫入あり	堅固	浅黄 (2.5Y ⅞)	浅黄 (2.5Y ⅞)	精良	径，復元
〃	〃	663		削り出し高台	外面自然釉	堅固	灰 (10Y ⅘)	灰 (10Y ⅘)	精良	径，復元
〃	〃	664		削り出し高台	底部ヘラケズリ	堅固	灰白 (7.5Y ⅞)	灰 (7.5Y ⅘)	精良	径，復元

縄文土器

図面番号	遺物番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 底面	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
52	665	SA5	角筒	胴部	貝殻条痕	タテ方向のヘラケズリ	——	貝殻腹縁刺突線文	——	1～2㎜の石英を多含 黒雲母，少量	橙 (5YR 6/6)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	良好	穿孔あり
〃	666	〃	角筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	——	貝殻腹縁刺突線文	——	1㎜前後の金雲母，長石，多含 石英，黒雲母少量	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	良好	
〃	667	〃	深鉢	口縁部	不明(風化)	不明(風化)	——	山形押型文	——	1㎜前後の石英を多含 黒雲母，長石，少量	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	良好	
〃	668	東区	深鉢	口縁部	貝殻条痕の後ナデ	貝殻条痕	——	貝殻腹縁刺突文	——	1～2㎜の砂粒を含む 石英，少量	にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	良好	外，スス付着
〃	669	SA5	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	——	貝殻腹縁刺突文 沈線	——	石英の細砂粒を多含 黒雲母，少量	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	良好	波状口縁
〃	670	東区	深鉢	口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	——	貝殻腹縁刺突文	——	1㎜前後の砂粒を含む	にぶい褐 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	良好	波状口縁 外，スス付着
〃	671	〃	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	——	斜線文	——	1～2㎜の砂粒 石英，黒雲母の細砂粒	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	赤褐 (5YR 6/6)	良好	
〃	672	〃	深鉢	口縁部	ヨコナデ	不明(風化)	——	貝殻腹縁刺突文	——	1㎜前後の石英を多含	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	良好	外，スス付着
〃	673	〃	深鉢	口縁部	ナデ	ヨコ方向のヘラナデ	——	貝殻腹縁刺突文	——	1～4㎜の砂粒 石英の細砂粒	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	良好	
〃	674	〃	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	——	——	——	1㎜前後の砂粒 石英を含む	にぶい褐 (7.5YR 6/4)	にぶい褐 (7.5YR 6/4)	良好	外，スス付着
〃	675	〃	深鉢	口縁部	ヨコナデ	板状工具によるヨコナデ	——	——	——	2㎜前後の砂粒を含む	にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	良好	
〃	676	〃	深鉢	口縁部	貝殻条痕の後ナデ	貝殻条痕	——	——	——	1～4㎜の砂粒 石英，黒雲母の細砂粒	灰 (5Y 5/1)	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	良好	
〃	677	〃	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	——	——	——	0.5～3㎜の砂粒 石英，黒雲母の細砂粒	明黄褐 (10YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	良好	
〃	678	〃	深鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	——	貝殻腹縁刺突文	——	1～5㎜の砂粒 石英の細砂粒	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	良好	外，スス付着
〃	679	〃	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	——	沈線文	——	1～3㎜の砂粒 石英の細砂粒	明赤褐 (2.5YR 5/6)	赤褐 (2.5YR 5/6)	良好	
〃	680	〃	深鉢	胴部	ヨコナデ	ヨコ方向のヘラケズリ	——	貝殻腹縁刺突文	——	1～6㎜の砂粒 石英の細砂粒	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	良好	
〃	681	〃	深鉢	胴部	ヨコナデ	ヘラケズリ	——	貝殻腹縁刺突文	——	1～3㎜の砂粒 石英の細砂粒 まれに6㎜の石を含む	橙 (5YR 6/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	良好	
〃	682	SA5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヨコナデ	——	——	——	1㎜前後の石英を多含	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	良好	
〃	683	〃	深鉢	口縁部	不明(風化)	ナデ	——	貝殻腹縁刺突文	貝殻腹縁刺突文	1～2㎜の砂粒を含む 石英，長石	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	良好	
〃	684	東区	深鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	——	——	——	石英，長石，黒雲母の細砂粒を含む	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	橙 (7.5YR 6/6)	良好	
〃	685	〃	深鉢	底部	貝殻条痕 ナデ	ナデ	ナデ	——	——	1～3㎜の砂粒 石英，長石，黒雲母の細砂粒	明赤褐 (2.5YR 5/6) にぶい黄橙 (10YR 6/4)	明赤褐 (2.5YR 5/6) にぶい黄橙 (10YR 6/4)	良好	

図面番号	遺物番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
52	686	東区	深鉢	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	不明(風化)	——	——	1～3㎜の砂粒を含む	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	良好	径，復元
〃	687	〃	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ	——	——	1㎜前後の砂粒を含む 石英，黒雲母，少量	明褐 (7.5YR 5/6)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)	良好	径，復元
〃	688	〃	深鉢	底部	ナデ	ナデ	不明(風化)	——	——	1㎜前後の砂粒 石英，黒雲母の細砂粒少量	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	赤 (10R 5/6)	良好	径，復元
〃	689	〃	深鉢	底部	不明(風化)	ナデ	不明(風化)	——	——	1～2㎜の砂粒 石英，長石，黒雲母の細砂粒	橙 (2.5YR 6/6)	黄灰 (2.5Y 7/2)	良好	径，復元

第Ⅷ章　結　　語

本報告にまとめたものは，学園都市遺跡群の内，遺跡の面的な上からも，出土した遺物の量的な上からもほぼ半分に相当するものであり，地域的には西の丘陵地を背にした台地の西半分に当たる部分である。当該地域の全体像の総括は、台地の東半分の調査が完了する来年度以降を期するしかない。しかし，本報告では各遺跡とも，発掘調査に際しても，また報告書をまとめるに際しても様々な方法論的な試みと問題提起を行っている。また，わたしたちの手に余る分野については，諸々の専門的な見地からの分析，同定，問題の提起をいただいた。

ここでは，わたしたちの試みがどのような地点にまで歩み得たかについて各時代を中心に整理することをもって，一つの結語としたい。

なお，原稿をいただいた市川米太，金子弘二，柴田喜太郎，中村純，三辻利一，山本輝雄の各氏には重ねて感謝を申し上げたい。

旧石器時代

堂地西遺跡の調査は，これまで散慢に確認されていた県内の旧石器時代の遺跡の内、剝片尖頭器とナイフ形石器の面的層位的位置付けを明確にさせ，そのことによって前後をつなぎ，ことに細石器文化，さらには土器出現の草創期に至るプロセスを示し得ることを可能にした。

従来わたしたちは，縄文時代の前期から早期さらに遡行して旧石器時代への層位的な指標を，肉眼観察によるアカホヤ火山灰と姶良Tn火山灰に求めてきた。その内，アカホヤ火山灰は比較的容易に判別することが出来，縄文・弥生・古墳時代，そしてそれ以降の遺構面の検出に際しても，アカホヤ層上の黒色土で判断つけ難い場合，そのアカホヤの明瞭な色調によって遺構検出の判断の基準としてきた。これに対し，姶良Tn火山灰についてはその堆積の状態が，地域的に大きく異なることがあり，その状態によっては判然としない場合もあった。しかし，今回の柴田喜太郎氏による分析は，その根拠をはっきりと指し示すことをなによりも可能にしている。そのことにより，堂地西遺跡における旧石器時代遺物の包含層がⅤc～Ⅵa層とした姶良Tn火山灰の上層に位置することを明確に指示出来る。それはまた，Ⅴc～Ⅵa層を突き貫けXⅠ層にまで，一部追求された調査によって人工的な遺物を検出し得なかった結果にも意味を与えるものであろう。

一方，旧石器時代から，アカホヤ層下の縄文時代早期まで継続して営まれている集石遺構について，Earth Oven，Stone Boiling などの機能を想定するのに，まず第１義的に果して集められた石が焼けているのか否か，そして焼けているならその年代はどのように位置付けられるのかについて，市川米太氏による熱ルミネッセンス法による分析・同定は欠くことの出来ない設定であった。その結果，肉眼観察で焼けていないと思われる石も焼けていることがあるのに対し，焼けていると判断したものはすべて焼けているという結論が得られ，肯定的な肉眼観察は一応先行させることが可能であり，むしろ否定的なものについてもなお加熱を受けている可能性が残されていることが明らかになった。それと共に，古い方から14,000～12,000Ｂ．Ｐ．，10,000～ 9,000Ｂ．Ｐ．　9,000～8,000Ｂ．Ｐ．，8,000～7,000Ｂ．Ｐ．とおおよそ年代を 4 分することが明らかにされている。現在，最古の土器出現を12,000Ｂ．Ｐ．とした時，最古の集石遺構は旧石器時代に属し，そのことは考古資料の上からは，剝片尖頭器とナイフ形石器の年代を示すものであろう。そして，堂地西では明らかでなかったが，県下の岩土原遺跡で細石刃を伴う爪形文系土器の出土が知られているのを考慮する時，堂地西の爪形文系土器が細石刃を発掘資料の上から確定出来ないにしても，10,000～ 9,000 Ｂ．Ｐ．といった年代観の中に対応するという想定を可能にしている。

さて，こうした諸科学の分析と同時に，考古資料の上からの遺構論ないしは遺跡論の展開が必要であるが，旧石器時代の石器を出土した周辺の集石遺構の熱ルミネッセンス法による年代が逆に 8,000～ 7,000B．P．の新しい範囲を中心とし，縄文早創期の遺物を出土した周辺の集石遺構に旧石器時代を指示する古い年代を示すものがあることは留意されるべきであろう。すなわち，石器類の出土の集中する生活空間と，集石遺構の存在によって示される生活空間とは一応区別された空間であったことが想定されるのである。そう考えた時，県下の集石遺構――縄文時代早期までを含めて――の周辺において遺物，ここに土器の出土が稀薄であることは頷けるし，辻，芳ケ迫，又五郎など遺物類の豊富な集石遺構をもつ遺跡が，相互に近接した丘陵・台地上に広く立地することを考えれば，集石遺構と周辺出土の遺物の年代観が錯綜している可能性も指摘出来るのである。ここでは，生活の道具たる遺物の所有せる空間と，集石遺構に想定する空間，前者を居住空間の内とすれば，後者の食生活空間はその外に，あるいは前者が家族に所有権の認められた空間の内とすれば，後者は共同体の共有の空間としてその外に位置付けられたものと考えられる。

縄文時代

早創期から早期に至る状況は以上述べた在り方から大きく変わるものではなかったと思われる。アカホヤ層下において集石遺構を伴い遺物類の検出された遺跡は，本報告に収めた遺跡についてはほとんどすべてである。その在り方は，活発な遺跡形成とも，少なくとも 5,000年以上に及ぶ年月の間に蓄積された結果とも評価出来る。勿論，まだ多くの分析とその値を比較検討しなければならないにしても，熱ルミネッセンス法による年代が 10,000～ 7,000B．P．の間にばらまかれていることからすれば，やはり 1,000年単位の年代観をどう評価するかについては，慎重であらねばならないであろう。

そうした事情に伴い，まだ分析の資料点数は少ないものの三辻利一氏による土器胎土分析は，縄文早期土器についても興味あるデータを示している。後にも述べるが縄文土器で二グループ分けが指摘された胎土の在り方を考慮しても，早期土器の数値にばらつきが目立っている。地域的には近い田野町芳ケ迫の資料で$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値が極端に高いものがあり，学園都市の中では$\overline{\mathrm{Sr}}$の数値が 0.5以上の第２グループの胎土が主であるが，0.5以下の第１グループに属するものが学園，芳ケ迫で共に検出されているなど，地域的な差，あるいは時期的な差とも解し得る要素が示されている。

このことを理解するために，あるいはより複雑にするために，後・晩期土器の分析結果についてまずふれておけば，$\overline{\mathrm{Sr}}$ 0.5以下の第１グループ，0.5以上の第２グループの土器を比べてみる時，極めて驚く程にはっきりとした土器型式上の差が存在するのである。すなわち，第１グループに属するものは，ほとんどすべてと言って間違いがなく赤褐色系の色調を示し，報告の中において貝殻（条痕）文系土器としたものなのである。地域差あるいは時期差のどちらを示すものであれ，いずれにしても，第１グループと第２グループの縄文土器が，当の縄文時代人によって区別されて生み出されたことは，相互に相手を意識し得る事情にあったか否かは別として，間違いない。このことは，$\overline{\mathrm{Sr}}$の値が 2.0を前後し，全く学園都市のそれと重なり合うことのない県北の陣内遺跡のほぼ同時期の土器群が，大分県あるいは熊本県の北部と共通する可能性のある県北独自の粘土に規定されて生み出されたこととは異なり，より狭い範囲での粘土の選択あるいは交流さらには時期差により生み出された差であると言える。

また，その粘土の選択あるいは交流・時期差にそくしてつけ加えれば，後の弥生土器，土師器，須恵器の胎土の数値は縄文土器の第１グループ周辺に分布するもので，第２グループに属するものが全くといってよいほど姿を消すことは注目されてよいであろう。

以上のように，時には画然とした区別が存在し，時には判然としない土器胎土の動きはどのように理解すべきなのだろうか。その手続きとして，わたしたちはこの報告において，次のような試みを設定している。一つは土器観察に

おける三要素，胎土，色調，焼成の内，まず胎土について，以上のような分析と共に，金子弘二氏による縄文後期土器の混和材の鉱物の分析を試みている。これについては，まだ県内での資料が充実しているとは言い難く，今回の試みはその入口に過ぎないが，資料の蓄積によって鉱物の分布範囲とその原産地を同定し得ることを疑っていない。すくなくとも，今回においても，胎土の構成鉱物から，３種の傾向が指摘されたことは意味がある。これらが，三辻氏の胎土分析結果とどう重なり関わるかについては，次の課題として設定されるが，第１グループの貝殻文系土器としたものは，おおむね金子氏のいう③に相当する可能性がある。

次に，色調については個別土器片それぞれの偶然性を伴う個性的な色調を示すのではなく，土器片それぞれが共通的に傾向としてもつ色調を“類”として示し，その中からそれぞれの多様性を指示するにとどめた。そのようにして見る時，各タイプの土器が破片それぞれの色調をもちながら，共通した範囲を示すものであることが把握出来る。それは，先に縄文土器胎土の第１グループの土器がほとんど赤褐色系の貝殻（条痕）文土器としたが，色調は焼成の違いと同時に胎土の違いをも反映することを指摘せしめるものであろう。

次の焼成については，今回わたしたちも従来の良好，良，不良などという表記法を超えるものを設定し得ていない。ただ，焼成の度合いを科学的に表記することが出来れば，どのようにして焼かれたのかを今以上に立体的に復元し得るかもしれないという見通しをもっている。

さて，以上の試みをベースに，県下における後・晩期土器編年という作業は，永い間不明の闇にあった県南を中心とした縄文土器論に一つの展開を与えるものであった。ただ，層位論的に処理出来る資料は少なく，５５棟の竪穴住居跡出土遺物をとりあえず一括遺物としてとらえ，その中で出土層位，出土位置，さらに主たる遺物か否かの判断から型式学的な処理を加えるしかない。しかし，その際切り合いの関係――実に３箇所６棟の竪穴住居跡にすぎなかったが――及び上屋構造が接するか，現実的に共存し得ない距離関係にある二棟以上の竪穴住居跡は，積極的に先後関係を発見することの手掛りとして採用した。ただし，それも土器の上では同一型式内で，住居の廃絶と新築が行われている可能性も考慮されねばならないという，土器のもつ時間尺と，住居のもつ時間尺のずれが難関として存在している。

一方，XXⅣ区の土器溜りとでも言うべき地区からの出土土器については，層位的な弁別が困難で，これは純粋に型式学的な判断が必要であった。

こうして，後期後半から晩期前半までを５期に分類する編年案を示しているが，周辺地における類例により補強・修正をしていく必要があることはいうまでもない。

さて，一方で縄文時代の集落景観の復元と，後・晩期の生産構造の理解のため，中村　純氏による花粉分析は，興味ある結果を提示されている。それは，XXⅣ区の土器包含層中からソバ，ゴマの花粉が検出され，その他の木本類，草本類との関係から，木本類が劣性で，農耕地あるいは陽地性の草地が周辺に存在したとの指摘は充分に注目すべきであろう。その前にＢ試料の下層にＡ試料の土壌が接続するのでは，という指摘に対し，遺物包含層及び土層の関係からいえば，Ｂ試料は現表土層から，中世の遺物，古代末の遺物を含む層から，アカホヤ層上の縄文後・晩期層までを含んでいる。すなわち，Ｂ試料において縄文後・晩期の包含層は薄く，20cm前後の層である。これに対し，Ａ試料は，傾斜地に堆積した１ｍ前後の厚さをもつアカホヤ層直上までの後・晩期の包含層で，先の指摘は考古学上からの見地とも合致し得るのである。ただ，確かに，Ｂ試料中においても，マツの増加するとされる 1,500～2,000Ｂ．Ｐ．以降とする年代観と，縄文晩期前半までとしても年代観の差は 500年近くあることになる。Ａ試料の採集地が，傾斜地の土器の廃棄場とでもいうべき所で，その中にはおそらく土壙等掘り込みを介在したものと思われ　弥生土器が混在することも指摘すれば，その包含層形成の判断には慎重な配慮が必要であろう。

では，考古学の資料の上から，農耕地，端的には畑作地を指示し得るものはないのだろうか。石斧・収獲具石器と

した一連の石器の内，収獲具――打製石庖丁，石鎌など――として指摘し得るものはわずかであるが，石斧は磨製・打製を含め約80点近くも出土している。県北の陣内遺跡あるいは大分県の大石遺跡で指摘される様相と単純に同質のものと結びつける訳にはいかないとしても，石斧といわれる石器のすべてが切断，彫刻に向くものではなく，むしろ土耕具としての機能をもつものとの指摘は許されるであろう。それは，農耕地の耕作に際し，有効な役割を担ったのではないか。

縄文時代の集落景観の最終的な復元は，今後の調査の成果に期するところが大きいが，可能な限りの復元を試みることは出来る。竪穴住居跡の中で主柱の明確なものは少ないが，二本の主柱をもつほとんどがが北西～南東に主軸をもつことから，南東に向けての緩傾斜地に，南西方向に入口部をもつ竪穴住居跡群が同時期には４～５棟並び，西方の平地に農耕地を開く集落構造を想定することが出来よう。

そうした縄文時代の終末は，刻目突帯文土器の出現に示されるが，この時期を明確に示す遺構は現在までの調査区内では確定し難い。

弥生時代

弥生時代の学園都市遺跡群におけるはじまりは明らかではない。台地の東端に位置する前原北遺跡の発掘調査がまだ残されているので断定はし難いが，昭和56年度の１次調査において弥生中期の竪穴住居跡の残存が確認されており，中期のどこまでさかのぼらせ得るかの結論はひかえるとして，少なくとも中期には前原北，そして堂地東の一部で弥生時代が開始されたものと思われる。その時，縄文晩期の刻目突帯文土器と弥生中期土器とは，時間的には隔絶されたものではなかったかもしれない。

弥生土器について，胎土分析はここでも多くの興味ある結果を提起している。県北の資料にまで分析を及ぼすことは出来なかったが，後に問題となる一ツ瀬川以北の資料として新田原遺跡，加えてさらに北の小丸川以北の持田中尾遺跡，大内原遺跡，そして一方では県南の内陸部の祝吉遺跡についての分析も加えていただいた。その結果，大内原のそれは$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値が 0.3を中心とする低いものであるのに対し，祝吉のそれは$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値が 0.5以上と高くなり，この二者の画然とした差は，両者がほぼ弥生時代の終末から古墳時代初頭に当たることからいっても注目に値するであろう。これらに対し，同じ一ツ瀬川以北とはいえ時代のさかのぼる弥生中期から後期の新田原遺跡の胎土は，大内原に近い数値と祝吉に近い数値とに二分され，さらに古い弥生前期末から中期の持田中尾が大内原と祝吉の中間値に集中した胎土の傾向をもつことは，さらに興味を深くするものである。

以上のような分析資料をより豊富化し，土器胎土の違いを基に地図上にドットを落としていけば，それらは生産地の確定に迫まることが出来るし，土器分析圏はより多面的に構成されたものであることを立証することが出来るであろう。

ここで学園都市遺跡群の中に限れば，弥生後期の浦田遺跡の胎土が$\overline{\mathrm{Rb}}$ 0.4以下，$\overline{\mathrm{Sr}}$ 0.5前後の数値にほぼ集中するのに対し，弥生中～後期の堂地東遺跡の胎土は$\overline{\mathrm{Rb}}$ 0.5前後，$\overline{\mathrm{Sr}}$も 0.5前後とMG４と比べ$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値に差があることが認められる。さらに，熊野原遺跡は弥生終末から古式土師とすべきものに二分されるが，古式土師の中に$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値が 0.3を前後するものが多く含まれていることは注目されるであろう。そして，小型丸底壺２資料の数値が極端に違うことも指摘しておかなければならない。

以上のことから現在成し得る想定は，$\overline{\mathrm{Rb}}$の数値の差に着目すれば一ツ瀬川以北の胎土が 0.3以下と低く，熊野原の古式土師はそれらに近く，学園都市の弥生土器は 0.3～ 0.5までの間に分布し，県南内陸の祝吉では 0.5以上に集中するというように，地域的な違いが反映され，さらに時期ごとに胎土の供給ないしは土器成品それ自体の動きが認められるのである。

さて，そうした弥生土器の編年については，学園都市遺跡群の中の弥生中期から古墳時代の比較的密集した集落跡と目される前原北遺跡の発掘調査が最終的に完了しておらず，また弥生後期～終末の熊野原遺跡のＡ・Ｂ地区の整理が未完であるため，それらの成果とあわせ他日を期すことになるが，弥生中期後半から弥生終末，そして古式土師に至る編年の骨格が少しづつ見えはじめている。大まかには，弥生後期までの間県北あるいは大分県との共通項の土器――代表的には安国寺式の二重口縁壺――をもつが，甕形土器には強い伝統性が示され，平底が強固に維持され，そこに日向南部の編年上の特色が示されると思われる。さらに，古式土師といわれる段階で，広口の甕が刻目の突帯をもつようになり，鹿児島県の成川式土器との相互の関係は，従来の見解とやや異なる様相をもって成立する可能性もある。

一方，遺構については，ついに墓地の検出を果たし得ていないが，いわゆる日向型間仕切り住居について幾多の好資料を得ることが出来ている。山本輝雄氏による，日向型間仕切り住居の評価と復元の試みは多くの貴重な問題を提起していただいている。考古学の資料の上からなぞれば，次のように現時点でまとめることが出来る。日向型間仕切り住居とした特殊な形状をもつ竪穴住居跡は，県北に近い日向市越シ遺跡でもそれと判断される遺構があり，分布圏はいまだ流動的ではあるが，鹿児島県王子遺跡等にも広がり，その分布圏は後の地下式横穴墓の分布圏と県南，鹿児島県において重なることは間違いがない。その中で，弥生中期末までにさかのぼる可能性をもつものは，一ツ瀬川左岸の新田原遺跡の住居跡と，学園都市堂地東の住居跡の一部である。そして，新田原は円形，堂地東は方形を基本的なプランとしている。想定として，日向型間仕切り住居は弥生中期末からおおきくさかのぼることはなく，むしろ弥生後期への転換の中で生まれ得た住居形態とみることが出来る。従って現在示されている上限の段階で方形と円形の二者が存在することは，そして方形・円形の基本プランが果して本質的な住居機能の違いとなり得るのか否かということも含め，当初より平面プランの上で見る限り多様な様相をもつものであったのではないか。地域性あるいは集落構成の中での住み分けあるいは役割りの違いなど多面的に検討する必要があるが，内陸の祝吉遺跡では同様のことが考えられたものである。

一方，日向型間仕切り住居のプラン設定について，外形の円形より方形の平面企画が設定され，その内側に突出壁が計画されるものか，中心部の掘り込みから拡張と張り出しの際，主柱穴背後の壁を掘り残し，外部の平面プランが計画されるものなのかは，堂地東の例を見る時，若干複雑なものがあり，上屋構造が乗った上で可能な空間を拡張したとみられる不整形プランのものが存在する時，主柱で囲まれる空間の外に，もう一つの空間を設ける意識に，突出壁によって空間を成し区切るものと，空間を増やすあるいはつけ加えることで空間を形成するものとの二者が存在するように思われる。その違いは形状にもあらわれ，前者は幅50cm内外の突出壁を残すが，後者には突出壁と形状し得るものはなく，四方にあたかも複室が設けられる形をとる。後者の例は鹿児島県小田遺跡例に端的に見出されるものである。

古墳時代

古墳時代初頭の集落の在り方は，熊野原遺跡（Ｃ地区）で明らかとなった。布留式に併行するこの時期，住居はすでに日向型間仕切り住居という特殊性を失っている。しかし，先述したようにことに甕形土器には強い在地性を示している。

住居構造の変遷は先のようであるが，集落もまた動いている。今回の報告に含まれる台地中央での集落変遷をたどれば，おおよそ次の通りである。堂地東に中期末に成立した集落は後期まで継続されるが，後期後半から終末にかけては谷底低地をはさんだ南の熊野原Ａ・Ｂ地区に移動する。堂地東にはその後単発的，小規模な生活が営まれることはあっても中心的な集落は形成していない。熊野原Ａ・Ｂ地区の集落は，古墳時代の開始とともにやや奥のＣ地区

へと変遷し集落を形成するようになる。しかし，台地下の北方に前方後円墳３基，円墳５基から成る小古墳群を形成する主体者たちの集落は，いまだ台地上の遺跡群の中にはあらわれていない。

ところで，弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて，集落の中に方形に溝をめぐらす遺構が存在することが確認されている。熊野原Ａ地区に１基，Ｃ地区に１基検出されているが，前者が弥生終末――庄内式併行――，後者が古墳初頭――布留式併行――のものと考えられる。近年，各県の当該期の調査でもこの種の遺構が検出されているが，集落内に周辺の竪穴住居跡とほぼ時期を等しくしこの手の周溝状遺構が存在することは留意されるべきで，そのことは周溝墓としての位置付けを困難にしている。しかし，何らかの祭祀遺構と表現してみたところで，何の解決にもなっていない。だが，Ｃ地区の周溝は土器を多く包含することがなかったが，Ａ地区のそれは南面する溝に多量の土器を包含していたことは，南面する溝に土器が包含される要素としては，周溝墓の場合と共通する要素であることは指摘出来る。では，全く墓に対してと同じかといえば，周溝墓の場合極めて祭祀性の高い土器が含まれるのに対し，Ａ地区の周溝のそれは煤を受けた甕形土器をはじめ日常土器であったことは，端的な違いといえよう。死者を送る祭りがﾊﾚﾞの祭りであり，そのための祭祀土器が用いられるとするならば，逆説的であるが，日常土器を用いる区画された空間――実際には溝で区画された中に祭りのための構造物が置かれていた筈だが――への祭りはｹﾞの祭りであり日常生活を支える“生み出すもの”への祭祀ではなかっただろうか。

古代・中世・近世

胎土分析に供した土師器，須恵器は古墳時代に属するものではなく９世紀以降のものを主にしている。従って，松ケ迫窯跡の須恵器に若干後出する時期であり，その意味でも$\overline{R}$ｂ 0.5をほぼ境にした胎土の違いが指摘されることは興味深い。松ケ迫の傾向は土師器第１グループに共通するが，第２グループの傾向が学園都市の弥生土器に近い傾向を示すことは着目しておきたい。そして，いずれにしても古式土師器とされる一群の$\overline{R}$ｂ 0.3以下という数値に後のの土師器が全く共通しないことも指摘しておくべきであろう。

竪穴住居跡にカマドが付設されるのは，日向においては７世紀に入ってのことで，その初見は宮崎市の浄土江遺跡に求められる。学園都市の赤坂遺跡を初見とするカマド付きの竪穴住居跡は，浄土江の掘り抜きの煙道と異なり，溝掘りした長い煙道とより深い掘り込みをもつ煙道口とにより構造されるもので９世紀に入り完成されたものであろう。その中には数個体の甕形土器を埋め込み煙道，煙突を形作るものもある。

これに対し，掘立柱建物跡の検出例も多く，ほとんどの遺跡において確認されているといってよい。本報告の遺跡群に限れば，平畑遺跡の掘立柱建物跡は平安時代末から鎌倉時代までのもので，多くの布痕土器を伴ない，また緑釉陶器も出土し，当時においてけだし通有の場所であっただけとは考えられない。赤坂，下田畑でも確認されたが，カマド屋とすべき掘立柱建物跡の存在も重要であろう。

一方，学園都市遺跡群の中で古墳時代までは墓の検出がないが，逆に古代以降の墓については興味ある幾つかの調査例が蓄積されてきた。前原西遺跡の14～15世紀の周溝墓，山内石塔群の 500基に近い石塔群――といっても埋め墓ないしは納骨又は蔵骨器がみられたのは数箇所に過ぎず，基本的には詣り墓であった――，そして堂地東遺跡の近世墓，それに９～10世紀の入料例を合わせれば，断片的にでも古代末から中・近世にかけての墓の変遷を素描することが出来る。入料の二例は共に 110×120 ㎝ 前後の正方形に近い掘り込みをもち，埋葬の上部に鉄鏃あるいは土師器埦を供献した墓壙の状態を想定することが出来る。これに対し，前原西の周溝墓は，周溝をめぐらすこと自体注目されるが，墓壙の北方，すなわち頭部付近に土師器坏・皿を重ね４方に配置し，他に漆器及び銅銭を墓壙の中に埋納する形態をもっており，この違いは留意されるであろう。勿論，入料例と前原西例との間には 400年もの時代差と同時に階層的な違いも想定されるべきであろう。そのことは，前原西とほぼ同時期に，山内石塔群で五輪塔をもつ墓の造営

が開始されていることからも，多様な“死後観”なり葬送意識が社会の構造の中で生み出されていたことを証している。さらに，山内石塔群は，確実には17世紀頃まで継続するが，18世紀末頃に現われるのが堂地東遺跡の墓壙で，墓標をもつ墓として営まれたものである。１～２m 程の深い墓壙を穿つ形態は，こうした幾段かの変遷を経て至った墓制であったのだろう。

（北郷　泰道）

付　　論

堂地西遺跡の集石の熱ルミネッセンス年代

奈良教育大学　市　川　米　太

今回，宮崎学園都市建設予定地内の堂地西遺跡の集石の焼けた年代を，熱ルミネッセンス法によって測定した。測定法としては，焼石を粉砕し，篩い分け，酸処理，電磁分離法などによって 0.1mm径の石英粒子を取り出して試料とする石英粗粒子法を採用した。熱ルミネッセンス法は，焼石中の石英粒子が焼かれてから現在まで受けてきた放射線量（蓄積線量）を熱発光曲線を使って測定し，この蓄積線量を，石英粒子が一年間当り受ける放射線量（年間線量）で割ることによって年代を求める。

蓄積線量を求めるための熱発光曲線が，Ａ－ＳⅠ27の試料を例として図１に示してある。図において，Ｎの曲線は焼石から取り出した石英粒子を 500℃まで加熱したときの熱発光曲線である。Ｎ＋2000の曲線は石英粒子にコバルト60の人工放射線源を使って2000ラド照射した時に加熱したときの曲線であり，Ｎ＋4000は4000ラド照射したときの曲線である。Ｎの熱発光量が何ラドの放射線量に相当するかをＮ＋2000，Ｎ＋4000の熱発量で較正して蓄積線量を求める。較正に当っては，考古年代の間のフェディングを考慮して 300℃以上の熱発光曲線の部分が使用される。

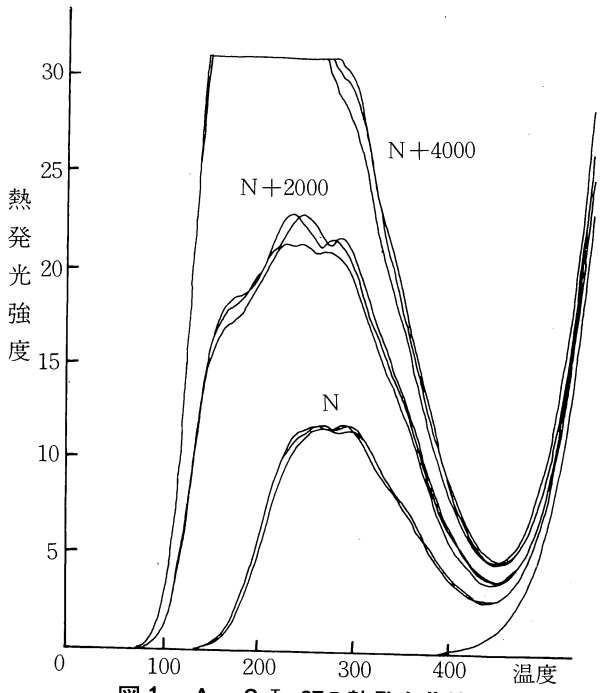


図１．Ａ－ＳⅠ 27の熱発光曲線

図２には，遺跡の周辺にあった石の試料，Ｃ—No.1 の熱発光曲線が示してある。この熱発光曲線においては，300℃ 以上の所で，Ｎ 曲線，Ｎ＋2000曲線，Ｎ ＋4000曲線の３曲線が重なっていることが観察される。これはＮ曲線から求めた蓄積線量が非常に大きいことを示しており，したがって非常に古い年代，地質年代を示している。すなわち，この石は考古年代において焼かれなかったのである。遺跡の中の石が焼けているかいないかはこれによって判定することができる。

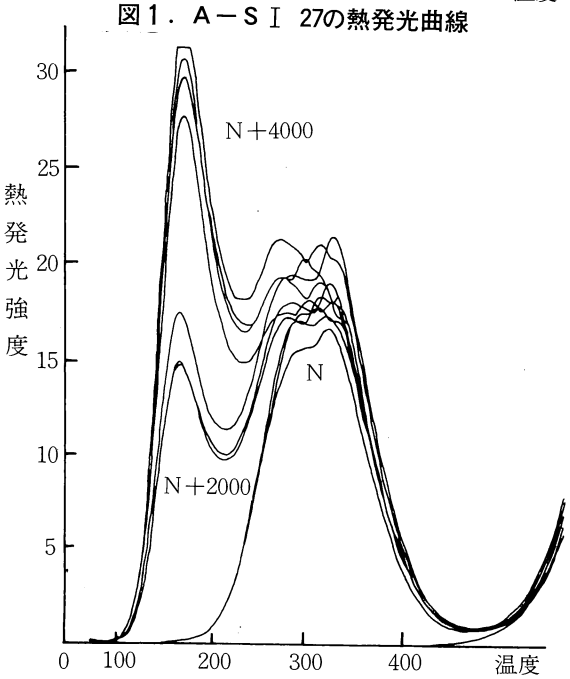


図２．Ｃ—No.１の熱発光曲線

年間線量は$CaSo_4$：Ｔｍの結晶粒子を線量計として使うことによって，熱ルミネッセンス法で測定した。焼石を粉砕して得られた粉末を使って，焼石中のベータ線量を測定し，これに遺跡の集石のあった場所で測定したガンマ線量を加えることによって年間線量を評価した。

測定した熱ルミネッセンス年代が表に示されている。蓄積線量を求める際には，スーパーリニアリティ補正を行なっているが，表の値は補正されたものである。Ｂ—No.１，Ｃ—No.１，Ｃ—No.２の試料は遺跡の周辺の石で，これらの石の熱発光曲線は前述した，図２のＣ—No.１と同じものとなり焼けていないと判定した。ただし，このグループの中で，Ｂ—No.２だけは焼けていて，表に示してあるような年代となった。

表．堂地西遺跡の集石の熱ルミネッセンス年代

試　料　名	蓄積線量（ラド）	ベータ線量（ラド／年）	ガンマ線量（ラド／年）	年間線量（ラド／年）	ＴＬ年代（年B．P．）
A－S I 27	3,154	0.215	0.102	0.317	9,950
A－S I 23	2,016	0.184	0.102	0.286	7,050
A－S I 22	2,292	0.156	0.102	0.258	8,880
A－S I 4	3,200	0.127	0.102	0.229	13,970
A－S I 13					不　焼
A－S I 15	2,453	0.189	0.102	0.291	8,430
A－S I 11	2,996	0.244	0.102	0.346	8,660
A－S I 9	2,632	0.179	0.102	0.281	9,370
A－S I 12	2,574	0.189	0.102	0.291	8,850
A－S I 4	4,685	0.240	0.102	0.342	13,690
A－S I 1	3,158	0.145	0.102	0.247	12,790
A－S I 8	3,086	0.208	0.102	0.310	9,950
B－S I 3	1,995	0.179	0.102	0.281	7,100
B－S I 5	2,453	0.244	0.102	0.346	7,090
B－S I 8	1,560	0.063	0.102	0.165	9,450
B－S I 10	2,250	0.186	0.102	0.288	7,810
B－S I 12	3,188	0.210	0.102	0.312	10,220
B－No.2	3,183	0.328	0.102	0.430	7,400

B－No.1，C－No.1，C－No.2，は焼けていない。

宮崎学園都市遺跡群出土の土器の胎土について

宮崎大学教育学部　金　子　弘　二

1．はじめに

宮崎学園都市建設に係わる遺跡発掘調査で出土した縄文時代晩期の土器中の胎土は，岩片として細粒砂岩・泥岩・火山岩（石基の破片），鉱物片として長石・石英・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・鉄鉱を構成単位とし，他に火山ガラスを特徴的に含んでいる。

土器は、素地の粘土質物質の性質や、混和物としての胎土の性質や分量、更に焼成の程度によって様々な見掛けを呈している。

本報文の初期の目的は，今回試料として県文化課より提供していただいた各土器片を，胎土の性質や分量によって分類し，土器の製作に当って胎土が採取された地域又は産地を特定する事であった。結果として，胎土の産地を特定するには困難も多く，検討しえた土器の数も過少であり，検討法も不十分であったので産地を特定するには至らなかった。

しかし，検討した土器片の性質からみてそれらは少なくとも三種にわけられる事と,胎土の各構成単位の若干の性質を知り得たのでここに報告を行う。

2．土器片の胎土の性質について

検討した土器片は，平均約５cm径の破片であり，胎土の分量によって以下のように分けられていた。

1）胎土の鉱物・岩片等が１－２％の容量を占めるもの

2）胎土の鉱物・岩片等が３－５％の容量を占めるもの

3）胎土の鉱物・岩片等が６％以上の容量を占めるもの

4）見掛けが若干異なっているもの

これらについて，できるだけ見掛けの異なるものを任意に10個選び顕微鏡用の切片を作成し観察した。尚、選び出す場合に胎土の容量についてはまったく考慮しなかった。

顕微鏡観察により分けられた３種はつぎのとおりである。

① 新鮮な火山ガラスの破片を多量に含む明るい色調のもの。

胎土を構成するのは火山ガラス，長石，石英，斜方輝石，鉄鉱であり，それらの量比は通常の火砕堆積物のそれと大きく異ならず，顕微鏡観察でも一見火山砕屑岩のように見える。

土器の製作時に胎土の原料に簡単な水簸が加えられたり，或いは，自然状態で分級作用を受けた物を胎土として利用した場合は，火山ガラスの量比に大きな影響がでるであろうから，火山ガラスの量比は各土器片毎に異なっている可能性がある。

上記の理由から火山ガラスを除外した胎土の構成単位の相対的な量の順序は次のとおりである。長石，石英，斜方輝石，岩片，鉄鉱

以下，各構成単位について性質をのべる。

長石……斜長石であり，顕著な振動累帯構造が認められる。双晶は多くない。外形にやや円磨された痕跡が有

るようであるが，全体としては破砕されている。

石英……破片状である。時に粒状で，外側を透明な火山ガラスが囲繞している事がある。時に淡褐色の火山ガラスを包有する。

斜方輝石……虫食い状に複屈折のたかい部分が有るが，これは，ややＭｇ組成の多い部分であろう。

火山ガラス……無色透明でわん曲した形態が顕著なものが多く，よく泡立ったマグマから由来するものと考えられる。

② 若干汚濁した火山ガラスの破片を多量に含む暗色の色調のもの

胎土を構成するものは火山ガラスの他に構成量の順に長石，単斜輝石，岩片，斜方輝石，石英，鉄鉱である。

長石……斜長石であるが，累帯構造があまり顕著でないものが多い。破片状である。液滴状の褐色火山ガラスを包有する。

単斜輝石・斜方輝石……単斜輝石のほうが多い。斜方輝石は多色性が強い。

石英……少量で破片状である。

火山ガラス……一般に包有物を含み，淡褐色を示すものが多い。脱ハリ作用をうけたもの，クリストバライトが晶出したもの等がある。

③ 火山ガラスを少量含み中間の色調をしめすもの

一体に胎土の構成単位の粒子が円く，長石，石英，岩片，単斜輝石，斜方輝石，火山ガラス，鉄鉱，角閃石等がある。岩片・長石・石英がほぼ等量で，ついで斜方輝石，単斜輝石の順である。全体に酸化鉄の汚染をうけ，包有物も多い。

岩片……泥質の物が多い。

斜方輝石……大粒の物が見受けられる。

角閃石……淡緑色の小破片である。

3．胎土の起源についての推定

始めに述べたように，火山ガラスや輝石類の屈折率などを測定し詳しく検討したわけではないので，以下述べる事はあくまでも推測の域をでないが，胎土の起源について述べる。

①の胎土は，その構成鉱物などからみて，姶良カルデラから噴出したもの（例えば入戸軽石流堆積物の非熔結部）ではないかと考えられる。

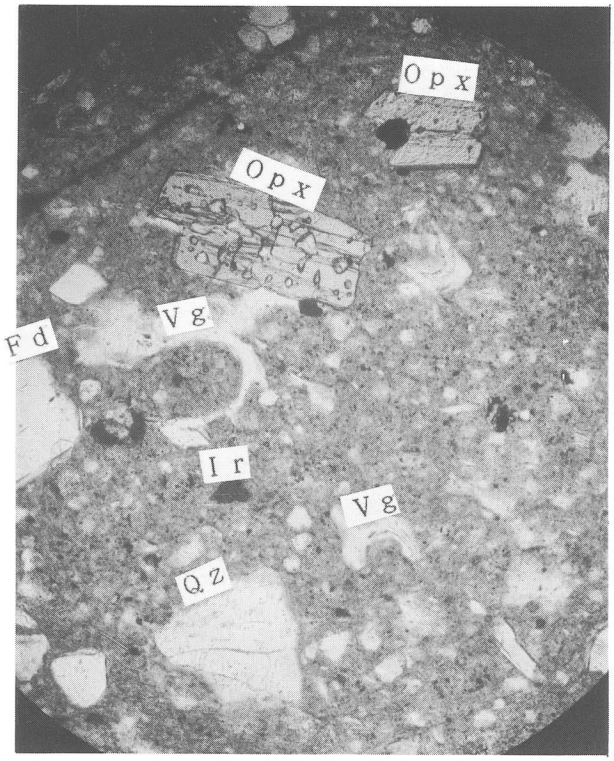
②は，すこし古い時代の火砕流堆積物または降下火砕物の粘土化したものを，そのまま使用したものではないかと考えられる。

③の胎土は，その構成鉱物などからみて，霧島火山に発する河川の下流の川砂ではないかと考えられる。

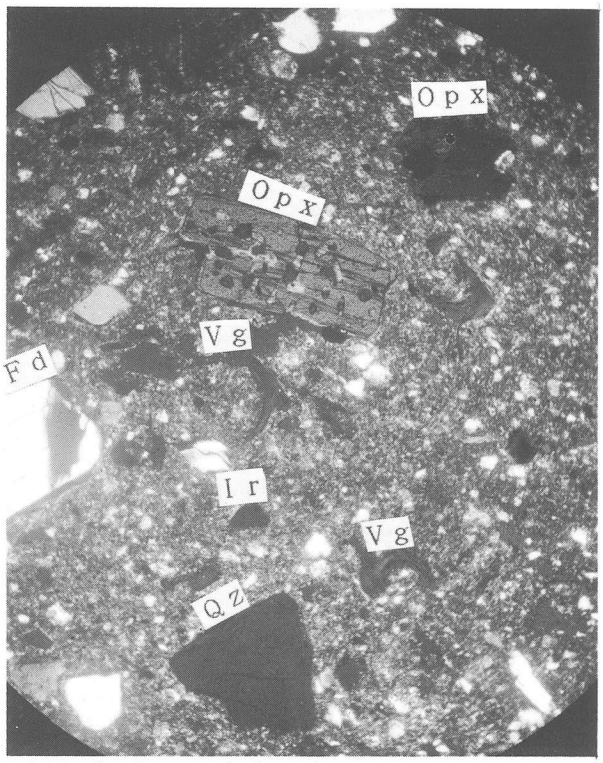
4．残された問題点

今回は胎土の構成単位の量比の定量的取り扱いと，輝石・火山ガラスの屈折率の測定を行うことが出来なかった。とくに，輝石・火山ガラスの屈折率の測定は３で述べた推定の真偽を定めるうえで重要な決め手となるであろう。

しかし，土器のように焼成されたもののなかで火山ガラスの屈折率がどのような変化をするかについては，殆ど分かっていない。



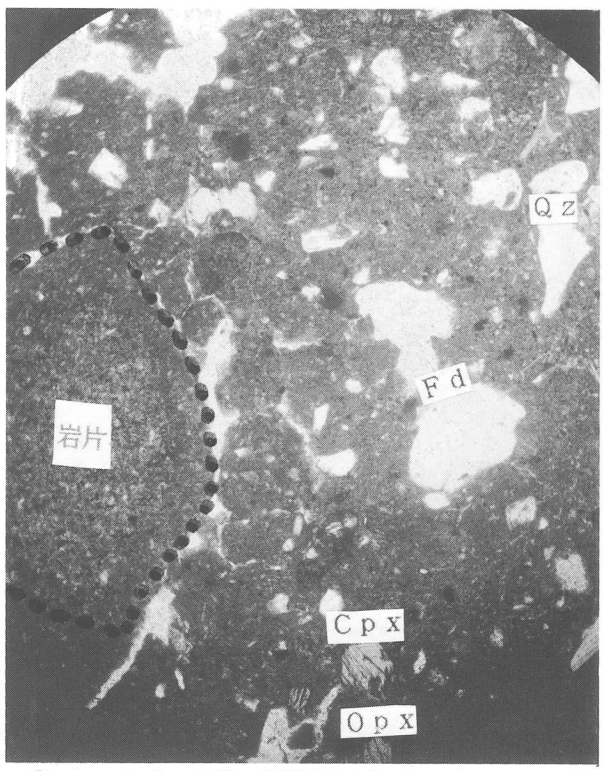
① のタイプの土器の顕微鏡写真（×30）
（平行ニコル）



同左（十字ニコル）（×30）

Qz：石英　Fd：長石　Opx：斜方輝石　Vg：火山ガラス　Ir：鉄鉱
（いずれも記号の直下の部分の結晶又はガラスを示す）

② のタイプの土器の顕微鏡写真（×30）



③ のタイプの土器の顕微鏡写真（×30）

Qz：石英　Fd：長石　Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　Vg：火山ガラス

堂地西遺跡の堆積物の検討

広島大学理学部地鉱教室　柴　田　喜太郎

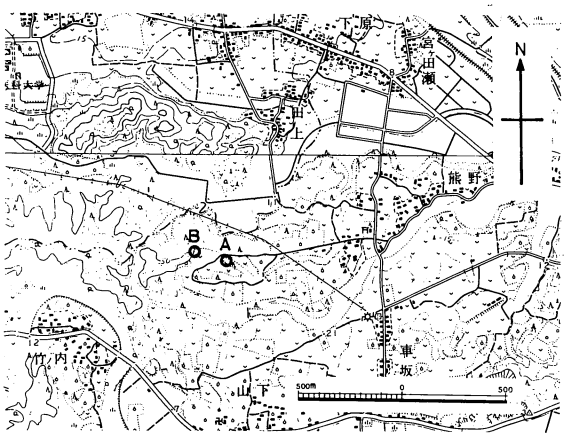
1．はじめに

堂地西遺跡は宮崎市の南に位置する宮崎市大字熊野の宮崎学園都市予定地にある。この遺跡は宮崎県教育庁文化課により発掘調査が進められており，筆者はその調査にともない堆積物の検討を行った。主として堆積物に含まれる火山噴出物について，遺物包含層の年代を明らかにする指示層としての検討を目的としている。

本報告をまとめるに際して，試料採取の機会を与えて下さった宮崎県教育庁文化課関係各位，鉱物の屈折率測定について御援助を賜わった群馬大学教育学部新井房夫教授に対して深甚なる謝意を表する。

2．試料採取地点の地形と地質の概要

堂地西遺跡は宮崎市の南に広がる丘陵地にあって，北側を清武川に南側を加江田川に接している。この地域の堆積物は，堂地西遺跡のトレンチと周辺の崖面において見られるように，宮崎層群の泥質岩を基盤にして未固結の砂・シルト・粘土および新期の火山噴出物や有機物に富む泥炭をはさむ堆積物からなる。



第1図　試料採取地点

3．分析試料

分析に供した試料は堂地西遺跡（ＭＧ９）のＡおよびＢ地点より採取した。試料はＢ地点の上部40cmを除いて，両地点とも堆積物の全層を厚さ10cmに区分し，その全てを採取した。試料数は合計42試料である。

4．分析方法

試料は次のような方法により処理した。

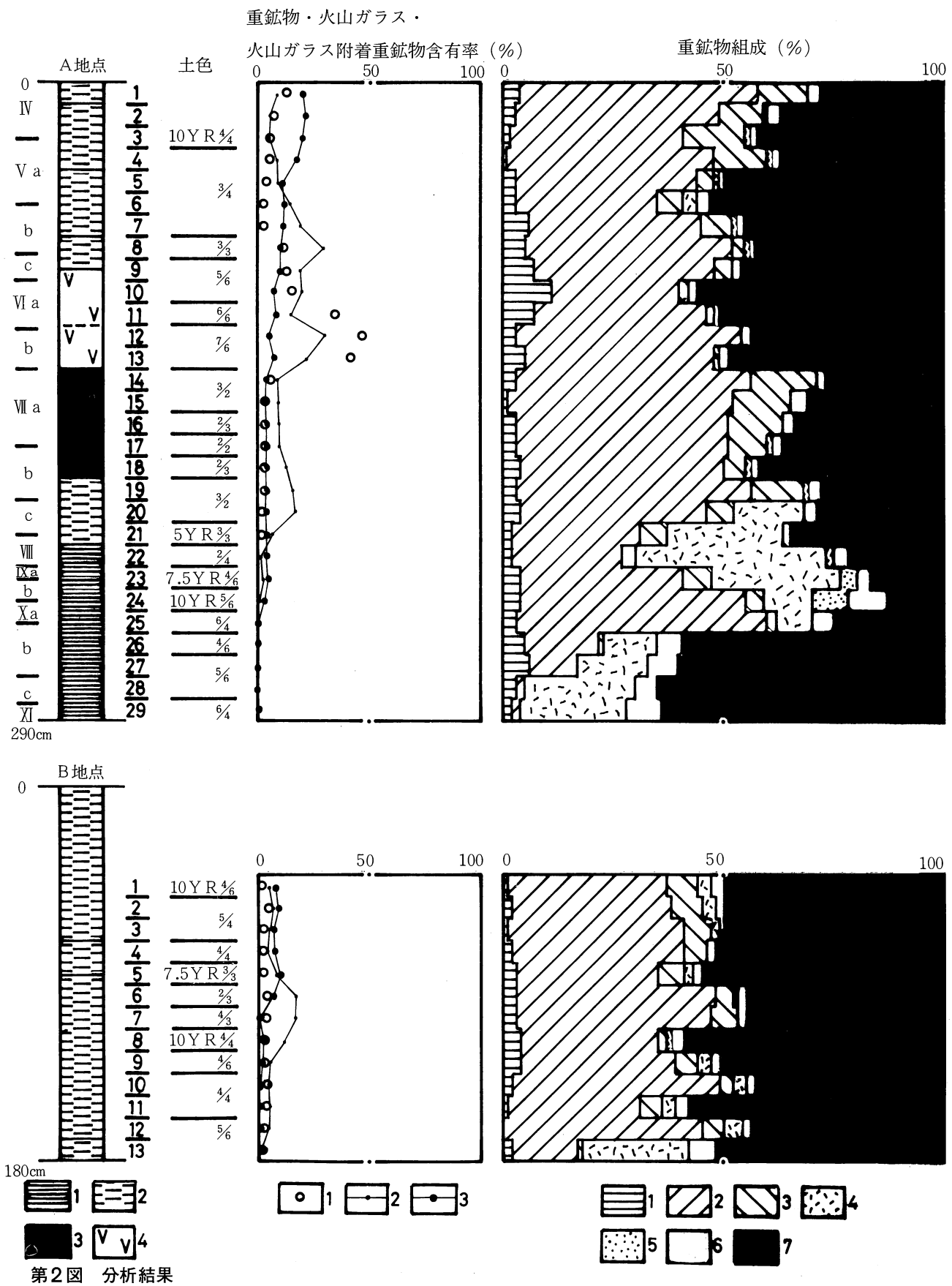
1．火山ガラス含有率（粒数%）：風乾した試料約 100g を取り，115～250＃（0.125～0.0625mm）の標準篩を用いて微細砂を分離する。次にこの微細砂を用いて散布プレパラートを作り，偏光顕微鏡下で鉱物粒250～300粒中に占める火山ガラスの粒数%を求めた。

2．重鉱物含有率（重量%）：火山ガラス含有率を求める為に分離した微細砂３～５g を用い，テトラブロムエタン（比重 2,965）により重鉱物を分離した。重鉱物含有率は原試料中に占める重鉱物の重量%である。

3．火山ガラス附着重鉱物含有率（粒数%）：微細砂から分離した重鉱物を用いて散布プレパラートを作り，偏光顕微鏡下で重鉱物粒250～300粒中に占める火山ガラス附着重鉱物の粒数%を求めた。

4．重鉱物組成（粒数%）：重鉱物の散布プレパラートを用いて，偏光顕微鏡下で重鉱物粒250～300粒中に占める次の重鉱物種の粒数%を求めた。検討した重鉱物は角閃石類（普通角閃石＋酸化角閃石，後者は微量である），斜方輝石，単斜輝石，雲母類，橄欖石，その他（変質鉱物＋不明鉱物＋ジルコン），不透明鉄鉱物である。

5．火山ガラスと斜方輝石の屈折率：火山ガラス含有率が特に高い試料について，火山ガラスと斜方輝石（γ）の屈折率を検討した。



第2図　分析結果

柱状図凡例：1．粘土　2．シルト　3．有機質黒色シルト　4．軽石

重鉱物・火山ガラス・火山ガラス附着重鉱物含有率凡例：1．火山ガラス附着重鉱物含有率（粒数%）　2．火山ガラス含有率（粒数%）　3．重鉱物含有率（重量%）

重鉱物組成凡例：1．角閃石類　2．斜方輝石　3．単斜輝石　4．雲母類　5．橄欖石　6．その他（変質鉱物＋不明＋ジルコン）　7．不透明鉄鉱物

5．分析結果

第２図に示した。分析結果の概要について述べる。

Ａ地点：火山ガラス含有率はⅤｂ層の下部とⅥａ層の下部に，次いでⅦｃ層上部にやや高い。重鉱物含有率はⅣ層にやや高く，下位に向って除々に減少する傾向を示す。火山ガラス附着重鉱物含有率はⅥａ層下部～Ⅵｂ層の範囲に高く他の層準では低い。重鉱物組成では各鉱物種の含有率の変化により堆積物を区分することができる。角閃石類は全層に含まれるが量は少ない。斜方輝石はⅩｂ層より上位に多く，不透明鉄鉱物は下位に多い。単斜輝石はⅣ層～Ⅴａ層上部とⅦａ～Ⅶｂ層の範囲に多い。雲母類はⅦｃ層より下位に多い傾向が見られる。

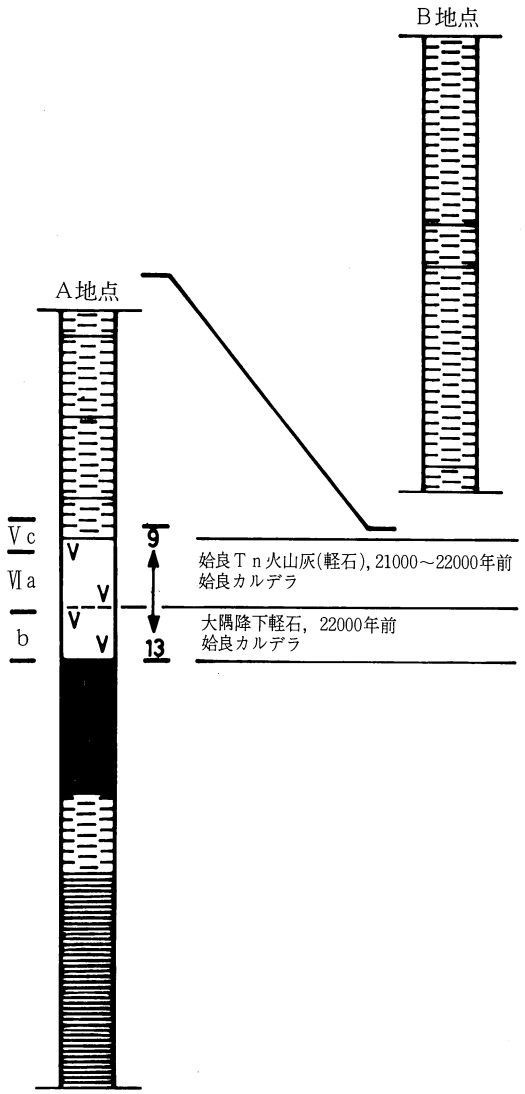
火山ガラスと斜方輝石の屈折率は，火山ガラス含有率の高いⅥｂ層上部の試料（No.12）について検討した。その結果この試料には大隅降下軽石起原と考えられる火山ガラス（屈折率レーンジ，1,498～1,501）と斜方輝石（屈折率レーンジ，γ＝1,728～1,733）が含まれていることが明らかになった。

Ｂ地点：火山ガラス含有率は試料６～７にやや高く，重鉱物含有率と火山ガラス附着重鉱物含有率は全層にわたって低い。重鉱物組成では，Ａ地点と同様に角閃石類の含有率が低く，斜方・単斜輝石には多少の増減は認められるが，試料13を除き不透明鉄鉱物含有率においても大きな変化はない。試料13は他の層準の試料に比して雲母類の含有率が高い。

火山ガラスの屈折率は試料７に含まれるものについて検討した。その結果，火山ガラスの屈折率のレーンジは1,499～1,501で姶良Ｔｎ火山灰に含まれるものである。

6．考　察

堆積物の試料を分析・検討した結果，次の点が明らかになった。Ａ地点ではⅥａ～Ⅵｂ層において火山ガラスと火山ガラス附着重鉱物含有率が高く，さらに，Ⅶｂ～Ⅶｃ層上部に見られる火山ガラス含有率の増加は，火山ガラス附着重鉱物含有率の増加を伴わない。試料採取地点の崖面において火山噴出物であることが識別できるⅤｃ層下部～Ⅵｂ層は，斜方輝石・不透明鉄鉱物・角閃石類・単斜輝石を含み，火山ガラス附着重鉱物含有率も高く，その中に角閃石類が見られる例はこの層準以外にはない。こうした傾向は火山ガラスと斜方輝石の屈折率の検討による結果とも一致し，火山噴出物の噴出源を考える上で重要である。Ａ地点のⅤｃ層下部～Ⅵｂ層に見られる火山噴出物は，堆積物の性質によりⅤｃ層下部～Ⅵａ層とⅥｂ層に二区分できる。重鉱物組成では上位の堆積物にやや角閃石類が多く，崖面では両者とも橙色を帯びた軽石からなっているが，前者はやや粗粒で“ノコクズ状”を，後者はややシルト質で“ミソ状”を呈する。火山ガラスは下位の“ミソ状”を呈する部分に多く，この部分の試料（No.12）の火山ガラスと斜方輝石の屈折率を検討した。その結果この試料に含まれる火



第３図　柱状図対比図

山ガラスと斜方輝石が示す屈折率のレーンジは，大隅降下軽石に含まれる物の屈折率に相当することが明らかになった。大隅降下軽石は姶良Ｔｎ火山灰の火砕流堆積物である入戸火砕流と同じ噴出源をもつと考えられ（荒牧・1969），姶良Ｔｎ火山灰を噴出した火山活動の先駆をなすもので，その年代はKIGOSHI and ENDO（1963）によれば 22000ＹＢＰであるとされている。また荒牧（1969）は，大隅降下軽石の分布の主軸が東南東に伸びることを述べている。こうした点を考慮すると，Ａ地点の大隅降下軽石が細粒である理由も明らかである。さらにＡ地点のⅥｂ層よりも上位の“ノコクズ状”の風化軽石は，田野町札ノ元遺跡において見られる火山噴出物の層序や粒度を考慮すると，大隅降下軽石の噴出後に降下した姶良Ｔｎ火山灰（町田・新井 1976）と考えることができる。Ａ地点の堆積物の重鉱物組成を見ると，Ⅷｃ層よりも下位に雲母類が多く一部に橄欖石を含む。さらにⅨｂ層よりも下位に不透明鉄鉱物が多い。しかし，これらの層準には火山ガラスや火山ガラス附着重鉱物の増加がなく，これらの層準には火山噴出物が存在するとは考えにくい。今後の検討を待ちたい。

Ｂ地点の堆積物は，試料６～８に火山ガラスが15粒数％前後含まれる他は変化にとぼしい。重鉱物組成も全層にわたって角閃石類が少なく，試料１～12に単斜輝石がほぼ一定して含まれることと，最下部の試料13に雲母類が増加する以外に顕著な変化はない。Ｂ地点とＡ地点の堆積物が層序的にどのような関係にあるかという点については，Ｂ地点の西側にある崖面の下部にＡ地点で見られた火山噴出物があることにより，Ｂ地点の堆積物はＡ地点の堆積物よりも上位に位置することは明らかである。また，Ｂ地点の試料７に含まれている火山ガラスは，屈折率の検討の結果，姶良Ｔｎ火山灰の火山ガラスからなり，アカホヤ火山灰によるものは含まない。これは火山ガラス含有率が少ないことから見て，この層準の堆積物が姶良Ｔｎ火山灰の上位に続く漸移帯の堆積物であることを意味する。Ｂ地点の試料の分析結果はＡ地点の分析結果と一致しない部分があり，両地点の堆積物の間には試料として採取されていない層準があることが考えられる。Ａ・Ｂ両地点の堆積物の柱状図は第３図のように配列できる。

7．結　論

堂地西遺跡のＡ・Ｂ地点の堆積物を分析・検討した結果，Ａ地点のⅥｂ層には大隅降下軽石（22000ＹＢＰ，KIGOSHI and ENDO．1963，姶良カルデラ），さらにその上位に接するⅤｃ層下部～Ⅵａ層に姶良Ｔｎ火山灰（21000～22000ＹＢＰ，町田・新井 1976，姶良カルデラ）と考えられる風化軽石があることが明らかになった。Ｂ地点では試料６～８の範囲に少量の姶良Ｔｎ火山灰の火山ガラスのみが含まれていることが明らかになった。これはＢ地点の試料を採取した堆積物は姶良Ｔｎ火山灰の上に続く漸移層であり，アカホヤ火山灰はさらに上位の堆積物に含まれていることを示す。

文　献

荒牧重雄（1969）：鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物，地質学雑誌，第75巻，第８号，425－442

KIGOSHI, K. and ENDO, K,（1963）：（Gakushuin radiocarbon measurements Ⅱ．Radiocarbon, vol．5，109－117

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰，－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義－　科学，第46巻，第６号，339－347

宮崎学園都市平畑遺跡の花粉分析

中　村　　純

宮崎学園都市予定地は宮崎市大字熊野の標高約15m の台地に展開するが，その地域内には縄文時代後期から近世におよぶ時代的に巾の広い遺跡が点在する。平畑遺跡もその一つである。今回は同遺跡形成以降の堆積環境を明らかにする目的で花粉分析的調査をおこなった。

分析試料を提供され，研究の機会をあたえて下さった宮崎県教育委員会の方々に厚くお礼申し上げる。

試料および分析方法

花粉分析用試料は同遺跡内の次の二地点より採取された。

試料Ａ：平畑ⅩⅩⅣ区−Ｃ−４地点のもので表土層（30〜40cm）と下層のアカホヤ層に挟まれた土層で層厚80cmの火山灰質黒色ローム層である。また同層の上部30cmは遺物包含層である。なお試料の深度は包含層上面を基準面として下層へ10cmごとに採取した。

試料Ｂ：試料Ａを採取した地点の東側 300m の地点（平畑－Ⅱ区）で表土層より 110cm下層までの堆積物である。これも火山灰質黒色ローム層であるが考古学的遺物は含まれていない。この試料は表層から順次10cm間隔で採取された。

両試料とも風化分解がはげしく，多量の腐植質を含んでいるが肉眼的な植物質はほとんどみられない。花粉化石の残存量もきわめて少ないので分析には大量の試料を使用した。

花粉抽出法：　各深度ごとに風乾量で50g の試料を予めＨＦ（40％）に浸積して火山灰質を除いたのち，10％ＫＯＨ溶液に入れて加熱し，有機物を分解した。つぎに比重 1.8の $ZnCl_2$ 溶液で比重選別をおこない，最後にアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混合液で加熱）をして，グリセリンゼリーでプレパラートに封入した。また抽出された花粉がきわめて微量で，すべての花粉を検鏡する必要があるので内径７㎜の内底部の尖った遠心管を用いた。このような特殊な抽出法によっても検出花粉は少数で分析結果の統計学的処理ができない試料もあった。

分析結果と考察

試料Ａ：　アカホヤ層上に堆積した遺物包含層をふくめて厚さ80cmの試料である。いずれも花粉残存量が少数なので分析結果は各試料ごとに50g 当りに含まれた花粉，胞子の粒数で示した（表１）。表１に示したように木本類，草本（シダを含む）類それぞれ24種類が検出されたが，花粉粒数は普通の湿生堆積物の数千分の一にすぎない。したがってこの分析結果からえられる情報量も制限されたものになることは止むをえなかった。

木本類では常緑カシ類やヤマモモなどが全般に多く，針葉樹や落葉高木類は少ない。また現在は自生をほとんどみないセンダンがみられるなど全層を通じて照葉樹の優勢な時代の堆積であることを示している。またガマズミ，ムラサキシキブ，ネズミモチ，カラスサンショウなどをまじえた低木二次林も照葉樹林の間には散見されたらしい。草本類では遺物包含層からソバ，ゴマが検出され，畑作が付近で確実におこなわれていたことを物語っている。またヨモギ，イネ科が多く，ツユクサ，タネツケバナ，スイバなども見られる。シダ類ではアマクサシダやカニクサも少なくない。これらは農耕地や陽地性の草地，林縁部などに多い雑草群である。また木本類とこれら雑草群との比率をみるとつねに木本類は劣勢であり，付近には農耕地又は草地が広く展開していたように推測される。

試料Ｂ：　表層から 110cm下層までの堆積物で分析の結果木本類30種類，草本類（シダ類を含む）37種類が検出された。その粒数も試料Ａに比べると多いので各種類の出現頻度は木本花粉の総数を基本数として％で示した（表２）。

したがって草本花粉のなかには 100%以上の値を示すものもある。また主な種類の消長は図１に示し，これらの花粉，胞子の一部は写真で図２に示した。表２および図１によると針葉樹ではマツが多く，次いでモミ，ツガ，ナギ，スギが多い。とくにマツは下層で少なく，中層から急増して最優勢となる。また，ナギは下層で比較的多く，スギは表層近くで急増し植林が普及したことを示している。

広葉樹類では常緑カシ，ヤマモモが多く，とくに中層以下で最優勢である。しかしマツの増加とともに減少して現在に至っている。これはカシ，ヤマモモにヤマモガシ，ホルトノキ，シイ，ハイノキ，ルリミノキなどをまじえた照葉樹林が中層から上層にかけて破壊をうけ，あと地にアカマツ，ハンノキ，ネズミモチ，ガマズミ，イヌツゲなどの二次林やスギの植林が拡がったことを物語っている。また，草本類ではヨモギ，その他のキク科，イネ科が多く，他に農耕地や草地に多い種類が全層を通じてみられる。シダ類ではカニクサ，アマクサシダ，ゼンマイ，コシダなど陽地的な荒地に多い種類が多量に出現し，しかも上層に向って増加する。またソバが散発的にみられ，オオムギも出現して農耕地が近くにあったことを示している。図１に示すように木本花粉と草本花粉や胞子の比率をみると全層を通じて木本類は劣勢でその傾向は上層に向って顕著となる。これは農耕地や草地が付近には多く，さきに述べた照葉樹林や二次林は比較的少なかったことを物語っている。

試料ＡおよびＢの分析結果を比較すると両者とも草本類やシダ類の優勢な植生下の堆積である点で一致する。しかしマツや常緑カシ，ヤマモモなどの消長を比較すると試料Ａは試料Ｂの中層以下に類似する。また試料Ａでは上層にセンダンが可なり検出されるがＢでは下層部にわずか見られる点からＢの下層部にＡは続く可能性もある。しかし試料Ａは花粉量が少ないので断定的なことはいえない。また，堆積年代については試料Ｂではマツその他の消長から1500～2000年前からの堆積と考えられる。試料Ａの下層部についてはアカホヤ層との関係が明らかでないから推定ができない。

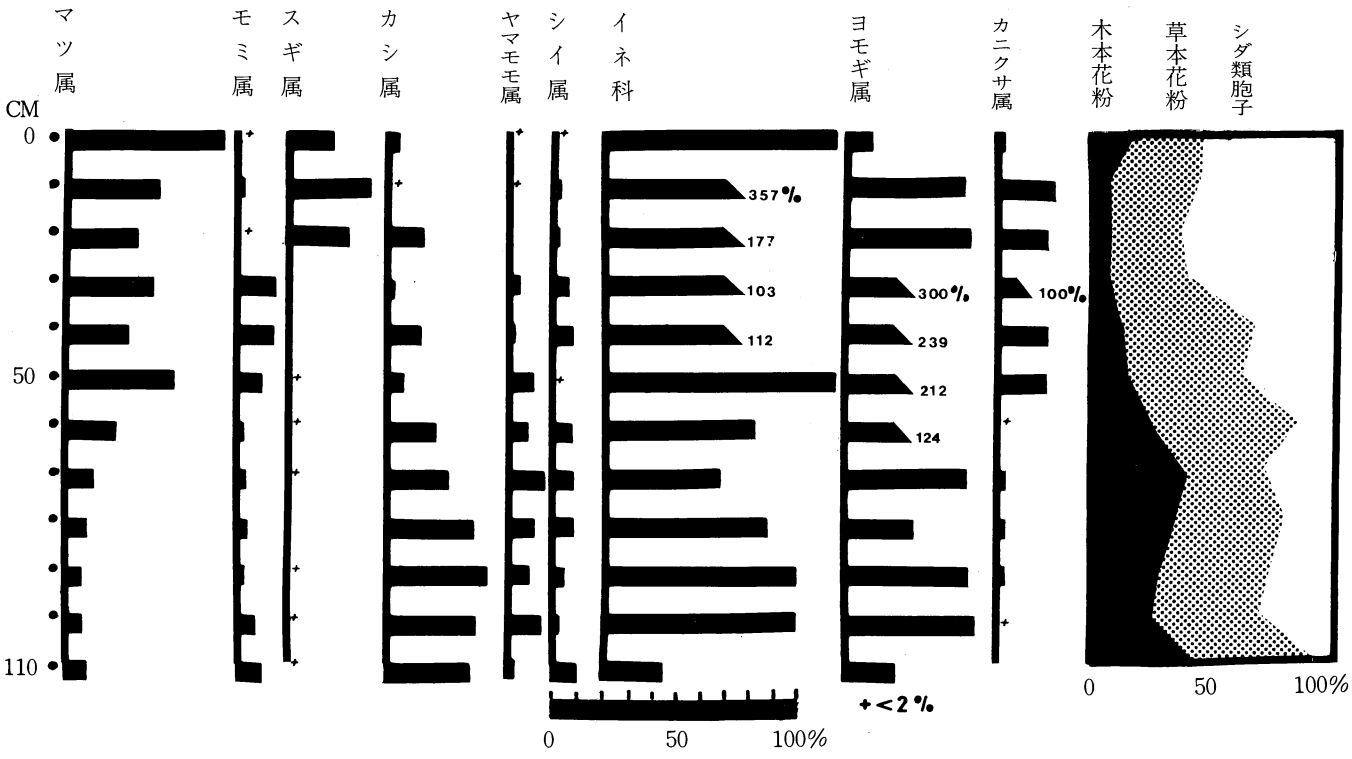


図１　試料Ｂの花粉分布図

ま と め

1．宮崎学園都市予定地の平畑遺跡の二地点の試料ＡおよびＢについて花粉分析をおこなった。

2．試料Ｂは1500～2000年前から現在に至る堆積物であり，試料Ａはその下層に続く可能性がある。

3．試料Ａの遺物包含層以後は付近でソバ，ゴマなどが栽培されていた。

4．試料Ｂの中層以後は照葉樹林の破壊が急速に進み，代ってアカマツ林，スギ植林地や草地が拡大し現在に至っている。

表１．試料Ａより抽出された花粉，胞子の粒数（試料50g 当り）

種類 ＼ 深度cm	0	10	20	30	40	50	60	70	80
木本花粉									
マツ属	1	1		6	2		9		9
モミ属							14		6
ツガ属							3		1
スギ属		1	1	5	5				
ナギ属			1	1	1		15		8
コウヤマキ属							1		1
アカガシ属	55	39	14	15	41	7	18		6
コナラ属	7			2	8				1
シイ属		1		1					
ヤマモモ属	6	2	1	9	2		12		13
エノキームクノキ属	1						2		5
ハイノキ属							16		10
ハンノキ属			8	3					
センダン属	16	13			1				
ミズキ属							1		1
エゴノキ属		1							
ヤマモガシ属	1								
ガマズミ属							1		
サカキ属		1		1					
ムラサキシキブ属	11								
イヌツゲ属		1	1				2		2
ネズミモチ属	1			1	1				1
サンショウ属	4	1	2				14		
ヤナギ属									2
小計	102	61	28	44	61	7	108		66
草本花粉									
テイカカズラ属							1		1
サカキカズラ属		1							
ヒメハギ属							1		1
アカザ属	2								1
シソ科							1		
セリ科	34	1		2	1	3	4		
ウマノアシガタ属	25	25	18	17	27	1			
ナデシコ科				1					
ブドウ属		1							
ツタ属		1							
アブラナ科	7								
ゴマ属	1								
イヌタデ属	2		1	1	2				
ソバ属	1		1	2					
イタドリ属	2								
スイバ属			1						
ツユクサ属					5				
カヤツリグサ属			1	1	2				
イネ科	23	4	21	15	15	2	50		49
ヨモギ属	25	10	9	15	37	3	20		12
その他のキク科	12	4	3	9	6	3	29		30
小計	134	47	55	63	95	12	105		94
シダ類胞子									
カニクサ属	6	8	8	5	17	5			1
イノモトソウ属	42	72	116	184	169	102	9		8
その他のシダ類	48	18	54	44	24	2	7		3
小計	96	98	178	233	210	109	16		12
木本，草本，シダ類の割合(%)									
木本類	30.7	29.6	10.7	12.9	16.6	5.4	46.9		38.3
草本類	40.3	22.8	21.0	18.5	25.9	9.3	45.6		54.6
シダ類	27.0	47.6	68.3	68.6	57.5	85.3	7.5		7.1

表2．試料Bより抽出された花粉，胞子の出現頻度（%）

種類＼深度cm	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110
木本花粉												
マツ属	65.1	41.5	30.5	36.0	26.6	47.0	21.5	13.0	9.8	7.6	8.1	10.0
モミ属	1.6	3.8	1.7	15.8	14.7	10.0	4.3	4.9	4.9	4.1	7.5	10.5
ツガ属	1.2	2.3	5.0	10.9	8.0	6.7	5.1	3.4	3.0	4.8	4.4	5.0
ナギ属	0.8		3.4	3.6	3.5	2.5	1.8	1.1	1.6	2.7	5.6	7.7
スギ属	21.1	36.5	27.2	2.4	2.8	1.6	0.3	0.3		0.7	0.6	0.4
シイ属	1.6	3.1	3.4	4.8	7.7	1.6	9.1	10.7	9.2	4.8	3.1	8.7
アカガシ属	5.0	1.5	16.9	2.4	14.0	9.0	21.8	26.0	38.8	43.2	38.3	34.7
コナラ属	0.4		1.7		3.5	2.5	13.1	13.0	3.8	5.5	2.5	
ヤマモモ属	0.4	1.5		7.3	4.2	11.7	10.5	15.7	12.0	9.7	15.0	4.5
エノキームクノキ属	0.8	0.7			2.1	0.8	1.4				1.3	0.9
センダン属											0.6	
ハンノキ属	1.2			1.2		0.8	1.0	0.8	0.5			
イヌシデ属						3.4	0.3				1.3	
サワグルミ属								1.5	3.2	0.7	0.6	
ニレーケヤキ属	0.8			1.2						1.3	0.6	0.9
ハイノキ属		2.3	1.7	2.4	1.4	0.8	2.5	1.1	4.3		5.0	7.7
トネリコ属												1.8
ヤマモガシ属		2.3	6.8	2.4	2.1	1.6	2.5	0.8	1.0	0.7	1.3	
ホルトノキ属				1.2								
ミズキ属							0.3	0.3				
カキ属		0.7						0.3				
ネズミモチ属	0.4				2.1		0.3	1.1	1.0		1.3	
サンショウ属							1.0	3.4	2.1	2.0	1.3	5.4
ルリミノキ属			1.7	4.8	6.3							
ガマズミ属		0.7					1.8			0.7		
ウコギ科								1.1	0.5	0.7		0.9
ムラサキシキブ属									3.8	1.3		
イヌツゲ属				3.6	0.7		2.5	1.5	0.5	1.3	1.3	0.9
ハゼ属		3.1										
グミ属		0.7										
草本花粉												
アリノウウグサ属	1.2	7.7	12.0	18.5	1.4					0.7		
アカザ属	1.6	2.3	1.7	3.6			0.6					
カラマツソウ属	1.2		1.7	3.6	0.7							
ウマノアシガタ属								3.8	3.2	1.4	1.8	
チドメグサ属					26.6	11.7						

種類＼深度cm	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110
その他のセリ科	0.4	6.9	5.1	36.9				1.6	1.0			5.4
キツネノマゴ属	1.6	1.5	1.7					0.8				
ミチヤナギ属	1.2	0.7										
イタドリ属	0.4	5.4										
イヌタデ属		0.7			0.7	0.8				0.7		
ギシギシ属		1,5										
ソバ属		0.7	10.2	4.8			1.8	0.8				
ナデシコ属	0.8	0.7	1.7	1.2								0.4
シソ属								0.4				
キジムシロ属	0.4											
エノキグサ属	0.4											
アマチヤヅル属							0.3					0.4
ノアズキ属									0.5			
ヤドリギ属										0.7	1.2	
サカキカズラ属		0.7		3.6		0.8						
テイカカズラ属		0.7									0	
ツタ属										0.7	0.6	0.4
キヅタ属					0.7							
スイカズラ属		0.7					0.3					
イラクサ科				2.4								0.4
カナムグラ属				1.2			3.3					
ヨモギ属	13.3	50.7	52.5	300.1	239.1	212.6	124.4	51.7	30.0	50.6	54.7	20.0
その他のキク科	12.0	71.5	42.3	78.7	37.8	57.9	15.6	10.3	12.0	15.2	8.8	31.5
ガマ属			1.7									
カヤツリグサ科	0.4	6.1	13.5	3.6	7.7		0.6			0.7		
オオムギ属					0.7							
その他のイネ科	94.6	357.7	177.9	103.3	112.6	95.8	62.7	46.3	67.2	81.2	81.7	45.3
シダ類胞子												
カニクサ属	5.4	26.9	22.0	100.9	22.4	22.6	0.3	5.0	7.0	5.5	1.2	
イノモトソウ属	10.4	24.6	27.1	23.4	12.6	14.3	2.1	6.8	2.1	10.4	44.0	2.3
ゼンマイ属	0.8	9.2	22.0	22.1		7.5	1.8	1.9	1.6	1.4	0.6	
コシダ属	31.9	18.5	35.6	9.8	6.2							
その他のシダ類	239.4	768.5	703.3	906.5	223.0	247.8	52.1	62.4	52.4	81.2	87.4	17.8
木本,草本花粉,シダ類胞子の割合(%)												
木本類	19.3	6.8	8.1	5.8	12.6	12.5	27.2	40.5	35.6	28.5	26.1	45.8
草本類	25.1	35.4	26.2	33.0	54.1	47.6	57.2	28.6	41.9	43.4	39.1	45.0
シダ類	55.6	57.8	65.7	61.2	33.3	39.9	15.6	30.9	22.5	28.1	34.8	9.2

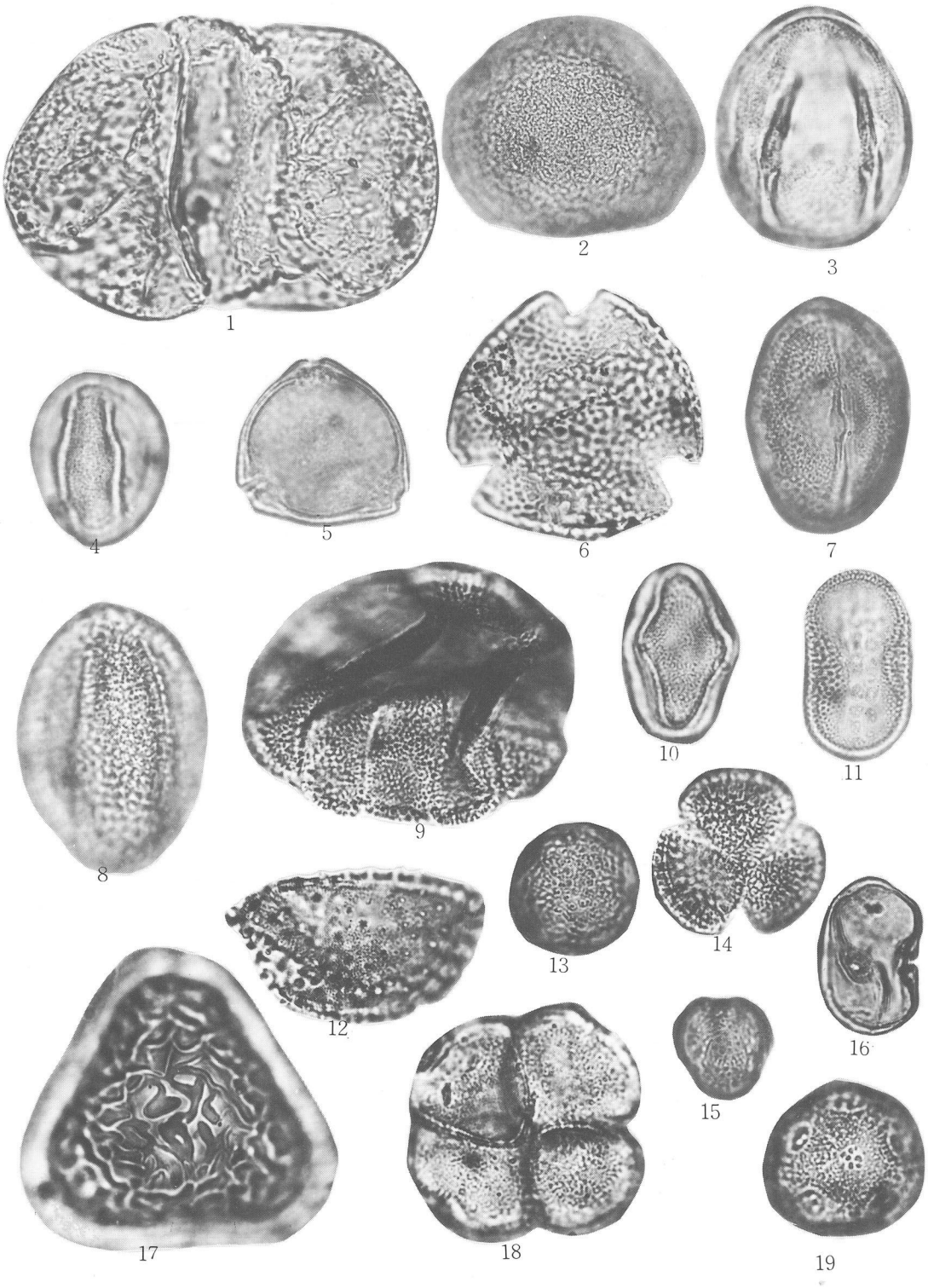


図2　試料A，Bより検出された花粉，胞子の一部

1．ナギ属	×1000	試料B－	100cm	8．ソバ属	×1000	試料B－	60cm	15．ヨモギ属	×1000	試料B	30cm
2．ツガ属	× 500	〃 B－	90cm	9．ゴマ属	×1000	〃 A－	0cm	16．サカキカズラ属	×1000	〃 A	10cm
3．センダン属	×1000	〃 A－	0cm	10．チドメグサ属	×1000	〃 B－	40cm	17．アマクサシダ	×1000	〃 A	60cm
4．アカガシ属	×1000	〃 A－	90cm	11．キツネノマゴ属	×1000	〃 B－	70cm	18．ガマ属	×1000	〃 B	20cm
5．ヤマモモ属	×1000	〃 B－	100cm	12．ツユクサ属	×1000	〃 A－	40cm	19．ナデシコ科	×1000	〃 B	20cm
6．キズタ属	×1000	〃 B－	40cm	13．ウマノアシガタ属	×1000	〃 A－	80cm				
7．ツタ属	×1000	〃 B－	100cm	14．ナタネ科	×1000	〃 A－	80cm				

宮崎学園都市遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

1．はじめに

土器の素材は粘土である。粘土を高温焼成して土器に作っても，その化学特性に変動はないことは粘土の焼成実験によって確かめられている。したがって，土器のもつ化学特性は素材粘土の化学特性である[1,2]。一方，粘土は岩石が風化して出来たものである。岩石が風化して粘土になっても，元の母岩の特性はとどめているようである[注1)]。ただ，粘土は一種類の岩石が風化されて出来るという単純なものではなく，周辺の種々の岩石の風化，混合によって出来るものである。そのために，周辺の岩石の分析データから簡単に粘土の化学特性を推察する訳にはいかない。実際に各地に産する粘土を分析してみなければ粘土の化学特性は分からないものである。もし，全国の粘土の化学特性を詳細に調べることができれば，土器胎土の分析によってその産地を推定することができる。しかし，実際に全国の粘土をすべて採集するということは不可能に近い。この難点を切り抜ける一つの方法は窯跡出土土器を分析することである。窯跡出土土器の分析データから，その窯跡で作られた土器の化学特性が分かれば，これに対応させることによって遺跡出土土器を窯跡に結びつけることができる。筆者の考えた土器の産地推定法はこのように土器胎土の化学分析によって，産地である窯跡に結びつけることであった。この方法を使えば，窯跡の残っている須恵器，埴輪，瓦の産地推定は可能である。ところが窯跡の残っていない土師器，弥生土器，縄文土器の産地推定はどうするかという問題が残る。現在のところ，これらの土器の産地を推定する方法はまだ出来ていない。しかし，例えば器形が同じ土器の胎土は果して同じであるかどうかという問題は簡単に解ける。本報告では宮崎学園都市遺跡群出土の縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，磁器の胎土分析の結果について報告する。

2．実験方法

土器資料はすべて宮崎県教育委員会文化課から提出されたものである。資料は表面を研磨したのち，100～ 200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は直径２cmの塩化ビニール製のリングに入れ10トンの圧力を加えてプレスし，コイン状の蛍光Ｘ線分析試料とした。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置で，真空下でＴｉを２次ターゲットとしてＫ，Ｃａを定量した。又，空気中でＭｏを２次ターゲットにしてFe，Rb，Srを定量した。定量分析には岩石標準試料ＪＧ－１を標準試料として使用した。分析値はＪＧ－１による標準化値，$\overline{X}$で与えられている。$\overline{X}$は次式で計算した。

$$\overline{X}=\frac{(\text{試料中のXのピーク面積})}{(\text{ＪＧ－１中のXのピーク面積})}$$

Ｘは各々，Ｋ，Ca，Fe，Rb，Sr である。もし，試料中の絶対濃度が知りたいときには，地質調査所から公表されているＪＧ－１の分析値に標準化値を乗ずれば得られる。

3．分析結果

はじめに，学園都市遺跡出土の縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，磁器胎土に違いが認められるかどうかを比較してみた。図１にはＫ量を比較してある。縄文土器，弥生土器のＫ量のばらつきは土師器，須恵器に比べて大きいことは明らかである。そして，縄文土器のＫ量は弥生土器，土師器，須恵器に比べてやや少ないことが分かる。大部分の土師器と須恵器のＫ量は殆んど同じである。磁器のＫ量はとくに多い。

図２にはＣａ量を比較してある。縄文土器のＣａ量のばらつきがとくに大きいのが目立つ。Ｃａ量でも，大部分の弥生土器と土師器，須恵器は同じである。

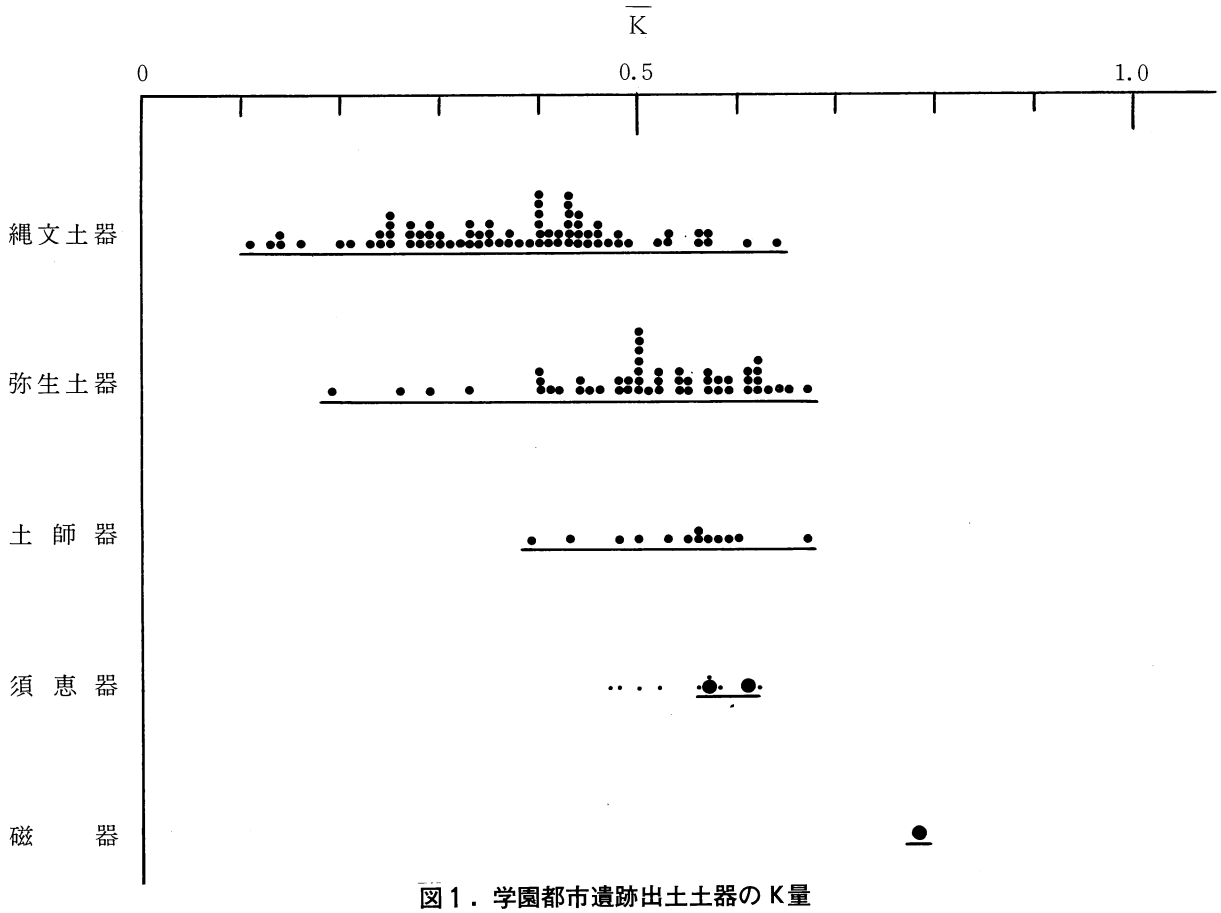


図1．学園都市遺跡出土土器のK量

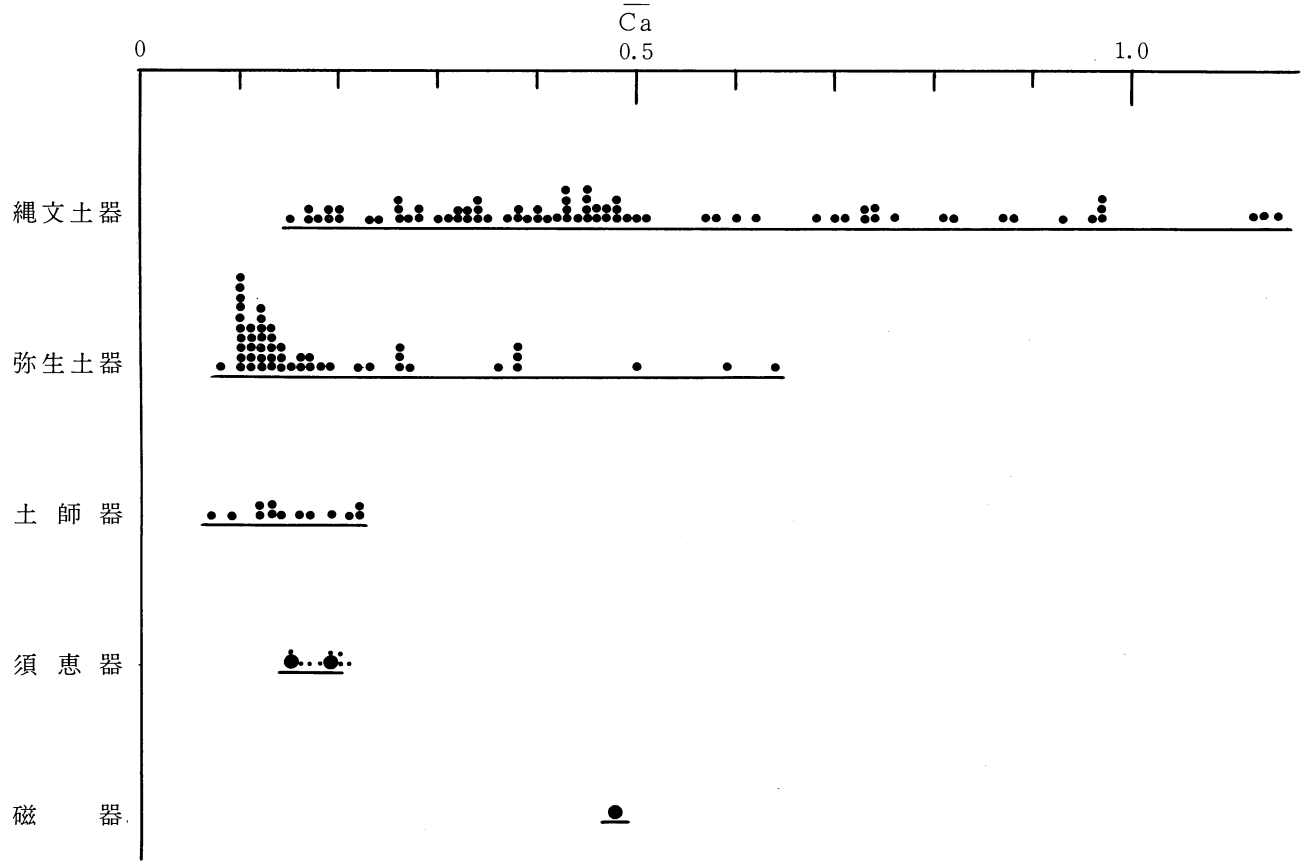


図2．学園都市遺跡出土土器のCa量

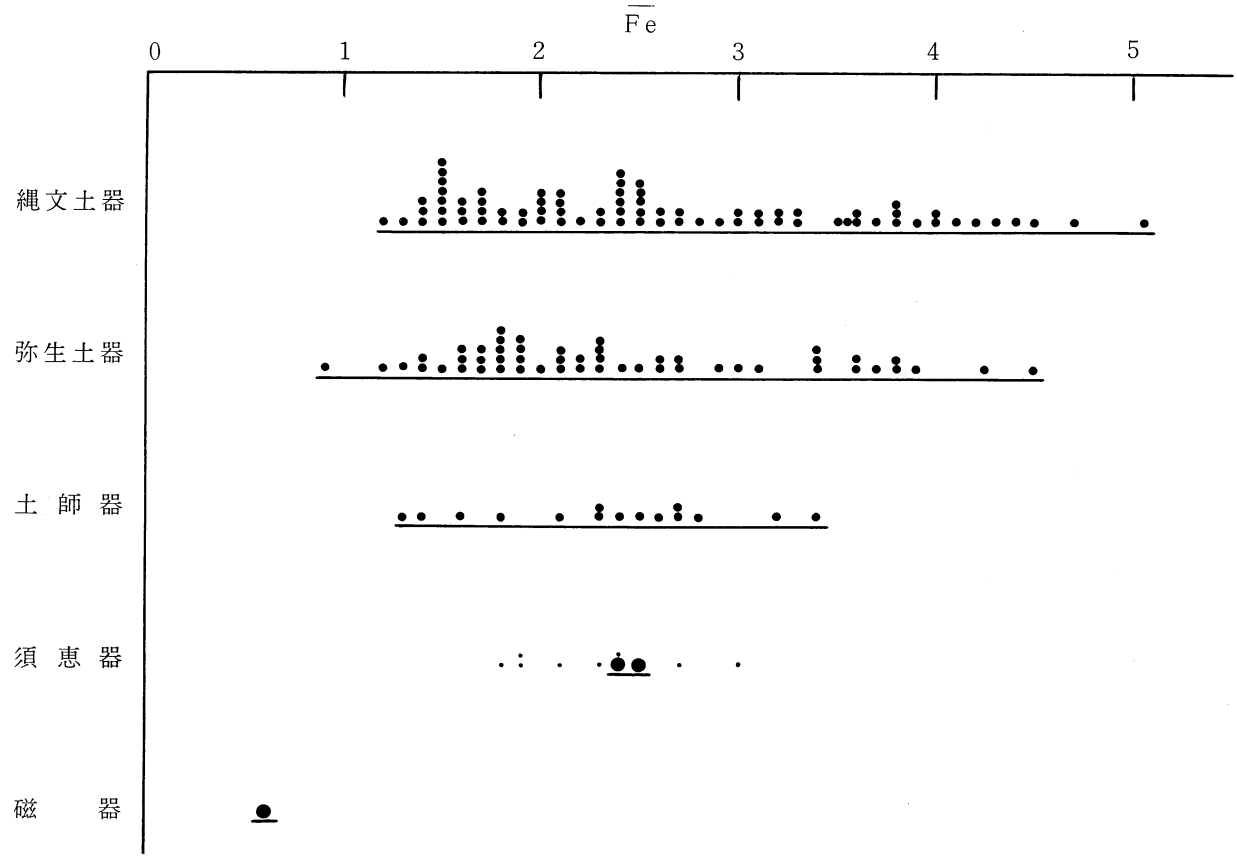


図3．学園都市遺跡出土土器のＦｅ量

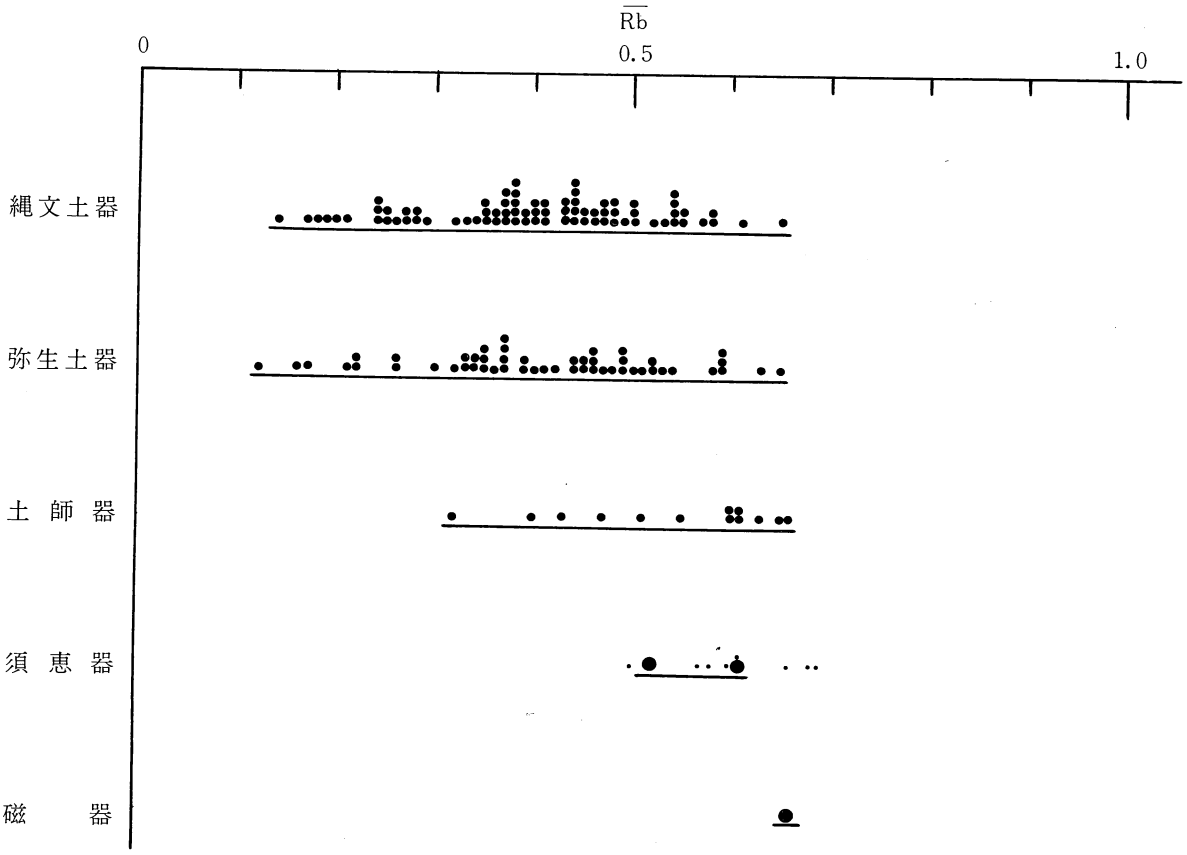


図4．学園都市遺跡出土土器のＲｂ量

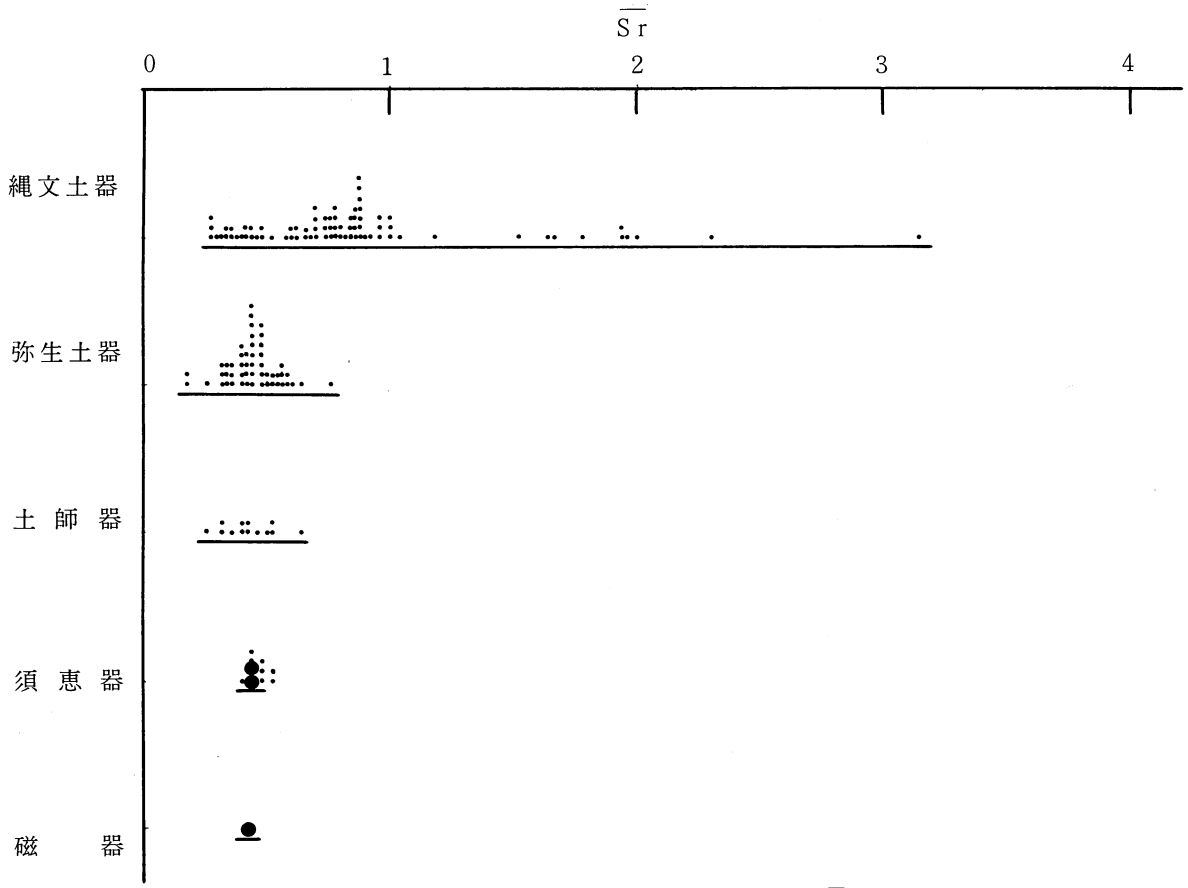


図５．学園都市遺跡出土土器のＳｒ量

図３にはＦｅ量を比較してある。縄文土器，弥生土器のＦｅ量のばらつきはともに大きい。Ｆｅ量は磁器中にはとくに少ない以外は縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器の間に大差はない。

図４にはＲｂ量を比較してある。縄文土器，弥生土器中のＲｂ量はほぼ同じであり，ばらつきも大きい。これに対して土師器，須恵器，磁器中のＲｂ量はやや多い。

図５にはＳｒ量を比較してある。Ｃａ量と同様，Ｓｒ量でも縄文土器中にはばらつきは大きい。一方，弥生土器，土師器，須恵器，磁器中のＳｒ量はほぼ同じであることが分かる。

以上の５因子からみて，縄文土器中の各因子のばらつきが大きいことが目立つ。これは縄文土器中にいくつかの産地のものが混じっていることも一因であるが，素材が十分選択されていなかったことが大きな原因であろう。土師器に比べて，弥生土器のばらつきが大きいことも同じ理由に依ると思われる。これに対し，土師器のばらつきは縄文土器，弥生土器ほど大きくはなく，比較的よくまとまっているのは素材粘土の選択がかなり厳しく行われたことによると推定される。また，どの因子についても土師器と須恵器はよく対応しており，同一地域の粘土を素材にしていると推定される。

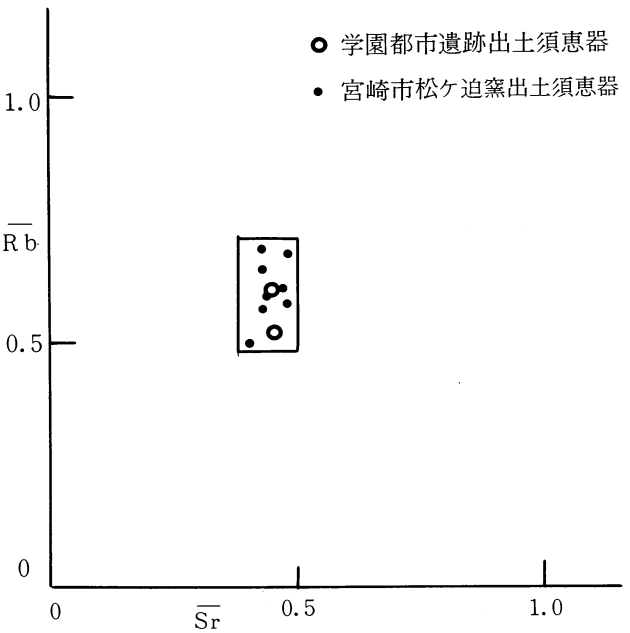


図６．学園都市遺跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図

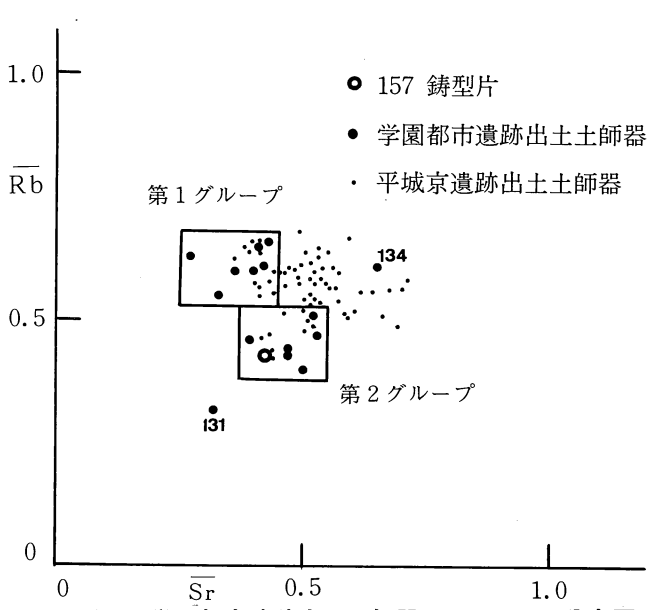


図7．学園都市遺跡出土土師器のＲｂ－Ｓｒ分布図

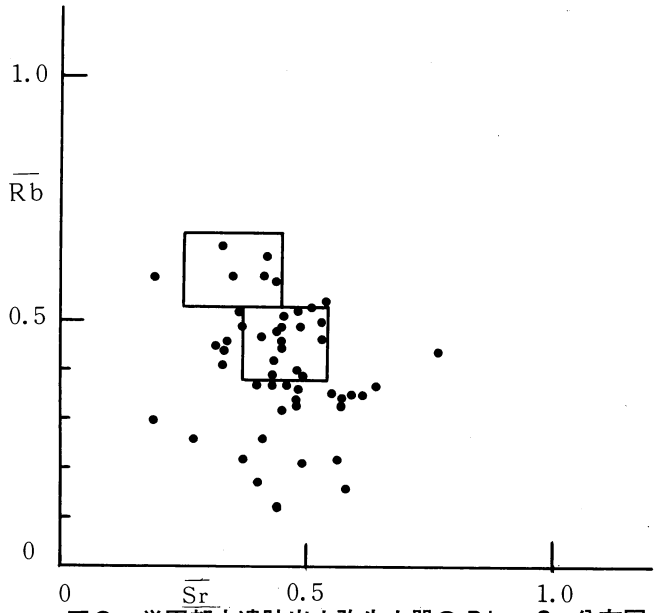


図8．学園都市遺跡出土弥生土器のＲｂ－Ｓｒ分布図

次に，これらの土器の産地について考えてみよう。まず，窯跡の残っている須恵器からみてみる。図１～５で学園都市遺跡出土の２点の須恵器と一緒に宮崎市松ケ迫窯跡出土須恵器の分布結果を示してある。どの因子についても，両者はよく対応している。また，図６には地域差をよく表示するＲｂ－Ｓｒ分布図を示してある。２点の須恵器は完全に松ケ迫窯領域内に分布している。このことから学園都市遺跡の須恵器胎土は宮崎市内産須恵器胎土と同質であると云える。したがって，その産地は宮崎市周辺とするのが有力である。次に，磁器はＫ量が多く，逆にＦｅ量が少ないという点で一つの特徴をもっている。これは名古屋を中心とした地域の陶磁器の特性でもある。器形よりこの磁器

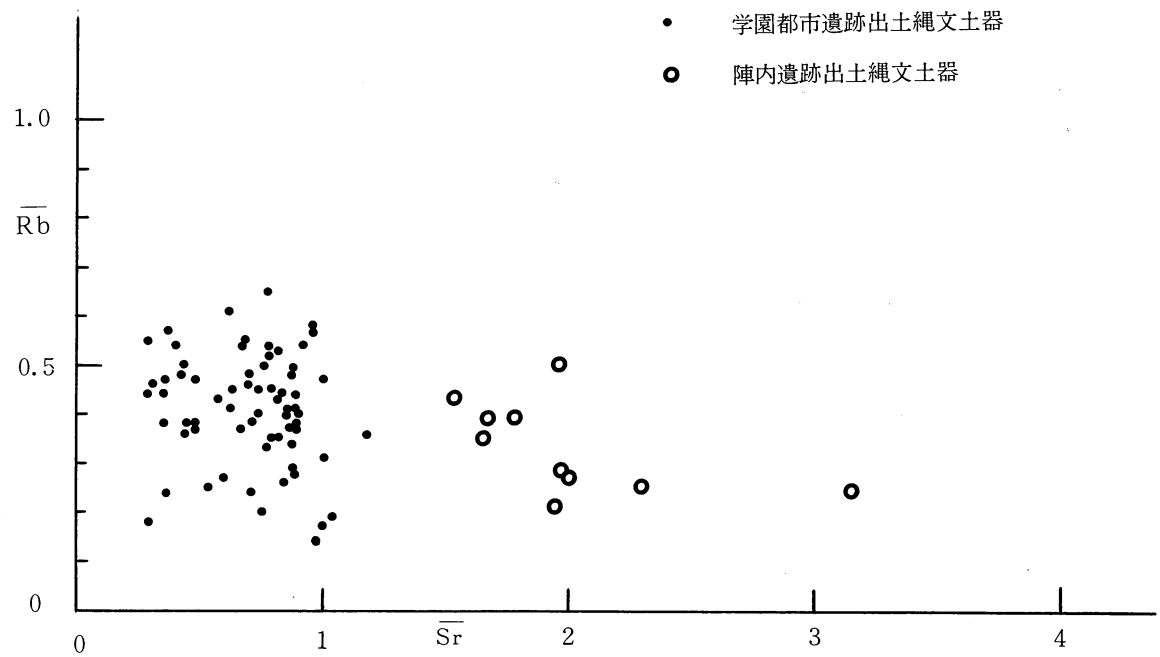


図9．学園都市遺跡出土縄文土器のＲｂ－Ｓｒ分布図（その１）

は古瀬戸と推定されているが，胎土からみてもこの推定は妥当と考えられる。次に，土師器であるが，前述したようにどの因子についても宮崎市内産須恵器によく対応しており，大部分の土師器産地は宮崎市周辺と推定される。図７にはＲｂ－Ｓｒ分布図を示してある。グループⅠ，Ⅱの２群に大別できるようにみえる。もし，この２群の存在が確認されるならば，少なくとも２ケ所の産地があることを示すことになる。ただ，この程度の分析数ではその存在は確認できない。No. 129, 132, 135, 137, 138, 139, 140の７点が第１グループに入り，No. 130, 133, 136, 141, 154, 156および，No. 157の鋳型片が第２グループに入る。また，念のため奈良県奈良市の平城京宮跡出土土師器も図７にプロットしてある。学園都市遺跡の土師器胎土と似ているが少しずれることが分かる。現時点では畿内産のものが入っていると積極的には云い難い。また，No. 131とNo. 134の２点の土師器は他の土師器とは少し離れて分布しており，別産地のものである可能性が大きい。このようにみてくると，大部分の土師器の産地は宮崎市を中心とした地域にあり，２～４ケ所の産地のものであると推定される。

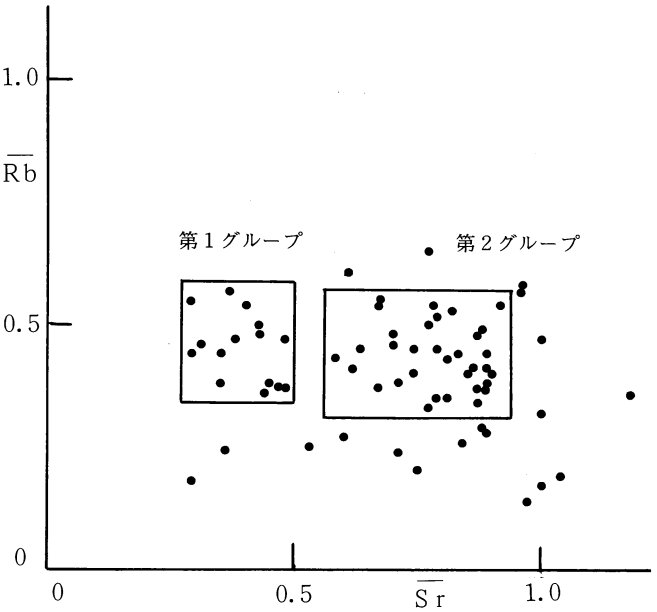


図10 学園都市遺跡出土縄文土器のＲｂ－Ｓｒ分布図（その２）

次に，弥生土器である。図８にＲｂ－Ｓｒ分布図を示す。図７の土師器のＲｂ－Ｓｒ分布図に比べると，分布はかなり広く拡がっていることは明らかである。この拡がりは素材粘土の選択が粗いことのみでは説明できないであろう。恐らくいくつもの産地の土器が混じっているのであろう。参考のため図７でつくった土師器の２グループの分布領域を示した。第２グループ領域を中心に大部分の弥生土器は分布する。これらのものの産地は土師器同様，宮崎市を中心とした地域内にあると推定される。しかし，Ｒｂ量の少ないものが９点ばかりあり，これらの弥生土器の産地は不明であるが，外来品の可能性もある。土師器にしても，弥生土器にしても窯跡が残っていないだけに，現時点ではこの程度のことしか云えない。

次に，縄文土器の分布結果について述べる。Ｒｂ－Ｓｒ分布図を図９に示す。そうすると，陣内遺跡出土縄文土器はいずれもＳｒ量が異常に多く，他の縄文土器の胎土とは全く異なることが分かる。つまり，陣内遺跡の縄文土器は他の縄文土器とは別産地のものであろう。次に，陣内遺跡のものを除く他の縄文土器のＲｂ－Ｓｒ分布図を図10に示す。そして，できるだけ多くの点を包含するようにして任意に２グループをつくってみた。Ｒｂは同じであるが，Sr量が少ないグループと多いグループである。各グループのばらつきは一窯跡出土須恵器に通常みられる程度のばらつきである。そうすると，縄文土器には少なくとも２ケ所に産地があることになる。この他，Ｒｂ量の少ないものが十数点あり，これらの産地もまた別の場所にあると推定される。第１グループは宮崎市周辺に産地があると推定した弥生土器の分布領域に対応しているが，第２グループに対応する弥生土器はなく，陣内遺跡の縄文土器と併わせて，縄文土器は弥生土器とは違ったところに産地があったと推定される。その場所は何処なのかは現在のところ不明である。以上のように，窯跡の残っていない土師器，弥生土器，縄文土器の産地推定は難しく，現在のところ，これらの土器が遠隔地から搬入されているという確実な証拠はない。今後の研究成果に期する以外にない。

最後に，Ｒｂ，Ｓｒ因子（表を参照のこと）よりみて胎土が同じと推定されるものを示しておく。平畑遺跡ではNo.16, 17, 18, 20, 21, 23, 24, 25, 26, 28, 29, 30, 31, 33, 34, 35, 37, 38, 39, 40, 43, 44, 47, 48, 49, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 58, 60, 61, 62, 64, 68, 69, 70, 71, 72, 73は類似している。また，No.22, 27, 32, 36,

41, 42, 45, 46, 50, 57, 63, 65, 67, 74, 75, 77は似ている。大きく２群に大別できる。No.19, 59, 66の胎土は少し異なる。入料遺跡のNo.12と堂地西Ａ，Ｂ遺跡のNo.13, 14, 15も平畑遺跡の第１グループに似ており，赤坂遺跡のNo.11は第２グループに類似している。また，弥生土器ではNo.94, 95, 96, 97, 98, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 108, 109, 110, 112, 113, 114, 115, 118, 119, 120, 121, 122, 124, 125, 126, 127, 128の胎土は類似しており，No. 93, 99, 107, 116, 117, 123とは異なる。

４．参考文献

１）三辻利一，脇田宗孝，圓尾好宏，喜多孝行，新浜夕起子，「須恵器産地分析に関する基礎研究，焼成効果について」　奈良教育大学古文化財報告，第７号，50～59　(1978)

２）三辻利一，「分析化学的手法による古代土器の産地推定とその問題点」　孝古学研究第28巻第２号，96— 109　(1981)

注1). 敦賀半島（福井県）と京都市の花崗岩とその周辺の土壌の分析結果，土壌の特性は母岩と推定される岩石の特性をもっていることが明らかになった。

表．学園都市遺跡出土縄文・弥生土器・および土師器の胎土分析データ

遺跡名	試料番号	器種	$\overline{K}$	$\overline{Ca}$	$\overline{Fe}$	$\overline{Rb}$	$\overline{Sr}$	備考
陣内Ⅱ	1	縄文	0.114	0.973	3.31	0.250	2.29	
	2	〃	0.205	1.23	2.99	0.240	3.15	
	3	〃	0.396	0.969	2.41	0.497	1.95	
	4	〃	0.340	0.929	1.72	0.433	1.52	
	5	〃	0.276	0.960	2.53	0.387	1.78	
	6	〃	0.416	0.674	2.84	0.393	1.67	
	7	〃	0.130	0.869	3.91	0.268	2.00	
	8	〃	0.270	1.13	5.05	0.352	1.65	
	9	〃	0.141	0.821	3.49	0.206	1.94	
	10	〃	0.266	1.17	4.66	0.284	1.97	
赤坂	11	〃	0.353	0.172	2.50	0.244	0.358	
入料	12	〃	0.164	0.879	1.24	0.143	0.967	No. 354, 80
堂地西B	13	〃	0.334	0.755	2.13	0.381	0.885	円筒土器3T, 259同一物
〃	14	〃	0.303	0.807	2.06	0.369	0.894	〃 〃
堂地西A	15	〃	0.254	0.729	2.00	0.258	0.843	7e—10
平畑	16	〃	0.518	0.737	1.71	0.359	1.18	SA8—13
〃	17	〃	0.427	0.333	1.44	0.439	0.892	SA8—15
〃	18	〃	0.434	0.300	1.47	0.532	0.817	SA2, 23
〃	19	〃	0.250	0.315	4.50	0.182	0.294	SA2, 25
〃	20	〃	0.401	0.599	2.26	0.396	0.897	SA6, 21
〃	21	〃	0.229	0.745	2.86	0.194	1.04	SA6, 24
〃	22	〃	0.425	0.439	4.32	0.382	0.450	SA6, 一括
〃	23	〃	0.461	0.277	1.49	0.645	0.772	SA7, 82 ①
〃	24	〃	0.562	0.483	2.65	0.448	0.794	〃 ②
〃	25	〃	0.448	0.407	2.51	0.479	0.869	SA7, 70
〃	26	〃	0.278	0.378	3.20	0.449	0.631	SA7, 80
〃	27	〃	0.200	0.330	4.03	0.356	0.439	SA9, 12
〃	28	〃	0.463	0.344	1.49	0.490	0.884	SA9, 15
〃	29	〃	0.477	0.466	1.45	0.369	0.868	SA9, ①
〃	30	〃	0.526	0.502	2.11	0.352	0.794	SA8, 9H
〃	31	〃	0.565	0.189	1.52	0.413	0.622	SA1, 68
〃	32	〃	0.331	0.266	2.99	0.383	0.466	SA1, 70
〃	33	〃	0.463	0.450	2.45	0.540	0.669	SA1, 127
〃	34	〃	0.557	0.264	2.14	0.613	0.611	SA1, 245
〃	35	〃	0.274	0.714	2.52	0.172	0.996	SA5, 40
〃	36	〃	0.237	0.226	4.35	0.437	0.350	SA5, 一括
〃	37	〃	0.612	0.458	2.41	0.436	0.831	SA5, 24
〃	38	〃	0.635	0.351	2.01	0.483	0.697	SA3, 13
〃	39	〃	0.486	0.696	2.74	0.409	0.855	SA3, 64
〃	40	〃	0.429	0.374	2.40	0.241	0.714	SA10, 11H①
〃	41	〃	0.247	0.243	4.03	0.384	0.348	〃 ②
〃	42	〃	0.353	0.192	4.19	0.464	0.314	〃36
〃	43	〃	0.242	0.511	2.42	0.199	0.747	SA12, 12
〃	44	〃	0.361	0.428	1.39	0.339	0.867	SA12
〃	45	〃	0.333	0.256	1.65	0.368	0.475	SA13, ①
〃	46	〃	0.135	0.398	2.55	0.246	0.532	〃 ②
〃	47	〃	0.427	0.430	2.36	0.446	0.736	〃 ③
〃	48	〃	0.301	0.679	2.58	0.289	0.880	SA14, ピット1
〃	49	〃	0.401	0.492	1.33	0.408	0.885	SA14, ①
〃	50	〃	0.446	0.195	3.13	0.497	0.433	〃 ②
〃	51	〃	0.412	0.619	1.57	0.473	1.00	SA15, 92

遺跡名	試料番号	器種	$\overline{K}$	$\overline{Ca}$	$\overline{Fe}$	$\overline{Rb}$	$\overline{Sr}$	備考
平畑	52	縄文	0.442	0.452	2.00	0.497	0.768	SA 15, 一括
〃	53	〃	0.392	0.457	2.26	0.398	0.743	SA 16, 9
〃	54	〃	0.409	0.565	1.37	0.538	0.917	SA 16, 一括
〃	55	〃	0.474	0.317	1.76	0.541	0.780	SA 17, 9
〃	56	〃	0.336	0.397	2.42	0.366	0.672	SA 17, 12
〃	57	〃	0.290	0.336	3.64	0.469	0.475	SA 18, 3
〃	58	〃	0.440	0.432	1.48	0.398	0.847	SA 18, 5
〃	59	〃	0.321	0.151	3.77	0.437	0.291	SA 18, 一括
〃	60	〃	0.569	0.431	1.84	0.522	0.785	SA 22, 1
〃	61	〃	0.480	0.449	1.55	0.580	0.956	SA 22, 5
〃	62	〃	0.402	0.729	3.27	0.283	0.887	SA 23, 一括 ①
〃	63	〃	0.528	0.260	2.02	0.554	0.677	〃 ②
〃	64	〃	0.441	0.577	3.07	0.377	0.707	SA 24, 1
〃	65	〃	0.366	0.310	3.61	0.482	0.429	SA 24, 4
〃	66	〃	0.427	0.170	4.08	0.552	0.287	SA 24, 6
〃	67	〃	0.440	0.393	2.17	0.463	0.695	SA 26, 10
〃	68	〃	0.346	0.484	1.46	0.323	1.01	SA 26, 15
〃	69	〃	0.379	0.382	1.87	0.331	0.769	SA 27, 4
〃	70	〃	0.254	0.483	1.89	0.352	0.805	SA 27, 11
〃	71	〃	0.417	0.468	1.55	0.579	0.957	SA 27, 14
〃	72	〃	0.399	0.424	1.68	0.425	0.814	SA 28, 12
〃	73	〃	0.288	0.448	3.17	0.269	0.603	NS f 11, ①
〃	74	〃	0.396	0.176	3.34	0.573	0.368	〃 , ②
〃	75	〃	0.372	0.199	3.65	0.542	0.403	〃 , ③
〃	76	〃	0.308	0.278	3.79	0.471	0.378	〃 , ④
〃	77	〃	0.287	0.342	3.67	0.426	0.575	No.2540, 丹塗
大内原	78	弥生	0.257	0.260	0.934	0.215	0.555	①
〃	79	〃	0.404	0.143	1.32	0.373	0.403	②
〃	80	〃	0.326	0.355	1.18	0.350	0.593	③
祝吉	81	弥〃生	0.524	0.165	1.79	0.652	0.332	①
〃	82	〃	0.541	0.192	1.74	0.591	0.413	②
〃	83	〃	0.616	0.128	1.83	0.522	0.362	18－5
持田	84	弥生	0.416	0.097	3.96	0.263	0.271	①
〃	85	〃	0.494	0.112	2.30	0.487	0.365	②
〃	86	〃	0.483	0.226	2.11	0.541	0.538	③
〃	87	〃	0.402	0.083	1.36	0.459	0.340	④
〃	88	〃	0.292	0.262	1.58	0.345	0.545	⑤
新田原	89	弥生	0.519	0.109	1.67	0.592	0.352	①
〃	90	〃	0.190	0.269	3.72	0.164	0.575	②
〃	91	〃	0.406	0.102	2.69	0.172	0.395	③
〃	92	〃	0.669	0.107	2.28	0.405	0.327	④
浦田	93	弥生	0.445	0.587	3.59	0.116	0.441	SA 7, 109 高坏
〃	94	〃	0.654	0.095	3.90	0.393	0.432	I, 343
〃	95	〃	0.456	0.158	1.93	0.328	0.570	SA 5, 19 鉢
〃	96	〃	0.541	0.121	1.86	0.322	0.446	SA 4, 55
〃	97	〃	0.591	0.131	2.49	0.371	0.425	I, 346
堂地東	98	弥生	0.512	0.379	2.73	0.350	0.609	II, SA 5, No.42
〃	99	〃	0.552	0.176	3.77	0.594	0.186	SA 5, カメ頸部
〃	100	〃	0.566	0.118	1.40	0.629	0.419	SC 1, 浮文カメ
〃	101	〃	0.522	0.379	2.29	0.458	0.528	SC 1, 18刻目カメ
〃	102	〃	0.504	0.221	2.40	0.517	0.475	2住, カメ
〃	103	弥生	0.478	0.256	2.60	0.419	0.427	SA 5, No. 329
〃	104	〃	0.500	0.119	2.21	0.367	0.455	SA 11, カメ
熊野原	105	土師器	0.633	0.137	1.58	0.492	0.486	SA 14, 455
〃	106	弥生	0.613	0.156	2.06	0.581	0.437	SA 12, 204
〃	107	土師器	0.546	0.137	2.64	0.363	0.480	SA 8, 2

遺跡名	試料番号	器種	$\overline{K}$	$\overline{Ca}$	$\overline{Fe}$	$\overline{Rb}$	$\overline{Sr}$	備考
熊野原	108	土師器	0.443	0.099	4.50	0.299	0.188	SA 19, 413
〃	109	〃	0.577	0.170	2.10	0.534	0.510	方形周溝, 89
〃	110	〃	0.575	0.132	1.81	0.338	0.574	SA 5, 250
〃	111	〃	0.397	0.643	3.42	0.444	0.766	SA 2, 20
〃	112	弥生	0.591	0.104	1.50	0.396	0.481	SA 5, 11
〃	113	土師器	0.492	0.106	3.42	0.217	0.366	SA 5, 107
〃	114	弥生	0.573	0.095	1.85	0.460	0.453	SA 5, 43
〃	115	〃	0.616	0.096	1.80	0.477	0.444	SA 5, 26
〃	116	土師器	0.504	0.377	2.28	0.367	0.640	SA 7, 一括①
〃	117	〃	0.497	0.104	3.62	0.258	0.414	SA 7, 一括②
〃	118	弥生	0.608	0.103	1.55	0.493	0.447	SA 5, 52
〃	119	土師器	0.635	0.117	3.40	0.474	0.406	SA14, 一括①
〃	120	〃	0.617	0.124	1.76	0.511	0.450	〃 ②
〃	121	〃	0.536	0.099	1.90	0.344	0.484	〃 ③
〃	122	〃	0.569	0.130	1.69	0.334	0.475	〃 ④
〃	123	〃	0.438	0.118	2.22	0.209	0.491	SA12 一括①
〃	124	〃	0.500	0.504	3.13	0.495	0.525	〃 ②
〃	125	弥生	0.500	0.146	2.02	0.394	0.491	SA 12, 194
〃	126	〃	0.669	0.121	2.89	0.449	0.454	SA 14, 330
〃	127	土師器	0.619	0.134	3.02	0.448	0.321	一括
〃	128	弥生	0.501	0.108	3.76	0.436	0.334	SA 5, 234
赤坂	129	土師器	0.495	0.067	1.34	0.627	0.272	
〃	130	〃	0.668	0.216	2.83	0.512	0.522	
〃	131	〃	0.386	0.159	3.23	0.315	0.324	
〃	132	〃	0.599	0.126	2.74	0.547	0.330	
山内石塔群	133	土師器	0.563	0.127	2.72	0.472	0.527	
〃	134	〃	0.564	0.210	1.55	0.605	0.652	
〃	135	〃	0.547	0.117	3.42	0.601	0.358	
〃	136	〃	0.428	0.223	2.28	0.319	0.504	
〃	137	〃	0.534	0.187	2.63	0.650	0.405	
〃	138	〃	0.575	0.088	2.07	0.659	0.432	
〃	139	〃	0.479	0.169	2.25	0.604	0.403	
〃	140	〃	0.594	0.119	2.37	0.610	0.419	
堂地東	141	土師器	0.573	0.137	2.49	0.432	0.466	Ⅲ, S－W－2
赤坂	142	須恵器	0.613	0.192	2.41	0.611	0.454	2
〃	143	〃	0.572	0.153	2.50	0.524	0.452	3
浦田	144	磁器	0.784	0.477	0.623	0.663	0.434	Ⅲ区
芳ケ迫	145	縄文	0.274	0.266	3.36	0.369	0.388	J 2－36
〃	146	〃	0.695	0.221	2.57	1.09	0.286	C 3－ 103
〃	147	〃	0.705	0.485	2.70	0.848	0.456	G 5－6
〃	148	〃	0.285	0.645	1.36	0.460	0.818	Ⅰ 3－9
永山	149	土師器	0.389	0.057	2.18	0.480	0.262	F－40
〃	150	〃	0.361	0.053	3.04	0.438	0.189	F－40
〃	151	〃	0.367	0.072	3.03	0.440	0.205	
下田畑	152		0.287	0.642	1.70	0.353	0.812	J－ 270
前原南	153		0.718	0.127	0.772	0.642	0.589	水田 0.1－45
浦田	154	土師器	0.525	0.128	1.44	0.435	0.471	SA 2, 36
堂地西	155		0.220	0.281	1.37	0.351	0.569	SⅠ2, 73
前原西	156	土師器	0.618	0.103	1.83	0.461	0.394	方形周溝, No.1
山内石塔群	157		0.556	0.093	1.83	0.444	0.419	鋳型片
前原南	158		0.635	0.134	0.710	0.617	0.523	水田b－1, 14
浦田	159		0.566	0.250	1.56	0.517	0.579	58, 341
〃	160		0.458	0.191		0.454	0.300	〃 〃
堂地東	161		0.565	0.190	2.25	0.478	0.503	ⅡC, ヘラ切杯
〃	162		0.575	0.063	0.607	0.770	0.181	Ⅳ区 古瀬戸, 水差し

所謂日向型間仕切り住居について

—— 建築史上の問題点 ——

九州大学工学部助手　山　本　輝　雄

はじめに

建築遺構の現存しない原始時代における建築史の資料の中で，竪穴式家屋址はかなりの数検出されている。九州地域では弥生時代中期から後期の竪穴式家屋址が類例も多く研究も幾分進んできたが，今回分析を試みるところの同時期の複雑な平面をもつ竪穴式家屋址は当地域に限って検出され，建築史からの問題提起は従来行われたことがなかった。発掘担当者はこの竪穴式家屋を日向型間仕切り住居と呼んでいる。この名称が妥当であるかどうかは今暫く置くとして，この所謂日向型間仕切り住居がもたらす建築史上の問題点をいくつか考えてみたい。

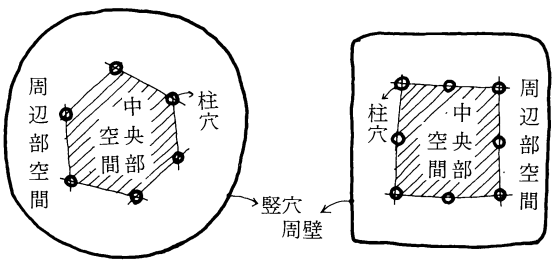
1．内部空間の分割について

一般に竪穴式家屋においては内部は単純に一室空間であると思われがちである。しかし，従来でも内部空間の使用上の分割が行われたのではないかと思われる竪穴式家屋址もあった。例えば，弥生時代後期北部九州地域に多い長方形平面，２本主柱の竪穴式家屋は，周辺部の床が中央部より一段高い部分をもち，これをベット状遺構と称えており，当然竪穴式家屋内部床面の使用上の分割が考えられる。その他にも，弥生時代中期に顕著な円形竪穴式家屋の床面上の直線状の溝は間仕切りの可能性を含んでいる。そして，いくつかのこうした実例において単発的に間仕切りの存在が指摘されたこともあった。

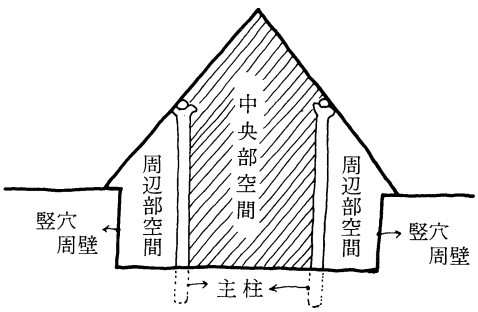
しかし，当日向型間仕切り住居には明白に間仕切りが存在する。

そこで，ここでは当日向型間仕切り住居を含めて，竪穴式家屋の内部空間が分割されて行く過程を推定してみたい。

竪穴式家屋とは「地上面を掘り凹めることによって生活面を確保し，その上に屋根を覆う家屋である」と定義すると，この定義上竪穴式家屋には柱は必要でない。しかし，発掘調査による実例は柱を床面上にもつものがそのほとんどである。



第１図

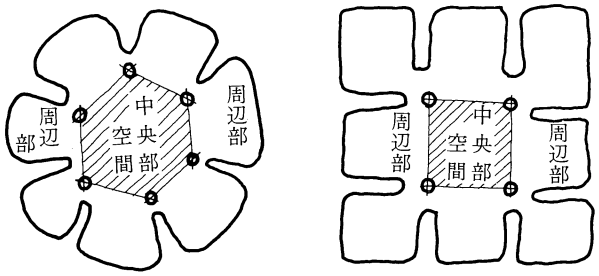


第２図

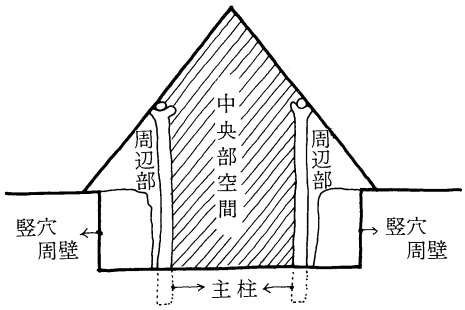
竪穴式家屋が単純に１室とすると，この柱は室内にあることになり邪魔となるが，屋根を覆う構造上やむを得ないと考えられる(1)。この柱群は２種類に分けられ(2)，うち１種類の竪穴周壁に平行な一群は，竪穴平面が「円形」であれ「方形」であれ，竪穴式家屋の内部空間をこの柱群で囲まれる中央部空間と柱群と竪穴周壁間の周辺部空間との２つに分割する（第１図）。

さらに，竪穴式家屋全体に山形の屋根が覆われるとすれば，柱群で囲まれる中央部空間は天井が高い主的な空間となり，周辺部空間は葺き降ろし屋根の天井が低い従的な空間となる（第２図）。

ここに，竪穴式家屋においては，竪穴周壁に平行に配置される柱群を床面に立てる以上は，当初から内部空間は２分割されていると思われる。

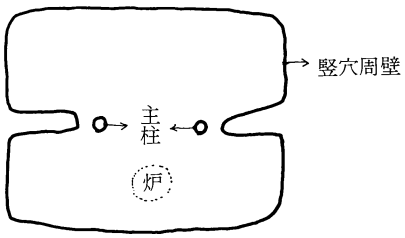


第３図



第４図

次に，当日向型間仕切り住居について考えると，発掘担当者が言われるように，この複雑な平面を「基本プラン」として「円形」，「方形」と捉える(3)ことによって，基本的には前述の第１・２図と同様な家屋のあり方をしている（第３・４図）。即ち，天井の高い中央部空間と天井が低く葺き降ろし屋根部分の周辺部空間とに分割されている。さらに加えて，周辺部空間において，「基本プラン」の竪穴周壁から内側へ突出する壁によって，いくつもの小室に空間分割されていると考えられる。周辺部がこのように明確に空間分割されているのが，当日向型間仕切り住居に最も特徴的なことである。即ち，周辺部空間を分割する施設が恒常的で固定的な土壁であり，造成にあたっては，「基本プラン」の竪穴を掘り下げた後この間仕切り壁が造成されたのではなく，「基本プラン」と同時にこの間仕切り壁も計画され当初より掘り残されていることに特色がある。



第５図

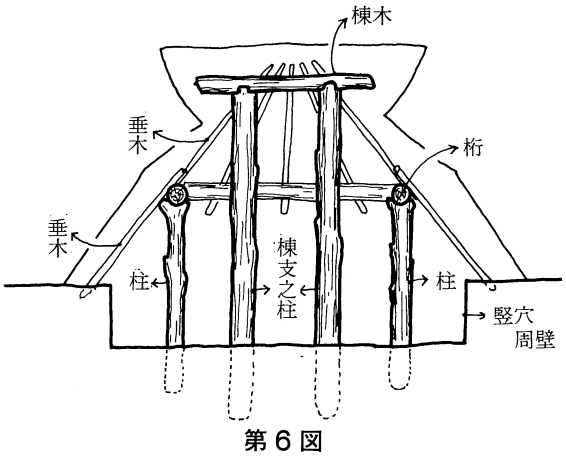
日向型間仕切り住居の間仕切り壁の存在によって，周辺部空間の細分割が明白に分かるようになった。

また，別の空間分割のあり方も，日向型間仕切り住居の例が示してくれる。「方形」平面・２本主柱の日向型間仕切り住居の場合,主柱の構成する軸線上に間仕切り壁を対にもつ（例えば熊野原Ｂ地区ＳＡ3)となると，竪穴式家屋の内部空間は対等な空間に２分割されるここになる（第５図）。しかも，炉が２分割されたいずれかの空間に配置されると，等分割された２空間はそれぞれに機能を異にした２空間となる可能性が強い。ここでは，前述の天井の高い中央部空間と天井が低く葺き降ろし屋根の周辺部空間という主従の２分割構成ではなく，対等な２つの空間の並列する構成の竪穴式家屋となっている。

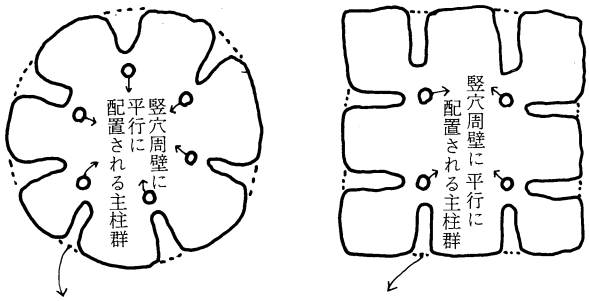
以上は全て，日向型間仕切り住居の間仕切り壁の検出によってのみ，発言され得ることであった。

さらに，日向型間仕切り住居が固定的な土壁で間仕切り壁を明瞭に表わしたことにより，遺跡上では明確でなかったこれまでの他地域での竪穴式家屋においても，間仕切りの存在は十分考慮に入れておかねばならなくなった。例えば，床面から立ち上がる木柵とか草壁の間仕切り壁は床面にはわずかにその壁跡を残すかも知れず，屋根や架構より吊り下げられた幕状の間仕切りは遺跡上にその跡を止めないかも知れない。

いずれにしても，今後の竪穴式家屋址の発掘調査にあたっては，考えておかねばならぬ重要な事柄である。

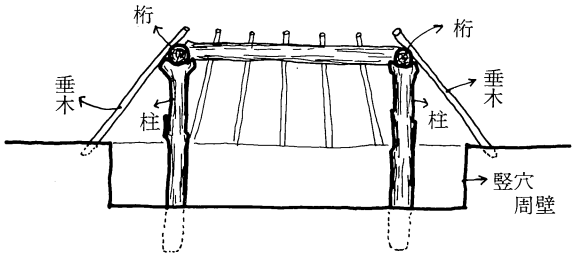


第６図



「基本プラン」円形　　「基本プラン」方形

第７図



第８図

２．推定上屋構造について

従来から建築史学徒に与えられてきた上屋構造を推定する問題についても，この日向型間仕切り住居は複雑な平面を呈するが故に，解答に対していくつかの根拠をもたらしてくれる。

推定（想像）と言えども，原始家屋の上屋構造の研究は，発掘遺跡・遺物に対する忠実な分析と一集落全家屋址の進展過程の把握を通して行うべきことを提示してきた。(4) そして，北部九州地域において実際にこれを行い，弥生時代中期に顕著な丸形平面（一般に「円形」と呼ばれている）竪穴式家屋と弥生時代後期の角形平面（一般に「方形」と呼ばれている）竪穴式家屋について，共通する２種の構造柱が存在することを明確にし，この共通事項の上に立って，竪穴式家屋には推定上屋構造が原理的に矛盾なく架構できることを提案した。(5) 即ち，中軸を構成する主柱によって支えられる棟，竪穴周壁に平行に配置される主柱群上を結ぶ多角形平面の桁および地上の竪穴平面（丸形平面又は角形平面）の三者間に傾斜する垂木を架け渡して屋根構造とする考え方である（第６図）。

当日向型間仕切り住居においても，北郷氏が指摘するように(6)，「基本プラン」を「円形」と「方形」と考えることによって，私案の原理に不都合はない。竪穴周壁に平行に配置される主柱群の存在は，方形平面・２本主柱のものを除いて明白である（第７図）。故に，主柱群より外の周辺部空間の屋根覆いについては，北部九州地域の竪穴式家屋の平面分析と同じであり，私案のように多角形の桁と地上の「基本プラン」の平面に傾斜する垂木を架け渡す架構法で納得できる（第８図）。

ただし，中央部空間の屋根覆いに関しては，北部九州地域のように中軸を構成する主柱の存在が共通事項として当日向型間仕切り住居にも指摘できるのか，あるいは別の共通事項が明白になるのか，当日向型間仕切り住居の類例が増えて行き，一集落址での竪穴式家屋の進展過程が判明する遺跡の出現を待って考えた方が良いと思う。

さらに,「基本プラン」が「円形」と「方形」のいずれを採用しているかについても，時期差があるのかどうか。また，突然にこのような複雑な平面の出現は考えにくいので，歴史的変遷のたどれる資料の積み重ねが必要であろう。現在出現している日向型間仕切り住居を見る限りでは，竪穴周壁に平行な主柱の数について，４本以上では「円形」の「基本プラン」となり，４本以下では「方形」の「基本プラン」となっていて，４本の場合は「基本プラン」が「円形」「方形」いずれもあり，中には４本の場合で「円･方形折衷様」という平面も存在する。これらの点について，竪穴式家屋を図形的に解釈して行こうとする際，「円形」「方形」という名称が妥当なのかどうか，日向型間仕切り住居の資料収集は多くの問題提起をして行くものとして重要なことになって行くと思われる。

なお,熊野原Ｂ地区ＳＡ7のような「基本プラン」が「方形」であり２本主柱の竪穴式家屋(7)については，この２本主柱が中軸を構成する柱と竪穴周壁に平行な主柱群をともに兼ねると考えることによって，私案の原理を躊躇しつつ当て嵌めてきた(8)ものであるが，当日向型間仕切り住居の出現によって，突出した間仕切り壁が周壁より２本の主柱の外側まで伸びているので，他の類型の日向型間仕切り住居と同様であることが分かり，この方形平面・２本主柱の竪穴式家

屋も四周葺き降ろし屋根の推定の根拠が与えられた。この点でも日向型間仕切り住居は貴重な資料である。

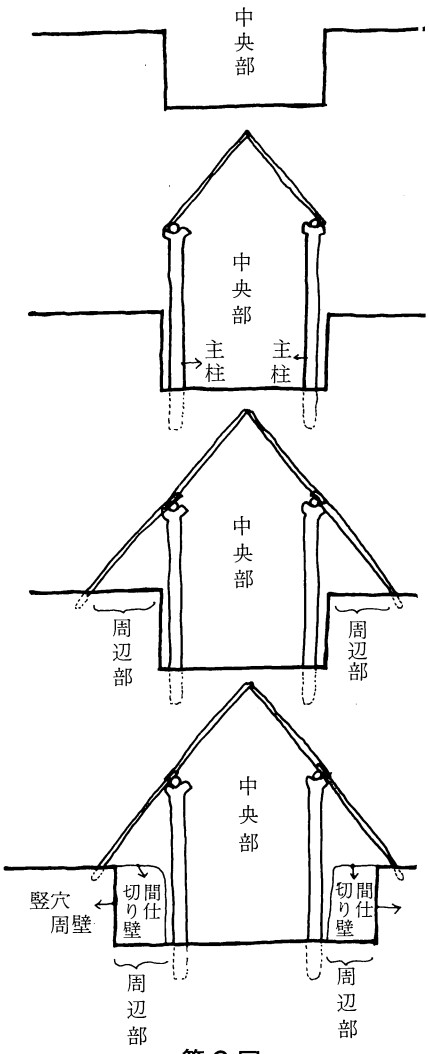
3．施工順序について

この日向型間仕切り住居の複雑な平面を眺めていると，この出入りの多い平面計画が最初から計画されそれに従って竪穴形が掘られた後主柱が立てられ上屋構造が架けられるという施工順序は，どうも考えにくい。

施工順序については，北部九州地域で一般に見られる「円形」や「方形」プランの竪穴式家屋においてなら，竪穴形を決定した後それに従って竪穴形が掘られてその竪穴を覆うように上屋構造を架けるべく主柱が立てられて建設が進んで行くと，従来一般に考えられているように考えて，一構に不安を感じなかった。

しかし，この複雑な平面をもつ日向型間仕切り住居の場合，施工順序も従来とは異なったことを考えておかねばならないと思える。そこで，次の提案を提示したい。

例えば，堂地東ＳＡ16では，主柱群で囲まれる中央部は主柱を含めた範囲が１段低く掘り下げられており，花弁状平面の周辺部は中央部より１段高い床面となっている。この床面の状態は家屋の完成時ないしは使用時の床面高の違いであるが，これを施工過程での違いが表われたものと捉えると，この複雑な平面の竪穴式家屋の施工過程は，次のようにも考えられる（第９図）。



第９図

(1). まず，主柱群で囲まれる中央部のみ，主柱群位置も含めて，竪穴を掘る。

(2). 次に，主柱を立て，中央部のみ上屋構造を完成する。

(3). 次に，上記架構の済んだ中央部の周辺に所謂「基本プラン」に従って「円形」か「方形」を決定して，周辺部の葺き降ろし屋根を建設する。

(4). その後，周辺部空間における間仕切りの平面計画に従って，間仕切り壁を「基本プラン」から内部へ突出するように配置し，この間仕切り壁部分を掘り残して，周辺部竪穴を掘る。

以上，床面高の違いをとらえて施工順序を推測する資料とした。この方法は，従来心配された足場の問題も幾分利点も含まれる。ただし，ここに提案した施工順序についても，この問題意識をもって今後実施される発掘調査によって実証される必要がある。

竪穴式家屋の建築史上の問題は，完成した姿を追求する研究とともに，どのように建設されて行ったかという施工過程の研究にも及んで行くであろう。

今後の発掘調査は，建設過程の視点が必要となってこよう。

おわりに

所謂日向型間仕切り住居はその複雑な平面をもつが故に，従来の単純な「円形」「方形」竪穴式家屋では提案できなかった色々な点につき指摘ができた。

そして，従来の単純な「円形」「方形」平面の竪穴式家屋についても，以上の３点，「内部空間の分割」・「推定上屋構造」・「施工順序」の各々については，念頭に置きつつ，発掘調査と研究に臨まなければならないことを，私達に示してくれた。

（昭和59年９月10日稿了）

註

(1) 拙稿「弥生時代住居の復元」（『竹並遺跡』1977年５月　竹並遺跡調査会編集　美夜古文化懇話会発行）

(2) 拙稿「竪穴式家屋の構造柱・二種――竪穴式家屋の上屋構造原理を求めて――」（『日本建築学会中国・九州支部研究報告第５号　1981年３月）

(3) 北郷泰道「Ⅳ，結語――住居の変遷にふれて――」（『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）』　1983年３月　宮崎県教育委員会）

(4) 次のようなものがある。

- 「丸形竪穴址について――特に，その上屋構造原理についての一私案――」（『谷頭遺跡』　1978年８月　谷頭遺跡調査団編集　熊本県阿蘇郡西原村教育委員会）
- 「竹並遺跡検出の円形竪穴式家屋――特に，その主柱穴配置における中軸線のあり方をめぐって――」（『竹並遺跡』　1979年５月　竹並遺跡調査会編集　寧楽社発行）
- 「大分県松木遺跡（大野郡大野町）に見られる方形竪穴式家屋の進行と進展について」（『大野原の遺跡』　1980年３月　大野町教育委員会）
- 「北九州地方における丸形平面竪穴式家屋の進展過程」（『日本建築学会大会学術講演梗概集〈近畿〉』　1980年９月）
- 「弥生時代の建物――建築学からみた住居の変遷」（『ふるさとの自然と歴史第 144号　1983年５月　歴史と自然をまもる会）
- 「直交軸採用建築の成立――所謂掘立柱建物の一研究――」（『大宰府古文化論叢』下巻　1983年12月　吉川弘文館）

(5) 前掲註(2)

(6) 前掲註(3)

(7) 「奴国における竪穴式家屋形式の確立」（『日本建築学会大会学術講演梗概集〈北陸〉』　1983年９月）

(8) 「下稗田遺跡Ｄ地区方形竪穴式家屋の推移について――竪穴式家屋の変質――」（行橋市下稗田遺跡の本報告に掲載の予定）

「日向型間仕切り住居」研究序説

1．はじめに

「日向型間仕切り住居」[1]とは，円形プラン及び方形プランを基調として内側の複数の突出壁によって間仕切りされた空間を複数有する住居で，従来「花弁状住居」，「花びら状住居」[2]とも呼ばれている。小丸川以南から大隅半島までの旧日向国に分布しており，後の日向の在地型墓制である地下式横穴墓とかなりの部分重なりあう点で注目されるべきであり，また汎日本的には円形プラン或いは方形プランの住居に対して特異的ないし在地的な住居である。

ここでは，日向における弥生時代住居及び集落の変遷を述べた後，「日向型間仕切り住居」の定義・形態分類と編年及び問題点を提示したい。

2．日向における弥生時代住居及び集落の概要

日向における弥生時代住居及び集落の変化を前・中・後期に分けて述べる。

縄文後・晩期

前段階の縄文時代後・晩期の竪穴住居は，従来不明であったが，学園都市平畑遺跡[3]で55軒の住居跡が調査されようやく明らかになった。平畑遺跡では直径４ｍ前後の平均７～９㎡の円形プランの住居である。

弥生前期

日向で最も早く弥生文化が波及したのは檍遺跡[4]（宮崎市）であるが，遅れて板付Ⅱ式の時期である。石川恒太郎氏が「敷石住居」の検出を報告されているが[5]，それは森貞次郎氏が指摘しているように墓の上部構造と考えられる[6]。持田中尾遺跡[7]（高鍋町）は，台地から突き出した小丘陵先端に位置しており２軒の住居跡が調査された。そのうちの１号住居跡は20㎡の円形プランの住居で，西部瀬戸内系の壺と下城式の甕を伴う古いタイプは前期に属する[8]。

弥生中期

洪積台地南端に立地する鐙遺跡[9]（新富町）で円形プランの２軒の住居跡が検出された。この土器群の古いタイプは，鋤先口縁の壺・下城式の甕・亀ノ甲式系の甕で，新しいタイプは突帯が台形状に変化し，横にやや拡張され逆Ｌ字化が進行した甕を特徴とする。２号住居は径約3.3ｍ，１号住居は7.4ｍ×6.9ｍの35㎡の規模で，２号住居から１号住居へ変遷し，中期前半に比定される。

学園都市堂地東遺跡では，中期後半に比定される方形プランの住居が２軒調査されている[10]。ＳＡ１は一辺約4.8ｍの方形プランの住居で，一部に張り出しを有しており，下城式の甕・軽石製石棒が出土している。ＳＡ２は，3.6ｍ×4.0ｍの11.1㎡の方形プランで，大甕を置く空間が一ケ所張り出している。新田原遺跡[11]（新富町）で12軒の住居跡が調査され，主体は後期初頭であるが，そのうちの一部が中期にはいる可能性がある。

弥生後期

「日向型間仕切り住居」が出現する時期である。

貝ノ畑遺跡[12]（延岡市）の竪穴住居は主柱穴４本柱の方形プランで19.6㎡，大貫遺跡[13]（延岡市）の竪穴住居は長方形プランの21.6㎡，持田遺跡[14]（高鍋町）の１号住居が方形プランの5.3㎡である。これに対して把言田遺跡（川南町）の１号住居は張り出しを持つ十字形の竪穴住居であり，２号住居も四隅が広がる竪穴住居で子持家型埴輪の祖型として考えられている[15]。

後期初頭～前葉の堂地東遺跡[16]（宮崎市）・新田原遺跡[17]，後期後葉～未の熊野原遺跡Ａ[18]・Ｂ[19]地区（宮崎市）・祝吉遺跡[20]（都城市）・丸谷第一遺跡[21]（都城市）は「日向型間仕切り住居」を主体とする集落であり，大萩遺跡[22]（野尻町）・

上示野原遺跡[23]（高崎町）には各1軒ずつ含まれている。これらの集落の概要については次の章で述べるのでここでは割愛する。 後期の集落の特徴としては方形プランの竪穴住居と「日向型間仕切り住居」が共存することである。「日向型間仕切り住居」は宮崎平野部では布留式併行期には消失し，方形プランの竪穴住居に総括されるが，大淀川上流域では小型丸底坩が出現する古墳時代初頭まで継続する。

3．研究史

「日向型間仕切り住居」は，1973年に上示野原遺跡[24]（高崎町），次いで大萩遺跡[25]（野尻町）で調査されて，その特異なプランが知られるようになった。茂山護氏は「室内の仕切り壁」と「出入口の階段の役割」を指摘[26]し，田中茂氏は「隅丸方形を基本としながら床面を二分するような施設」を有していると指摘[27]して以来，1977年の丸谷第1遺跡[28]で調査され注目されたが，面的な調査は行なわれなかったので，集落の中での位置づけを行なうまでは至らなかった。茂山護氏は上示野原遺跡における長方形プランの住居との対比によって，「日向型間仕切り住居」である2号住居を集落の集会所か共同作業所の可能性を指摘[29]したのは注目される。

1980年代になると，80～81年の祝吉第1遺跡[30]（7軒）・第2遺跡[31]（13軒），81～84年の宮崎学園都市遺跡群[32]（宮崎市・清武町）内の堂地東遺跡（20軒）・熊野原遺跡B地区（18軒），前原北遺跡，81～82年の新田原遺跡[33]（新富町・12軒），82年の寺原第1遺跡[34]（西都市・2軒），84年の越シ遺跡[35]（日向市・1軒）とある程度面的な調査が行なわれるようになり，集落としての性格付け・構造などを追求する段階を迎えた。

「日向型間仕切り住居」の突出部について，田中茂・茂山護両氏の意見を踏襲し，石野博信氏の「間仕切り」の理論[36]を採用・発展させ，面高哲郎氏が「間仕切り的機能」と表現[37]し，次いで北郷泰道氏も「間仕切り的機能」を使用した[38]。北郷氏は，「祝吉遺跡(1)」[39]において1号住居の西南のコーナーを工房区，東南のコーナーを食住の空間として一歩踏み込んだ推定を行ない，間仕切りされた空間に対して具体的な使用法を示した。面高氏は，「祝吉遺跡(2)」[40]において，10号住居の間仕切りされたベッド状遺構から手捏ね土器や朱玉が出土しているので，祭祀に関する住居を想定している。このように遺物で間仕切りされた空間の性格・機能を追求できる段階になった。また「花弁状住居」という語を初めて報告書に使用した山中悦雄氏は中期末から終末期にかけて盛行[41]するとした。

1982年，北郷・菅付和樹両氏は，熊野原遺跡B地区の概要報告の中で「日向型間仕切り住居」の集成をすると伴に，基本プランとして円形と方形を示した[42]。

1982年に北郷氏は「日向型間仕切り住居」をⅠ～Ⅳ類に分類した[43]。Ⅰ類：基本プランを円形プラン（例＝新田原遺跡・熊野原遺跡B地区8号住居），Ⅱ類：基本プランを方形（例＝熊野原遺跡B地区3・4号住居），Ⅲ類：Ⅱ類が小規模化したもの，2本柱（例＝熊野原遺跡B地区7号住居），Ⅳ類：Ⅲ類と同じ，突出壁が一箇所で二本柱に直交（例＝大萩4号住居）。編年については，Ⅰ類は新田原遺跡の中期後半を上限として熊野原遺跡B地区1号・8号住居の後葉～末を下限とし，Ⅱ類は一部古墳時代に入るとした。また，円形プラン・方形プランを基調として間仕切りの機能を有する突出壁を複数持つ住居を，「続日本紀」の日向の国に分布するということで積極的に評価し，北郷・長津は「日向型間仕切り住居」と呼称した。

1983年には堂地東遺跡(宮崎市)が調査され，熊野原遺跡B地区に先行する時期の住居形態が明らかになり，学園都市遺跡群内の住居形態の変遷が追求できる段階になった。長津は，「日向型間仕切り住居」を平面プラン・突出壁・ベッド状遺構の3要素によって分類した[44]。第Ⅰ類は円形プランを，第Ⅱ類は長方形プランを，第Ⅲ類は第Ⅰ類と第Ⅱ類の折衷型プランを基調とする。第Ⅳ類は方形プランで突出壁を1，2個有する2本柱，4本柱。第Ⅰ類～第Ⅳ類は，ベッド状遺構に有無によって更にA・Bに分類した。「日向型間仕切り住居」の出現は，新田原遺跡の瀬戸内系の矢羽透し入り高坏に示される外的契機によってもたらされたものであり，中期と後期とを分ける要素の一つである。一

方，基本的には前方後円墳の出現と伴に消滅するとした。この考え方にたって，第ⅠＡ類を後期初頭～末（山中編年[45]Ⅴａ～Ⅷ期），第ⅠＢ類を後期前半～末（山中編年Ⅴｂ～Ⅷ期），第ⅡＡ・Ｂ類を後期前半（山中編年Ⅴｂ～Ⅵ期），第ⅢＡ・Ｂ類を後期前半～末（山中編年Ⅴｂ～Ⅷ期），第ⅣＡ類を後期初頭～前半（山中編年Ⅴａ～Ⅵ期），第ⅣＢ類を後期初頭～末（山中編年Ⅴａ～Ⅷ期）に比定した。時期比定は学園都市遺跡群内の弥生土器編年が未完成であり，また日向全域を普遍的に扱ったこと，及び社会現象と土器編年の関係の点で問題点もある。

1983年石川悦雄氏[46]は，その機能及び性格が確定してから正式名称を決定したいとして，外見上の特徴により「花弁状住居址」と呼び，基本的に円形・方形・Ｈ形プランの３つに分類した。Ⅴａ期の後期初頭を初現として古墳時代には急激に減少するとし，新田原遺跡を北限として王子遺跡（鹿屋市）を南限とした。「花弁状住居址」の出現が後期初頭であり，中期と後期とを区分するメルクマールとした瀬戸内系土器が伴なう点，最盛期のⅦ期からⅧ期にかけては，大淀川中流域に進出し，畿内系である線刻土器が伴なう点を重要視した。また「花弁状住居」の出現を外来系文化の伝播に対する在地集団の何らかの反応のあらわれとし，分布域が地下式横穴墓の北限と南限が一致するため，集団が同一だとした。氏は住居については慎重な態度をとりつつも，土器の意義付けによって「日向型間仕切り住居」について積極的な評価を行なっている。

1984年に菅付和樹氏は「間仕切り式住居跡」と呼称し，突出壁に対して「間仕切り壁」と呼称した[47]。

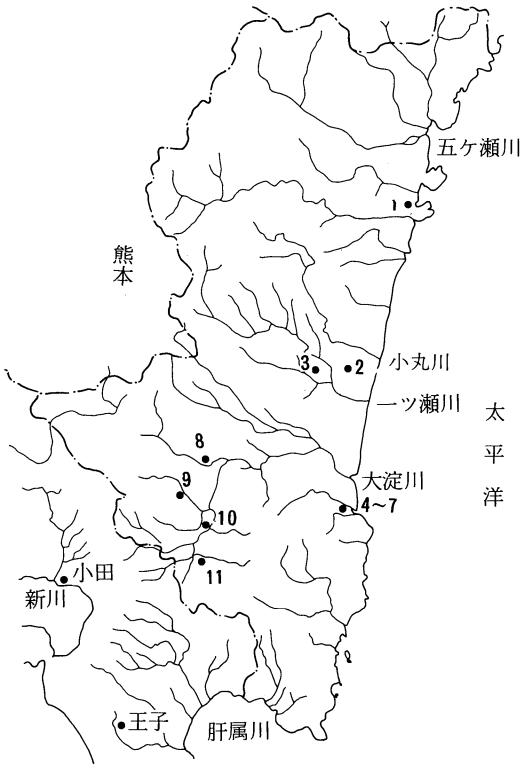
4．「日向型間仕切り住居」検出遺跡の概要

(1) 越シ遺跡[48]（日向市大字日置屋字越シ）

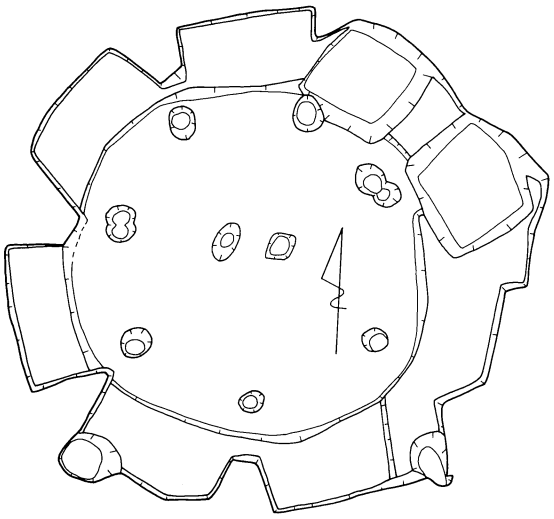
越シ遺跡は，五十鈴川と塩見川に挟まれた海岸段丘上の南側に位置し，標高26m である。１号住居は，6.9× 3.4m ＋αの方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で，一辺に一個ずつ突出壁を有する。方形プランの竪穴住居によって切られている。弥生終末期に比定されている。

(2) 新田原Ａ遺跡[49]（新富町大字新田）（Fig．39）

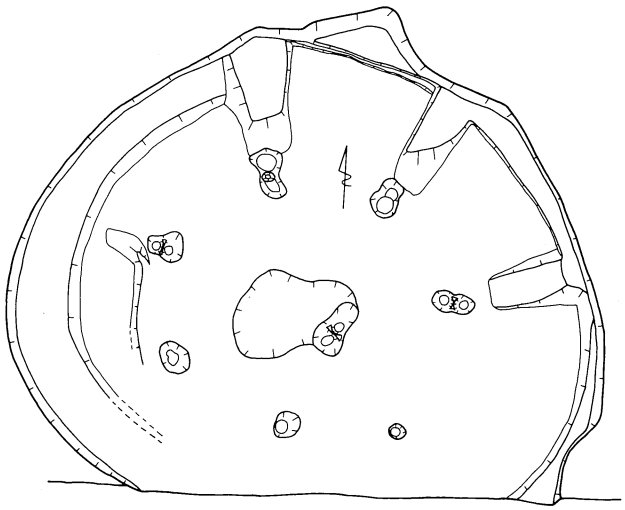
新田原遺跡は，一ツ瀬川の北に広がる洪積台地に位置し，標高70m である。1981～83年の３次にわたって新富町教育委員会によって調査が行なわれ，計12軒の竪穴住居が検出された。内訳は方形プランの住居５軒，円形プラン２軒，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」３軒，方形プランで突出壁を１有する「日向型間仕切り住居」１軒である。円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」である６号住居は43.4㎡，12号住居は50.4㎡である。６号住居は７つの突出壁に対応して７つの主柱穴があり，中央に東西方向の２本の柱穴がある。４号住居は円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」か円形住居のどちらからかの拡張かが問題となる[50]。12号住居も６つの突出壁に対応して６本の主柱穴があり，中央に２本の柱穴がある。新田原遺跡の円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」は，突出壁と柱穴が対応し，ベッド状遺構を持つなど非常に定型化した住居形態を示している。６号住居はＴ字に肥



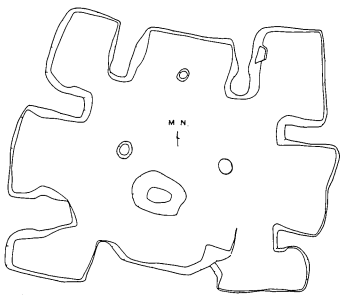
Fig．38「日向型間仕切り住居」分布図



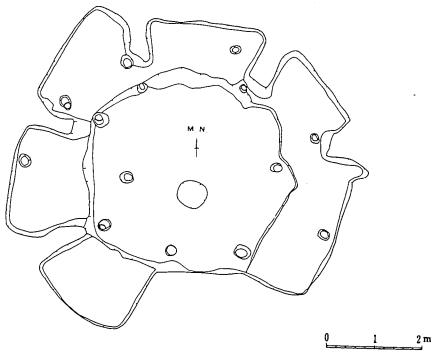
新田原6号住居



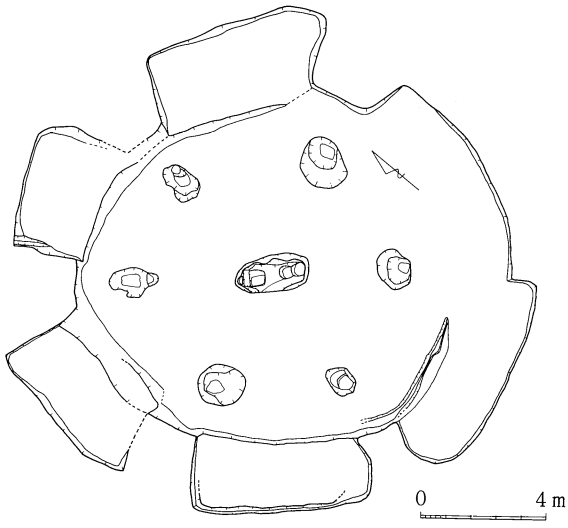
新田原4号住居



堂地東5号住居



堂地東16号住居



新田原12号住居

Fig.39 「日向型間仕切り住居」実測図（Ⅰ）(縮尺不同)

厚した凹線文の壺や矢羽透しの高坏という瀬戸内系土器を出土しており，石川悦雄氏編年のⅣａ期，後期初頭に比定されている。[51]

(3) 寺原第１遺跡[52]（西都市大字三宅）

寺原第１遺跡は，一ツ瀬川右岸の西都原古墳群が所在する洪積台地の北西部に位置し，標高68m である。1983年に西都原古墳研究所によって調査され２軒の竪穴住居が検出された。１号住居は，方形プランで突出壁を２つ有する４本柱の「日向型間仕切り住居」で面積は41.8㎡である。２号住居は，４つの突出壁を有する方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で４本柱である。弥生終末期に比定されている。

(4) 前原北遺跡Ａ地区[53]（宮崎市大字熊野字前原）

前原北遺跡は，清武川右岸の学園都市遺跡群がある洪積台地の北部に位置し，標高16m である。1981年の県文化課の調査によって南北7.2ｍの「日向型間仕切り住居」のプランの一部が確認されている。Ｂ地区では５軒の方形プランの竪穴住居が調査され，うち２号住居は一辺 5.1ｍの，４号住居は一辺12m で壁際にベッド状遺構を有する。５軒の竪穴住居の時期は弥生終末～古墳時代初頭に比定され，石川悦雄氏編年の第Ⅵ期に相当する。

(5) 熊野原遺跡Ａ地区[54]（宮崎市大字熊野字熊野原）

熊野原遺跡Ａ地区は，学園都市遺跡群がある洪積台地の縁辺部に位置し，標高約14m である。北側の谷底低地との比高差は約1.5～４ｍである。1981年の県文化課の調査によって周溝状遺構１基，竪穴住居２軒が検出された。ＳＡ１は突出壁を３有する方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で31.6㎡である。ＳＡ２は方形プランの住居で9.9㎡である。竪穴住居の時期は弥生時代の終末期に比定され，石川悦雄氏編年のⅥ期に相当する。

(6) 熊野原遺跡Ｂ地区[55]（宮崎市大字熊野字熊野原）（Fig. 40）

熊野原遺跡Ｂ地区は，熊野原遺跡Ａ地区から西へ約70m 離れた同一の洪積台地上に位置する。北側低地との比高差は約1.5～４ｍである。1982・83年の県文化課の調査によって18軒の竪穴住居が検出された。18軒の内訳は，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」２軒，折衷型の「日向型間仕切り住居」１軒，方形プランで突出壁を１・２有する「日向型間仕切り住居」９軒，方形プランの住居２軒である。方形プランで突出壁を１・２有する「日向型間仕切り住居」が主体を占め，ベッド状遺構はない。面積ではＳＡ４の37.8㎡，ＳＡ８の34.8㎡，ＳＡ１の32.1㎡が大きいが，多くは10㎡～30㎡である。集落の時期は後期後半～末に比定されている。

(7) 堂地東遺跡[56]（宮崎市大字熊野字堂地）（Fig. 39・41）

堂地東遺跡は，学園都市遺跡群がのる洪積台地に位置し，標高は20～30m である。谷底低地との比高差は５ｍ～15m である。1981年～83年の県文化課の調査によって20軒の竪穴住居が検出された。20軒の内訳は，方形プラン４軒，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」５軒，方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」６軒，折衷型の「日向型間仕切り住居」３軒である。住居の規模は20㎡～40㎡であるのに対してＳＡ８は66.1㎡と突出しており，方形プランは10㎡～20㎡と小さい。「日向型間仕切り住居」の円形プランと方形プランが共存しているのは注目される。中期後半２軒、後期初頭９軒，後期前葉８軒であり，集落の主体は後期初頭～前葉である。石川悦雄氏編年のⅢ～Ⅳｂ期に相当する。

(8) 大萩遺跡[57]（西諸県郡野尻町大字三ケ野山）（Fig. 42）

大萩遺跡のＧ区は大淀川の支流である岩瀬川の北に広がる台地の中段に位置する。標高170ｍで，岩瀬川との比高は約30m である。台地の上段では弥生後期後半～終末の土壙墓17基，竪穴住居１基，地下式横穴墓33基が調査された。1975年，県文化課の調査によってＧ区で５軒の竪穴住居が検出された。内訳は，突出壁を２つ有する方形プランを基調とした「日向型間仕切り住居」１軒，方形プラン２軒，不定形プラン２軒である。１号住居は

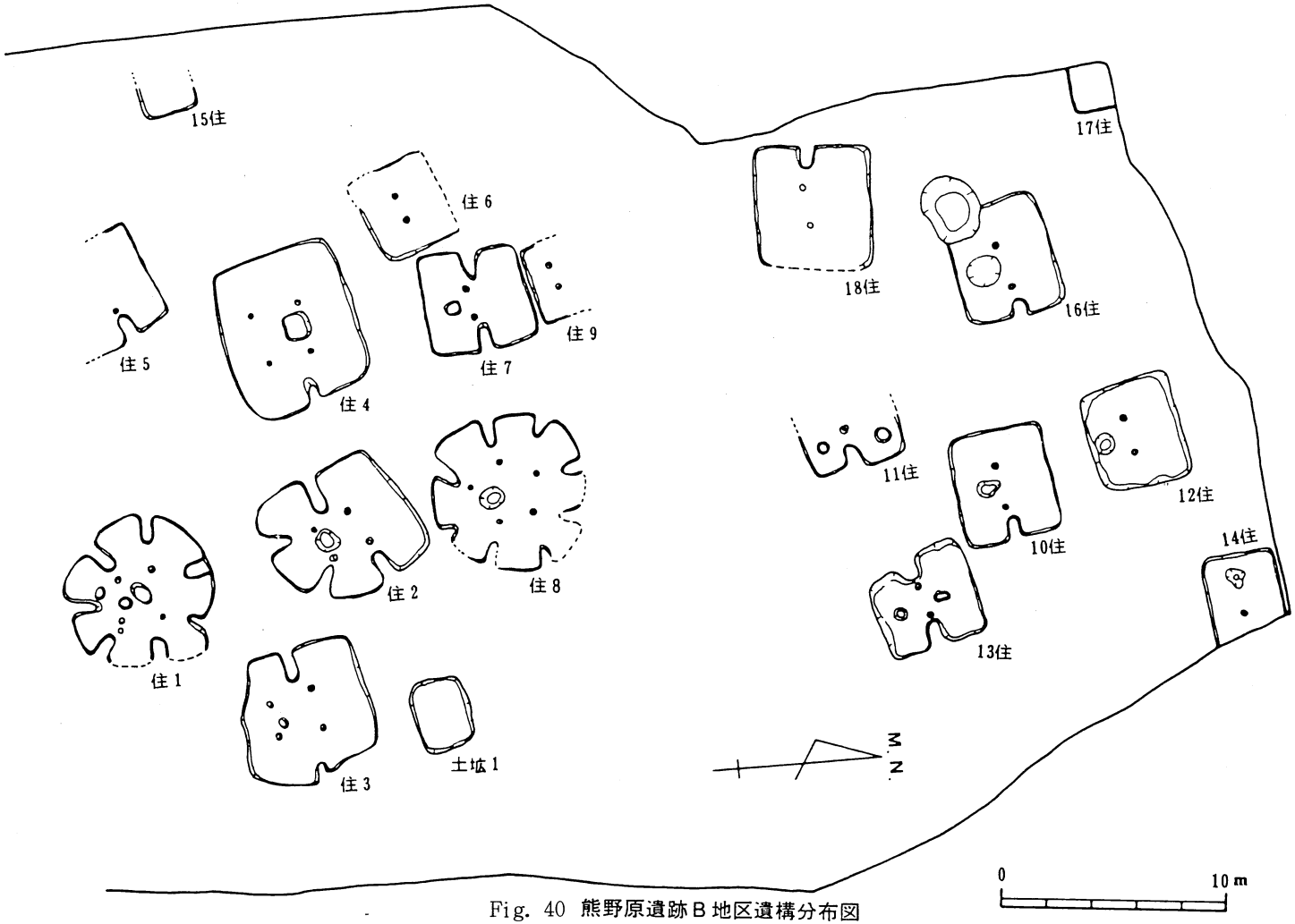


Fig. 40 熊野原遺跡B地区遺構分布図

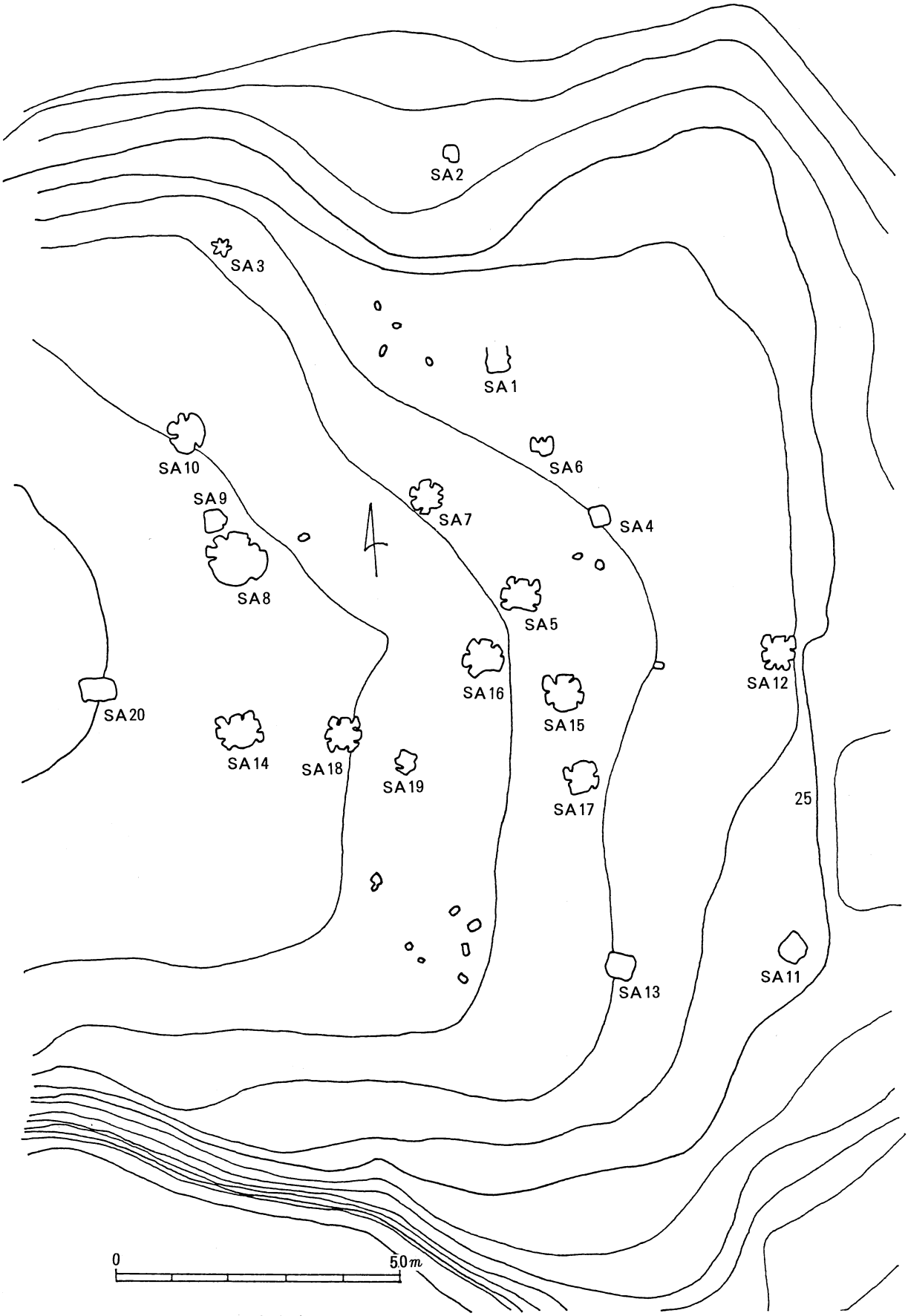
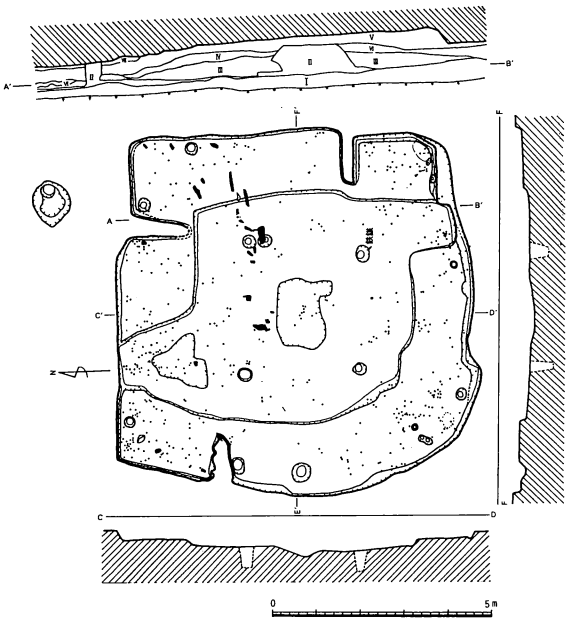
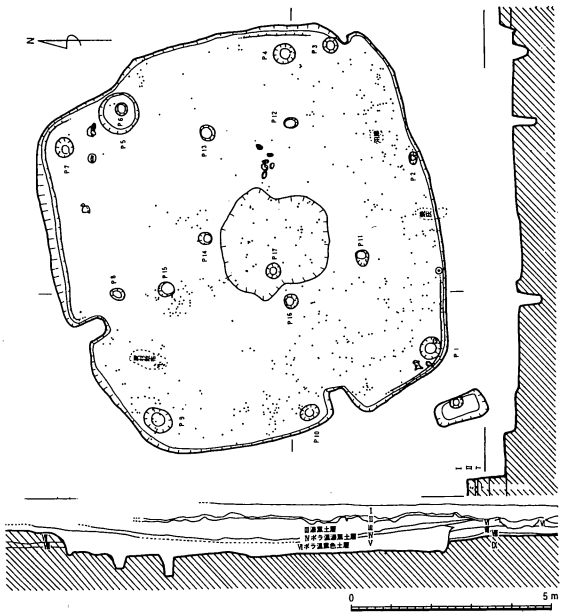


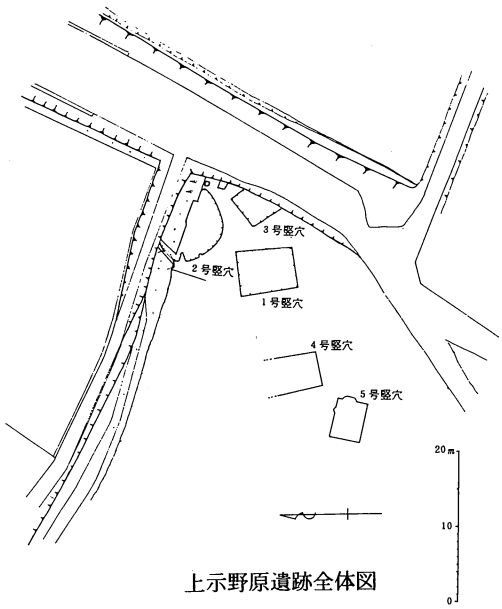
Fig. 41　堂地東遺跡全体図



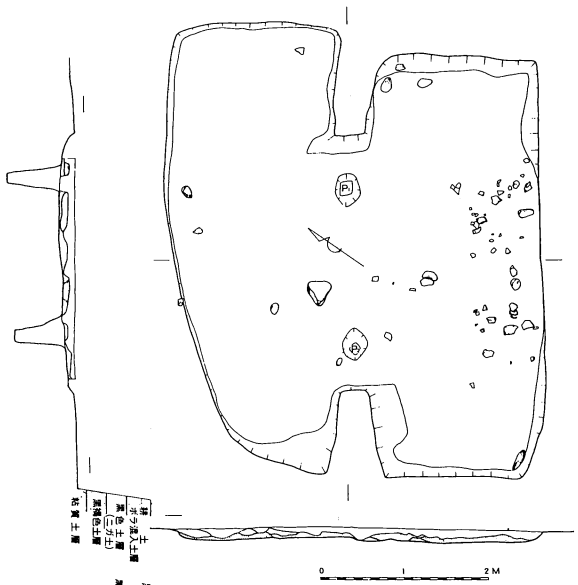
丸谷1号住居



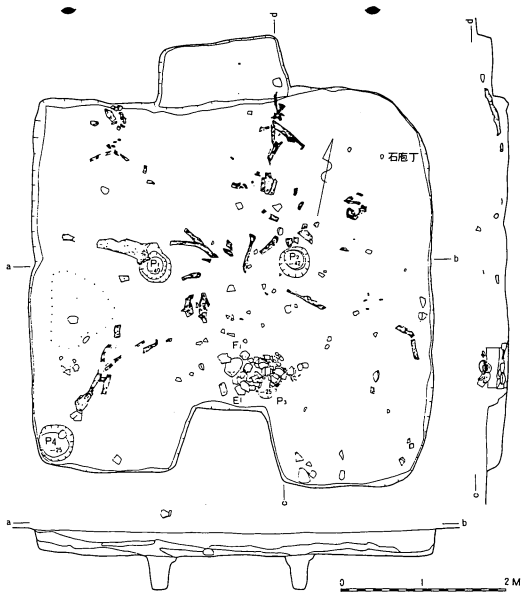
丸谷2号住居



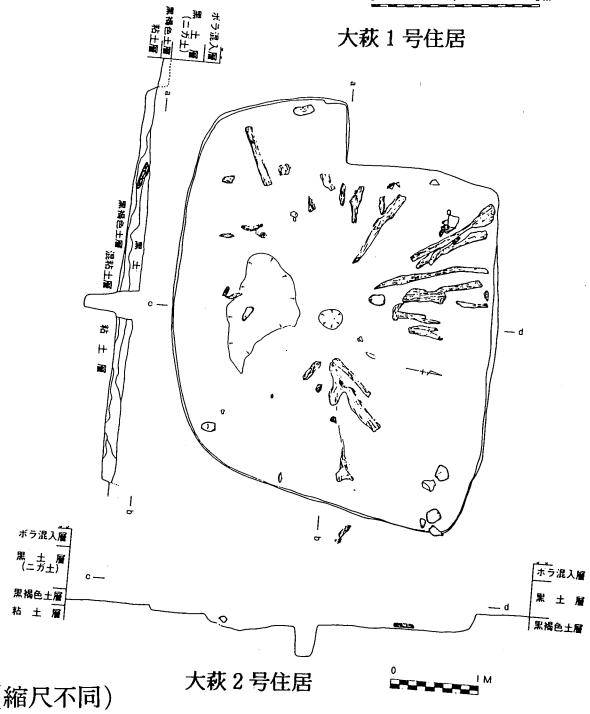
上示野原遺跡全体図



大萩1号住居



大萩4号住居



大萩2号住居

Fig. 42「日向型間仕切り住居」実測図（Ⅱ）（縮尺不同）

突出壁が2つ向かいあっており，柱穴が突出壁に対応して2本柱である。4号住居は南側に突出壁に類似するものがあるが幅広であるので入口部と考えられる[58]。弥生終末期に比定される。

(9) 上示野原遺跡[59]（北諸県郡高崎町大字大牟田字上示野原）(Fig．42)

上示野原遺跡は大淀川の支流である荒場川に開析された標高150ｍ～180ｍのシラス台地上に位置する。1975年に県文化課によって調査され，5軒の竪穴住居が検出された。内訳は円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」1軒，方形プランの竪穴住居4軒である。4号住居は直径約10mの円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で，道路のために一部分だけ調査が行なわれ，突出壁3とベッド状遺構を有する。方形プランの住居は，1号住居が41.3㎡，3・4・5号住居が20㎡代であるのに比較して2号住居は大きい。

(10) 丸谷第1遺跡[60]（都城市丸谷町）(Fig．42)

丸谷第1遺跡は都城盆地の台地の南面する緩傾斜地に位置する。標高は146ｍ～148ｍで比高差約25mである。1977年の県文化課の調査によって2軒の竪穴住居が検出された。2軒とも方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」である。1号住居は3つの突出壁とベッド状遺構を有し，主柱穴は4本である。2号住居は突出壁を2つ有している。面積は2号住居が78.8㎡，1号住居が57.6㎡と大きい。弥生終末期に比定される。

(11) 祝吉遺跡（都城市祝吉町）(Fig．43・44)

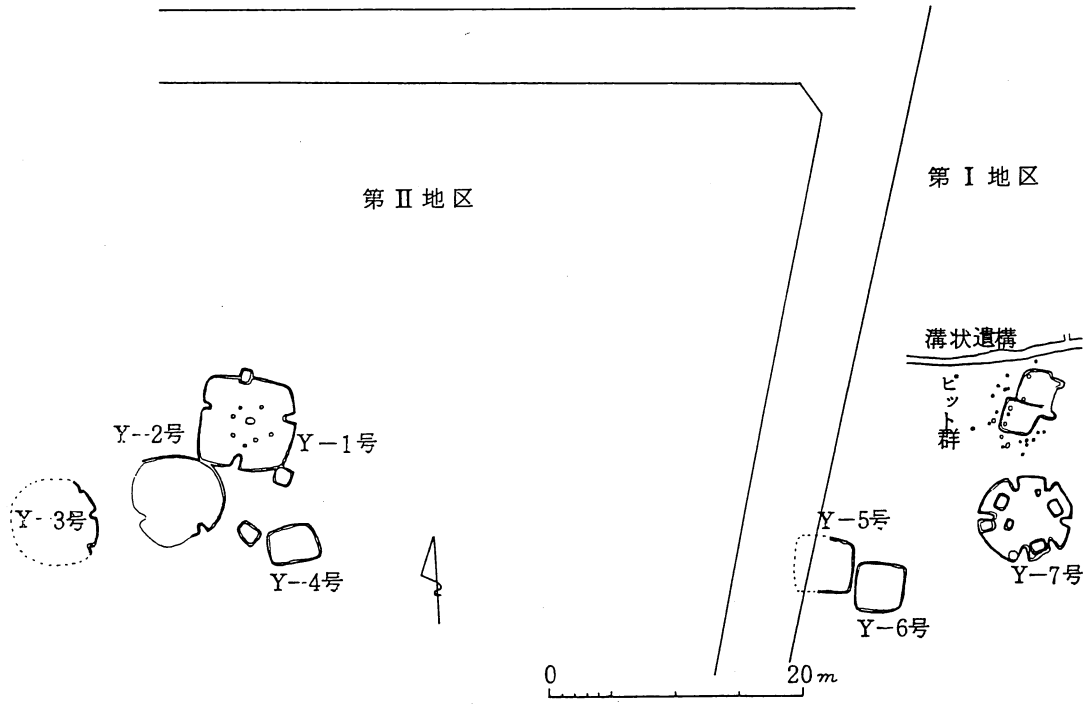
祝吉遺跡は都城盆地内の大淀川支流の沖水川により浸食を受けた低位河岸段丘上に位置する。標高は約150ｍで沖積地との比高差は約10mである。1980年の都城市教育委員会の調査によって竪穴住居が7軒検出され，1981年の同委員会の調査によって竪穴住居が13軒検出された。第1次調査地区と第2次調査地区は約50m離れている。

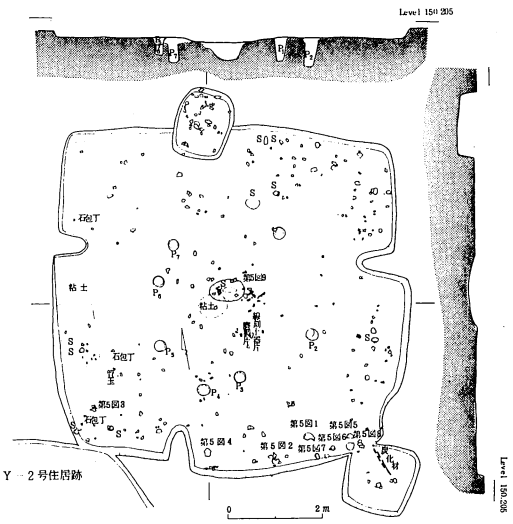
第1次調査分7軒の内訳は，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」3軒，方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」1軒，方形プランの住居3軒である。1号住居は突出壁を3つ有する方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で，南と西の突出壁で囲まれた空間から磨製石鏃の未製品が多量に出土していることから磨製石鏃を製作する工房区とされている[61]。7号住居は突出壁を6つ有する円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」である。面積では1号住居51.2㎡，7号住居39.5㎡，2号住居38.6㎡に対して方形プランの住居は10㎡前後と隔差がある[62]。弥生中葉～終末期に比定される。

第2次調査分13軒の内訳は，円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」5軒，方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」4軒，方形プランの住居2軒である。7号住居は突出壁を3つ有する円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」であり，ベッド状遺構を有する。この住居からは線刻のある石庖丁・ミニチュア土器と伴に小型丸底壺が出土している。10号住居は突出壁を2つ有する円形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で，ベッド状遺構を有し，主柱穴は4本である。2つの突出壁で間仕切りされた空間からミニチュア土器・朱玉が出土したことから祭祀に関する住居の可能性が指摘されている。13号住居は突出壁を1つ有する方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」で，ベッド状遺構を有する。この住居は下城式の甕形土器が出土しており中期末～後期初頭に比定されている。13号住居を除くと弥生終末期～古墳時代初頭に比定される[64]。

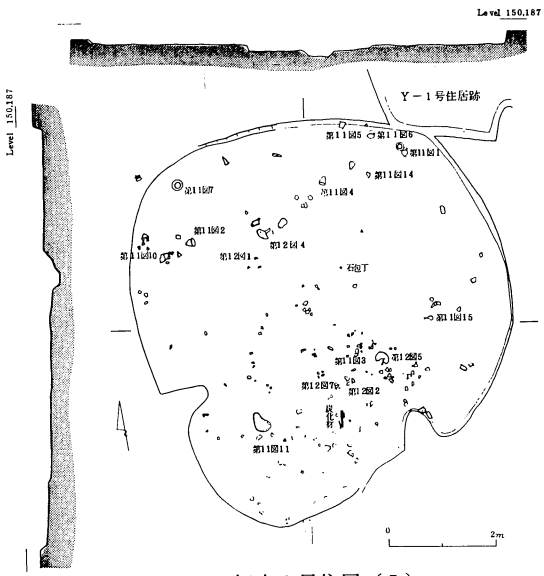
5.「日向型間仕切り住居」の定義と形態分類・編年

「日向型間仕切り住居」とは，間仕切りの機能を持つ突出壁を有する住居である。そのプランは円形或いは方形を基調とするが，折衷型や不定形も存在する。突出壁は竪穴住居を掘る際に意図して掘り残されるのであり[65]，新田原遺跡の4・6・12号住居のように突出壁と柱穴が対応することは，石野博信氏の間仕切り溝のＤ型を小溝[66]ではなく突出壁であらわしている。その機能は石野氏が言われるように間仕切りであり，身近な土で以て表現したことに特徴がある。分布は越シ遺跡を北限として肝属川上流の王子遺跡[67]を南限としており，「続日本紀」の旧日向国の範囲に相当し，



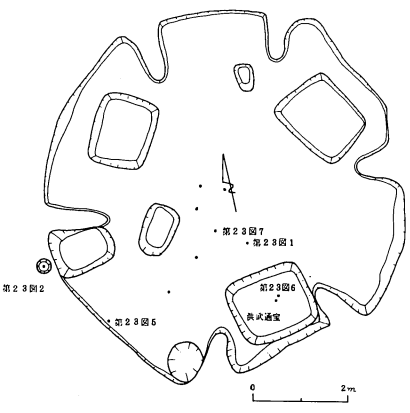


祝吉1号住居（Ⅰ）

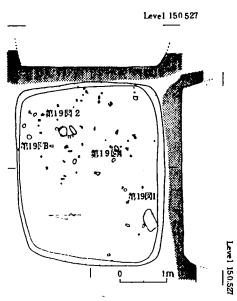


祝吉2号住居（Ⅰ）

祝吉3号住居（Ⅰ）

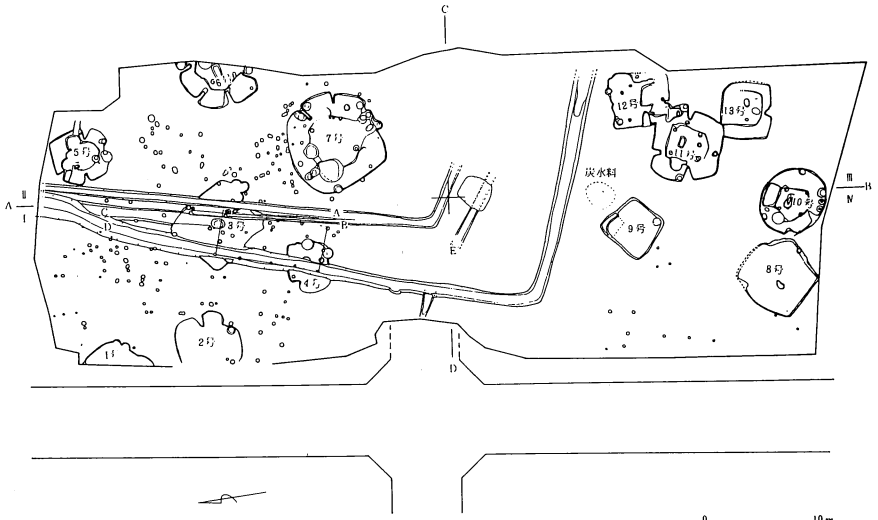


祝吉7号住居（Ⅰ）

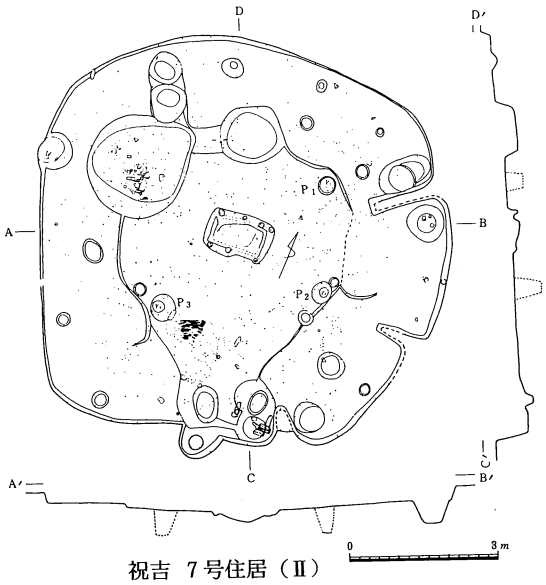


祝吉3号住居（Ⅰ）

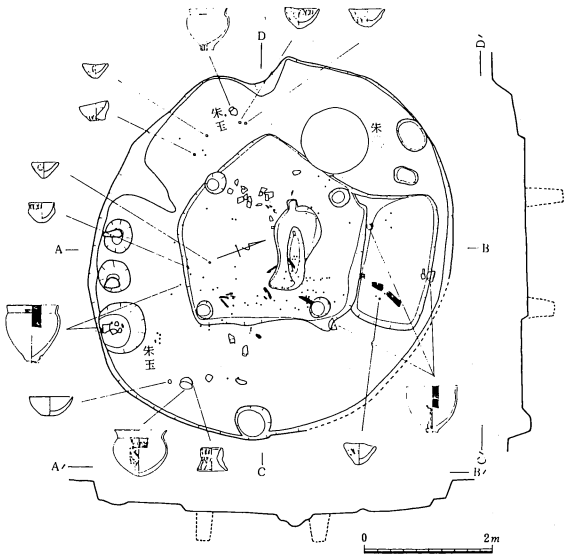
Fig．43　祝吉第1遺跡実測図



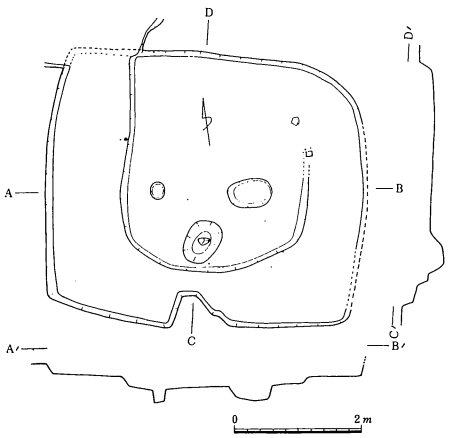
祝吉遺跡全体図（二次調査）



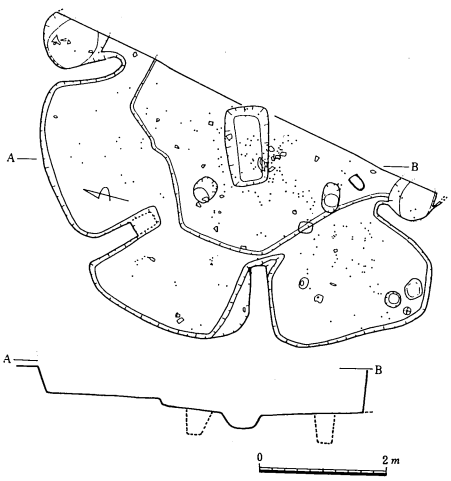
祝吉　7号住居（Ⅱ）



祝吉（Ⅱ）10号住居



祝吉（Ⅱ）13号住居



祝吉（Ⅱ）6号住居

Fig. 44　祝吉第2遺跡実測図

また柱穴と突出壁が対応する円形プランを基調とする住居が多く日向地区で検出されるので，「日向型」を「間仕切り住居」の前につけた。

「日向型間仕切り住居」の形態分類は1984年に提示しており[68]，ここでは平面プラン・突出壁・ベッド状遺構・主柱穴の4要素によって一部改変して述べることとする。第Ⅰ類は円形プランを，第Ⅱ類は方形プランを，第Ⅲ類は第Ⅰ類と第Ⅱ類との折衷型プラン及び不定形プランを基調としている。第Ⅳ類は方形プランで突出壁を1・2有し，主柱穴は2本と4本に分かれる。第Ⅰ類～第Ⅳ類はベッド状遺構の有無によって更にA・Bに分類される。1982年の北郷泰道氏分類[69]に比較するとⅣ類の突出壁が2本柱に直交するとして例に挙げた大萩4号住居の見解が異なる。4号住居の場合，突出壁に類似するものが79cm～126cmと幅広であり，かつ2本柱に直交するので，入口部と考えられるので，この類を除外した。また突出壁を1・2有するものに突出壁に対応する2本柱と対応しない4本柱に分けた。またベッド状遺構の有無が地域によっては時期差になるので分類の一要素として取り入れた。ⅠA類は新田原4・6・12号住居，ⅠB類は熊野原遺跡B地区のSA8，ⅡA類は丸谷第1遺跡2号住居，ⅡB類は堂地東SA5，ⅢA類は堂地東SA18，ⅢB類は熊野原遺跡B地区のSA2，ⅣA類は新田原1号住居，ⅣB類4本柱は熊野原遺跡B地区のSA4，同2本柱の同遺跡7号住居が代表的である。

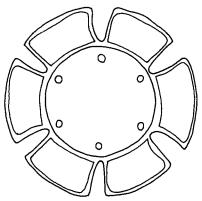
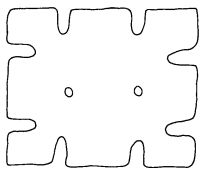
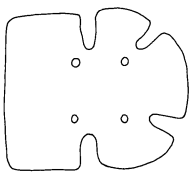
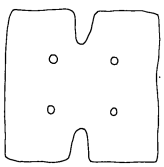
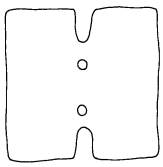
分類		模式図	特徴
Ⅰ	A		円形プランを基調とする。 ベッド状遺構を有する。
	B		円形プランを基調とする。
Ⅱ	A		方形プランを基調とする。 ベッド状遺構を有する。
	B		方形プランを基調とする。
Ⅲ	A		Ⅰ類・Ⅱ類の折衷型 ベッド状遺構を有する。
	B		Ⅰ類・Ⅱ類の折衷型
Ⅳ	A		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 4本柱　ベッド状遺構を有する。
	B		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 4本柱
	A		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 2本柱　ベット状遺構を有する。
	B		方形プランを基調として突出壁を1.2個有する。 2本柱

表62　「日向型間仕切り住居」分類図

次にそれぞれの類の時期幅について述べることにする。地域的には広義の宮崎平野と大淀川上流域に分けられる。宮崎平野部ではⅠA類が後期初頭～前葉，ⅠB類が後期初頭～終末，ⅡA類が後期初頭～中葉，ⅡB類が後期初頭～前葉，ⅢA類が後期前葉～弥生終末，ⅢB類が後期前葉～末，ⅣA類は後期初頭～中葉，ⅣB類は後

期後葉～末である。

大淀川上流域では，祝吉遺跡の第二次調査の13号住居の第ⅣA類が後期初頭に遡る可能性があり，また祝吉遺跡の第一次調査分の2号住居が中葉であるのを除くとすべて後葉～末であり，「日向型間仕切り住居」が消滅するのは祝吉遺跡の二次調査の7号住居・小型丸底坩の時期の古墳時代初頭である。

6．「日向型間仕切り住居」をめぐる諸問題

以上のように「日向型間仕切り住居」の分類を行なったが，まず出現の問題について述べたいと思う。「日向型間仕切り住居」の出現は，出土土器からすれば新田原遺跡の住居に端的に示されるように円形プランを基調として柱穴と突出壁が対応し，ベッド状遺構を有するものが初現の可能性が強い。新田原遺跡を調査した石川悦雄氏が言われるように瀬戸内系土器が一つの契機となったことは確かであるが，その具体的内容については現状の資料では明らかにできない。山本輝雄氏が付論[71]で述べられているようにまず柱穴の位置を決め内側の空間（主空間）を掘り，それから突出壁を掘り残して外へ拡張して間仕切り空間を作ることは合理的であり，新田原遺跡の住居が柱穴と突出壁が対応するという事実に合致する。しかし，堂地東遺跡では柱穴と突出壁が対応するのはSA16だけであり，熊野原遺跡B地区では2本柱のⅣB類だけであり，対応するのはⅣB類を除くと非常に限られる。その出現時期は，出土土器から石川悦雄氏編年[72]のⅣa期の後期初頭に比定され，土器の変化と「日向型間仕切り住居」出現という住居形態プランの変化が呼応していることは興味ある現象である。

「日向型間仕切り住居」の集落における位置について述べる。集落をある程度復元できる面的な調査は，新田原遺跡・堂地東遺跡・熊野原遺跡B地区・大萩遺跡・祝吉遺跡で行なわれているが，すべて「日向型間仕切り住居」が主体となる集落であるので，「日向型間仕切り住居」を全く含まない集落との比較はできない。「日向型間仕切り住居」を主体とする集落では，方形プランの住居に比較すると面積が広く，北郷泰道氏が言われるように[73]集落内における機能差に由来する可能性を考えたい。また堂地東遺跡ではSA8のように突出した竪穴住居が存在することもその現れかもしれない。

突出壁の機能については，北郷泰道氏[74]・面高哲郎氏[75]らが述べている間仕切りであることは確実である。突出壁で間仕切りされた空間は1㎡～3㎡程度の狭い空間で，室内を広く活用する点では不合理であるが，その空間に固執している。祝吉遺跡で見られる工房的，或いは祭祇的なあり方は，遺物が少なかったせいか堂地東遺跡では確認されなかった。住居の廃棄パターンには種類があるので，焼失住居が検出されない限り，その復元には非常に困難がある。

分布については，従来新田原遺跡を北限として王子遺跡（鹿屋市）を南限としていたが，弥生終末期の土器を伴なうⅢB類の越シ1号住居・寺原2号住居，4本柱のⅣB類の寺原1号住居の検出により新たな展開を見せはじめた。特に越シ遺跡の場合は，方形プランの住居によって切られている可能性があり，完掘していないので，その評価・解釈については流動的である。また王子遺跡は10数軒の竪穴住居が営まれ，その中に「日向型間仕切り住居」に近いものが検出されており，瀬戸内系土器を共伴しているということであるので，土器編年ともからんで新田原遺跡と比較する上で非常に重要であり，正式な報告書の刊行が待たれる。しかし，典型的な「日向型間仕切り住居」で構成される新田原遺跡，弥生後期初頭～終末期まで「日向型間仕切り住居」の変遷が追える学園都市遺跡群に中心は求められる。

「日向型間仕切り住居」の消滅は，宮崎平野部においては弥生終末に，大淀川上流域では古墳時代初頭に求めた。これは，学園都市遺跡群において布留式併行期の熊野原遺跡C地区で集落に「日向型間仕切り住居」が全く存在しないことから推定できる。前方後円墳の出現という社会的・政治的変革の中で土器変化と伴に在地的な住居であった。「日向型間仕切り住居」が連動していったことを端的に示している。当地域における首長墓である木花古墳群（前方後

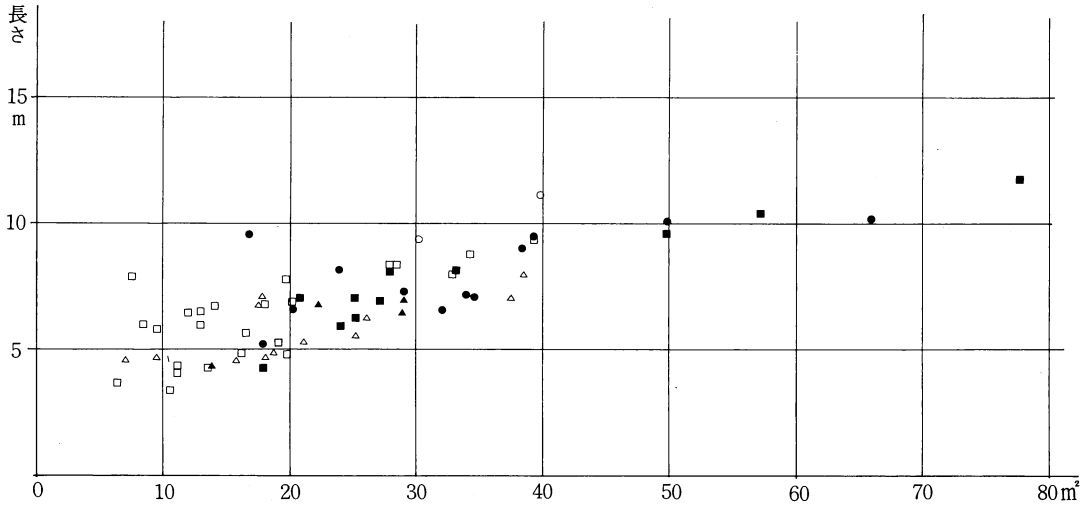
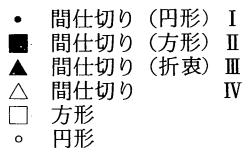
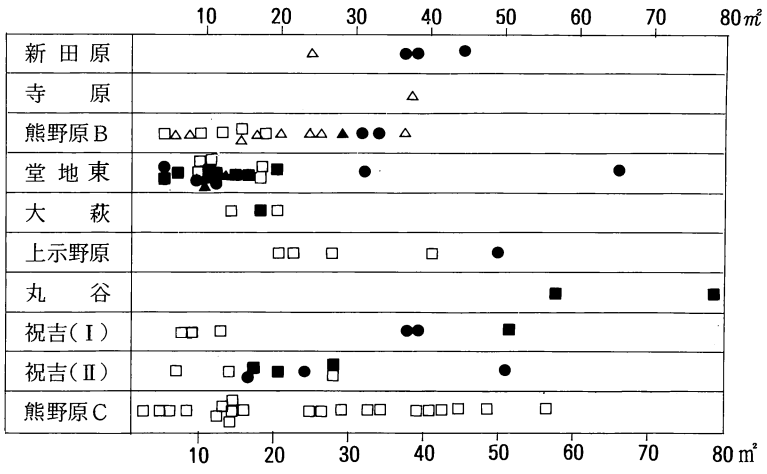


表63　日向における住居面積分布





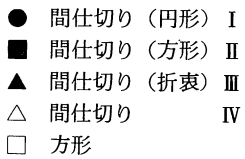


表64　日向の住居面積構成（弥生時代～古墳時代初頭）

円墳３基・円墳５基）の実体が不明ではあるが。大淀川上流域では，祝吉遺跡（二次調査）の７号住居に小型丸底坩が共伴する事実は，宮崎平野部とは違った対応が行なわれた可能性があり，この要因の一つとして前方後円墳の少なさがあるかもしれない。

7．ま と め

以上述べたように複数の突出壁を有する竪穴住居を「日向型間仕切り住居」と定義し，「日向型間仕切り住居」の出現は新田原遺跡に求められ，その契機は瀬戸内系土器が入る後期初頭であるが，その具体的内容については現状では不明である。最古の「日向型間仕切り住居」は柱穴と突出壁が対応し，ベッド状遺構を有する円形プランを基調とするものであり，ほどなく方形プランに応用されていく。最終段階の突出壁が１・２有するⅣ類は本来の間仕切りの機能が失なわれ形骸化したものである。「日向型間仕切り住居」の消滅は，宮崎平野部と大淀川上流域では地域差は存在するが，基本的には前方後円墳の出現という社会的・政治的現象に対応すると考えられる。「日向型間仕切り住居」という在地的な住居形態も瀬戸内・畿内という外的な契機によって出現し，前方後円墳の出現という汎日本的なうねりの中に吸収される。

今回の論は日向の土器編年はまだ不十分である中で進めたので，宮崎と鹿児島の土器の併行関係を含め新田原遺跡と王子遺跡の正式報告書が刊行された後，再度検討していきたいと思う。

この論考をまとめるにあたり，岩永哲夫・面高哲郎・北郷泰道・石川悦雄・永友良典・菅付和樹・日高孝治・谷口武範・緒方博文・有田辰美・蓑方政幾各氏の御助言や教示を賜わったことを記して感謝申し上げる次第である。

（長 津 宗 重）

註(1) 北郷泰道 「結語―住居の変遷にふれて」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 1982

(2) 小田遺跡の新聞報道で初めて使用された名称であり，報告書としては石川悦雄氏が「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」（1981）で初めて使用した。

(3) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市遺跡埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ～Ⅳ」 1981～84

(4) 森貞次郎 「宮崎県檍遺跡」『日本農耕文化の生成』 1972
石川恒太郎「宮崎阿波岐原町砂丘遺跡」『考古学雑誌』第43巻４号 1958

(5) 石川恒太郎「宮崎市檍弥生初期集落遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』 第４輯 1959

(6) (4)の森氏の文献

(7) 北郷泰道「持田中尾遺跡」 1982

(8) 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案―素描（Ｍｋ．Ⅱ）」『宮崎考古』第９号 1984

(9) 面高哲郎「鐙遺跡」『新富町文化財調査報告書』第２集 1983

(10) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅰ・Ⅲ」 1980・82

(11) 1980年から1982年にかけて３次にわたる調査が新富町教育委員会によって行なわれた。報告書は未刊であるが，新富町教育委員会の御好意によって資料の一部を掲載できたことを記して感謝申し上げる次第である。調査者の面高哲郎・石川悦雄・有田辰美各氏の御教示。1986年３月には報告書が刊行される予定であるので成果が期待される。

(12) 石川恒太郎「延岡市貝ノ畑遺跡調査」『第二次日向遺跡総合調査』第２・３輯 1967

(13) 石川恒太郎「延岡市大貫遺跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 1972

(14) 石川恒太郎「高鍋町持田の遺跡調査報告」『第二次日向遺跡総合調査』第２・３輯 1967

(15) 石川恒太郎「川南町把言田遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第３輯 1958
石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究 家』 1958

(16) (10)に同じ。

(17) (11)に同じ。

(18) (3)に同じ。

(19) (3)に同じ。

(20) 北郷泰道「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第１集　1981
面高哲郎「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第２集　1982

(21) 面高哲郎「丸谷第一遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)　1979

(22) 宮崎県教育委員会「大萩遺跡　(2)」　1975

(23) 茂山護「上示野原遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集　1980

(24) (23)に同じ。

(25)～(27) (22)に同じ。

(28) (21)に同じ。

(29) (23)に同じ。

(30)・(31) (20)に同じ。

(32) (3)に同じ。

(33) (11)に同じ。

(34) 日高正晴「寺原第１遺跡」『西都原古墳研究所・年報　開所記念号』　1984

(35) 1984年に日向市教育委員会によって発掘調査が行なわれ，方形住居によって切られた方形プランを基調とする「日向型間仕切り住居」が半分検出されており，谷を挟んだ丘陵上から４本柱の方形住居が２軒検出されている。緒方博文氏の御教示。

(36) (15)の石野博信氏の文献。

(37) (21)に同じ。

(38)・(39) (20)の北郷泰道氏の文献。

(40) (20)の面高哲郎氏の文献。

(41) 山中悦雄「20号地Ａ遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）』　1982

(42) 北郷泰道・菅付和樹「宮崎学園都市14号地遺跡検出の住居形態について」『九州史学会大会研究発表要旨』　1982

(43) (1)に同じ。

(44) 長津宗重「堂地東遺跡ーまとめ」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）』　1983

(45) 山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描」『宮崎県総合博物館研究紀要』第８号　1983　以下同じ。

(46) 石川悦雄「日向における外来系土器の伝播とその地域性(1)ー瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」『宮崎県総合博物館研究紀要』第９号　1984

(47) 菅付和樹「熊野原遺跡Ａ・Ｂ地区の発掘調査」『宮崎考古学会第13回研究発表会発表要旨』　1984

(48) (35)に同じ。

(49) (11)に同じ。

(50) ６号住居の２つのプランの新旧関係が「日向型間仕切り住居」の発生問題を考える上で大きな鍵となる。

(51) (8)に同じ。石川悦雄氏の御教示によれば４号住居からもＴ字に肥厚した凹線文の土器が出土している。

(52) (34)に同じ。

(53)～(56) (3)に同じ。

(57) (22)に同じ。

(58) 既に面高哲郎氏が「丸谷第一遺跡」で幅広であるので本質的に異なると指摘している。

(59) (23)に同じ。

(60) (21)に同じ。

(61) (20)の北郷泰道氏の文献。

(62) ２号住居（中頃）→７号・３号住居（後葉）→１号住居（終末期）

(63) (20)の面高哲郎氏の文献。

(64) 13号住居（初頭）→７号住居・２号住居（終末期）→１号・12号住居→10号・11号住居（古墳時代初頭）

(65) (11)に同じ。

(66) (15)の石野博信氏の文献。

(67) 王子遺跡では10数軒の住居が調査され，その中に「日向型間仕切り住居」に類似するものが検出され，瀬戸内系の矢羽透し入りの

高坏や凹線文の土器が出土しており，土器編年及び「日向型間仕切り住居」成立論を進める上で１つの鍵である。

(68) (43)に同じ。

(69) (1)に同じ。

(70) (46)に同じ。

(71) 山本輝雄「所謂日向型間仕切り住居について一建築史上の問題点」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第２集　1985

(72) (8)に同じ。

(73) (20)の北郷氏の文献。

(74) (73)に同じ。

(75) (20)の面高氏の文献。

表65　日向型間仕切り住居地名表

	遺　跡	住居	形態プラン	規 模(m)	面積(㎡)	主空間(㎡)	間仕切り空間(㎡)	主柱穴	突出壁	ベッド	時 期	備　考	分類
1	越　シ	1号	間仕切り(方形)	6.9×3.4+α					2+α		終末期		
2	新田原	1号	間仕切り(方形)	5.9×4.84	29.22	29.22			1				Ⅳ
		4号	間仕切り(円形)	8.56×7.32	45.76+α	22.24+α	23.52+α	7	3+α	有		石鏃・石斧	Ⅰ
		6号	間仕切り(円形)	7.76	43.36	23.44	(8) 14.8(1.85)	7	7	有	後期初頭	石鏃	Ⅰ
		7号	方　形	4.33×3.21	11.91	11.91							
		8号	円　形	5.36	23.75	23.75							
		10号		9.48	67.27+α								
		12号	間仕切り(円形)	8.28	50.38	26.60	(7) 23.78(3.4)	6	6	有			Ⅰ
3	寺原第一	1号	間仕切り(方形)	6.0×5.8	41.8			4	2		終　末		Ⅳ
		2号	間仕切り(方形)	7.1×6.8				4	4				
4	前原北A	1号	間仕切り	7.2					3+α				
5	熊野原A	1号	間仕切り(方形)	5.7×5.55	31.6				3				Ⅱ
		2号	方　形	3.4× 2.9	9.9								
6	熊野原B	1号	間仕切り(円形)	6.5×6.3	32.1	13.6	(7)18.5 (2.6)	4	7				Ⅰ
		2号	間仕切り(折衷)	6.4×5.6	29.2	5.4	23.8	4	4				Ⅲ
		3号	間仕切り	6.1×5.7	26.6	26.6		4	2		後期後半		Ⅳ
		4号	間仕切り	7.0×6.0	37.8	37.8		4	1				Ⅳ
		5号	間仕切り	4.7×4.7+α	9.6+α	9.6		1+α	1+α		後期後半		Ⅳ
		6号	方　形	4.2×3.6	13.6	13.6		2					
		7号	間仕切り	4.6×4.5	18.3	18.3		2	2		後期後半	磨製石鏃	Ⅳ
		8号	間仕切り(円形)	7.0×6.9	34.8	19.0	(8)15.8 (2.0)	5	8				Ⅰ
		9号		3.6×1.2+α	6.4+α	6.4		2+α					
		10号	間仕切り	4.8×4.4	18.9	18.9		2	1			磨製石鏃	Ⅳ
		11号	間仕切り	4.5×1.8	7.0+α	7.0+α		1+α	1+α				Ⅳ
		12号	方　形	4.8×4.1	16.2	16.2		2			後期後半		
		13号	間仕切り	4.5×4.4	15.9	15.9		2	2		後期後半		Ⅳ
		14号	方　形	3.3×3.5+α	10.6+α	10.6+α		2			後期後半		
		15号											
		16号	間仕切り	5.3×4.4	21.2	21.2		2	1				Ⅳ
		17号											
		18号	間仕切り	5.5×5.0	25.3	25.3		2	1+α				Ⅳ
7	堂地東	1号	方　形	4.8×4.8	19.9+α						中期後半	軽石製石製品	
		2号	方　形	4.0×3.6	11.1	10.3	0.8(張り出し)	2			中期後半	張り出し石斧	
		3号	間仕切り(折衷)	5.2×4.5	16.9	7.9	(6) 9.0(1.5)		6	有	後期前半		Ⅲ
		4号	方　形	4.2×3.4	11.0	11.0		2			後期前半		
		5号	間仕切り(方形)	7.0×6.0	25.4	13.1	(8) 12.3(1.5)	2	8		後期前半	円形浮文	Ⅱ
		6号	間仕切り(方形)	6.8×5.3	27.7	17.4	(2) 10.3(5.15)		2		後期前半	丹塗・鋸歯文	Ⅱ
		7号	間仕切り(円形)	6.5×6.0	20.5	10.0	(7) 10.5(1.5)	5	7		後期前半	丹塗	Ⅰ
		8号	間仕切り(円形)	10.2×9.7	66.1	32.7	(6) 33.4(5.6)	8	6		後期前半	丹塗	Ⅰ
		9号	間仕切り(折衷)	4.3×4.1	14.0	14.0			2		後期前半		Ⅲ
		10号	間仕切り(円形)	7.2×7.0	34.5	6.3	(4) 28.2(7.05)		4		後期前半	石斧	Ⅰ

	遺　跡	住居	形態プラン	規 模 (m)	面積(㎡)	主空間(㎡)	間仕切り空間(㎡)	主柱穴	突出壁	ベッド	時 期	備　考	分類
7	堂地東	11号	台　形	5.5×4.5	16.3	11.8		4		有	後期末		
		12号	間仕切り(方形)	6.1×6.0	24.6	11.3	(8) 13.3(1.7)		8		後期前半		II
		13号	方　形	5.2×4.5	19.4	19.4					後期前半		
		14号	間仕切り(方形)	8.0×6.0	33.7	20.5	(7) 13.2(1.9)		8	有	後期前半		II
		15号	間仕切り(折衷)	7.0×6.8	29.2	11.7	(6) 17.5(2.9)	4	6	有	後期前半	円形浮文	III
		16号	間仕切り(円形)	7.2×6.8	29.5	13.2	(6) 16.3(2.7)	7	6	有	後期前半		I
		17号	間仕切り(方形)	5.9×5.7	24.0	15.3	(5) 8.7(1.7)	2	6	有	後期前半		II
		18号	間仕切り(折衷)	6.7×6.2	22.6	11.0	(8) 11.6(1.45)	4	8	有	後期前半	軽石製石製品	III
		19号	間仕切り(方形)	4.2×3.7	7.9	6.3	1.6	4	3	有	後期前半		II
8	大　萩	1号	間仕切り(方形)	4.4×5.09	18.2	18.2		2	2			石庖丁・磨製石鏃	II
		2号	不定形	3.74×4.57	13.0	13.0						石庖丁	
		3号	不定形	2.91×3.39	8.6	8.6							
		4号	方　形	4.86×4.82	20.9	19.9	1.0	2				張り出し・石庖丁	
		5号	方　形	4.15×3.60+α	14.9							石庖丁	
9	上示野原	1号	方　形	7.5×5.5	41.3							鉄鏃	
		2号	間仕切り(円形)	10.0×5.0+α	50.0+α				3+α	有			I
		3号	方　形	5.0×4.6+α	23.0+α								
		4号	方　形	4.7×6.0+α	28.2+α								
		5号	方　形	5.3×4.0	21.2								
10	丸谷第一	1号	間仕切り(方形)	8.1×8.45	57.6	27.9	29.7	4	3	有		石庖丁・鉄鏃	II
		2号	間仕切り(方形)	9.87×9.2	78.8	78.8			2			石庖丁	II
11	祝吉 I	1号	間仕切り(方形)	7.36×7.76	51.2	51.2		5	3		終　末	磨製石鏃・石庖丁	II
		2号	間仕切り(円形)	7.1×6.8	38.6	31.9	6.7		2	有	後期中頃～末	磨製石鏃・石庖丁	I
		3号	間仕切り(円形)						3+α	有	後期後半	磨製石鏃	I
		4号	方　形	3.92×3.12	9.8	9.8							
		5号	方　形	4.16×2.24+α	8.6+α	8.6+α							
		6号	方　形	3.84×4.0	13.2	13.2							
		7号	間仕切り(円形)	径　7.6	39.5	20.3	19.2		6	有	後期後半		I
	祝吉 II	1号	方　形	6.08×2.08+α	7.7+α	7.7+α					終末～古墳初頭		
		2号	間仕切り	5.76×4.48+α	19.8+α	19.8			1+α		終　末		
		3号	方　形	6.4×5.76	33.0	33.0							
		4号	間仕切り	4.48×3.68	12.8	12.8			1				
		5号	間仕切り(折衷)	4.8×4.8	18.3	5.8	12.5		4	有			III
		6号	間仕切り(円形)	7.56×3.9+α	17.1+α	6.2+α	10.9+α		4+α	有			I
		7号	間仕切り(円形)	8.25×8.10	50.8	19.4	31.4	3+α	3	有	終　末	磨製石鏃・石庖丁 鉄鏃・錐	I
		8号	方　形	6.08×6.24+α	28.2	28.2							
		9号	方　形	4.8×4.14	14.7	14.7				有			
		10号	間仕切り(円形)	6.3×5.52	24.3	6.5	17.8	4	2	有	古墳初頭	石庖丁	I
		11号	間仕切り(方形)	5.92×6.24	28.1	9.9	18.2	4	3	有	古墳初頭		II
		12号	間仕切り(方形)	5.12×4.64	21.8	21.8			1+α		終末～古墳初頭		II
		13号	間仕切り(方形)	4.75×4.35	17.6	8.4	9.2		1	有	後期初頭	鉄片	II

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集

浦田遺跡　　平畑遺跡
入料遺跡　　堂地東遺跡
堂地西遺跡　　熊野原遺跡

本　文　編

1985年２月28日発行

編集・発行　宮崎県教育委員会